

らぬ夢の尾を延く様な、カットされた活動寫眞を見せられた様な、妙な氣持になつて、或は步調も合つてゐなかつたかも知れない。併し、いよいよ分列式に移ると、極度の昂奮がそんなものを一蹴して了つた。加ふるに幾千の足音の爲に軍樂隊の奏でる行進曲は少しも聞えない。併し、「足を合はせねばならぬ」と云ふ觀念が頭の一隅にこびり附いて、それが無意識的に踏替をさせてゐる様だつた。併し、陛下の近く、約五十米許に進むと、最早そんな觀念は全然影をひそめ、邊に漂ふ神々しさに打たれるばかりだつた。やがて、「頭右」の號令で、陛下に注目し奉れば、尊と、威と、慈そのものの様な玉体を、やゝこちらに向けられ、いとも御叮嚀なる御答禮を賜はつた。私はかたじけなさの外には何物も感じなかつた羅列する文武百官もなく、潮の如き五萬の大群もなく、我もなく、銃劍もなく、肩の痛さもなく、此の世に唯、陛下御一人が在します心地がした。次にはあまりの尊さに、あまりの畏れ多さに、御龍顔を拜する事が出来ず、自づと頭の垂れるのを感じた。併し、陛下の御前を通り過ぎると、始めて我に歸つた様なはつきりした感じと、今迄の出来事が遠い遠い昔に起つた事の様な矛盾した二つの感情が興つて來た。この様な畏れ多い、有難い事が今の世ではあり得ない様な感じがする。と、「直れ」と云ふ號令でほんとうに我に歸つた。軍樂隊の奏でる勇壯な行進曲が聞えて來る。銃劍の閃が美しい。駈足をした。凹凸がはげしい。館旗がひらめく。かうして元の位置に戻つて來た。

遠い遠い昔の思出を辿る様にして今迄の事を考へて見ると、先づ第一に腦裡に浮ぶのは、陛下の御姿である。一點の汚なき純白の玉座に立たせられた陛下の御姿は、眞に尊嚴そのものであらせられる。慈愛そのものであらせられる。而して威光自からその中にありて英風邊を拂ふ。誠に神そのまゝの御姿であらせられる。是に於いてか我等は「あらひとかみ」の感を一層深くするのである。今、私は御親閱當時の模様を追想し、此の式に参加する事を得た我等の光榮を思はずには居られない。同時に亦、かくの如き聖天子を上に戴く日本國民の幸福を感謝せずには居られない。

御親閱拜受所感

福岡縣東筑中學校第五學年

千々 和 壯 七

くつきり澄み切つた晩秋の空に喇叭が響く。それが尾を引いて遠く消える彼方には、波の様な阿蘇の外輪山が灰色の肌を見せてゐる。晝過ぎた帯山練兵場には、光榮と感激に燃ゆる七萬の若人が森嚴なる整列を了してゐる。「氣を付け!!」大隊長の鋭い號令で一齊に硬くなる。さむくくと底知れぬ水が淵に淀んで動かぬ様に嚴肅な空氣が總ての人の胸から胸へと沈み込んで行く。軍樂隊が嚴かに「君が代」の樂を奏する。陛下の自動車兩薄は只今臨御あそばされたのだ。名狀し難い息苦しい緊張の空氣が漲る。心臓の鼓動が聞え相だ。間もなく玉座に立たせ給ふ、大元帥陛下の御英姿を遙かに拜することが出來た。「挿銃!!」の號令が骨に沁む。やがて軍樂隊は勇壯なる行進曲を奏し始めた。あくまで高い秋の日は燦然と頭上に輝き、勇躍した各部隊が動き出す。答禮遊ばされる御英姿がぼんやり遠くに拜せられる。幾遷廻の後、吾等の部隊は大隊長の號令で分列に移る。玉座が刻々と近づく。前の大隊が「頭右」をした。陛下の御答禮の御姿が大分はつきりと拜せられる。愈々だ。「頭―」といふ號令が響いた。全身の血が止る。瞬間「右!!」の號令を微かに耳底に感じて殆んど無意識に頭を振つた。ばつと右の高い玉座に立たせ給ふ、天皇陛下の御英姿。あゝ何たる感激ぞ、何たる光榮ぞ。泪!! 泪!! 陛下の白い御右手が靜かに答禮遊ばされる。全身が棒の様で、何をしたのか、何處を歩いたのか、「直れ!!」の號令でハツと我に歸る。あゝ我等の一生を通じて忘れることの出來ない尊い瞬間がかうして終つたのだ。

x

日本帝國の有難さ、一天萬乗の大君に御親閱を仰ぐ喜は、我が國民でなくて誰が味ひ得ようか。その喜と誇に面を輝かせた吾等健兒の乗る團体列車は、夜をこめてひたすら南へ馳つた後、光榮の日、昭和六年十一月十八日午前零時五十分、まだ明けやらぬ熊本驛に着いたのであつた。満天の星も凍るばかりにきら／＼と輝く驛頭には、多數の憲兵や警察官が手

際よく人員の整理を進められる。数千の學生や青年團、在郷軍人が、黙々として敏速に行動して一糸みだれぬ統制を示す強いアーク燈のみ燦と輝く驛頭には、かうした團体を次から次と吞吐して少しの混亂も見られない。誰もが緊張して、せめて自分で出来るだけの努力をしようといふ自制心が、期せずして皆の心持を一致せしめたのであつた。聖駕駐ります熊本の市街は未だ深い眠りの中にある。軒並の裝飾にも、掃き清められた街路にも、つゝまじやかな民草の喜が溢れてゐる。

吾等福岡縣の學生は鐵道學校で夜明を待つた。空は暗い。だが上天氣。霜が下りるのか寒い。運動場の所々に焚火がされる。あか／＼と燃える火を圍んで誰も言葉がない。いや口に出して言ふには餘りに尊い感激が胸一杯に溢れてゐたのだ。楽しい今日の豫想にどの顔も緊張し切つてゐる。九州の南から北からはち切れさうな元氣で集つた七萬の若人の胸は、恐らく同じ感激に震へてゐたことであらう。御親閲の開始されたのが午後一時十六分。陛下の臨御と共にあの廣い練兵場が深い靜寂に包まれて、針の落ちる音でも聞えさうに思はれた。御親閲を仰ぐ七萬の人々と、之を拜觀する十數萬の大衆が陛下を中心に仰いで、息づまる様な感激にひたつた崇高なる風景であつた。遠い町中からの響が。別の世界からでも來る様にかすかに聞えてゐた。何等の雜念もない、たゞ廣大無邊の聖徳にひたつて無我の境地に立つてゐたのだ。捧銃の禮と共に玉座に仰ぐ陛下の白い御右手が靜かに擧手の御會釋を賜はるのが拜せられた。私は何か知らず強い力でぐつと胸をしめ付けられる様で吾知らず喉が熱くなつた。吾等は今陛下の御前に立つてゐる。朝に夕に忘れたことのない聖上陛下。學校の儀式に御眞影として拜し、或時は新聞紙上でのみわづかに拜した御英姿を、吾等は今、親しく拜しつゝことに御會釋まで戴いてゐるのだ。昔の人は己が仕ゆる主君にさへ土下座した。昭和の御代に生れた吾等は草莽の身を以てこの光榮を擔ふのだ。七萬人の呼吸がたゞ一つに感じられるこの靜寂の中に在つて、私はたゞ一人陛下の御前に居る様な勿休なさを感じた。滲み出る涙をどうしようもない。私は直立不動の姿勢のまま、人知れず涙をこぼした。女子奉唱隊の齊唱は見事な出來榮であつた。一萬餘の女學生が赤誠こめて高らかに歌ふ美しい諧調は、或は高く或は低く一糸もみだ

れず、その澄み切つた歌の調は深く秋空に徹し遠く阿蘇の山根に響いて洋々と充ち溢れた。これは人間の肉聲ではなかつた。無邪氣な少女達が天にも響け地にも徹れと眞心こめた魂の叫であつた。又響ればかの果しなき大海原の洋々と押し寄する大波にも似た御代長久を壽ぐ喜の調であつた。耳を澄ませばその朗な唄の波にゆられつゝこの身も遠く楽しい天國に漂はされて行く様な氣がした。その少女達の一生懸命な氣持が、日本人なればこそ、と私には泣けて仕方がなかつた。

御親閲の終了したのが二時十五分。その間滿一時間玉座の陛下は不動の姿勢をとらせられたまゝ、嚴然としてお立ち遊ばされた。嘗て數年前、二重橋前廣場に於ける青年團御親閲に際して、雨中にも拘らず、遂に雨具の御使用もなかつたと洩れ承つて恐懼にたえなかつたが、今日親しく御高徳を拜しては只々感激言ふ所を知らなかつた。卑賤なる民草の身ですら、豪者を誇り自墮落に流るゝ者の多い現代に、上御一人の身を以て嚴正克己、身を以て衆を統べさせ給ふ大御心に對し奉つて、吾等の小さな我儘の如きは木葉微塵に打ち碎かれて、ひたすら頭の下るのを覺えた。「大君は神にしませば」と昔の人は歌つた。大君を現人神と仰ぐこの尊い思想は、一貫して今日に流れてゐる。この御高徳を仰ぐ時吾等はこの言葉の眞實である事を痛切に感じた。吾等は絶えざる歴史の流れを顧みる時、吾が祖國のみ有する萬國無比の美點は枚舉に遑なきが中にも、常に變らぬ皇室の御仁慈、御高徳を第一に數へねばならぬ。外國史を繙けば、皇室と國民との關係が必ずしも圓滿であるとは限らないが、わが日本歴史の頁には、かゝる類似の記録の一行を見出す事も出來ない。これこそ吾等が聲を大にして世界に誇り得る所以のものである。

嗚呼吾等が家は日本帝國、吾等が親は天皇陛下。「海行かば水づく屍、山行かば草むす屍」と歌はれた如く、「大君の命のまにまに」ひたすらに吾が身を惜しまず、如何なる困難に對しても、如何なる危機に際しても、必ず克服する日本民族傳統の精神は、かゝる雰囲気の中に生み出されたものであり、而して日本人の何人にもこの感激の溢れてゐる事を疑はない。今や滿蒙の天地には戰禍漲り、思想界亦動搖して歸趨を知らない。外には利害の反する所列國虎視眈眈として吾が弊を覗ひ、内には痛烈なる經濟的危機愈々深刻を加へようとしてゐる。この重大なる時局に際して一步を誤つたなら

ば、日本の前途は累卵の如く危いものがある。この國難に直面して、將來の日本を背負つて立つべき青年の責任は一層重大を加へたものと言はなければならぬ。吾等の覺悟如何は直ちに國家の消長に大なる關係を有するのだ。吾々は國運を雙肩に擔つて敢然として奮起しなければならぬ。而して今日の御親閱に於ける緊張と、團結とを以て進んだならば如何なる困難をも突破することは易々たるものである。あゝ吾等の愛する祖國日本。その民草の大御親として統治せらるゝ天皇陛下。吾等は茲に再び感激を新にしつゝ御親閱の光榮を偲ぶものである。

御親閱を拜受して

福岡縣嘉穂中學校第五學年

原 田 政 盛

待ちに待つたる御親閱出發の日は來た。時あだかも國家非常の際である。パリに於ては昨日から第三回の聯盟理事會が開催されてゐるのである。此の度の此の理事會に依つて日本の運命は決するといふ非常に重大な時である。今や朝野を擧げて、正に國家總動員の姿にて聯盟に對して日本の正義を鳴らしてゐるのである。輿論黨々として日清、日露の役當時もかくやと思はれるばかりの物凄さである。何時爆發するかも知れない。かゝる時に際して今度此の陛下の御親閱を拜するといふ事は國民的感激以外にも、尙意義深きものがあると思ふ。世界の凡ての眼がただ一つの日本の輿論を凝視してゐる時に其の喧々囂々の輿論の中にかくも御盛大なる御親閱式を遊ばされたといふ事は、世界の人々に又我々日本人に、ともすれば浮腰にならうとするのを深く戒められた如き觀があるのである。今迄我が日本に對して非常に險しい眼で見居た世界人も此の天皇陛下の御親閱といふ事を拜しては必ずや今迄の惡感を捨てた事であらう。

我々が此の千載一遇の御親閱を拜する迄には非常なる準備があつたのである。今年の夏休み前、我々五年生が參加するのだと聞かされてからは教練の時間には今迄よりも一層身を入れて心身の鍛錬をしたのである。そして十月十六日。御親閱の日から丁度一ヶ月前には福岡の練兵場で縣下一萬數千名の大團體で豫行演習舉行。明日は秋季大運動會であるといふ

其の前日であつたのであるが、我々はそれをも押して參加したのである。各組から二名御親閱の委員が任命される。それらの諸君は毎日々々おそく迄居残つて此の光榮ある御親閱を如何にして無事に御受けするかに就いて非常に心配され、準備されたのである。私は此の御親閱を拜するといふ事でさへ光榮であるのに其上更に一校を代表する我が校旗の旗手として御親閱を拜受するようになったのである。實に以て無上の光榮である。洋服も帽子も靴もゲートルも凡て萬遺憾なき迄に修理或は新調したのである。朝はより早く起きて寒風の中に眞つ裸となつて齊戒沐浴。私の日課の御眞影の前の祈念もいつもよりはしみ／＼となる。

「天皇陛下、皇后陛下、皇太后陛下、内親王殿下、各御皇族殿下の御幸福を御祈り申し上げ、次に天照大神、歴代陛下今上天皇陛下に『一身以殉國』をお誓ひ申し上げ、それから歴代陛下の御名を暗誦し次に御勅語、御詔勅の拜讀。最後に御親に旗手としての大任の無事務まるように祈念。」

愈々準備は成つた。昭和六年十一月十七日午後八時武裝して校庭に集合。全員校旗に敬禮。我が嘉中健兒二百名は校旗を先頭に諸先生の見送りの裡に堂々と一路飯塚驛に向つたのである。午後十時四十五分飯塚驛發。明日は大事な日だからと思つて寝ようとしても明日の光景をさまざまと思ひ起してどうしても寝られない。寝られない儘に遂に熊本驛着。時正に午前三時十五分。氣が張りつめてゐるせいかちつとも眠くない。驛前に集合して「此の列車にかくも大勢の者が乗つてゐたのか」と今更乍ら驚いた。

校旗を先頭に本莊町鐵道學校遊行軍。我等が着いた時には既に澤山の學生が盛んに食事中であつた。我等も武裝を解いてくつろいで朝飯をした／＼め終つた。顔を洗ふ者、食事をする者、とてもにぎやかな事である。其の間私達旗手、旗護三名は交代で校旗及び銃線の警戒。だん／＼だん／＼刻一刻と夜は明けんとする。午前六時三十分元の隊形に集合。學校順に順次鐵道學校出發商業學校に向ふ。小さな路次、大通り、或は田圃路。夜は全く明け放れた。昨夜懸念された天候は今日はからりと晴れて實にすが／＼しい氣分に掩はれる。町の家々には何處も此處も國旗の列。警官の血走つた眼、忙しさ

うな學生の歩み。水前寺公園に一先づ休憩。何處の學校の生徒か今や我が又銃線を切らんとする。私は大聲叱咤してやつた。眞赤になつて向ふの方に姿を消してしまつた。午前八時六分商業學校集合。其處には既に校長先生もおいでになつてゐた。随分待つて後始めて武裝を解いて休憩。中食をしてよいとの柳先生のお話であつたので「やれ中食だ」と思つてやつと握り飯一つ食べた時に大隊長野添少佐殿の集れの號令。まるで戦地か演習地かの如き忙しさである。飯を新聞紙に包んで背囊に入れる。水筒のせんをする。劍を吊る。背囊を負ふ。又銃線に集る。物狂はしいような迅速さである。第五集團は東筑中學より出發。次は我が嘉中、第十八中隊。校旗を先頭に堂々と一路帶山練兵場に向つて行進。

昨日から今日にかけてかなり永い間校旗を正式に保持してゐたので右腕が大分疲れてゐる。然し自分はあく迄も頭張つて校旗を高く上げて先頭に進んだ。腕がもぎとられさうにあるのを我慢して歩んだ。

旭日に香ふ山櫻花。これ實に我が日本民族の精神を最も遺憾なく表徴せるものである。其の日本民族の精神である所の旭日に香ふ山櫻花の校章を實に見事に眞中に織りなしたる、かの光輝燦たる我が校旗。翩翩として翻へる我が校旗。あの廣い練兵場に隅から隅まで校旗の波、團旗の波。其の下には六萬六千の九州健兒が今日の光榮を顔面に輝かしながら武裝いびしく整列してゐるのである。前方のはるか向ふには眞白き玉座が設けられてある。仰ぎ見れば、我等の大日章旗は此の佳き日を迎へて高く高く大空に國威を輝かしてゐる。純白に眞紅の日輪。さうだ我等の心はあく迄も純白であると共に又あく迄もあの日章旗の紅の如くに紅くく愛國の熱血に燃えなければならぬのである。

折から天にも届けと合圖の花火が上る。ラヂオは「陛下の大本營御出發を放送する。陛下の御到着は一時十六分との事である。一秒々々と時間は経つてゆく。全員しんと水を打つたような静けさである。皆心から陛下の御臨御をお待ち申し上げてゐるのである。何といふ緊張であらう。學生、青年團、其他拜觀者無慮十七萬の大勢の人々がかくもしんとするものであらうか。愈々時は來た。陛下の御臨御。あの玉座にお立ち遊ばされたる。聖上陛下の御姿。私は夢ではないかと疑つた。我等の様な一介の田舎學生が一天萬乘の大君を現に拜しようとは、私は何と言つてよいか判りません。大隊

長殿の號令で全員一齊に捧げ銃。校旗の禮。終つて熊本縣知事の御親閲について言上。

次に愈々我等の分列式。天候は實に上々で一天雲なき快晴であつた。然し乍ら唯だ一つ旗手として心配したのは、風が非常に強く爲めにともすれば校旗が倒れそうになる事であつた。然し愈々分列に移る時自分は「死を以ても決して校旗だけは離さぬ」といふ自分としては悲壯なる決意をしたのである。死を以てと言ふと非常に大仰に聞えるが其の時の自分の心中は唯だく此の決心あるのみであつた。「死力」といふ事を考へた時に自分の身體はまるで彈丸のように堅く引き締るのを意識した。大隊長の「分列」の號令。自分は此の堅き決意を以て其の第一歩を踏み出したのである。おほ玉座々々もう無我夢中であつた。「頭右」の號令で力一杯に根限りを出して右腕を伸ばしたのである。陛下の御答禮を拜して實に感激の極に達しました。兩の眼からは熱い涙がとめどもなく流れ出てどうしても禁ずる事が出来なかつたのである。これは凡ての人の涙である。然しこれは決して不覺の涙ではない。此の涙こそ實に尊い赤誠の發露でなくて何であらう。畏れ乍ら陛下の御姿は涙の爲にぼんやりとしか拜む事が出来なかつた。私は此の二つの肉眼でははつきり拜する事は出来なかつたけれ共心の中此の一眼でよりはつきりと陛下の御姿を拜する事が出来たのである。

建國以來三千年の我が光輝ある歴史は決して理屈ではない。其の理屈に非ざる三千年の歴史を私はまさしく意識したのである。私はしつかりと其の尊い歴史をつかみました。感激々々。唯感激あるのみである。陛下の爲ならば、國の爲めならば我等は敢て水火をも辭せず。唯だく盡忠報國に生くるのみである。

分列終つて又元の位置に整列。始め見た時は随分廣い練兵場であつて、あの廣い所をどうして分列しようか。あの長い間を進み得るだらうかと密かに危惧したのであるが結果は全然其の危惧と反對に充分歩み得たのである。これが豫行の時であつたならどうであらうか。では何がさうさせたのか。それこそ我等日本人の心の奥にひそめる尊い精神ではあるまいか。

次に女子の奉唱。男子のように教練、訓練をやつてゐるのではない彼の女子が實に堂々と一糸亂れず陛下の御前に進

み出て奉迎歌を奉唱し終つたのには驚いた。やはり日本人である。

全員「君が代」奉唱。次に熊本縣知事の發聲にて全員七萬の若人は天地もくつがへれとあらん限りの聲を出して天皇陛下の萬歳を三唱、おゝ我等皇國の若人の赤誠は必ずや天にも神にも通じたであらう。最後に全員敬禮の裡に鹵簿は靜かに御退場遊ばされた。其間一時間餘り微動だにも遊ばされず唯だ直立不動の御姿勢にてあの風の中にて我等に對せられたのかと思へば更に更に新たな涙にむせぶのである。實に有難き大御心ではないか。かつて東京で御親閱のあつた際は寒風肌をつんざくような厳しいみぞれの中でテントの撤去を命ぜられ其上更に外套をもおぬぎ遊ばされ、寒風にさらされて實に一時間二十分の永きに亘つて御親閱を遊ばされたといふ事である。これを思へば實に〳〵感激の外はない。嗚呼。一たびでもよい國をのろふような不逞の輩に此の御親閱式場の感激の光景を見せてやりたいものである。午後六時頃下河原公園着。寒さと空腹に耐へながら十一時迄露天に汽車時間を待つた。午後十一時二十分下河原公園出發。多數の先輩に見送られて萬歳萬歳の裡に感激深き熊本出發。明けて十九日の午前四時五十三分飯塚驛着。校歌を合唱しながら未だほの暗き中を霜をおかして威歩堂々と歸校。校旗を送つて一同石井先生の發聲で天皇陛下萬歳を三唱して解散。此處に無事に目出度く此の光榮ある、實に千載一遇の御聖恩に浴して感激の裡に〳〵がなく任務を終る。

(昭和六年十一月二十六日)

御 親 閱

福岡縣八女中學校 田 中 孝 二

昭和六年十一月十八日！私達は熊本帶山練兵場に於て 聖上陛下の御親閱を拜受致しました。此の日、朝霧によつて清められた練兵場一帯は、正に秋空一碧、東に大阿蘇の雄大なる巨姿が迫り、西近く金峯山は翠嵐に鎖されてゐます。桿頭高く翻る日章旗、總てが奉迎の二字に輝いてゐます。正に午後一時十分。御召自動車の入御。軍樂隊の「君が代」吹奏

總べてが高鳴る緊張に満ち充ちてゐました。「君が代は千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむすまで」。私は始めて日本帝國の國歌たる「君が代」の眞髓を味ひました。その一韻〳〵が腦裏深く浸み込んで行くやうでした。すぐ御親閱は開始されました。聖上陛下には、練兵場の西側に設けられた高き玉座に一時間にわたりて不動の御姿勢をおとりになり、御熱心に七萬に近き赤子を御親閱遊ばされました。此の御親閱によつて、私は今迄経験したことのない嚴肅な尊嚴な体験を致しました。頭の頂から足の先まで名狀すべからざる森嚴さが透徹して行くのを覺えました。この極度に緊張した空氣の中に立つて、私の精神も自ら鼓動を高める程緊張して來ました。そして私達は高き玉座の上にお立ち遊ばされて一々擧手の答禮を遊ばされつゝ、いとも御熱心に御親閱遊ばされる 聖上陛下に注目致しました。一天萬乗の大君として直立し給ふ 陛下の龍顏を拜したのです。自ら感涙に咽ばざるを得ませんでした。嗚呼その時の境地こそ全身全靈を捧げて皇恩の無窮に感激した眞如の姿でした。

この御親閱を受けまして、私は、我が大日本帝國の精髓に觸れ得たやうな氣が致します。皇室中心の我が大日本帝國を眼前に見せつけられたやうな感じが致します。皇室を中心として奉戴してゐる國民と、宗主であらせられる 陛下の間に嚴かな中にも美はしい情景の展開してゐるのを看取することが出來ました。皇室中心主義の我が大日本帝國の精神を腦裡に深く刻み込まれました。かうして 陛下と國民と美はしい情景の中に相會することの出來る我々日本帝國の國民は、實に幸福な國民だと思ひました。この千載一遇の御親閱を拜受し得ました身にとりまして、我が大日本帝國の眞面目をはつきりと心に印することが出來、奔放な私の思想中に一大鐵槌を下されたやうです。この尊い御親閱の印象が、實に〳〵自由散漫な私達青年の思想を善導することを確信してゐます。御親閱の印象そのものが既に私の精神界にとつて一大收獲でした。あの森嚴な御親閱の雰圍氣の中に、一時間餘り立つてゐたことがきつと私の修養上に多大の反映を齎らすことせう。かくて私の修養上に一大轉機を劃した此の御親閱こそ、最も有意義な記念すべき經驗でした。私は此の御親閱の印象を永久に心に銘じつつ 陛下のため皇國のため奉公の赤誠を盡さんと決心致しました。

御親閲を拜受し奉りて

福岡縣小倉中學校第五學年

中 川 中 夫

天は高く晴れ、地には菊の香かほる秋十一月十八日 天皇陛下には熊本市外帯山練兵場に臨御あらせられ、九州各縣の學生、生徒、青訓生等約七萬人を御親閲遊ばされた。僕は小倉中學校の一生徒として御親閲を拜受し、初めて親しく龍顔を拜する光榮に浴したのである。これは僕にとつて終生忘れ得ざる印象となるであらう。

御親閲式の前後を通じて多くの印象を得たが、特に分列式の際 陛下が御前を通過する赤子等に擧手の御會釋を賜はつた、其の時の感激、それが僕の心中に残る印象の最も大なるものである。これこそ實に吾等日本人のみが味ひ得る感激に外ならない。そしてこの精神が、大古より現代に至る迄我國人の心に根強く一貫して居る盡忠報國の精神である。僕はこの日本人の日本人たる所以をかくの如く深刻に感じ得たことを喜ぶのである。又あの廣い平原に六萬數千の大勢が整列して 陛下の臨御を御待ち申し上げた時の僕の陛下に對し奉る心持は、畏れ多いことながら、國民の父君としての陛下を御迎へする親慕の情に満ち満ちて居た。そして陛下が、北風の強い高い玉座に一時間も御直立遊ばされたその畏れ

多さと共に 陛下の吾等臣民にめぐみ給ふ御いつくしみの御心を拜察して感涙にむせんだ者は僕一人ではなかつたであらう。

惟ふに我國は、建國の昔より今日に至る迄、唯神の大道に依つて君臣の別明かに定まり、而も其愛情は猶父子の如く以て萬邦無比の國體を形成し、加ふるに一度の外寇さへ許さなかつた歴史的光輝を維持して、昭和の御代に至つた。この聖代に生を享け、今この御親閲を拜受し奉つた吾等は、限りなき歡喜が新らしく心中に充滿するのを覚えるのである。實に今度の御親閲式は、或る種の精神的原動力を僕に與へて呉れたのである。近來内外益々多事ならんとする折から、吾等はこの感激を忘れず微力ながらも誠を致し、以て聖慮を安じ奉り、昭和の大理想に向つて努力しなければならぬ。

御親閲を拜受し奉りて

福岡縣小倉中學校第五學年

田 中 照 敏

數日來の積雲も見事一散して、麗かな日本晴の青空を音もなく飛ぶ御親閲祝賀機、見渡す限り遙々と續く帯山の太練兵場のまはりを取り巻く幾萬の拜觀者、初夏の様に暖い午下りの陽を受けて綠まばらな枯野原は褐色に燃えてゐる。

愈々光榮の時刻だ。忠勇なる約七萬の若き男兒が着剣して凜然と整列した光景は勇ましくも美しい。周囲の騒音を破つて冷水の如き靜寂が大群衆の間に落ちた。と、嚙喰たる喇叭が一聲高く中空に鳴りひびく。緊張!!もう若人の心臓は高鳴つてゐた。氣をつけたの號令が一齊に響く。やがて軍樂隊の莊嚴なる「君が代」の調が終つて、遙に玉座に御直立遊ばされた。大元帥陛下の颯爽たる御英姿を拜し奉つた瞬間!!息をつく邊もなく捧げ銃の號令、息づまる如き緊張!!無言の感激!!やつと意識を取り返した時には、お、勇壯なる軍樂隊の行進曲が轟き渡り、感激にうるんだ眼にもかすか彼方高御座の御前には劍光も華かに分列式が始まつてゐるのだ。若人の胸は唯躍りに躍る。數分の後には我が小倉中學の一隊も、滔々たる感激の潮に乗つて御前近く進軍してゐた。遂に錦旗が見えた。強い筑紫の高峯おろしに翩翩と翻る錦旗の神々しさ!!たゞもう夢心地だ。歩調は無意識に樂隊に合はされてゐる。「頭右」で長くも 天顔を咫尺に拜し奉つた時は、大地を踏みつけてゐる足さへ感覺を失つてゐた。唯玉座の御あたりに漂ふ靈氣と、犯すべからざる御威容とのみが強く心底に焼き刻まれてゆくのを覺えた。後は唯氣が遠くなりさうな極度の興奮が続いたまゝ進む。何時しかさしもの大圏をまはつて舊位置に整列してゐた。感激に守られた沈黙が続く。遙かの高御座の前にはまだ後から後からと分列行進が続いてゐる。錦燦然たる校旗、團旗を陣頭に靡かせつゝ進む勇壯なる若人の進軍!!壯烈無比!!數十分が夢の中に過ぎて分列式が終を告げると、幾萬の奉唱隊が御前近く進んで阿蘇もゆるげと熱誠溢るゝ奉迎歌を合唱する。「天皇陛下萬歲」の叫び。かくて最後の名殘深き捧げ銃が終ると、莊重なる「君が代」の奉送裡に畏れ多くも 陛下には御還御遊ばされる。

雲一つない青空、うらかな日の光。かくて光榮の日は恙なく盛にそして華かに過ぎたのである。此の日ほど深く優渥なる天恩に感泣し、盡忠報國の感激に燃えたことはなかつた。あの感激こそ若き日の光榮として我等の胸の中に不滅の炎となつて燃え續けてゆくのである。

御親閱拜受感銘録

福岡縣三池中學校第五學年 貝 谷 和 昭

惟、時昭和六年十一月十八日、我々熱血燃ゆる九州男子は畏くも御親閱拜受の光榮に浴することを得たのである。如何なる筆舌をもつてしても、此の感激と喜悅とを表現する事は、到底不可能なことである。げに國家多端の今日、龍顏殊に美はしき 聖上陛下を、彼の帶山の練兵場に拜せし事は、必ずや、昭和第二維新に幾多の志士を吾が九州の地より送り出す事が出来得るに相違ない。

さて吾等は此の感銘録を謹書するに當り、永久に忘れ得ぬ當日の追懐が髣髴として眼前に描き出されるのである。

大演習を慫ました雨も、我々若人の意氣の前には一抹の雲と消へ去り、澄み渡りたる晩秋の碧空には赫々たる太陽の歩みと、しかして宇宙の果までも廣がり行く赤誠の炎とが全ての不純物を一つだに残さず焼きつくして行くのだつた。間斷無き時の経過は、はちきれんばかりの興奮に燃え盛つた七萬有餘の若人の頬に、緊張しきつた午後一時十六分の時を知らせたのである。一里四方に、吾我國全土に充滿したる透明な大氣をふるはす嚴かな「君が代」の奏樂に、おー我々の胸は押しよせる洪水の如くに波うつのだ。微音一つだに無き靜寂の天地には、高き御親閱臺に御起立あそばさる

聖上陛下の御英姿を拜すると同時に、高らかなる御親閱開始の鼓聲が響いたのであつた。前進、前進、六萬有餘の九州男子の心は、今や或一點に結合し、唯一途に彼方の理想へ。さうだ畏れ多くも 聖上陛下の御心を通して、遠い我國創業の理想へと突進するのである。「分列に前へ……」嗚呼、我々の感激に潤んだ瞳には、直立不動の御聖姿が、しつくりと、

否々、永劫にきざみ込まれたのであつた。

たとひ穩健ならざる外來思潮に心醉せる者も、我同胞である以上、此の 聖上陛下の龍顏を拜し得たならば、とめどなき感涙にあふれ、熾烈な祖國愛に燃えない者が一人だにあらうか。女子の奉迎歌……君が代合唱……實に一時間餘りの長きにわたり、微動さへ遊ばされず、大空翔る太陽のその如く、慈愛に満ちた御瞳をもつて、我々七萬有餘の若人に御親閱を賜はつた事は、無意識の熱淚滂沱として兩頬をつたうのである。嗚呼、かくして千載一遇の榮ある御親閱の一日は、力強い愛國の烙印をしっかりと我々の胸に刻して終りを告げたのであつた。此の絶大なる御親閱に參列の、此の上も無き光榮を得た我々若人こそ、萬人の羨望の的たる幸運兒にあらずして何んであらう。

我々の行手には明るい我國再生の陽光が燦然と輝いてゐるのである。

我々若人よ、汝すべからく汝の重大なる任務を果すべし。汝の熱と力の有無こそ、此の三千年の光輝ある歴史を持續し來つた我國体を、死活の兩極端に立たしめるのだ。そうだ我々は今、國民覺醒の鐘を亂打しなければならぬ。我々九州男子は畏れ多くも 聖上陛下の御瞳に確く誓つたのだ。「我々はかならず、いかなる國難をも踏破して、我々の祖先に恥かしからぬ確固不拔たる再生の國家を建設するのだ」と。今筆を走らせた感銘録は、實に吾人の感激の萬分の一をも表現する事は不可能であつたけれど、吾人の心の中に燃ゆる九州男子特有の血と熱は、かならずや此の感銘録をして眞の感銘録たらしめてくれる事を、確く信じて疑はないのである。

御親閱に參列して

福岡縣福岡中學校 林 敬 一 郎

悠々たる哉、阿蘇の連峯！渺茫たる哉、肥後の平原！此の日空に一抹の片雲なく、秋陽蒼空高く浮び、瑞祥の氣靄とてして、武夫の矢並つくらふ篠原にも似たる託摩原頭をこめ、鳳凰も將に舞ひ下るかのやう。林なす銃劍のきらめき、強く

誠忠の色に輝く夜來の睡魔何者ぞ！汝、此の劍光の下にひれ伏せ。私心何者ぞ、雜念何者ぞ、明き直き大和心に比して何と僅小な存在ではないか。往時、遠く吉野朝の際、菊池公が殉國の劍に今川、大内の輩を屠りたる古戰場、曠古の大光榮に浴せんとして此所に集ふ學生青年團等無慮七萬、一絲亂れず整列し、身を清め心を正して鶴首御來場を待ち奉る。徐に虚空を仰げば天も大盛觀に接したいのか、淺緑に澄みわたる空に、日輪が漸くこちらに近づいて來るのだ。

遂に午後一時！行在所御發聲を知らせる煙火が心持よく碧落をふるはし、上空でバツと白雲に化した。する／＼と上る日の丸の旗、秋風に翻々と翻る。この時肅虔、端莊、嚴止の氣が不動の姿勢の体内を熱く馳せめぐる。頬がかすかに紅潮する。片唾を呑む八縣の若人、感激に高鳴る胸を抑へ御來場を待つ。此の間十五分……。かすかに響くエンヂンの微音、同時におこる「君が代」の奏樂。嗚呼！遂に、遂に、御着場！！「捧げ銃」、銃を握つた手が震へて居る様だ。だがそれすらもよくわからない、何もわからない。睡氣は何處へやら、雜念もかくれ眞に是れ明白々無念清澄の心境か。辭書にもない人に聞いても分らない此の氣持、短い「君が代」の一節が身も心も遠く忘我の神境に立入らせてしまつたのだ。「君が代」の餘韻が長く／＼、ほそく／＼伸び紺碧の彼方に吸ひこまれてしまふ。今や先頭の銀杏城下の健兒が直に分列に移つた。一齊に動く大部隊、踏みならす靴の響、さしも廣い帶山の地が震ふ！我等こそ筑前城下の若者、どうして他縣にひけを取らうか。

勇往！邁進！勇躍！前進！第一歩、畏くも 陛下の御前に近づく我が腦裡にふと浮ぶ大伴の歌——「海行かば水漬く屍山行かば草むす屍大君の邊にこそ死なめかへり見はせじ。」——これだ、そして唯これだけだ、今の胸中は。前進！前進！躍進！更に躍進！左方の陸軍行進曲の音がかげろうの中に吸込まれ、琴々たる太鼓の音も早や聞えない。御座所が近づいた。身心一塊となり歩調自ら整然。「頭右つ」その瞬間。

おゝ！仰げ！純白無垢の壇上靜かに擧手の禮を賜ふ 陛下の御英姿を！！折から御背よりの金鷄光に宛然神の如き御姿だ眼が曇つた……「何事のおはしますかは知らねども」……さうだ、有難さに涙がこぼれるのだ。

嗚呼建國以降遼々二千六百秋、萬世一系の天子治しめす東海日出る國、國体の優、風土の美共に比するに國なし。炳として輝く皇統、耀として麗はしき國体。何と立派な國家だらう、何と幸福な我々だらう、日本の蒼生として生を受け斯の如き光榮に浴す。臣民たる者どうして聖恩に感泣せぬ者があらうかどうして鴻徳に副ひ奉る決心なき者が居らうか。日本人にして初めてかゝる感激の高潮に陶醉するを得るのだ。

頭をもとに直した頃再びマーチが聞え出した。やがて定位置に來るとまもなく、女子青年團の御親閱奉迎歌がはじまり高く低く強く弱くやはらかな面もおごそかなリズムが聖徳を稱へ奉りて、野を山を靜かにこえて行つてしまふと、すぐ「君が代」の合唱。——小學校に入學してから、否それ以前から芽出度い日、嚴かな式日に何度ともなく、繰り返し歌つて來た「君が代」だ。而し今日大君の御前に唱へ奉りたる「君が代」程、嚴肅に、何かしら神秘にひし／＼と胸に迫つた事はなかつた。やがてこの合唱の後、おゝ聞け！乾坤をゆるがす大和民族最高の雄叫び、歡喜の絶叫を！！

「天皇陛下萬歲!!!」「萬歲!!!」「萬歲!!!」

あゝ、これで終つたのだ。ほつとして空を見ると、盛觀に打たれてまじろぎもしなかつた太陽が思ひ出した様に動きはじめ居た。風が増して託麻原に秋色が深い。

御親閱の光榮に浴して

福岡縣鞍手中学校第五學年 長野勝利

碧空に一點の雲も無き銀杏城下の帶山原頭は天に瑞氣滿ち地に赤誠の民草數萬を數えて只管陛下の入御を迎へ奉る凡そ七萬に垂とする九州各縣の若人の頭にはたゞ 陛下を迎え奉る喜以外の何物もなかつた彼の廣い／＼帶山原頭に溢れんばかりの人々は水でも打つたかの如き靜けさに壓されて終つた。頭左の號令と共に今迄の靜けさが一段と強く身にしみ入つて何だか非常に有難く無闇に無條件に有難い感じがした。戸山軍樂隊の吹奏する音樂の音も勇ましく愈々分列は開始せら

れた遂に吾等も 陛下の御前に近づいた無理にそうしようと思ふのでないが獨りでに歩調に力が入つて大隊全部の歩調がすつかり一つになつて終ふ吾が視線が 陛下の御姿に結ばれた時にはありとあらゆる俗念は頭を去つて唯 陛下と吾とのみ此の地上にあるかの如く思はれて神々しい御姿の外には何もなかつたほつと息づいた時には長い感激から覺めて原位置近くを行進して居た、国歌合唱、萬歳三唱總てが無條件に我等をして固有の日本精神に蘇らしめた。

御親閱拜受の所感

福岡縣朝倉中學校第五學年 川 上 茂 夫

今秋、九州陸軍特別大演習を親しく御統監遊ばされし 聖上陛下には、去る十一月十八日、熊本市外帶山練兵場に於て特に九州地方青年學徒諸團體のために千載一遇の長き御親閱を賜はつた。

此の日、晩秋の空愈々高きに片雲だに止めず、颯々たる金風に我等若人の心はいやが上にも緊張するであつた。渡鹿練兵場を中心に空前の大壯觀を呈せる露營地を出發して、待ちに待つた榮ある御親閱を拜受せんものと躍動する胸を抑へつゝ、帶山練兵場に向へば、同じ感激に胸躍らせてひし／＼と參集するもの無慮七萬人、さしにも廣漠たる練兵場の大半を埋め盡して整列した。

午後一時十六分、滿場寂として聲なき中に日章旗は清澄の空高く翻翻として翻り、莊嚴なる「君が代」の奏樂裡に御車は靜かに着御しました。やがて遙かの玉座に、初めて颯爽たる 陛下の御英姿を拜し奉りし時、大隊長の凜乎たる「捧げ銃」の號令が骨髄にまで徹れと轟き渡つた。嗚呼、此の瞬間の緊張！感激！日夕數百里を隔て、禮拜し奉る九重の雲深き大君を、今こそ現實に拜し得る自己の存在が唯々夢かと疑はれるのみであつた。間もなく軍樂隊の行進曲と共に榮ある分列行進が開始された。畏多くも、至尊の大前に我等第二國民の燃ゆるが如き意氣と盡忠報國の赤誠を披瀝し奉るの時は今を措いてはないのだ。意氣軒昂天を衝くの慨あり、森嚴極りなき分列式は次から次へ續けられた。帶山練兵場一帯は、

今方に九州男兒の勇壯活潑なる行進によつて寂として聲なき聲に鳴動しつゝあるのだ。次に女子團體の奉迎歌、天皇陛下萬歳の奉唱！我等若人の熱誠こめた其の聲は天地の涯まで轟き渡つたことであらう。御親閱遊ばさるゝこと二時間餘 陛下には全く不動の御姿勢に渡らせられ、而も天機殊の外に麗はしく拜し奉つて我等一同、唯々御聖徳の彌高きに感激し、斯かる聖天子を戴き得る國民の幸福に隨喜せずには居られなかつた。かくて再び「君が代」の奏樂と共に全員奉送裡に靜かに還幸遊ばされたのであつた。

昭和六年十一月十八日!!此の日こそは我等の生涯を通じて空前絶後の尊き感激の一日であつた。而して此の感激を一貫するものは實に「我等は 陛下の赤子なり。」とふ嚴然たる自覺がどこにあらう。此の自覺あつて始めて我等は日本國民たるの眞の幸福と誇とを感ずるのだ。此の自覺あつてこそ、他國人に見られない盡忠奉國の働が出来るのだ。總ての國民的活動の源泉がこゝにあるのだ。

美はしい哉日本の本國！我等は此の度の御親閱に於て畏多くも 陛下の赤子たるの自覺と感激とを深め、日本國民としての誇を新しくし、我が國體の尊嚴なる所以を今更のやうに痛感した。只千載一遇の光榮だ。感激の極だと言つただけでは相濟まぬ。今や帝國は國の内外を擧げて多事多端、眞に國歩艱難の秋である。而して此の現状を打開し帝國の前途を開拓し、祖國の隆盛を圖るは實に我等青年の責務であらねばならぬ。畏くも 天皇陛下には宵衣旰食寸暇もおはしまさぬを、特に我等青年學徒の爲めに御親閱を賜ひし聖徳の程を恐察し奉り、今後益々人格の修養に力め堅忍不拔の氣風を養ひ學業の研鑽に精勵し以て 陛下の赤子としての本分に向つて一意邁進しなければならぬ。

御親閱受拜記

福岡縣築上中學校第五學年 末 延 榮 治

短い冬の日はとつぷり暮れた。「おい、燈をみせてくれ、やこれは辨當がは入りきれないぞ。」十一月十七日の日暮れ後間もない築上中學校の銃器庫の中での話だ。黒い頭が右往左往してゐる。銃器庫から出て来る者、這入つて往く者、皆云ひ知れぬ喜びを、その細かな一舉一動の中に表はしてゐる。五年生百餘名の人數は午後六時頃には大抵集つた。やがて東、中、西組の順に集合して校長先生の御注意があつた。そして、東組から直ちに出發した、旗手の捧げる校旗を先頭として、かくも喜ばしい出發は私の學校生活中、未だ曾て味つた事がない。驛へ急ぐ途すがら、皆の心は、今夜の車中の賑かさを想像してゐる事だらう。或は、遠く未だ見ぬ熊本の城下街を描き出してゐる事だらう。盡きぬ話を語り合ふ中、宇島の驛に着いた。暫時休憩、夜の宇島驛も今夜は賑かだ。上り七時四十六分の列車が勢よく構内に入つて来る。我等の團体は汽車の中に吸ひ込まれて行く。

△深夜の熊本着

行橋の驛まで一走り。窓外は黒く塗られた闇だ、何も分らない。行橋で、特別仕立ての臨時列車へ乗替へる。其れから列車は西へくと、ひた走りに走つて行く。窓外は刻々に更けて行く。一驛毎に目指す熊本が近づいて来る。汽車の一揺れ毎に明日は迫つて来る。此の間にも窓外の景色は次々に展開されて行くであらう。が、既に西の山深く落ちて行つた太陽の光は、之等の景色を映し出してはくれない。然し、此の度の我等には窓外の景色よりも車内での心行く迄の語りひの方が、又、御親閲場の光景を想像して見る事がより楽しい。愉快な事かも知れない。炭坑町も次々に過ぎて行つて、トンネルも大分通つた様だつた。かくして窓外はあわたしく變化して行く。車内では互に思ひの話を實が入つてゐる。彼處ではどつと笑ひ聲が起る。此處では地圖を擴げて汽車の進み行く驛々を追つてゐる。「おや、十一時過ぎた。」誰か云ふ。「皆、一寝入りしないと、明日ぬむいぞ。」誰かが相槌を打つ。皆、そろ／＼眠る用意にかゝる。席のない者は寢を敷いてゐる。腰かけてゐる者は互に寄り合つたり足を組んだりして寝入らうとする。が却々寝入りさうにもない。一部の者はまだ／＼寝る處の騒ぎではない。面白さうに、愉快さうに賑かな事だ、長い車中を語り明すつもりだらう。「十

二時だ、やあもう過ぎたもう今日は十八日だ。今日御親閲を受けるのだ。」だしぬけに大きな聲で誰か叫んだ。一同の者は愈々眠らうと焦る。あせればあせる程益々目はさえる。幾らかの者は寝入つた様だつた。然し、大部分の者は寝入らうとすればする程高まる汽車の動揺とレールの軋りに妨げられて寝つかれなかつた。廣い、寂しい久留米のプラットホームの深夜に、辨當賣りの聲を聞いて後幾時間、我等を運ぶ列車は上熊本を過ぎた。「やあ熊本城だ。」遙か彼方の樹梢に城の櫓の屋根を電氣に反射させて、その雄姿を闇の中に浮べてゐる。

十八日午前三時十五分、熊本驛のプラットホームには夥しい中學生、青年團等の團体が吐き出された。夜まだ深い三時頃と云ふに、熊本驛頭には榮ある御親閲を拜受すべき團体が集合した。驛前の廣場は晝間の様に明るく照り出されてゐる。各團体は各指定の休憩所に案内者が導いて行く。我等は市の通りを美しい裝飾に目を見張りながら進んで行つた。長い／＼市中のあらゆるものは、眠れる者の眞の姿であるかの如く。黙々として静寂を續けてゐる。が一度、曉の光が東の空を染めた時には、この全熊本市はどんなに忙しい活動が開始される事だらう。正に嵐の前の静けさだ。今、我等は此の眠りから覺めようとしてゐる熊本の市中を、東亞鐵道學校に向つて急いでゐる。寂しい、裏町に曲つてやがて鐵道學校に到着した。此處には既に數十校の學校の生徒が來てゐた。我等は校庭の一隅に陣取り、朝食をすまして夜明けを待つた。

△帶山練兵場へ

午前六時頃鐵道學校發、熊本の夜明けの街の香を味ひながら水前寺に向ふ。同所で暫時休憩後、熊本商業學校に往つた同校にて我等第五集團は集合して、午前十時頃自由休憩。此の間に、我等幾人かは再び水前寺の美景を訪うた。此の人工の遊覽地、水前寺は正に熊本の一名勝たるを失はないだらう。

午前十時頃再び集合して逐次列をなして愈々晴れの御親閲場へと歩を向けた。長い／＼幾つかの團体は、市外の帶山練兵場へ急いだ。長い長い巨蛇のうねり、銃を肩に練兵場へ續く縦列は順次に所定の位置に就いた。已に多數の先着者が休憩してゐる。我等もやがて休憩に移り、次々に集まる團体が揃ふのを待つ。その間に晝食をすまず、尙遙かの練兵場の彼

方には小さい人々の姿が急いでゐるのが見える。廣い此の場内には殊更に小さく映る人々の姿だ。集る／＼。無数の人数だ。六萬六千の人数と聞いてゐたが、此の人の波には一驚を喫した。恐らく二度と見られない人数だらう。全員の揃つた頃、整頓が始められ、さしもの大團休も整然と整頓された。空は日本晴、實に恵まれたる絶好日である。

△御親閱拜受

午後一時、轟然、火花が一發碧空に響き渡つた。程なく、廣大な練兵場の遙かの地平線を破つて、天皇陛下の御車が靜々と進められた。瞬間、我等の身体は、肅として異常の緊張を覺えた。廣い式場は、極度の緊張が漲つた。式場外の拜觀者も感激にうたれた事だらう。此の式場の次第、順序を傍らにては全國民にマイクロフォンにて通じてゐる。

陛下には直ちに我等の前方遙かの白地の御席に、靜かに臨御あらせられた。その氣高き御姿、神々しき御英姿に、私の全神経は異様な靈感的波動を波打つた。私は生れて此處に十八年、今日、今時、唯今始めて、大元帥陛下の御英姿を咫尺に奉拜し得たのである。おゝ、この歡喜、私の全血管は唯ならぬ鼓動に打ち震へた。朝からの足の疲れ、不眠の弊は、放散されて了つたかの様に忘れられてゐた。我々の眼は、至尊の御姿から寸時も離れなかつた。「君が代」奉唱後、各部隊は順次に分列行進を始めた。六萬餘の大部隊は次々に、陛下の御前を通過する。陛下には一々擧手の御答禮を遊ばされる。實に畏き極みである。我等中學生は着け劍をなし、愈々、大元帥陛下の光榮ある御親閱に浴する時が來た。我等の部隊は行進を始めた。陛下の御前に近づく。「頭右」の號令にて、龍顏を拜し上げた時、陛下には恐れ多くも擧手の御答禮を遊ばされた。我等は萬感胸に満ちて、目の熱くなるのを感じた。

陛下の不動の御姿こそ、我等日の本の確平たる礎だ。我等日本國民八千萬の、民草の安危を、日夜大御心にかけてせられて、御軫念下される尊い大君の御姿。今や、日支關係日々に險惡なる折柄、滿蒙出征の我が將士等の身の上を御案じ下される。陛下の廣大な御仁慈。之等の事を思つた時、我等の眼には新たな感涙が湧いてくるのであつた。然も、滿蒙の空、風雲急なる折、さすがに大國の英主の御態度に相應はしく、九州の僻地に御西下あらせられて、大演習を御統監遊ば

される御宸襟の悠悠さよ。あゝ、何國の君主か、此の天空海潤的な態度を、此の緩急なる秋に際して、持し得るだらう。

我が一生に記念すべき幾瞬間かが過ぎた。我等の部隊は、既に陛下の御前を過ぎ、再び出發地點附近に行進を續けて其處で全部隊の御親閱終了を待つてゐた。續いた、續いた。六萬の人数の夥しい事。幾百人かの部隊が引つきりなしに前進して、約一時間餘りも續いた。次いで女子團が陛下の御前迄進んで、奉唱歌を歌つた。實に、此の一時間餘りを、陛下には直立の御姿勢もて、可なり風強い御臺上に立たせられて、各部隊／＼に御答禮遊ばされたのである。思ふだに恐れ多いことである。最後に、天皇陛下萬歳を三唱して、御親閱はいとも莊嚴裏に終了した。陛下には悠揚迫らざる氣高き御態度にて、御降臺遊ばされた。直ちに、御乗車、再び、地平線の遙かの彼方に御還幸あらせられた。我等は、再び拜することも期待出来ない。陛下の御車の影が、地平線下に没した時、此の廣い練兵場を突き抜けて行く十一月の風が、冷たく感ぜられた。大きな波形を描いて、練兵場の空を小鳥が泳いで行く。

△記念撮影

廣い練兵場の一隅から順次に、此の數萬の大部隊は退場して行く。後には一人の人影もない廣い練兵場が、一抹の、寂しみを感ぜさせる。退場して行く我等の心には、神々しい陛下の御英姿が深く印象されてゐる。歸途の足どりも輕やかに、再び水前寺に來て、暫く休憩した。後、宮の階段に並んで御親閱參加記念の寫眞を撮つた。

△歸途

再び東亞鐵道學校に還つた。我等は夜の十時頃迄休憩を與へられた。疲れた足も、城下街の見物に引き立てられて、一同は各自賑かな市内遊覽へと、とび出した。午後十時頃、方々に行つてゐた一同は、校庭に集つて、愈々鐵道學校を後にして、熊本驛に向つた。更け行く夜の風は身にしみる。熊本驛頭の寒風を避けて、歸途の列車に乗り込んだのは、十九日午前零時十五分頃だつた。列車は一路築上の地に向つた。乗車後、不眠と、足の疲れとで、一同は先を争ふ如く、席に、或は、通路の筵の上に寝入つて了つた。汽車は間斷なく深夜を縫ふ。一揺れ毎に一同は、深く／＼、眠りの谷底に揺り落

されて行く。十九日の朝七時三十四分には、宇島驛に着くのだ。が、今の一同には、眠り以上の有難さはないのだ。あの雄壯な御親閲の行進の夢に心を躍らせながら。——思へば十七日の日没より、十八、十九日にかけての我等の行動は、緊張しきつてゐた。實に充實しきつた三日間の生活だつた。

御親閲拜受所感

福岡縣山川中學校第五學年

鐘ヶ江 貢

乾徳、天際地涯到らぬ限無き、昭和聖代辛未の秋十一月十八日午後零時三十分、莊重森嚴なる「君が代」吹奏裡に鹵簿肅々として、熊本第六師團帶山練兵場に入らせ給ふや、秋氣搖曳、瑞雲たなびきて「氣をつけ!!」號令一下せらるゝや體驅凜然、意氣軒昂。

今度、畏くも 聖上陛下には國家蒼生の爲、深く御軫念あらせられ、陸軍秋季大演習肥後熊本に於て舉行せらるゝや、九重の禁中より玉歩、鳳闕を出でられ、御統監として行幸あらせられ親しく兵を閲し給ひぬ。而して又今日此の佳き日、連日の御疲勞に御懸念遊ばされず、天機殊に麗しく全九州の學生、生徒、在郷軍人、青年團、處女會等の諸團體、御親閲舉行せらる。宜なるかな。一旦緩急あらば義勇公に報ずるの聖訓、時に遭ひ物に觸れて其の頻發するを見るは。

有難き哉!! 尊き哉!! 陛下玉座に御起立遊ばされ給ふや、國歌奉唱の聲一齊に起りぬ。續いて響く分列の喇叭の音、いよゝ分列式は舉行せられたり。見よ颯々の秋風に幾百旋とも知れぬ校旗、團旗の翩翻たるを先頭に、歩武堂々として行進する若人の「熱」と「力」の泐々たるを。畏くも 陛下には一々擧手の御答禮を賜ひぬ。感激、胸裡を衝きて足の地につくを知らず。

熟々御淑慮を拜察し奉るに、澆季瀾濁にして、世道萎靡頹廢し人心輕佻浮薄なる現代時局の當面打開青年の意氣の善處振興に在り。須く春秋に富む生等若人は、「熱慮斷行」國家擔當の責務の如何に重大なるかを悟り、志氣の善用に務むべき

なり。祖先百戦の山河に生れ、出で、目に旌旗の翻るを見ず、耳に鑼鼓の轟くを聞かず、文恬武嬉安きに慣れて危き想はず、欲に趨り、利につき、舌頭には能く風を生ずるも、腕に風捫るの力だに無く、風俗の奢侈につれて志氣軟化し、柔化し、終に腐敗せんとす。立てよ若人目覺めよ青年御親閲拜受の光榮に浴して感激に堪へず一言述べて所感とす。

御親閲拜受到對する感想

福岡縣八幡中學校第五學年

溝口 肇

瑞雲一廓東曉に棚引くや四海山川悉く鎮まり、聖駕はるばる九州の一角に行幸遊ばされて、壯烈なる大演習を親しく御統監になつた。東雲の風が一陣さつと肥後一圓を拭ひ清めて明くれば十八日、碧空一天日はきら／＼と輝き渡つて大自然阿蘇の雄姿を背にした此の帶山の一帶には晩秋の爽かな微風が埃を燈ましてゐた。あゝ、此の日青春の血に燃ゆる我等六萬の若人を 聖上陛下御自ら御親閲遊ばされたのである。嚙唳として起る喇叭の音につれてはるか視野のつきるあたりの純白の御臺上に始めて御姿を認め奉つた時、老も若きも、男も女も、練兵場を埋むる幾十萬の民草は一齊に不動の姿勢をとつて静まりかへつた。いひしれぬ感激に閉されて固唾をのんだ。やがて樂隊の音を合圖に沈黙は破られて、勇壯極りなき大分列式は次第に展開された。閃々たる銃劍の林、幾百となき、校旗團旗の美しい波、そして全身感激に満ちあふれた青年の一条亂れぬ正しき歩調、之等を 陛下はかたじけなくも不動の姿勢をおとりになつて、一々御みそなはせられたのである。我等八幡中學校の生徒も輕快莊重なるマーチに揃へて歩武堂々と御前を分列行進した。頭一右ツ!!といふ號令と共に御臺上に立たせられた颯爽たる御英姿を仰いだ時、はつとしていひ知れぬ森嚴の氣に深く閉された。その刹那白い御手が上つて、親しく擧手の禮を賜はつたのである。

あゝ!! 何たる感激、畏れ多い事であらうか!! 廣大なる聖恩のかたじけなさに思はず目頭が熱くなるのを覺えた。ここに於いて我々は一身を以て、赤誠皇恩に報ひ、衷心忠義を盡すの愛國心を深く／＼心肝に徹して誓つたのである。今や國家

は多事多端にして、對外的には孤立無援の窮局に直面し、對内的には政界といはず財界といはず諸般の問題紛糾錯綜して誠に國家の一大危機である。一刻も猶豫すべきでない。而して第二國民の中樞たる我々學生は、國家の將來を双肩に擔つて立つべき大使命を有するものである。すべからず内は日進月歩の學理を應用し、確固不變の意志を以て之等の内憂外患を處理し、外は燃ゆるが如き正義憂國の日本魂に依て向ひ、而して國家を泰山の安きに置くべきである。ゆるやかな「君が代」吹奏が終つた。萬歳三唱である。幾十萬の聖恩に感泣する民草の心を籠めた萬歳の轟は天地もゆるげとばかりに四方からわき起り、四圍の連山もこだますばかりに響いた。

御親閱を賜はりて

福岡縣宗像中學校第五學年

田 中 駒 夫

御民吾れ生けるしあり天地のさかゆく時に會ふらく思へば

あゝ、昭和六年十一月十八日。此の日こそ、吾等が一生涯を通じて、忘れんとして忘る能はざる光榮の日であつた。即ち吾等宗像中學校第五學年生一同が、申すも畏きことながら、吾が 天皇陛下より御親閱を賜はつた日である。

此の日、夜來の雨模様も吾々の至誠が天に通じたか、一點の雲もない日本晴となつて、四方の山々も欣然と其の雄姿を現し、あたかも吾等が今日の光榮を祝するかに見えた。吾等は同日午前六時と言ふに、宿舎たりし鐵道學校を發して、第五集團集合地に暫時休憩し、曠て今日の晴の舞臺たる帶山練兵場に向ひ、正午到着した。此の間の道決して近きにあらず加ふるに夜來の睡眠不足を以てしたのであつたが、今日こそ 陛下の麗しき御尊顔を拜し奉るのであると思へば、却つて勇氣百倍して、些の疲勞をも感ぜず、自ら血湧き肉躍るのを禁じ得ないのであつた。かくて、午後一時、いよ／＼鹿兒島を除く九州全土、及び山口縣より集ひ來れる各團體十餘萬の人々は完全に整列を終へて、幾萬の銃は秋陽に閃々ときらめき、幾百の校旗團旗は折からの秋風に五彩の雲の如くなびいた。物凄い緊張。それが何時となく場内を籠めて居た。俄然

煙火一發。大國旗は宛も昇天する大日輪の如く掲げられて、場に溢るゝ十餘萬の人々を、醉えるが如き感激の境地に導いた。と、間もなく嚴然たる大隊長の命令一下、吾等一同は一齊に「捧げ銃」の禮に、靜かに玉座に着かせらるゝ吾が、陛下を御迎へ申上げた。あゝ、其の時の感激。唯、有難し、畏多しと申すの外到底筆古の及ぶ所にあらず、人々は期せずしてホロ／＼と感激の涙を流すのみであつた。次いで軍樂隊の「國歌」奉奏があり、それよりいよ／＼分列式に移つた。畏多くも其の時 陛下に置かせられては、純白に被はれたる前面の高い壇上に颯爽たる御英姿を現し給ひ、軍樂隊の吹奏する勇ましい曲に導かれて、力強い歩調に、目のあたり御尊顔を拜し奉る吾等に、一々畏くも御答禮を賜はつたのである。あゝ、何と言ふ感激の極み、光榮の至りであらう。

海行かば水づくかばね山行かば草むすかばね大君のへにこそな死めかへりみはせじ

まことに此の感の湧然として全身に漲り渡るのを禁じ得なかつたのである。

思ふに、吾等日本國民が今日の如き激甚たる列國競争場裡に於て何等異人種より輕視さるゝが如き事なく、否むしろ常に優位に立ちて世界の正義を指導しつゝあるが如き所以は、一に、皇室を中心と爲し奉つた君臣一體忠孝一致の大團結に由るのであつて、まことに義は君臣なれども情は父子の如くに、陛下の廣大無邊なる御聖恩のもとに、生を樂しみ得る吾々は、其幸や大且深と言はなければならぬ。今滿蒙に風雲は急を告げて居る。陛下におかせられては大御心を痛めさせらるゝ事多大なるものがあらう。此の時に際し吾等の心には、層一層忠君愛國の至情が燃えざるを得ないのである。

あゝ、昭和六年十一月十八日。此の日こそは眞に吾等が生涯を通じての感激深き日であつた。

御親閱拜受所感

福岡縣若松中學校第五學年

廣 澤 寛

先行の大部隊は、行進曲の音と共に 天皇陛下の御前を進行し終つた。いよ／＼待ちに待つた我が大隊の大分列だ。大

隊長の前進の號令は下つた。私は急に緊張した。力が湧いてきた。しびれの切れてゐた手もそれを感じなくなつた。銃劍總てが一身同體となつて、足がいやが上にも上つた。否足が獨りで無意識の中に入つた。何時もの二三倍も。大分耳馴れた大行進曲も、此の時こそ眞に骨の眞髓に響いたのだ。私は一步々を踏み張つた。天地を踏み裂き、とどろかさんばかりに。前後左右總ての者が歩調を合せて、さながら大男が一人で歩いてゐる様だ。これのみが分つた。残るは皆無意識だつた。その時微かに耳に響いたものがあつた。「頭右」の號令だつた。頭を右にして、第一番に目を引いたものは賢くも 天皇陛下の御姿だつた。神々しい、尊嚴な、そしてデリケートな印象を私に與へた御姿であらせられた。

私の心は聖姿の御光明に照らされて、何とも云へないものに成つてしまつた。何となしに涙ぐんだ氣持になつて、誰も居らぬなら忍び泣きしたかも知れぬ。それと共に勇氣は百倍した。どんな強敵でも、一刀の下に切り倒す氣概が横溢した滿洲の暴戾なる支那兵が何だ。劍で突きさして、粉骨碎身せん。私は皆の者を忘却してしまつた。私一人が御前を通過する氣持だつた。私は 陛下の御麗顔を見つめてやめなかつた。止めたくなかつた。あくまで泣いて、もつと勇氣を出したののだつた。純白な御臺の上に、青天白日の下に、氣品高く、嚴格に立たせ給う 聖上陛下であらせられた。一切のものを一目で威壓し、屈服させる様な御容貌であらせられた。心中何やかやで満ちてゐる時、朦朧たる意識の中に大隊長の「直れ。」の號令が聞えた。その時もはや大部隊は餘程前進して、廣い帯山練兵場を眞直に進んでゐた。

御親閱所感

福岡縣浮羽中學校第五學年 中村正男

十一月十八日未明。どうしてもじつと眠つてゐる事が出来ない。旭日は將に億萬條の光線を惜しげもなく野に溢れようとする時、起床ラツパは八絃九野隈なく響き渡る。吾等は敬虔な朝會を済して大きな握り飯二つに腹を充しながら今日の榮ある身を祝しあつた。集團編成の爲、商業學校に向け正々堂々と出發した。學校に到着し第一に吾等が直觀したの

は褐色を帯びた芝生の中に、すつくと建つ校舎の清楚な眺めと、校舎内外に於ける清潔整頓の行き届いてゐる事だつた。編成も終り、南朝の忠臣菊池氏忠勇の譽も高き古戰場帯山練兵場に向け隊伍肅々として出發した。吾等が到着した時には最早大部の群集は整列してゐた。吾等は第五集團の定位置に又銃して中食を済した。

やがて大隊長の「氣を付け」の號令が澄みきつた晩秋の空氣を振はした。これより先 陛下御發聲の號砲は一天拭ふが如き碧羅の空に轟き渡つてゐたのであつた。少時間経た後、正面に設けられた純白な 陛下御座所の右に日章旗は、するすると掲揚せられ、軍樂隊の奏する「君が代」の奏樂が、いと莊嚴に奏でられた。この時吾等の集合所から左手に當つて赤味を帯びた御召自動車が瑞雲の中に神々しく現はれるのを拜したのである。陛下は純白な御座所に御着座遊ばされた。「捧げ銃」の號令は今更吾等の心に何とも云ひ表はされない或る激動を與へた。七萬有餘の群集は、緊張に緊張を加へて練兵場内は恰も靜寂たる夜そのもの、靜けさ、緊張さ、森嚴さであつた。やがて御親閱開始のラツパは緊張しきつた吾等の心をいやが上にも衝いた。と其の瞬間、影も形も見えなかつた集團が銃劍の光、いかめしく隊伍肅々と御親閱を仰ぎ奉つてゐる。陛下は其の集團に對し舉手注目御答禮を遊ばされてゐらせられる。實に思ひ見るだに餘りに畏れ多い事である。いよ／＼吾が第五集團の御親閱である。出發してから御親閱迄可成りの距離ではあつたが餘りの緊張の爲か、その距離を感じない。大隊長の「頭右」の號令で恰も機械の如くピチツと一齊に頭を右に向ける。まるで大きい一個の人間が一人で諸動作をやつてゐるやうだ。平常の時なら顔の眼、鼻、口、どこでもはつきり見られる近距離に於いて、御親閱を賜はつたのであるが、あまりの畏さの爲に眼がかすんでゐるのか、又餘り畏れ多くて心がどうかなつてゐる爲であるかはつきりと拜し奉る事が出来なかつた。着劍の刃は眞晝の太陽を受けて光りに光る。

この千載一遇の御親閱の感想は唯々有難い、嬉しい一種名狀し難い妙な感じが深く心に刻まれたのみである。この感じは終生自分から消え失せる事はない。吾等は今更大君の御鴻恩を深く感銘するのである。

男子の御親閱が終ると女子の大集團が、御座所を中心に三方より凹字形に肅々然と一糸亂れず進み出る。そして何とも

云ひ得ぬ神々しい餘韻を含んだ、「奉迎歌」を奉唱し奉り、御親閲に與つた全員が「君が代」をいと莊嚴に奉唱し奉る。時に益々神々しさ、莊嚴さを感じ何とも云ひ得ぬ感情に支配される。

熊本縣知事の音頭により全集團こぞつて「天皇陛下萬歳」を赤心より天地も破れん計りに三唱したのである。陛下におかせられては一時間に亘らせられる間、微動だに遊ばされず、龍顔うるはしく「君が代」吹奏の中に御還幸遊ばされたのである。

御親閲所感

福岡縣糸島中學校第五學年

菅

嚴

夫

秋曼快く晴れて肥後の沃野は一望千里、蜿蜒十數町の新道には蒼人草の人の波、これぞ今日、祖國の帝、大皇帝の龍顔を拜せんものと、御親閲場に充てられた帯山原頭へと、雪崩れる人の羣集である。吾等はいかした人の波、人の垣をわけ、御親閲場に急いだのである。

繩を區劃に張り廻された場内の廣さは、まあなんと廣いものだらう。福岡城外練兵場の幾十倍思はずも其の廣さに眼を見はりそこには、既に集つた九州各縣の代表學生、青年團、在郷軍人團で充たされてゐる。校旗、團旗、郷旗の林立、秋陽に映えるその色の美しさ、秋風に揺ぐその踊躍、燦たる赫き——場に溢れたものみなはすべては、帝の御親閲を仰ぎ得る——といふ無上の光榮に感激する赤心の象徴に外ならぬ。來る時を待つ間の心、何と譬へたらよいだらう。日頃は、腕白に一時もじつとして居ることの出來ない私等も、今日ばかりは、面の色も嚴かに、靜かに、緊張し切つた態度です。場内整理の騎馬巡查が、馬の蹄を高鳴らして駆け廻るにも、異様の緊張に、身だしなみを忘れ得ない態度である。東の空に遙かに高く聳ゆる大河蘇の連山にも、靄々模煇たる瑞雲が棚引いて、今日の光榮を、目出度さを祝福して居る。

午後零時半——一時、折から爆音高らかに、合圖の號砲が、群集の耳を、心を驚かした。陛下の御臨場である。スル

スルと碧空高く掲げられた日章旗、それぞ皇國の御稜威を八紘に輝かしむる陽の象である。場の西端に一段高く設けられた御座所に今や陛下は、その御英姿を現はし給うたのである。極度の莊嚴さと、無上の尊さとが、場のすべてを肅然たらしめる。

愈々御親閲の光榮に浴するのだ。日頃鍛へた部隊教練、意氣と覇氣と勇往邁進、以て皇國民の御國を負つて起つ心意氣を、天覽に供し得ねばならぬ。吾等は第五集團、而かも福岡縣學生團の最先頭部隊である。部隊長中野少佐殿の指揮號令が緊張する。肅々と歩調を整へて前進する足並に、軍樂隊の嚙啞たる樂の音がリズムを合せる。もう何の雜念もない。唯無心に邁進するのみである。「頭右！」嗚呼、吾等は將に陛下の御側近くを、分列してゐたのである。英風颯爽、不動舉手の御答禮、とるにも足らぬ吾等如きにこの御答禮、吾等は今、陛下を拜み得たのである。主上の御龍顔に接し得たのである。何んといふ光榮。何んといふよろこび、何んといふ有難さであらう。この感激に、はふり落つる涙を拭ひもあへなかつたのは、この群集の誰もが均しく味つた心境であらう。昔西行が、皇太神宮の御社前に頼いて「かたじけなさに涙こぼる」と謹詠しては、暫し其處を立ち去りかねた彼の心中、之ぞ感謝感激の絶對境であらう。かうした胸中を懐きながら、吾等は、御親閲を終へて所定の位置についたのである。間もなく女學生團の奉迎歌が、樂の音につれて、やさしく靜かに、而かもおごそかに合唱せられる。秋空にこだまして、此處原頭を揺がしては、やがて四境に響き去つたのである。陛下の御還幸の時刻も迫つた。國歌「君が代」が群集の心から、口から合唱し初められた。民草の赤心を、帝の御前に吐露するのである。嗚呼、吾が此の禿筆もてこの心を如何に現し得ることよ。やがて熊本縣知事發聲にて、之こそ天地を揺かす、ありたけの聲を——萬歳と壽き奉つたのである。此の聲、民衆の聲、何處まで響き渡つたことであらう。

かくして吾等は、陛下の赤子として、この少年の日に、腦裡深く、吾等の元首を、刻銘し得たのである。常に吾等の胸中に、臨御まします帝の御英姿が、吾等を、眞に日本國民として、忠勤を勵ましめ給ふ所以であらねばならぬ。

大元帥陛下の御親閲を拜受して

福岡縣門司中學校第五學年

田 中 一 生

十一月十八日畏くも 大元帥陛下には、我等全九州七萬餘の若人を親しく熊本の野に閱し給へり。

この日透徹したる晩秋の碧空には、白雲亂れ飛び、紅葉せる森林、坦々たる田園、積重ねたる稻堆、處々に散在せる人家、紫に烟りし阿蘇連峯の雄姿を背景にせる丘陵は、恰も一幅の大和繪を織りなせるが如し。是渺茫たる肥後平野の展望なり。折りしも一臺の飛行機爆音勇ましく、銀翼を秋陽に輝かして今日の盛事を祝するが如く東方より來り忽にして去る曠大なる帯山練兵場は、幾萬の拜觀者其の周圍を埋め、幾百となき校旗、團旗は眞に空を蔽へり。

午後一時を過ぐる事數分。煙火一發帯山原頭に響き渡るや、場の正面に聳えたる白柱には、日章旗高く掲揚せられ、折りからの微風に翩翩と翻る。ふと仰げば御召自動車は遙か場の一隅より御座所の方に進ませられ、陸軍軍樂隊の國歌吹奏裡に 陛下には純白の臺上に昇らせ給ひ臺下の後方には天皇旗燦として耀けり。やがて「捧げ銃」の號令、更に嚴かに流れ渡る「君が代」の吹奏と共に、林立せる幾萬の劍光は日の光に反射して大空を明るく照らすが如し。かくて熊本縣知事御親閲を拜受する旨奏上し奉れば、各集團は校旗或は團旗を先頭に順次御親閲の光榮に浴す。愈々我等第五集團の分列行進となり、一步一步御座所近く進むや、全員肅として聲なく、唯我が眼に映するものは前者の背囊、唯耳に入るものは歩調と共に僅かに搖るゝ銃劍の音、靜かに軋り合ふ彈藥盒帶革の音のみ。我等の身は頓に緊り、歩調は覺えず高く強く大地を踏みしめ、一種云ふ可らざる緊張裡に歩武堂々として行進す。「頭右」と云ふ集團長の張り切つたる號令と共に一齊に陛下に注目し奉れば、畏くも 大元帥陛下には始終不動の御姿勢にて舉手の禮を賜ふ。我等の胸は唯感激に高鳴り思はず兩眼の潤むを覺ゆ。

やがて分列式終了して女子中等學校生徒等御前に進みて奉頌歌を奉唱したる後、熊本縣知事の發聲にて 大元帥陛下の

萬歳を三唱し奉れば、唱和の聲は轟々と肥後の山野を震動せしめ、遙かに大阿蘇の噴煙と消え行く。かくして御親閲の盛事は終りぬ。時に午後二時半。

願ふに今や滿蒙の風雲は日に急を告げ、國際關係は益々紛糾を極め、我が國運を賭して獲得したる滿洲の特權は將に侵害せられ、我が生命線は絶たれんとす。眞に千古未曾有の國難と云ふべし。然るに内には過激なる思想未だ其の跡を絶たずして、人心の動搖猶熾ます眞に國歩艱難内憂外患交々至るの秋なり。畏くも 陛下には、日夜深く此に御軫念遊ばされ寸暇もあらせ給はざるに、我等青年の士氣を鼓舞し意氣を壯にせんとす。茲に親しく御親閲を賜ふ。誠に恐懼措く所を知らざるなり。今日この光榮に浴し、我等粉骨碎身日々學業に務め、以て他日の大成を期し、天地神明に誓つて國運の隆昌發展に貢獻せんことを期す。

御親閲拜受感想

福岡縣三浦中學校第五學年

船 津 茂 雄

明治維新以來星霜を重ねること茲に六十有餘、此の間我が國は比類なき進歩發展を續けて來た。其の目覺しさは實に日進月歩も管ならざる有様である。然るに輓近經濟問題及び思想問題が相次いで起り、不景氣の聲巷に滿ち、危險思想が侵入し來つて、動もすれば國家の基礎を危くするの惧がある。加之彼の廣漠たる滿洲の野には日支衝突事件が勃發し、その戦局の推移するところは遽に逆賭すべからざるものがある。斯く内憂外患交々至るの時に當り、我が九州の地に陸軍特別大演習が行はれ、 聖上陛下におかせられては親しく御統監のため御西下遊ばされたのである。且 陛下には熊本市に御着輦以來御繁劇に渡らせらるゝにも拘らず、我々學生に至る迄御親閲を賜はつた事は洵に恐懼の極である。

十一月十八日。此の日晴朗、靨靨の氣が天地に漲つてゐた。午後一時十五分、鹵簿の先驅が帯山練兵場に達すると同時に、森嚴窮りなき御親閲は開始された。「捧銃」の號令によつて誠心誠意を一銃に籠めて敬禮申し上げた。純白の壇上に

碧空を背にして立たせられた颯爽たる御英姿は、到底筆舌に盡し難い程神々しく拜せられ、その氣高さには自ら頭の下るのをも覚えなかつた。分列式に移るため右へ迂回して前進を始めた時、私は漸く塔の如き拜觀者があるのに氣付いた。がそれも忽ち見えなくなつて、分列行進の意識のみが腦裡を占有した。模糊たる遠山を背景として動く背囊、天日に輝く劍の光芒。總てが活々として生氣に溢れてゐる。大隊長殿の咽喉も裂けよと掛けられる號令に、一齊に頭を右に向ける。此の時には、軍樂も聞えず太鼓の音もしない。前後左右の誰彼も忽焉として眼界から去り、中央聖壇の兩側にある人の氣配も掻き消す如くなくなつた。唯壇上嚴かに立たせらるる 聖上陛下を仰ぐのみであつて、何とも言へぬ強い感激に撃たれた。女子奉唱部隊の赤心を披瀝する奉迎歌がみ恵のいかなる幸かかしさに涙こぼるる……に及んだ時には、胸が詰つて眼頭の熱くなるのを如何ともなし得なかつた。本山熊本縣知事閣下の發聲で山をも轟かささんばかりに三唱した萬歳は我々民草が國康かれ、聖壽永へなれと祈る誠の發露であつた。

謹みて惟ふに、我が國は上下三千載、金匱無缺、萬世不易、東西に匹儔を見ぬ國柄であつて、寸毫たりとも他國の爲に之を毀損せらるゝ事を許さない。然し現下内外の狀勢は、全國民の大いなる奮勵努力を要する秋に際會して居る。嗚呼。復となき御親閱拜受の光榮に浴した我々學生は、只管各自の本分を守り、學業に勉め、堅固な意志と果敢な斷行力とを涵養し、以て將來國難を打開し、皇運の隆昌を扶翼し奉るべきである。國民擧つて、宏大無邊なる聖恩と悠久無限なるべき皇國とを思ふ至誠が、須臾もその念頭を去らぬ時、其處に國家永遠の盛運が實現するのである。

御親閱拜受の感想

福岡縣筑紫中學校第五學年

大

田

實

丁度九時—汽車は悦びと感激の若人に乗せて竹下驛を發車した。窓外を眺めると晩秋の筑紫野が月下に淡く次から次へと繰展げられて行く、目指す熊本には眞夜中にしか着かないといふのに、誰一人として寝ようとはせず、あちらでもこち

らでも朗かな談笑が交されてゐる。かくて光榮の地銀杏城下に着いたのは正に午前二時一分であつた。プラットホームに整列すると冷々した夜氣が急に身に沁む。驛前に出ると眩しい程の電飾に奉迎門が浮彫され、そそり立つてゐて、自動車は右往左往し、佩劍をマントの下に覗かせた軍人の姿は去來して、如何にも大演習の名残が充ち充ちて居る。奉迎の提灯國旗等で美しく飾りたてられた街々を通つて、僕等の休息所たる春竹小學校に着いたのが二時半頃だつた。小倉、福岡の師範學校、福岡農學校其他を交へた我等若人の群は先づ行在所に向つて初の遙拜を申上げた。藁席の下板床の隙間から背中に沁込む寒さに慄へながらも、一寸まどろんだかと思つたらもう夜明だ。洗面を簡單に済まして朝食の冷たい辨當に嘔りつく。其の中にすつかり夜が明け切つてしまつた。溢れるばかりの朝日の光が新鮮な空氣に躍り輝いて今日の上天氣を約束してゐる。校庭の木木には雀の囀りが喧しい程だ。八時—愈々野營地に向つて出發。寝られなかつた昨夜ではあるが今朝の皆の足取りはなかなか元氣である。九時頃水前寺グランドに着いた。高臺になつてゐるこのグランドからは熊本一の街が見下されて、遙か薄紫の家の屋根には陽光が燦燦と降り注いでゐる。空はコバルト色に晴れて實に好い天氣だ。グランドを突切つて更に行くに愈々僕等の野營地だ。區劃をする。天幕を借りて来る。戰場の様な忙しさだ。それでもやつと張り終へたのが三時少し前であつた。それから直ぐに夕飯の支度だ。研ぎ慣れない米、其の上水を取換へるのに不便を感じながらも、今朝以來初めて温い御飯にありつけるので皆がいそいそと支度をする。幕舎内では火を起すのに大騒動である。天幕内の蒸暑さに堪へかねて外へ出ると、將に日が沈まうとする所だ。團々たる眞紅の太陽が平原の彼方へぐんぐんと没して行く。振返つて見ると神火盡きぬ阿蘇の靈峯は薄闇に蔽はれて、愈々明日に迫つた無限の喜びを胸底深く秘めようとしてゐる。愉快な晚餐を終へて、グランドに於ける「野營の夕」に行く。仰ぎ見ると寒月は雲を蹴つて大空を盛んに泳いでゐる。顧みると月影に眞白く映えた幕舎が到る處に列んでゐて、ぬくぬくとした炭火の氣を漂はせてゐる。幕舎の内はとて暖かだ。昨夜からの疲れのせい、爐に懸けた藥罐の湯の沸く音を聞きながら、愈々明日といふ日の光榮に胸を高鳴らせながら、我等一同は間もなく安らかな夢路を辿つた。

曉の大氣を震はせて幕舎内に傳はつて來た六時の起床喇叭に皆が跳起きて、ぞろぞろと軀をかじめて外へ出る。清しい黎明だ。嚴肅な國旗掲揚式を行ひ、体操、掃除、洗面を済ませ、握飯の朝食を終へて、愈々御親閱場への出發準備に取掛る。靴を磨く、服装を整へる、昨日から又銃して置いた、露でしつとり濡れてゐる冷たい銃を執つて整列する。元氣な號令、いさぎよい番號の聲が一齊に起る。空はすつきり晴れ渡り、阿蘇の外輪山の連峯も今朝は一段と輝いてゐる。七時四十分——集團編成場所たる商業學校へと向つて出發する。歡喜に充ちた元氣な足並、勇み立つ今朝の筑中健兒二百、今日こそは待ちに待つた御親閱拜受の日なのだ。集團編成も滞りなく終へ、愈々晴れの御親閱場帯山練兵場へ向つたのが十時過ぎ、延々として盡きぬ長蛇の如き我等若人の群が、光榮の今日一際輝かしい陽光に胸躍らせて行進する。練兵場の周圍は既に拜觀者の波だ、渦だ。かくて正午頃までにはさしも廣漠たる帯山の大練兵場も我等六萬の若人と十數萬の拜觀者で一杯になつてしまつた。

遙か東には薄紫に匂ふ大阿蘇が聳え、西金峯山一帯には瑞雲欄引く快晴の秋日和——正に天皇日和だ。聽て 陛下行在所御發聲の狼火一發碧空に揚ると、日の丸の大國旗がするすると玉座横の竿頭高く翻り、刻一刻と息詰まる様な緊閉氣の裡に午後一時十六分御先導のサイドカーの爆音も軽やかに御臨場遊ばす。我等は身じろきもせず眞一心に迎へ奉る。莊重な「君が代」の樂の音が緩やかに流れて、嚴肅な氣分が天地に充ち塞がる。「捧げ—銃」の號令で、謹んで遙かに拜すると長くも玉座には、天皇陛下の颯爽たる御英姿が仰がれる。あゝこの瞬間、溢れるばかりの感激に思はず身内が打震へるのであつた。軍樂隊の嚴かな「君が代」が輕快な行進曲に變つたかと思ふと、遙か彼方の高い純白の玉座の前には既に銃劍の列がきらめいて居て、勇壯な分列行進が始まつてゐる。愈々我々も天顏に咫尺するの光榮が忝くされるかと思ふと、唯もう張り裂けんばかりの胸の轟きと悦びとで自ら歩調に渾身の力が入る。

最後の方向變換をすると愈々玉座の前だ。駈足で亂れ勝ちだつた歩調が快い程不思議によく揃ふ。「頭——右」僕は電氣に打たれた様に頭を振向けた。嗚呼、陛下には長くも擧手の禮を賜はつて、微動だに遊ばされず、嚴然と御立ち遊ば

されて、いとも御熱心に我等を御親閱遊ばされてゐるのである。

此の時私の血行は停止した。否、逆流した。赤い血は潮の様にたぎつた。眼には熱い涙が思はず滲み出た。我等は今しも萬世一系の現御神を現實に拜し奉つて居るのである。嗚呼日出づる我等が祖國——日本帝國の此の絶妙境に誰が陶醉せず居られよう。思へばこの我々の大親様なのだ、我々はこの御方の赤子なのだ。この御方の爲なら命などは何時でも投出すのだと、ほんたうに唯感激と歡喜——それだけが胸一杯になつて、日本人として生れ甲斐のある事を泌々と思ふのであつた。

分列行進も無事に終つて、女子奉唱團の奉迎歌の奉唱があつてから全員「君が代」を合唱し、天地も搖げとばかり、陛下の萬歳を三唱して我等が忠誠を誓ひ奉ると、無限の恩寵に輝く晴れの御親閱はいとも芽出度く終りを告げたのである。思へばこの託麻原頭こそ、今を去る五百五十餘年前、畏れながら金枝玉葉の御身の良成親王と九州男兒の華たる菊池武朝とが朝敵今川了俊等の大軍を撃退し、碧血を以て彩り、武勳を樹てたる古戰場なのだ。而して今此處に昭和の聖代に當つて、我等は我等の至尊を迎へ奉つて身に餘る榮譽を荷つたのである。正に我等六萬の若人の胸には、生涯の光榮として今日この感激を未來永劫に胸底深く銘したのである。

野營地に引返して愈々天幕の取片附けだ。張る時に較べると、とても早く一時間程で終つてしまつた。愈々歸還だ。昨日來眺め親んだ阿蘇の山とも最後の別れを告げて驛に向つて出發する。日もすつかり暮れて奉迎の悦びに溢れた夜の熊本街は美しい。託麻原頭の約二日間の滞在の後初めて見る街の有様に少なからず感嘆した。かくて感激と歡喜に始終した光榮の地熊本に名殘を惜みつつ列車が靜かに滑り出したのが十時十分過ぎ。我等は懐かしい福岡へ、息詰まる感激の光景を眼の前に浮べつつ父母弟妹への榮ある土産話を心組みながら——。

御親閲を拜受して

福岡縣豊國中學校第五學年

福

田

清

我等が世の人となりて、常に我等の生活を意義あらしめ、世に出づるの道と與ふるものは「誠」なる一字である。此の一字の持つ精神である。生きる者の生命は、この誠の道を歩む事に依つてのみ、益々明らかになり、活氣を帯びるのである。私は去る十一月熊本に於て中學生として御親閲をうける光榮に浴した。「頭——右」大隊長の號令で、私の張り切つた頭は機械的に正しく四十五度曲つた。陛下の御姿を目のあたり拜して唯胸はせまり、はては喉の熱くなるのを覺ゆるばかり。何故だかは知らないけれど、心の底からこみ上げてくる熱情はやるせなく、唯大地もゆれよと踏みつけた。この周囲の打算的概念、否自分の存在すら忘れた無我無心の境地こそ、心からなる誠の然らしめたものだ。

確乎たる信念のありのまゝの發露——それが誠てふ姿である。神そのものゝ如き御姿を拜して、私は今迄のあらゆる教訓やあらゆる研究を超越して心の底深く感銘するものがあつた。私の國體觀念は宇宙の大眞理を發見した様に悦びと満足のためには燦然と輝き初めた。大君のために直ぐにも我身を投げ出さうと思つた。この熱が最高潮に達して至誠となり熱誠となるのだ。然し人は心の底からほとばしり出る誠の眞實の姿を掩ひ隠さうとする。徒らに附和雷同して尊き己の信念に背いて敢て恥ぢざるの態である。その意氣が誠しかやに見えてもどうしてどうして眞の誠の人と云ひ得よう。それは形骸のみの虚偽の誠である。

私は今度の御親閲に於て皇室の尊嚴、國體の精華に對する信念を一層深く意識した。そして古忠臣がこの熱誠に動かされて身命を抛つて奮闘した事を懐ひ、今零下三十幾度、寒風吹きすさぶ荒蕪たる滿蒙の野に、御國の爲めに戦つて居る兵士を想ひ、至誠なき、熱誠なき現今の青年を想つて、轉た第二の國民としての重大な責任を感ずるのである。

聖上陛下の御親閲に参加し奉りて

福岡縣西南學院中學部

中

野

義

光

十一月十八日帶山練兵場に於て吾等九州健兒 聖上陛下御親閲の光榮に浴せし事は、吾等生涯を通じての無上の光榮である。

此の日 陛下には連日の大演習と數十萬の閱兵分列を饜はせられ尠からぬ御疲勞を感ぜさせ給ひしにもかゝはらず、直立不動の姿勢の儘約一時間の長きに亘り六萬六千の青年婦女子の閱兵分列を御覽あらせられ、而も毫も其の御疲勞を御示し遊ばされざる克己の力、忍耐の力のお強さには我等一同敬服し奉つた。その上又風吹き寒さ膚をさすが如き寒氣にもかゝはらず、玉座には屋根も設けさせられず其の上身には質素なる陸軍通常禮服を御まとい遊ばされ、而もそれで十分御満足の御様子に御見受け申し上げる。即ち民と苦を共に遊ばすといふ有難き御思召しであらせられるのである。其の海山よりも深き御慈愛の程即ち吾等八千萬の民草を吾が子の如く愛撫して下さる大御心を眼前にまさしくと拜した時、私の心には有難いとも畏いとも形容の出来ない無量の感激に滿され、感涙の頬を傳ふを如何ともする事が出来なかつたのである。

他の諸外國の國王に於ては、秦始皇帝の如く巨萬の富を費して阿房宮なるものを造築し民にその權威を示す等の事は擧げて數ふるに違がない。然るに吾が國に於ては代々 天皇は能く民草を慈み給ひ仁徳天皇におかせられるが如く高樓に登らせられて民の家から立ち昇る煙の多いのを御覽遊ばしては宮室は朽壞し、暴露を免かれずといふ程に窮し給ひても、朕富みたりと仰せられそれを快としてゐらせられる。實に吾が皇室に於てのみは全く彼等と類を異にしてゐるのである。斯かる貴き皇室をいたゞいてゐる吾等の幸福を今更の如く有難く思ふと同時に、楠公父子の忠臣、東郷、乃木の勇將の出でし所以をはつきりと解する事ができたのである。

御親閲を仰ぎて

福岡縣南筑中學校第五學年

高松良昭

昭和六年十一月十八日、我等の一生忘れ得ざる日である。澄み渡つた大空の下、帶山練兵場に集りたる數萬の人、愛國者。さしにも廣き練兵場も御親閲拜受の青年男女によつて埋められ、その壯觀は到底筆舌に盡し得べくもない。

午後一時半待ちに待つた御車は音もなく場内に進んで來た。「君が代」を奏する樂の音、若人の捧ぐる銃劍の輝き、何者もおかす能はざる尊さ、嚴肅さ、身心自然に緊張して何と云ふ事なしに有難さに涙がにじみでて來る。「前へ進め」一歩々々御前に接近して行く。私の心は喜悅で一杯だ。あゝ偉大なる神、偉大なる父とも仰ぎ奉る。天皇陛下の御親閲に浴する光榮に若人の熱と力はいやが上にも高まる。大地もほげよと踏みしめる歩調、勇ましき軍樂の響。感激々々々々、感激の極。おゝ、この大君の爲ならば火中も厭はぬ、水中も恐れぬ、一命何ものぞ。

「頭右」おゝ御前に來たのだ。輝かしい龍顏、壇上に立たせ給へる御英姿。平素の邪念妄想は凡て消え去つてたゞ有難い。感激の涙がとめどもなくはふり落ちる。おゝ、私は誰にも劣らぬ忠君愛國者であるのだ。力強く大地を踏みしめつゝ進んだ。元の位置に歸り着くと全身びつしより汗をかいてゐた。分列行進が済むと三方より數千の女子奉唱隊が玉座に近く進んで奉迎歌を合唱した。その啾々たる合唱の聲は晴れ渡る大空の下に響き渡り阿蘇連山にこだました。またも感激の涙がはふり落ちる。おゝ、この青年男子と青年女子よ。第二の日本を背負つて立つのだ。あゝ何と云ふ勇ましき姿ぞ。

今や我國は未曾有の國難に遭遇し内外多事である。滿洲に奮闘せる皇軍の活躍を思ひ、今回の大演習の壯觀を偲び、この御親閲の盛觀に接した私は、丹田の底から大和魂が湧き出でて手足の先までじり／＼と瀾漫するのを感じた。

御親閲は終つた。我等は未だ會て經驗せざる尊きもの強きものを悟つた。五年間校長先生の修身のお話によつたよりも今日の一事によつて我が國體の尊嚴無比なることを體驗し得た様に思ふ。嗚呼この萬邦無比の有難き國家に生を享けたるもの豈、奮勵せずして居られようぞ。

もの豈、奮勵せずして居られようぞ。

御親閲を仰ぎ奉りての所感

福岡縣實業補習學校教員養成所第二學年

稲戸務

御親閲は午後一時からと言ふのに、十一時頃には御親閲を仰ぐ準備は整つて、今はただ鳳輦を迎へ奉る許りとなつた。奉迎者の緊張は極度に達してゐる。朗かに晴れ渡つた晩秋の空はコバルト色に澄み切つて、流れ雲一つない。快晴の秋日和である。暖かな陽光のゆるやかに流れて、帶山の野の彼方には、微かではあるが陽炎さへ燃えゆらめいてゐる。さわやかに吹き渡るそよ風は汗ばんだ膚へに素的な心地よさを感じさせる。晩秋には珍らしい小春日の様な暖さである。此の恵まれた快晴の日に、陛下の御親閲を仰ぐ吾等若人の幸福は至大なものと言はなければならぬ。陛下を迎へまつる吾等若人の喜びは、到底筆舌のよく盡し得る所ではない。それと同じ様に、生命はなくとも熊本山河は、その喜びに齊しく微笑んでゐるに違ひない。見よ、今日の大君の行幸を吾等と共に壽ぐのか、四圍の森羅萬象の總てが何となく生々としてゐるではないか。

迎へまつるすめらみことの御光に阿蘇の高嶺は輝よひにける

遠く東の彼方、大阿蘇の連峯には噴煙のかすかに見えて、その莊嚴な姿は澗刺として輝いてゐる様に思はれる。また、眞近く西に金峯山高く聳え立つて、頂には一連の瑞雲が繞り、如何にも喜びに堪へない様な表情を見せてゐる。練兵場の西端と思はれる邊りに高く掲げられてある日章旗は、眞晝日の陽光を受けて、ひら／＼と舞ひ狂つてゐる。

時は恰度一時五分、齊しく皆が陛下の御着輦の一刻も早かれと希うて止まない折、靜かに鳴りを沈めてゐる帶山の野に朗かな「氣を付け」の喇叭の音が鳴り渡つた。愈々陛下が行幸遊ばされたのである。喇叭に續いて、彼方此方で「氣を付け」の號令が亂調子に相次いだ。と、ひとごとではない。僕等の大隊長中野少佐の朗かな聲が命令一下、「氣を付け

え——」あとはまか静かにひっそりと鳴りを沈めて咳一つ起らない。神経はいやが上にも尖鋭化して来て、非常に緊張してゐる。吾等第五集團第一大隊は福岡縣奉迎者の第一線であるが、前方も側方も何處の縣の奉迎者かまるで人の渦、旗の波。數萬とも知れない人の群で、どの邊りに 陛下が御着き遊ばされてあるのか分らない。音、波の舞ひ狂つてゐる日章旗の近くにお立ち遊ばされてゐらつしやるのであらうと、日章旗に滿腔の敬意を拂つて只管次の號令のあるのを待つた。重々しい軍樂隊の「君が代」奏樂が人の群を泳いで流れ、背すぢに水を浴びた様な嚴肅な感じで胸を打つたが、それも瞬間、奏樂が終つて直ぐ「捧げ銃」の敬禮。「捧げ銃」陽光を受けて閃く劍の林。暫く恐ろしい程の静けさが来た。それはひし／＼と胸をつく底知れない力があつた。或る靈感にでもうたれたと言ふのであらうか、何となく伊勢の皇大神宮へ參詣した時の様な心の戦きを感じた。嘯き聲はおろか咳一つしない。碧く淀んだ魔の淵の様な静けさである。息苦しい様な緊張の昂じた静の極致である。併しそれもやがては動へ移る過渡期の静けさでもあつたのである。愈々静の極致は破れて動が来た。勇ましい行進曲の奏樂が始まつた。分列の行進なのである。「分列に前へ——進め」號令と一緒に動き出した若人の意氣は物すごいものがあつたに違ひない。互に觸れ合つて鳴る劍鞘の音、大地を踏みしめて進む靴の響き、抑へに抑へてゐた若き血は躍る。行進に次ぐに行進、行進曲の奏樂は大空に木魂して若き血を沸き立たせた。併し静から動へ移る時の心の弛みは或は免れ難い事かも知れないが、列は亂れ、歩調は整はなかつた。心の弛みが斯様にまで露骨に現はれて來ようとは誰もが豫期しなかつたであらう。意氣は確かに物すごかつたに違ひない。が、足なみは揃はなかつた。「捧げ銃」の時の緊張は此の行進に依つて容赦もなく消し飛ばされてしまつた。一つには地形の關係があつたであらうが、とにかく動の第一歩に於て隊伍が亂れた事は心の弛みがそこにあつたからである。亂れた儘の行進が暫く続いた。列を整へ足なみを揃へようと若人の心は齊しく焦つた。瞬間、眞近かに我が眼をかすめたのは錦の御旗である。陛下を拜するの最早分刻の後に迫つてゐる事を知つて若き血は希望に高鳴り、言ひ知れない幸福感到に酔つた。底知れない 陛下の御威嚴を感じてか、意氣揚々と行進する隊伍の列も歩調も期せずして調つて來た。さすがは皇御國の若人である。動の中に靜の

極致を再び呼び返して來た。「捧げ銃」の時のそれよりも更に眞剣な無表情な無我の境に誘ひ入れられて來たのである。興奮してゐるが又緊張もしてゐる。と、突然「頭ア——右」

嗚呼、大君の不動の御姿。一段と高い三階の臺上に御立ち遊ばされた 陛下の不動舉手の御姿。愈々 陛下を拜する事が出來たのである。涙の出る様な有難さに、只管 陛下の幸へを祈りつゝ御姿を仰ぎ見つめた。慈父の様に和やかな陛下の御姿を拜して若き心は感激した。今更のやうに君恩のかたじけなさかしみ／＼と胸をつく。何と言ふ緊張し切つた刹那であつたらう。「大君のへにこそ死なめ」と希ふ純眞な精神は吾が若き血を沸き立たせた。

陛下の御前を過ぎてからも御姿は幻影として吾が腦裡に焼き印の様にこびりついて何時までも消えなかつた。振りかへれば曠野一面に動く劍の波。分列の行進は次から次へと引き續いてゐる。行進曲の奏樂は朗かに鳴り渡つて若人の意氣を鼓舞する。分列式が終つてから女子學生の奉迎歌奉唱の大コーラスが帯山の野を揺がした。數萬の少女等々の眞心から迸り出る奉唱の餘韻は重々しく阿蘇の靈峯に木魂してコバルト色の大空へ吸ひ消されて行く。希望に燃ゆる若人の明るさと大君を迎へまつる躍り立つ様な喜びとを包んだ大コーラスを 陛下は如何にお感じ遊ばされたであらうか。入り陽と共に影の薄らいで行く森の中へ木魂して響く晩鐘を聞いてゐる様な莊嚴さを感じた。奉迎者全員の「君が代」奉唱及び萬歳三唱に御親閱は終つて、錦の御旗は納められた。時は丁度二時。

現今、思想問題が喧しく叫び出されて來た。思想は混沌として危機が迫つて居り、世相は極めて不安であると識者等は言ふ。現代人の思想を展望するとき、それは事實には違ひない。併しそれが何であらう。今日 陛下の御親閱を仰いだ數萬の若人の、あの、緊張し切つた意氣と大君を慕ひ奉る眞心があれば決して現代人の思想も憂ふるには當らない。危険思想未だ恐るる必要はないと、今日の御親閱に際會して強く感じた。是は單に一個人としての所感ではなくて、御親閱を仰いだ若人の何人もが齊しく感じた所である事を疑はない。數千年來吾等の祖先の血を流れて來た忠君の赤誠が躍如として若き血潮に甦つて來るのを感じた。身を捧げて 陛下の御爲に奉ずる忠君の意氣と護國の精神とが若人の血を流れてゐる

問は、思想問題の紛糾も起らず、皇御國は永久に榮えて行くものと信ずる。

御親閱所感

福岡縣福岡農學校第三學年 因幡實

千載一遇、此の機會、此の時、清冽たる熊本の野營地で、私は夜半幕舎の不寝番に立つて、清く靜かに澄み渡り片雲だに止めない天、平和な夜の靜寂に包まれた渡鹿の野を眺めた時、私の胸中には時ならぬ閃きを感じた。此の由緒ある、歴史ある思ひ出多い古戦場の地は、五百有餘年前の面影を眼の邊りに再現せしめた。さうして又次から次へと思ひ浮べられた。憎みても尙餘りある彼の今川了俊一味を打たんが爲に、菊池武朝は猛然と奮ひ立つた。が但し、遂に衆寡敵し難く形勢悪化した。此の時森の彼方より突如と良成親王が出でられ、縦横無盡、大に奮闘せられ、遂に驍將了俊を退け給うた御勇武、祖先の鮮血の跡である。目前のこんもりとした薄暗い森が、良成親王の英姿颯爽たる御姿を現はしになつた森ではないかと一人疑つた。かつて血と汗と脂で穢された此の地には、今幾萬の若人が安らかに夢路を辿つてゐる。天を仰げば月は淡い光を寂しく下界に落してゐる。轉た五百有餘年前の回顧の情を起さしめ、一入感慨無量の感に打たれた。邊りは靜か過ぎる程靜かであつた。さうして時の移り行くことすら忘れ果ててゐた。

明くれば十一月十八日、旭は赫々と勢よく東天に昇り、幸多いこの日は暖かな小春を俾ばせるに充分であつた。あの茫茫たる帶山練兵場を望んだ時、此の高原が數百年前の血生臭かつた新戦場であつたらうとは、誰しも想像しなかつたであらう。今日行はせられる御親閱はかくして國賊の爲に悲惨な最後を遂げた忠臣烈士の英靈を弔ひ慰めるに充分であらう。あの廣漠たる高原の一角に白布の玉座に嚴かに御健かに只御一人居ます 聖上陛下の凜然たる御姿を眼近に拜し奉つた時私否我々一同等しく有難く尊嚴な感に打たれた。

さうして若人の赤い血はひとりでに燃えた。此の内憂外患共に多い我國の現在に於て、斯くの如く御健かな英明なる大

君の御力を以て行はせられるからには、必ずや國難は打開され近い將來に於て平和な春風が訪れると私は堅く堅く信じた我々は微力を合せ、固く結び、君の御恩の萬分の一に報い奉らんことを堅く心に誓つた。斯くの如き英邁なる君を上仰ぎ奉ることの出来る、我々八千萬同胞こそ最も幸福に恵まれた民である。我々は國のために一致團結し、いやが上にも國運の隆盛を計つたならば、世界のあらゆる國と雖も絶対に追従を許さない、進歩發展を見ることが出来るであらう。我々は個々の使命に向つて邁進し、君の大恩に報いよう。筆舌に盡し難い有難さ、いや尊さを覺えた。

御親閱所感

福岡縣田川農林學校第三學年 村上誠

帶山練兵場は廣敞として秋空高き陽の下に、聖天子を御迎へせんものと雄大に展けてゐる。此の日昭和六年十一月十八日、天は隈なく晴れ渡り、そよぐ微風も昭和の御代の限り無事慶事を乗せて快く頬をなぶる。仰げは一點の曇りもない空には、軍樂隊の奏する妙なる音律が輕快なりズムを持つて流れてゐる。

やがて午後一時十五分唳々たる喇叭の音が場内を壓して響き渡ると肅々と御進御の御召自動車の御姿を遙に拜す。陛下玉座に御立御せさせ給ふや、光榮に輝く九州健兒は愛國の血潮を沸き立たせた。續く號令は畏れ多くも御前の分列行進である。我々田川農林の三學年生七十餘名は、五集團第二十四中隊に加はり行進の第一歩を踏みしめた。秋陽に輝く銃劍、大和民族一致團結の精神こめて踏みつける靴の音、ひとりでに足は高くあがり、その意氣正に天を衝く、脚下に渦巻き起る砂塵を蹴つて、行進又行進、一步は一步と、前近く御行進、いと麗はしき御尊顔をはつきり拜せられる。この時、日常御眞影より受けたる尊嚴さを超越した、眞に言語にも絶する異常の靈氣を感じる。無意識の中に「頭右」をみると、畏れ多くも陛下は親しく擧手の禮を下し給ふ。我々一介の臣民が斯様な光榮に浴し得るかと思へば、感涙の滲むを禁じ得なかつた。吾等の 天皇、吾等の皇室であればこそ陛下は斯くも尊く御慈しみを御垂れ下さるのだ、有り難い事だ、

微力乍らも此の皇恩に報ひ奉らねば日本國民としての義務責任を全うしないわけだ。あゝ何といつても畏れ多い事である。思ひ續け拜し續けて御前を去り定位置に着くと、時を移さず黒い制服を纏うた數萬の筑紫の女學生は、陛下の御前に進みて奉唱歌を奉唱申上げる。陛下は嚴然と御起立遊ばし給ひ御聴取になる。其の御姿は戦地に馳驅する軍人を御勵まし給うかの如く、不況に歎く民草を御慈しみ遊ばされるかの如く、又長へに日本の國の榮へまさん事を御祈り遊ばされるかの如く、神々しさ、痛く身に喰ひ入る。萬歳三唱を最後に御名残り惜しくも、陛下は勇ましい軍樂隊の奉送を受けさせられて御召自動車にて御仁慈渴仰止む能はざる民草の奉送裡に鹵簿御還御。

吾等、陛下を御奉送申上げると一時に張詰めた氣が緩んで呆然として體の疲れを覺へた。ふと御召自動車の御還幸遊ばされた彼方に視線を延ばすと、唯多數の庶民のどよめきのみで、最早や拜し得ず眼に映するものは聖代の餘澤を歡ぶ純白の玉座を照らす光のみである。

御親閱拜受の感想

福岡縣遠賀農學校第三學年

佐伯正彦

昭和六年十一月十八日。此の日こそは我等が、永遠に忘却すべからざる日でした。何故ならば賤夫の身を以て、至尊の龍顔に接するの光榮を得た日だからです。その日は實際、緊張の極みでした。折尾を午後六時頃發した列車は、夜半の〇時過ぎ瑞雲欄曳く熊本市に着き、一時間餘り坦々たるアスファルトの路上を一路鐵道學校に行つて、一夜の假寝に就いたので、其の間一刻の熟睡さへにも就かなかつたのです。

緊張と言へば想ひ起されます。我等の第五集團が玉座の右側後方より行動を起し、幾度か方向變換した際は、實際整頓が區々でした。兎もすれば左側の、糸島農學校の生徒と離れ勝ちでした。勿論第一中隊、第二中隊等も整頓が悪かつたのです。それでも御親閱を拜受する事が出来るだらうかと、一人小さな胸をいためました。多分、他の人々もその様に感じ

た事でしょう。それが分列發起點と標せる白線に至り歩調を描へ、大隊長の一令で行進した際は、あたかも一糸を張つた様に、皆の胸が一致してゐました。立派に整頓が出来たので、吾事の様喜びました。此の日、蒼穹あまねく晴れ渡り、時偶軟風が場の草頭を撫で過ぎる、暖い小春日と同様で大阿蘇の英姿も祝ふが如くに現はれてゐました。緊張に緊張を加へた所以か、帽子の内側からとめどもなく滴る汗は、彈藥盒に點々と泌み込むのでした。分列行進が終つて我々は、陸軍戸山學校軍樂隊の奏する陸軍行進曲に、歩を合せて元の位置に歸る時、清淨極み無き白き玉座に佇立せさせ給ふ。聖天子を想起して見ました。少し遠かつたので龍顔をしかと拜する事が出来なかつたが、あの慈しみ深いまなざしは、常時新聞紙上で拜する、それと少しも變らなかつた。

唯深く感銘した事は半刻の間、九州(鹿児島縣を除く)沖繩、山口諸縣の若人六萬人を親しく閱し給ふ間、玉歩を他に移させ給ふ事無く、直立不動の御姿勢を以て、終始せさせ給うた事です。教練で習ふ所の不動の姿勢とは、聖天子の執らせ給うた動作ではなからふか？化石の如く佇立せさせ給ふ。陛下の御英姿を拜した時は、思はず何とも形容し奉る事の出来ない感激の想がひしと胸に迫つて來ました。間もなく全部の分列行進が終りました。奉迎歌奉唱部隊が三方から靜々と玉座を圍繞して、朗かな奉唱歌が帯山練兵場の草を、和やかにふるはして耳に入りました。陛下も御満足の體に拜されました。次はいよいよ我々が奉唱する國歌「君が代」です。軍樂隊の前奏につれて切れ切れに續きました。それは清冽な山溪に、銀鱗をきらめかして流れにさかのぼる若鮎の氣持の如く、あくまで透きとほつた聲でした。續いて起つた。

天皇陛下萬歳の聲。急テンポな「君が代」奏樂裡に、聖天子の御歸還。終りを報する喇叭一聲。皆、ほーつと心底より息つき、緊張より逃れた瞬間。あゝ！想ひ出しても感激の極み。全身に冷水八斗とは、このことでしょう。體中が冷く感じます。

あの御親閱拜受其の時の有様を、心のアルバムにしつかり印して、とはに忘れぬ様に心掛け、至尊の御英姿を想ひ浮べて、盡忠報國の精神を發揚致しませう。終に、天皇陛下萬歳を謹唱して擲筆する次第です。

御親閲參加の所感

福岡縣鞍手農學校第三學年 西村愛夫

唯感激ばかりだつた。時は仲秋の十一月十八日。其の目こそ我等にとつて忘れられぬ日である。それは熊本帶山練兵場にて、御親閲に參加の光榮に浴した日である。此の光榮に浴した若人は九州各縣の學生、青年團、在郷軍人で實に六萬六千人、拜觀者の群は廣々とした練兵場を埋め盡して黒山の様であつた。

紺碧の空には一點の雲なく、唯烈風が吹き渡つて校旗、軍旗等は勇ましく翻つてゐた。JOGKのマイクロホンを通じて、各所に取付けられた擴聲器からは 陛下の御様子を刻々に報じてゐた。

午後一時十六分、突然喇叭の合圖で不動の姿勢に移つた。かくして緊張味は次第に秒一秒と加はるのであつた。正に一時十八分、陸軍軍樂隊の奏する國歌と共に御召自動車は迂る様にして御座所近くに停止し 陛下には直ちに御座所にお着き遊ばされた。左側には燦然と輝く、嚴かに尊い天皇旗が折からの烈風に揺々としてゐるのを見た時、何んとも言へない尊い感激が胸にこみ上げて來た。感激の裡に御奉迎申上げて、分列行進の順となつた。分列行進と共に、光榮の感激に血潮は高鳴り、肉躍るの感慨で威風堂々と發進した。見渡せば在郷軍人の行進が陛下の御前で「頭——右」の號令に軍旗が低く垂れて、何んとも言へない莊嚴な光景であつた。遂に我等にも光榮の時は來た。足音高く軍樂隊に合せて進み、中隊長の「頭——右」と聲高く叫ぶ號令と共に、校旗はすつと垂れて遙かに御座所を拜した時、さながら伊勢神宮に參拜した時の如き感起り、胸中清らかになり精神は統一せられて感激の情が胸に溢れるばかりであつた。其の號令に對して、畏くも 陛下は御答禮遊ばされた其の瞬間萬感胸に溢れて、頭は自ら下つてゐた。皇統連綿として、外國に比類なき我が國躰を思ふ時、國民としての自覺の念と無限の力が油然と湧き出て來るのを覺えた。我等は元氣旺盛に活潑に、若人の意氣を充分に表はして、分列行進はこゝに恙なく終つた。現今國家、多事多難の秋にして非常に御多忙の折ながら、

陛下には大演習御統監の爲に遙々筑紫の地に行幸遊ばされ、又此の日には我々まで御親閲の光榮に浴させ給ふ大御心の程誠に有難き極である。女學生。處女會員等の奉迎歌も終つて、熊本縣知事の發聲で「萬歲」を力強く、聲高らかに三唱した其の時、自然に湧く涙はしばし止まなかつた。やがて「君が代」の吹奏裡に 陛下は御召自動車に召されて御歸還遊ばされた。此の光榮に浴した人々の目には有難さに感激の涙が浮んでゐた事であらう。陛下には烈風吹き荒ぶ帶山練兵場の御座所で一時間餘の長時間不動の御姿勢で御直立遊ばされ、一々御答禮遊ばされた御態度は誠に神々しく拜し奉られた。

嗚呼かゝる有難い皇室を戴く我々國民は強い覺悟を抱き、大御心を安んじ奉る様に心掛けて歴代皇恩の萬分の一を報い奉る御奉公に精進しなくてはならないと確信する。以上の感想を述べ謹みて國家の隆盛と皇室の御繁榮とを祈り奉る。

御親閲拜受所感

福岡縣嘉穂農學校第三學年 須藤喜人

十一月十八日に我々は長くも一天萬乗の 天皇陛下の御親閲をうけた。當日は前夜汽車にゆられて來た爲か元氣が衰へてしまつてこれで 陛下の御親閲が受けられるであらふかと思つた位であつた。時刻が來て一同帶山の練兵場内に入場して此所で晝食をすました。陛下御登場の時間迄約一時三十分間一同整列して御待ちしてゐたが二十分、三十分と時間が過ぎるにつれて昨夜來の疲れか二三の他校生は起立してゐることが出來ずにすわつてしまつた者さへあつた。ラジオが一時十六分に玉座に上らせ給ふと告げた、セコンドはキチキチと一時十六分に近づくやがて軍樂隊の奏する音楽が聞へて來た正しく一時十六分 陛下玉座に立ち給うた。はるか彼方の玉座の上に立ち給ふ御姿が我が帝國を總べ給ふ 天皇陛下の御姿であると思つた時先づ湧き出でたのは涙である歡喜の涙か！將た感激の涙か！嗚呼思はざりき我々如き輩が、大日本帝國皇帝の御姿を拜することが出來得よふとは、胸は何者かに壓へられた如く一杯になつて呼吸も苦しくなるよふに感ぜ

られこの胸の塊はとけて眼に涙となつてあふれ出ではるかに拜し奉る御姿がぼーつと涙にくもつたやがて分列行進が始まる大勢のことで隊形は亂れがちであつたが分列發起点からは一直線になつて進み得た、やはり我々も日本國民である苟も天皇陛下の御前に出る時には緊張と尊敬の外に何物も無いのだ「頭、右」の號令で一齊に注目すれば陛下はおもむろに御答禮をなし給うた。噫我々如き者にも天皇陛下は御答禮をあそばさるかと思つた時又熱涙は頬をつたはつて下つた。同時に嗚呼自分は日本國民として生れたかひがあつた麗しき大君の御尊顔をこんな近い所より拜し奉り得てこんな嬉しいことはないもふ自分は死んでも満足だと思つた。我々の分列行進が終つて舊位置に歸つた時女子は軍樂隊につれられて三方より玉座に進んだ二萬數千人の女子が一条亂さず玉座に近づく様は實に神々しき迄に美しかつた、一同停止して最敬禮をなした之が又一齊で一人として早き者なく遅き者無く御前に額くのであつた。やがて奉迎歌を唱ふ其の歌がいかにも其の時の我々の感じと一致してゐたことよ！又訪れるものは涙！自分は泣いた眞剣に泣いた周囲の人を憚つて慟哭こそはしなかつたが幾度か幾度か涙をのみ下して泣いた心の眞底から泣いた喜びか尊敬かしらぬが兎に角泣いた其の時は理屈で言得ない方程式で解き得ない兎に角泣くより外に方法はなかつた。やがて「君が代」の合唱だ自分達も之れのみは合唱の榮を得たと思つて學校其の他に於ける式の時などに唄つてゐた「君が代」の幾十倍かの熱をもつて唄つた。あゝはるかなる玉座に立ち給ふ大君の御代よ千代に八千代に幾千萬代に「天皇陛下萬歳」「萬歳」「萬歳」「君が代」「萬歳」も此の時改めていかに大なる意義を有する言葉であるかを知つた。

此の時の感じはいかなる方法を以てしても到底表し得ない、頭の頂から足の爪先まで全身何者かゞ泌み入る様な感じ、それは自分が一生復と感ずることは出来ない感じであつたらふ。例へ文豪シエクスピアも此の時の自分の感じは文にすることは出来ないであらふ又出来たら大變だあんな感じを文の上で味ふことが出来たらそれこそ大變と言ふものだ自分は大日本帝國の一人として尊い日本國に生れ一天萬乗の陛下の御姿を拜する時は文を以て現はし得る如きそんな淺薄な感じは持たぬのだ身は五尺しかないが陛下の御姿を拜する時はまだく大なるものを感じるので。大君の御姿を拜して得

た感じをペンで現さうとはそれは無理だ日本國民でありながらそれをペンで表すことの出来る様なそんな輕薄な感じしかうけない様な人間では駄目だそんな者は眞の日本國民ではないのだ一時間の長時間玉座に御立ちあそばされ民草の禮をお受けになつたあの御雄姿！あの尊い御姿は人ではない！神だ！やがて玉座より下り給ひて自動車にて御退場あそばされた其の後我々はお互に顔を見合すれば皆眼の周囲を赤くしてゐて「何とも言得なかつた」といふ言葉を交換した。大君の御姿を拜する時は實に何とも言得ぬ感じがするのだ誰に言ふにも「何とも言得なかつた」と言ふより外に意志の表しやうがないのだ。しかし同様の感じをうけた者は「何とも言得なかつた」とか「あゝ有難かつた」とか言ふ短い句で充分に相手の意志を推察することが出来るのだ。玉座に立ち給ふ御姿を拜する時の様な感じは今まで感じたことはなかつた又今後も感ずることは到底出来ないであらふ生きて再び天皇陛下の御姿を拜することが出来るならば兎も角も先づ我々如きものは出来ないとしなければならぬ然らば此度こそ實に千載一遇であつたのだ。噫何とも言得ぬ感じであつた。自分は確に此の世の中に生れた而も日本帝國にそして今日まで生きて來たかひがあつて、大君の御尊影を拜することが出來た。嗚呼！自分は生れて來たかひがあつた。まだ確かに生きてゐる、まだ大きな用事がある筈だ自分は天皇陛下の御爲に大日本帝國の爲に！此の感激の萬分の一なりと盡して死せねばならぬ。

御親閱に參列して

福岡縣糸島農學校第三學年

島

崎

楨

太

十一月十八日、あゝ此の日こそ全九州山口の我等學生、青年團が聖上陛下の御親閱を仰ぎ生涯に於て最も記念すべき絶大の光榮に浴せし日だ。

この日未明熊本驛に到着した我團體は直ちに夜の町を鐵道學校に向ふ。驛前には奉迎門が夜の空に白く浮出て眼もさむるばかりに美しい。市中は種々に意匠を凝らし、裝飾の電燈は晝を欺く輝き奉迎の氣が至るところ溢れてゐる。鐵道學校

に到着、火を焚き暖をとりて夜を明かす。こゝで朝食をすます。目出度い日の丸辨當だ。

午前六時出發、市中は今日の光榮に浴せんとする人々——團休、一般拜觀者等によつて非常な混雜を呈してゐる。町を通りぬけ師範附屬小學校に寄る福岡縣全部の團休が集合して部隊の編成が始まる。我糸島農學校は福岡農學校、教員養成所、遠賀農學校と合して一ヶ中隊を編成し、第五集團、第一大隊、第六中隊となる。かくして編成を終り式場に臨む、式場は熊本市外帯山練兵場だ。桔梗色に澄み渡つた空は高く實に日本晴の快晴である。若人の意氣はいやが上にも上り緊張の氣みなぎる。正午までにはこの光榮に浴せんとする青年男女は陸續として式場に乘込みさしにも廣大な帯山練兵場も熱誠溢るゝ國民によつて埋め盡すかと思はれる。遙か西方には白く輝く玉座が設けてあり各團休は玉座に面して整列する。在郷軍人の分會旗各學校の校旗等色とり／＼に今日を晴と輝き風にひらめく様も美しい。この名譽の旗手こそ輝かしきものである。既定の場所に至り整列して時の至るを待つ、此の間に晝食をなし服裝を整へ愈々準備も出來た。

その時——午後一時、煙火は空高く打上げられ白煙は紺碧の中に鮮かに漂ひ間もなく四散する。大日章旗はスル／＼と掲揚され秋風に翻々と翻る。「氣を付け」の喇叭は喇叭として響き遙か前方の部隊より次々に電波の如く「氣を付け」の號令がかゝつて來る。息詰る様な沈黙、時に場の一隅に靜かに莊重なる「君が代」の奏樂が起つた。その響は寂として咳一つ聞えない大氣の中に傳はり、はては我等の心底深く透り靈氣にうたれたるが如く「我」あるをさへ忘れしめた。「捧げ—銃」の號令は力強く響き長くも 聖上陛下には「君が代」吹奏裡に玉座に着御遊ばされたのである。今、目のあたり、聖上陛下を拜し奉りし時我等の心は躍り感激と敬虔の念に充されたのである。やがて軍樂隊の奏する行進曲と共に熊本師範を先頭に分列式は始められ九州各縣の若人は逐次行進、歩武堂々と分列行進は続けられる。我部隊も次第に進み遂に遂に千載一遇の光榮に浴する時は來た。緊張—今までみだれ勝ちだつた列の出入り、歩調も玉座の御前に近づくとつれて思ひ合せた様に次第に揃ひ、そこには大和魂の流れを汲む我等お互が一心団休になつたのだらう。立派なる体形となり足も輕やかに陸高く大地を踏みしめ堂々と進んだ。大隊長中野少佐の號令一下「頭—右」で注目敬禮お、御龍顏を拜したその瞬

間恐れ多くも 陛下には御舉手の御答禮を賜はり直立不動御嚴格なる御舉手——云ひしれぬ恩愛深き御答禮に對し我等は唯感極まつて——何とも云へない一種の靈感にうたれたのだつた。唯感激の裡に神の如き、陛下の御姿を頭に描きながら半、夢中で前進しつゝ舊位置に復し玉座に對した時未だ分列式は続けられてゐる。幾萬の學生が威風堂々前進する様は將に意氣天を突く。先頭に翻る幾旒の旗、時しも午後の太陽に反射する劍光はさながら電光の如く行進曲の調子に合せて大きく波うつ。畏くも 陛下にはこの各部隊に對し一々御舉手の御答禮を賜はつてゐるのである。かくして分列式は次第に続けられ全部が終るとついで各縣高女其の他の女子部隊は玉座前に整列し御親閱奉迎歌を奉唱し、又全員の「君が代」のコーラスは實に莊重の限りだつた。熊本縣知事の發聲音頭で七萬の若人が叫ぶ萬歳は心からなる聖壽萬歳を祝ふ聲であつた。「天皇陛下萬歳」その叫びはさながら潮の如く肥筑の野邊に滿ち餘韻を引いて……。かくして式の總ては全く終り「君が代」奏樂裡に 陛下には御退出遊ばされた。腰を下した我等はほつと安堵の吐息を漏し互に顔を見合せるのであつた。やがて旗の合圖によつて各學校は秩序的に退出する。我第六中隊をつくる福岡農學校、遠賀農學校、一日の縁ではあつたが同一中隊をなして御親閱を受けたそのことはお互の心を融和して別れには名残さへ感じ「さようなら」の挨拶も決して不自然ではなかつた。

人もかなり少くなつた帯山練兵場を見渡した時、感慨無量、東には遙かに阿蘇の連峯が悠然と聳え、西は限りなき肥筑の平野だ、この廣き原頭に立つ時自分の思は遠き滿洲の野にあつた。この時局に際しても皇軍の御統監、士氣鼓舞の御思召を以て遙々邊陲の地九州の果までも御行幸遊ばされる大御心に喩の熱くなるのを感じるのだつた。建國以來二千數百年その間上に叙聖文武の天子を戴き下に忠勇義烈の臣ありて所謂君臣一體、未だ嘗て夷國の侵略を蒙りしことのない光輝ある歴史を有するのである。この祖先の後を紹ぎ彌々我が帝國の國威に光彩あらしむべき我々が今この 陛下の御爲め皇國の爲め身命を捧げむと誓ふのも偶然ではないのだ。何かしら力強いものが沸いて來て拳を固く握つた。やがて我糸島農學校、糸島中學校も此所を引上げんとする時、日は遙か西に傾き、玉座の上に燦々として輝いてゐた。御聖恩にも似て……

途中水前寺公園に立寄り少憩の後又も鐵道學校に集合し午後八時熊本驛に向ひ歸途についた。

御親閲に列しての感想

福岡縣八女農學校 徳 永 正 三

晩秋色濃き十一月十八日の晴れの御親閲に我々が列し得た事は千載一遇の光榮とする所である。我等が第二の日本を建設し我が皇國の國威をいやが上にも發揚すべき修養の時、誠に意義深き一頁は彩られしこと、確信する。

この日肥後帶山の天地は連日の秋雨去り秋風颯々として嚴肅の氣滿ち我等の精神は全く緊張し切つてゐた。我等の眞正面に純白なる玉座は設けられ靜寂且つ莊嚴そのものゝ如く澄んだ正午の秋光は白々と一段と輝かしき光を投げ整然としたる若人の胸中奥深く或一種異様の森嚴の氣が浸み込んでゐた。其の靜境に軍樂隊の繰り出す「君が代」の吹奏につれて御召自動車は肅然として入り來り 陛下が玉座に御立ちになるや吹奏の音は帶山の土深く吸ひ込まれた如く消え去つた。其の時の静けさは筆舌にあらはし得ない如き靜寂さにて其の中に底力あり生氣滿々として疲勞は忘れ惡心は去り我等の五體は無念の神々しさに閉ざされた。而していきづまる様な瞬間に捧鉢をなす。其の捧鉢こそ赤誠の結晶である。畏こくも陛下におかせられましては、うや／＼しく御答禮遊ばされ我等は感激おく所を知らず。この間千草は肅殺たりとも無盡の君恩を辱うし帶山の地否九州は感慨深き靜境となつた。銃劍はまばゆく光り赤誠は猛然と湧き上り無想の内に分列行進は展開し精神は益々緊張し帶山を壓する九州男兒の分列は赤誠と愛國に燃えた若人の歩みである。元氣に充ち滿ちた威風堂々たる分列は帶山の草木を靡かし遠くは阿蘇連峯に反響してやがては全九州をゆるがした。苟も大和民族の血を受けし者なら忠誠の念は忽然と湧き上り皇室を擁護すべき念を確固として感受し奮然として或希望に燃えない者はなからう。上は皇統連綿として一系相承け大君は仁に臣民は忠にして上下相睦じく國は富み兵は強くこれこそ我が帝國の精華であり又譽である。下我等はかゝる世界無比の麗はしき國土に産れ高大無疆なる大君の御恩澤に潤うて其の日を安らかに樂しく生活

し得られるのは誠に無上の幸福である。我等は滿身の努力を以て常に君恩の萬分の一にも報い奉らんことを心掛けねばならぬ。あの東西宇宙を照す意義深き又無限の光と偉大なる力を有する太陽に象つた日章旗の下に我が大君の御威徳並に帝國の國威は四海に輝きわたり、我が大日本帝國は皇室を中心とし核として億兆心を一にして永久に榮えるのである。

今や内は經濟並に思想動搖混沌たるの時又外は日支問題等複雑化し來り我が滿洲には重大なる危機を孕んでゐる。此の内憂外患の秋に國民一致團結舉國一致以て正義の道に邁進せなければならぬ。此の時局に直面して我等學生生徒青年等に御親閲を賜はりしことは實に意義深きものあり又我等の責務の重大なるものありしを感ぜり。

御親閲を受けて

福岡縣京都農學校第三學年 藤 河 威 光

總員六萬の國民は千載一遇の光榮に浴せんと晴れの御親閲を仰ぐべく九州の各地より帶山練兵場へと隊を調へて續續と馳せ参じた此の日は幸に恵まれたる絶好の秋日和で帶山の空には瑞雲棚引渡つていとも心地よい天氣でした大國旗は東方に聳ゆる大阿蘇より吹き下ろす秋風にあふられて竿頭高く翻つてゐた。

午後一時十五分「君が代」の吹奏と共に 陛下を練兵場へ御迎へ奉つたやがて、軟かなる秋風を浴びて帶山の原頭に銀色に輝いてゐる純白な高さ二間あまりの玉座に畏くも 天皇陛下の御英姿を拜し奉る其の瞬間言ひ表はせぬ一種の感に打たれ全身感激に滿ち滿ちた、玉座の右側には天皇旗燦として輝きわたるまもなく軍樂隊のマーチと共に場の一角より分列に前への號令が下された次から次へと學校のマークを染めぬいた校旗を先頭にして九州男子の意氣を持つて威武堂々として進す玉座間近くにて「頭右」の號令にて生れて始めて嚴肅な注目の敬禮を行ひ神々しき 陛下の御龍顏を拜す、畏くも陛下に於かせられては我々に對して一々舉手の禮を賜はつた始め遠くから御英姿を拜し奉つた時よりも一層強き／＼感謝に打たれたある時敬虔といふことを修身で話されたが一向思ひ當らなかつた後思ふとこれこの瞬間の氣分が本當の敬虔か

と思はれて何となく神秘の境に入った様な愉快な氣持となるので其後もこの時の氣持に立ち歸りたく思ふことが度々であるかくて男子青年等の分列式も終り女子奉迎團の奉迎歌が奏せられ式は全く終りて萬歳三唱の聲響く中に 陛下は玉座を御立ち遊ばされた。惟ふにこの式は最初より最後まで實に嚴肅其のものであつた然し 陛下は我々以上に嚴肅な御態度におはし約一時間の長時間に渡り直立不動の御姿勢で一々御親閱を賜はつたのである。

嗚呼何と有難き御思召しか何と偉大なる御風格の盛んなる神々しき昭和聖天子ておましますか。
而してこの 大帝陛下こそ我々の父とも仰き現人神でおはしますかと思ふと何となく誇らかな氣分に充ち満ちて唯有難涙に胸の躍るを覺ゆるのみ。

嗚呼昭和聖天子の赤子となりし我か八千萬同胞の無限の光榮ぞ而してこの榮えある御親閱を受けし我等學生の極みなき幸が私は此の精神をいつまでも捧持して尊き我か一天萬乘の大君の爲め將た我が國家の爲め粉骨碎身して盡すべきであることを痛感したのであります。

御親閱の記

福岡縣築上農學校第二學年 安 藤 時 藏

東雲漸く明けて帶山の野にも榮えある日は訪れた。未明より集まれる群團はさしもに廣き練兵場を所狭き迄に人堵を以て埋め盡した定刻前部署に就いた集團は靜かに整列して御臨幸を待ち奉つた間も無く合圖の日の丸の旗は御座所近く掲げられ軍樂隊の奏する「君が代」の音いとも嚴かに響き渡る時 聖上陛下には長くもこの吹き曝しの野邊の玉座に着御遊ばされた。全員は嚴肅に眞心を罩めて最敬禮をなし續いて分列行進に移つた六萬有餘の各大隊は軍樂隊と和し嚴肅なる中に一糸亂れず歩武堂々と御前間近に歩を進め神々しき御英姿を拜す一同の光榮何物にか譬へん。陛下には始終學手の御會釋を賜ふ男子部終ると共に貳萬餘の女子奉唱隊は靜々と御前に進み玲瓏たる奉迎歌の調は宛がら神境に彷彿する心地であ

つた最後に熊本縣知事發聲の下に 天皇陛下の萬歳を三唱し奉る其の熱誠天地も搖がんばかり誠に崇嚴の極みであつた。國民擧つて崇敬し奉る龍顏に咫尺し奉る我等の榮譽幾何なるぞ唯に聖代の心強さ有難さは到底筆紙の盡す所でない斯くして御親閱式が滞りなく終ると、聖天子の御影は次第に遠ざかり目送する群集は皆感激の涙に咽ぶ計りであつた。

御親閱拜受所感

福岡縣朝倉農學校第三學年 松 尾 武 幹

突然啞啞たる喇叭の吹奏。「氣をつけえーつ」號令がかゝつた。さしも騒いでゐた帶山原頭の人の波は一時に鳴りを沈めてしまつた。と同時に私の心はキリツツと緊張して一切の雜念が不思議に奪ひ去られてしまつて唯一筋の心の琴線のみがお出ましの方向に慄へてゐた。御衛の車に護られた 陛下の御車を拜したのはそれから數分の後であつた。莊重な「君が代」の音調裡。七萬餘の學生の焦點となりつゝ赤茶色の自動車徐徐に進行して設けられた玉座の際にハタリと止つた間もなくへんぼんとして翻る天皇旗……。御座上の御英姿……。捧げえ銃。私はしかと銃を捧持して、陛下を凝視し奉つた。此の時私の魂は抜け出して 陛下の足下に跪いてゐた。そしてその間、神！國王！日本國の太陽！其處！こんな聲が私の腦裡を何べんか往來した。私の心は思はず森嚴な盆の中に浸り切つてゐた。

きらめく劍の林が移動してやがて分列式が始つた。勇ましい喇叭の行進曲に足はおのづと上つた。然し心は何時も陛下の所に繋がれてゐた。「かしらあ右」おゝ目近に仰ぎ見る龍顏。微動だにあらせられず御答禮遊ばさる現人神よ。私の心は再び或る神秘的衝戟に打たれてしまつた……。

噴煙常に空を蔽ふ大阿蘇の山麓、勤王史に輝く熊本城下に於て、一天萬乘の大君を眼前に仰ぎ見奉つたこの日の森嚴な場面を私は永遠に忘れることは出来ない。そして御一人を中核にして數萬の若民草の心中深く潜んでゐた大和魂がこの時發露して偉大な力を示したことをも。

御親閲に對する感想

福岡縣福岡工業學校建築科第四學年

淺川壽人

時間は刻々と迫つて一時を過ぎる五分となつた、各集團の奉迎準備はもう完成された、待つ事十分餘遙かの彼方から嘯唳たる喇叭の音が聞えて來た、今迄雜然として居た場内は一瞬にして靜寂と化し、やがて「氣ヲ付ケ」の號令が掛り軍樂隊の「君が代」の吹奏が始まつた、此の時心の中に描かれるのは 大元帥陛下の御姿のみである、間も無く玉座には、陛下の御雄姿が拜せられる、「捧銃」幾萬の民草の眼は等しく 陛下に注がれ 陛下は御丁寧に御答禮遊ばされた。愈々壯快なる分列式が始まつた、萬場は寂として水を打つた様で、聞えるものは唯軍樂隊の樂音と指揮官の號令ばかり誠に森嚴そのものである、段々と順番が進んで吾等の部隊も分列發起點迄進んだ、何だか體が固苦しくなる様である、併し之から 陛下の御前にぬかづくのであると思ふと元氣は百倍して來た、以前より一層強く第一歩を踏みしめて發進を起した、軍樂隊の樂音は益々はつきりと聞えて、欣喜躍動する吾等が心をいやが上にも高からしめた、遂に 陛下の御前三四歩の所迄進んで來た、左右の列並を見ると全く揃つて居ない、此の儘で御前に進んだら……と心配しながら勉めて整頓しようとなつた、もう既に十數歩となつた、遂に「頭右」の號令は下された、此の時偶然であらうか今迄あれ程に不規則であつた列は定規を當てた様に整ひ歩調もピタ／＼と揃つて居た、之れ全く各人が緊張に緊張し最善の努力を盡して見苦しう行動を天覽に供しては相濟まぬと思ふ強い一念が凝つて此の二三十歩の間に斯かる結果を齎らしたに外ならぬ、人のやらうと思ふ一念は誠に恐しく強く神の様な力を持つものであると思つた、なせば成るなさねば成らぬ……と言ふ古歌も精神一到何事かならざらんと言ふあの格言も實にこの様な事を言ふのであらう。斯くして 陛下の御直前を過ぐる時は全く無我夢中であつた、前日よりの不眠不休の疲れも、脚の痛さも今は全く打忘れて居る、嗚呼これが我等の朝な夕なに神と崇ひ慕ひ奉る聖天子におはしますかと思へば感激の涙に純白の御親閲臺上に御直立遊ばす 陛下の御英姿をも確かに拜す

る事が出来る程であつた。

今や北滿の天地急を告げ戰雲たなびく此の時局重大な折柄千載一遇の御親閲を拜受した若人は皆一つ心に身命を捧げ君國の御爲め盡さうと堅く誓うたのであつた。

分列式に續く女子の奉迎歌奉唱が終つて愈々萬歳を三唱する時が來た、本山熊本縣知事の發聲に唱和するその聲は大きく強く、果て知らぬ熊本大平野をわたり遠く噴煙たなびく大阿蘇の連山を越へて全國の津々浦々迄響いたであらう。此の天地も轟く萬歳を聞召された大元帥陛下も御心強く御満足に思召された事であらう。

御親閲

福岡縣小倉工業學校機械科第四學年

中垣辰雄

御親閲の日、私たちは嘗て思ひ及んだことのない敬虔な心が湧き起り、帶山練兵場が恰も、一大神域であるかの感に打たれた。私はあの老大人人の群が、かやうに統一した行動をとり得たのは、實に人々の、この眞率な念が帯のやうになつて各自をつないだためだと思ふ。

今、當時を再び追想するならば、私はかの、蜿蜒と續いた集團の流れが、よくもあんなに機微に至るまで、一絲も亂れなかつたものと深く感ずるのである。かゝる「體驗」はこの先、果して何時得られるかもしれない。實に千載一遇の光榮ではなからうか。

萬民の景仰してやまぬ、大稜威を拜し奉るとき、この數時をこそ、私共は、一つの修養を果した悦びを覚え、非常なる感激を包み得なかつた。私たちは皆、一心一体となつて分列をなして進んだ。確然たる連鎖の如き、結束を固めて進んだだからこそあれだけの集團が、よく規律正しき行動をなし遂げたものではあるまいか。亦一つには、あの莊重なる軍樂の音が敏感な神経の奥底に滲透してゐたためであらう。自分ながら實に立派な歩調だつたと自負し得る位だ。凜乎としたもの

であつた。私は今こそ現神を仰ぎ奉る慶びに、全く思無邪の心境を体験したといふ氣持が湧くのである。

陛下の御前では、あのすばらしく横幅の廣い縦隊の一人一人が、前夜の疲勞をうち忘れ、尺を置いたやうに井然と「頭右」をなして進んで行つた。何がこの刹那の抑へ難い感激をかくも充溢させたのであらうか。「なほれ」を聞いて初めてほつと、重任を果し得た歡喜に、隊は足も軽やかに左に向を換へて行つたのであつた。

聖上陛下の御座所とは相當距離を隔てゝゐたけれども、萬場一面、王者としての御風格が流露し、一集團毎に賜はつた擧手の御答禮を拜し奉つて、ひしひしと身に迫る新たな感激が起つた。

そして私は心ひそかに、次のことを直感した。「一様に人も斯かる感激を覺えたであらう。何といふ心強さだ！」と、當日チチハルは皇軍によつて陥落したのである。このチチハル進軍と、私等第二國軍の旺盛なる意氣との、この間にはしつかりと契られた一つの強い緒があるのだ。私は斯く、私等の進路に、いささかの危惧をも感じないのみならず、かの日を幾たびとなく回顧することによつて、益々、その感を新にし、奮發しやうとのみ思ふのである。

御親閲の光榮に浴して

福岡縣八女工業學校電氣科第四學年

松崎敏男

今日は 大元帥陛下の御親閲を仰ぐ日である。一生一代、恐らく之が 陛下の御親閲を仰ぐ最初であり、又最後であらう丁度學校の最上級生として、此の光榮に浴する事の出来る我等は、實に幸福と言はねばならぬ。斯く思ふ時、思はず身心の緊張するのを覺えた。熊本商業學校に隊伍を整へた我が第四大隊は、帶山練兵場へと向つた。高聲で談笑し勝ちな我等も、帶山原頭に繰り擴げられんとする壯烈な分列の光景を想像して、高話する者もない。只ヒソヒソと憤み深く囁くのみである。各學校、各團體は、光榮にはためく色とりどりの校旗團旗を先頭に、歩武堂々と入場して来る。誠に生れて始めて見る壯觀である。

陛下の臨御を待つこと暫し、マイクロホーンを通して 陛下の御臨幸を報ずる聲は嚴に響いた。帶山練兵場には寂として聲なく、六萬餘の赤子の心は緊張に張り切れるばかりである。莊重なる喇叭鳴るや、大隊長の「氣を附け」の號令が続いてかゝる。「君が代」の奏樂起り、西風に翻りながら日章旗はスル／＼とマストに掲揚された。次で 大元帥陛下には玉座に着御し給うた。擧手を以て捧げ銃に答へ給ふ 陛下の颯爽たる御英姿を遙に拜する時、我等の胸は高鳴り、熱い感激の涙のこみ上ぐるのを感じた。軍樂隊の先導にて分列の幕は切つて落された。感激に總身の力漲り、踏む足も強く行進した。「頭右」の號令に 陛下を拜すれば、畏くも擧手を以てこたへ給ふ。この時私は強い強い感激に打たれ、身は硬直して、覺えず涙が頬を傳つて流れた。念頭には只 陛下あるのみで、一切が無我であつた。かくて我等は唯感激の中に御親閲を終へた。それは、我が日本國民が、戰場に於て國家皇室の御爲に働く時の崇高なる感情と一致するものであらう。我が帝國の強みは、皇室を中心として團結するところにあるのだ。團結の力は實に偉大である。支那兵が滿洲の野に於て、何分の一にも足らぬ我が軍に勝つことが出来ぬのは、中心が無く、個々に動くからだ。皇室を中心とし、眼に見えぬ糸に依つて一體に結ばれてゐるところに、我が國家の強さがあるのだ。

昭和六年十一月十八日！此の日こそは、到底忘れんとして忘れる事の出来ぬ日である。私は此の日ほど國民的感激を強く意識した事はない。我等は此の日の感激を永久に胸深く刻んで、日本國民たるの光榮を思ひ 陛下の御爲、國の爲、身を挺して働かねばならぬ……とは御親閲を拜して受けた強い感銘である。

御親閲拜受の感想

福岡縣浮羽工業學校研究科第一學年

田中保太郎

菊花愈々薫り爐紅葉照り映え、繪の如く錦繡を織りなす筑後の野、鐘樓より撞き出す晚鐘の響、吾等の首途を誇ぐ音とや思はれけん。夜のとばり未だ淺き水繩連山から吹下す寒風、満身の上に吹き荒んで秋氣棘々膚に通る。午後六時十分

第五集團第三十中隊の青マークを胸に意氣衝天の吾等の中隊、浮工健兒武装に身を固め校庭集合。人員點呼。氣を付け號令。校旗に捧銃。闇に閃く銃劍。校長先生への敬禮。「明日の御親閱拜受は千載一遇諸子は勿論本校の榮譽譬へんにもなし。陛下への尊敬の念を一層厚うし御親閱拜受を感謝し元氣潑刺たる態度を以て本校の榮譽、縣の聲譽を汚さざらむ様心掛け、指揮者教官殿の命令に絶対服従し、汽車乗降りに留意し、以て重大任務を果し恙なく歸校する様切に希望す」との校長先生より莊重感激に満ちた懇切な訓示を賜はり。「御懇篤なる訓示を體し必ずや校長先生の御意に副はむことを誓ひ期します。」との生徒の答辭あり。六時五十分、靴音高く、天地も揺がらんばかり、意氣揚々と冲天高く銀星恍々の夜の校門を後に驛へ進發。八時五分の出發時の時計の針の刻みの音遅しと、待つこと一時間……時は來た。吾等の汽車はホームに迂り込むかの如く、校長先生、諸先生の見送りの内に、懐しの田主丸驛に暫しの別れを惜しみつゝ、闇夜を汽車は久留米へ……。久留米驛頭に憩ふこと五十分間、十一時四十分第五十四號臨時列車は長いホームへ、はち切れる勢で流れ込む。車中に於て、武装解除。感激と感喜、夜は深い眠りに落ち、悽星輝く星夜中を南へ……と……。車輪の鬱然たる響、視界は唯人家の外燈が淋しく明滅するのみ。車中は夢の國。闇に響く氣笛、悽しい車輪の男性的な雄叫び、唯詩人の耳にセンチメンタルな空想家の耳に、微妙な天國の小夜曲、柔いリズムを傳へるのみ。一驛に停車。高瀬驛。時計は零時二十分を報じ、容易に發車せず。急激な動搖。當驛を發車。時に一時過五分。動搖で目醒め又銃を杖に深い夢路に還り御親閱を夢想しつゝ。明治十年の乃木大將の苦戰奮闘の戰跡、木の葉・植木の古戰場の驛も、深更の爲夢の内に列車は、何時の間にか勇ましく熊本驛へと。安らかな夢路は何處へやら。降車。

深夜の寒さは緊々と全身を襲ひ來る。驛前に整列。軍隊よりの案内者に依り、聖駕奉迎の榮光に百三十萬熊本縣民の熱誠と感激とを表す大奉迎門を後に、深い……眠りの森の都、一入榮光に輝く銀杏城下深更の熊本鐵道學校へ急ぐ。睡眠不足と乗車の疲勞、でも歡喜と元氣に満ちた足並を高く鐵道學校へ到着。時方に午前三時。星明りの人員點呼。指定の部屋に丸寢の床さし入りて夢路を辿る。

午前五時、目覺むれば朝來片雲だに無き快暗に惠まれ。肥後平野には百舌の裂帛頻りなる酣の南部晚秋の空明朗に晴渡り碧空に一點の雲朶も無き全くの天皇日和の訪れとなり、吾々浮工健兒の歡喜の色いと深く無上の光榮と共に森羅萬象悉く奉迎の誠を捧げて全九州、山口縣下、高等専門學校、男女中等學校、男女青年團、青年訓練並に在郷軍人團、各團體六萬六千有餘名が陛下の御親閱を拜受する本日若人の意氣彌が上に昂く、渡鹿練兵場は、五萬の緋緋を去る十五日御親閱兵分列式を嚮はせられし所、東に遠く天に沖する噴煙を抱いてそそり立つ阿蘇の靈峯の雄姿を仰ぎ、西は渺茫たる肥後の平野に連なる、實に俗塵を避けた城東の一清淨地に於て、六萬六千餘名の我等若人の千載一遇の榮譽と感激を滿身に滿たし乍ら、午後零時過、式場西端の玉座を正面整列し鹵簿奉迎の盛觀を拜せんとする者場を十重、二十重と取り圍み此の時煙火一發國旗は秋空高く……掲揚され、肅々として音なき時陛下には略式自動車鹵簿によらせられ一時十分御着。場の一隅軍樂隊の奏する「君が代」の奏樂、全員の最敬禮裡に、玉座に着かせ給ふ。

陛下には陸軍通常禮裝に菊花大綬略章を佩ばせられ、天機殊の外御麗しく御舉手の御會釋を賜はり。一時十二分軍樂隊の奏する陸軍行進曲に連れ、熊本師範を先頭に逐次分列行進は續く、吾が福岡縣男子中等學校分列に進む、第五集團第四大隊第三十中隊浮工健兒、隊長の號令「頭右」仰ぎ拜すれば御英姿颯爽。御玉體の神々しさ……。陛下には一々御舉手の御答禮を賜はり、恐懼云ふべくもなく錦旗は清秋の旭光に映え欣喜感激の最高潮に達し、有難さ、勿體なさ、夢で夢見る心地。榮光と感激の泪に眼は何時しか濕ひ千載一遇の御親閱拜受の一員として感泣感喜本校沿革史上に永劫に光輝ある記念の頁が綴られ榮譽措く能はず。一時三十八分、各縣女子中等學校、女子青年團一萬四千餘名によりなる、女子部隊は玉座前に凹字型に整列し、御親閱奉迎歌を奉唱し、次で「君が代」の奉唱後、本山知事の發聲で、天皇陛下萬歳を三唱し、陛下には龍顏麗しく午後二時十三分全員の奉送裡に御退出遊ばさる感激の泪の内に世相を鑑みるに、内外の時局極めて重大なる折にも拘らず、只管國軍士氣を鼓吹し軍規を振作せん御恩召を以て、玉歩を西陸九州の地に運ばせ給ふのみか、演習期間中將卒と苦樂を共に遊ばされ、戰況の推移に御留意遊ばされ、其の心情を慰ぶ時、恐懼に堪へず。

吾が帝國は經濟・外交・思想的に國家多事多端に直面せし、此の國難排除は吾が建國以來傳統的精神たる皇室中心主義の精神を持ち更に一層戮力協心以て聖慮を安じ奉ると同時に皇運の隆昌と聖壽の無窮とを祈り奉る次第なり。

拜受後八女工業との隊を解き、御尊顔再拜日の何時なるかを思へば轉た感慨無量崇嚴さ、悲哀さ、錯綜し、胸に滿ちぬ。三時三十五分雲集の人混みの中を下河原公園へ……四時三十分到着、七時半迄の自由行動の時間の中に御親閱拜受の大略をノートに謹書し、七時四十分感喜を罩めた夜の森の街を、不夜城の森の都を熊本驛に。九時十分の第五十四臨時列車は氣笛一聲諸共に大車輪は迂るが如く吐き出す一抹の黒烟を中空に、名残の森の郷を後に一路鄙の夜の深沈たる肥後の野を霧進又霧進。晝の感激を夢に見、前夜の車中に比しての静寂さ、唯車輪の響のみ刻一刻と刻む時計の針の如く歸路は近まり、何時しか大牟田も後に、羽犬塚も過ぎ、十一時三十分久留米驛構内へ。待つこと五十分。久大線臨時列車上の人となり、高空雲無く寒黒い數里、筑紫野の暗夜をひた走りに田主丸驛へと……。午前一時半過ぎ、全員恙無く、校長先生他の諸先生のお迎へに守られ、眠りは何時しか醒め果て隊伍堂々と……。水繩連山は静な眠りに晩秋の肌寒さ身に泌みて來る、深夜を學校へと行進。懐しの校庭に於て、校旗並に校長先生に捧鉢。校長先生より、職員生往に對する慰勞の言葉を戴き、午前二時半、丑滿の眞夜中を懐しの家路へと急ぐ。

御親閱拜受の感想

福岡縣三井工業學校第三學年 原 登 士 男

聖上陛下の御親閱を拜受すべく我校二百の一隊は、十六日の夜大牟田驛に汽車を待った。其の間に一列車の臨時發が通過したので、我々は改札口に現はれてそれを見た。どれもこれも満員で、壽司詰めではあるが、どの顔を見ても不平相な顔は一つもない。顔と云ふ顔總ての顔は皆、輝かしい希望に充ちて生々としてゐる。其の列車が動き始めた時、我々は本能的に「左様なら！」と彼等に呼び掛けた。彼等も又窓から乗出す様にして我々に應答した。其處には學校の別も郷土の

違ひも何もない。同一の希望に充ちた同國に生きる若者の胸と胸とに相通する何物かがあつたのである。自然に兩者否、多數の心結びつける崇高なる希望が全身に漲つてゐたのである。

帶山練兵場に到着して非常なる力強さに身中がぞくぞくするのを感じた。自分は未だ曾て斯くの如き大群集を見た事はない。其の集團が一群又一群、定規でも當てたかの様に美しく整列してゐる様子は見事なものである。而して其の上、後から〜と續々長蛇をなして進んで來る參加集團の列を見ては、其の偉大さに打たれるばかりである。「これが皆我が同胞だ。」唯一つの同じ希望を抱いて集ふ人々だ。「斯くあればこそ學國一致、能く國難に當り得るのだ。」我が大日本帝國が大盤石の搖ぎなき歴史を保持し得る所以の物はこれだ。……我が國民の心は斯くして一致協力するのである。

午後一時、我々は極度の緊張を以て 陛下の臨御を御待ち申した。満場水を打つた静けさ、咳一つする者なき中に、遠くに響く自動車のエンヂンの音のだん〜近くなるに従つて、私の全身は異常なる緊張に震へるのをどうする事も出来ぬ爆音高く先驅のオートバイが姿を現はした時、私の全身は丁度熱湯でも浴びたかの様に熱い血潮の漲るのを感じた。言ひ知れぬ緊張に身体の震へは一層其の度を加へて來る。陛下を純白の玉座に仰ぎ奉つた時「日本は萬代不易だ！」と直感的に頭に響いた何物かがあつた。何故か分らぬ。併し私は今もあの時の心強さが忘れられぬ。分列が始められた。我が大隊も動き始めた。たゞ無意識に進んだ。秋風に翻る絢爛目覺むる許りの校旗團旗を先頭に數萬の人の動き、青空に閃く銃劍の光、遠くに響く樂隊の音、其の中に包まれて夢中に行進を續けたが、聞えるものは唯一つの足音のみである。大隊長の號令も唯夢の如く、大きな〜興奮に酔つてしまつた。玉座間近になれば、再び全身の血は沸騰するばかりで、前に増した震ひの襲ふのを強く感ずる。右手は銃床も碎けよと固く〜握り締め、一步一步の足は大地も裂けよと力を込めて踏みしめる。自分自身の力とは到底思はれぬ強さがある。校旗が斜に倒される。「頭右……」澄み渡つた青空、壇上高く直立し給ふ 聖上陛下の御英姿を拜し奉つた時、畏くも擧手の御會釋を賜はつた刹那、何もかも忘れてしまつて、森嚴莊重の極唯々感涙の湧くのみであつた。其の時の氣分は到底筆舌で表現する事は出来ない。斯くして分列式は終つた。併し

私は、何處をどんな風にして過ぎたか分らなかつた。總ての人が皆さうあるに違ひない。「此の距離を行進して、少しの疲労をも感じないのは不思議だ」と或者は云ふ。此の不思議なる心理状態こそ我が國民の一樣に誇り得る尊いものである。嗚呼、曠古の御盛儀、此の尊い御親閱拜受の光榮に浴し得た事は、私としてこれが空前の事であるは勿論、或は絶後であるを思ふ時、絶大無限の感激に胸を刺されるのである。私は我が大日本帝國の天壤無窮なる所以を、茲に改めて實感し得たのである。數萬の拜受團體も、幾萬の拜親團體も齊しく此の感激に咽んだであらうことは、私の申す迄もない事である。

光榮に輝く日

福岡商業學校第五學年

犬 丸 正 三

人の波!!人の波!!それは、はる／＼として蒼穹の下、かぐはしい土と草の香りの中に、日本人と生れた誇を瞳に、肩に、胸に、はちきれるやうに抱いた老若男女の夥しい群だ。誰も顔が喜悅と歡喜とに晴れやかに輝いてゐる。感激の渦!!心象の坩堝!!馬の嘶きが眞晝の空高く交響してゐる。光榮の秋!!四時間の夜汽車の旅。はる／＼御親閱の光榮に浴せんと、間斷なく襲ふ睡魔を、疲労を排しつゝ氣も朗かに、この感激と興奮との放電の渦巻の中を縫つて、我第五集團は所定の場所に整然と列んだ。澄みつゝ青き空の高處幽かに満てるもの、建國三千年の榮光の輝き!!

タイム、タイム、タイム。刹那ボンボンボンと二、三發、白煙天空に躍つて、幽薄の著御を報じた。靜寂!!靜寂!!靜寂!!肅として水をうてるが如き中を、若人のうちに漲る興奮を凝つと制するやうに、啾啾たる吹奏樂が嚴かに、靜かに耳へ肺へ流れはじめた。

おゝ見よ、神々しいまでに純白な布で蔽はれた壇上にお立ち遊ばされた颯爽たる御英姿を、バツクの廣い天心から、貴い圓光が玉體をおつゝみしてゐるやうだ。「君が代」の合唱、唱つてゐる中にだん／＼と胸が苦しくなつた。聲が出ない

はては嘘一杯に熱い涙が滲み出て 陛下の御姿が臚に、かすかに、そして空の彼方に見えなくなつてしまつた。俄然起つた軍樂隊の躍心的な行進曲!!壯觀なる御親閱の幕が、今こゝにきつて落されたのだ。歩武堂々たる大部隊の行進!!おゝ進む進む 陛下の御前へ……焦燥と喝望の時間が過ぎて、とうとう僕等の順番が廻つて來た。「さあ進め、我等若人よ行け」玉座に近づくとつれて脚がおのづからぐん／＼高く上る。おゝ 天皇旗ひた／＼とひらめく御側に、神ながらの御勇姿が僕等の眼に映じたではないか。御前を距ることまさに百米突餘。あゝ千載一遇のこの一瞬時……胸が、心が、躍動する。頭の芯がぐつと張り切れさうだ。「頭右つ」眼はすばやく全身の吸収力を一點の瞳に凝して、龍顔を畏い程まともにすそれこそまともに見詰めた。

君と臣との連綿たる血脈の融流だ。一切を超越した見事な連鎖だ。髣髴たる興奮と感泣の亂舞だ。火花となつて奔流する日本歴史のフィルムだ僕等はたゞ恍惚と波瀾のうねりにのせられて、御前をはるかに過ぎてもとの位置に歸る迄、この感激と恍惚の錯交はなか／＼靜まらなかつた。大部隊の行進がまだまだ續く。銀波の躍動の限りなき連鎖だ。僕は孰々考へたのだ。今更何と畏いことか。今日陛下に於て始めてかの直立不動の姿勢を見出した。連日連夜に亘らせらるゝ大演習御統監の御疲労のお氣色だに拜されぬあの嚴然たる而も長時間御微動もなきお姿に、不動の姿勢そのものゝ典型極致をまのあたりに拜んだ。さうだ、僕等青年どもへ親しく御垂範下されたではないか……

やがて青年女子團の奉迎歌があたりをリードした。彼女達のはちきれる赤き心からの莊重な音律がひし／＼と僕を、肺腑をしめつける。感激!!熱涙!!燃え盛る若き命の眩暈!!おゝ大君の御馬前だつたらたつた今この場で僕の小さな命を投げ棄てたい。こんな謹嚴な感情が、湧然として起つたのは僕だけではあるまい。恐らくこの何萬と言ふ人の一人一人のその心の中に勃々と強く明るく湧き溢れてゐた想に違ひない。

「おゝ光は東方より世界へ、人類へ燦然たる黎明を齎さんすめら御國すめら帝」我が帝國の同胞よ!!汝の赤誠とそれの結合もて 陛下を、皇室を守護し奉れ、神の國日の本を護れ!!これこそ我等九千萬國民の重い尊い使命にして榮譽ある誇り

ではあるまいか。「天皇陛下萬歳」「大日本帝國萬歳」

御親閱拜受感想

福岡縣久留米商業學校第五學年 牟田成夫

畏くも 大元帥陛下には、昭和六年十一月、陸軍特別大演習御統監の爲め、親しく鳳輦を肥筑の平野に進め給ふ。西海の民草齊しく歡呼拊舞、熱鬧に山野に相慶し相賀して只管に 陛下の行幸を迎へ奉る。去る十二日久留米驛頭に龍顏を拜し奉つて以來 陛下におかせられては、連日の御統監にも拘はらせられず、更に畏くも、我等九州の全學生、青年訓練所生及處女會員等、七萬の微賤をして、御親閱の榮譽に浴せしめ給ふ。我等あまりの辱けなさに、歡喜感泣しつゝ、この光榮の日を待つこと久しかりき。

昭和六年拾一月拾八日。嗚呼此のよき日！我等一生の歴史に最も尊き最も光輝ある一頁を與へぬ。前夜來野營の夢圓かに明くれば、南朝天授四年の秋、菊池が忠誠の古戰場、託摩原は狹霧に包まれて、遠近の幕舎を出づる我等の同志幾千とも知れず。朝暾に數百旒の校旗を翻して、喜びの餘り心ひたすらに躍る。踏む足取も軽く、抑へ切れざる嬉しさに、口許に綻ぶ微笑を禁じ得ず、歩武堂堂蛇蜒長蛇をなして陸續として式場へと詰めかけぬ。何たる壯觀ぞ。廣茫幾里只人と旗のみ。而かも肅として聲あるなし。天亦今日のよき日を祝ふか、碧空一點の雲翳を止めず、東を望めば阿蘇の靈峯久遠の噴煙を柵引かせ西、遠く雲仙の秀峯かすかに霞む。前方、御座所は純白の布にしつらへられ、御傍に國旗朝風に翻へりて今や 陛下の臨御を待ちわびるばかりなり。

聽て午後一時をぐ過る稍稍にして、「君が代」の奏樂嚴かに響くと見るや、畏し眞紅の 天皇旗を御先頭に起伏せる丘の彼方に鳳輦を拜しぬ。何たる莊嚴ぞ。何たる森嚴ぞ。我等今迄幾度となく此の場の御光景を想像したれども、尙ほ斯くの如しとは思はざりき。我等此時程の肝銘を知らず。これほどの緊張を知らず。御車之るが如く止まり給ひぬ。まもなく

颯爽たる御英姿は、金峯を背に白く青空に浮立てる玉座の上に立ち給ふ。其の神々しき御姿。碧空に嚴然と御立ち遊ばされたる御英姿を仰ぎ拜して、あまりのおほけなさに、目頭の熱くなれるを如何せん。滿場寂として聲なく、一齊に最敬禮をなして赤誠を捧げぬ續て勇壯なる軍樂隊の奏する、陸軍マーチに分列は始まりぬ。校旗を先頭に晴れの御前へと、躍る心を堂々と踏みしめぬ。君が爲國の爲には水火をも辭せず。君に捧げたる命。我等何たる幸福ぞ。我等は光輝ある日の本の男子なり。今畏れ多くも 陛下の御前へと行進しつゝあり。この感激を懐き得るは我等日本國民の特權にあらずして何ぞや。陛下の御前へ近づくに従ひて、意氣感々盛んにして、今は天をも衝かん許りなり。感激に震ふ足を踏みしめ踏みしめ歩武堂々と、我等第五集團は行進を続けぬ。數千の心一になりて只無我の境にあり。突如荒井大隊長の「頭右」の號令はかかりぬ。おゝその瞬間！實に其の瞬間なり。仰げば 陛下には凜然として、身動きをなし給はず直立不動の御姿にて、御仁慈深き御まなざしを注がせ給ふにあらずや。而かも畏れ多し、我等に擧手の禮を賜はるにあらずや。何たる恐懼ぞ。何たる神々しき御姿ぞ。軍樂隊の奏樂も今は耳にあらず。我等目に青空なく、丘陵なく、自身の存在さへ忘れぬ。忘我とや言はむ。映るものは只神々しき 陛下の御姿のみ。斯くの如く、咫尺の間に陛下の御英姿を拜し得むとは夢にも思はざりき。思へばよくぞ日の本に生を享けたるぞ。我等いつ迄もいつ迄も其處に止まつて 陛下を拜せむ心一途なり。最早斯くの如き榮譽は一生あらざるべしと思へば振り返り振り返り御姿を拜せざるを得ざりき。大地を踏みしむる足並の音のみ。場を巡りて元の位置に歸りぬ。玉座の御前には、心は同じ後續部隊が陸續として御親閱を拜受しつゝあり。見よ其の足並を。その敬虔なる態度を。永きに互る男子の御親閱終ると見るや、女子奉唱隊、前面と左右兩側より玉座の御前につつましく進み出でぬ。

あゝ今すめらみことの御姿を 拜みまつる御姿を

拜みまつる御恵の

いかなる幸か かしこさに涙こぼるゝ

今が今まで場内聲なきに勃然と起るこの合唱。美しき心の一致。新たな感激を覚えぬ。次に満場七萬聲を合して「君が代」を奉唱し、終れば熊本縣知事の音頭にて「天皇陛下萬歲」を唱へ奉る。心の奥底より吐露せるこの赤誠の聲、西海の山々に呀して、天は爲に震ひなむ。地は爲に搖ぎなむ。餘韻は遠く山波をかすめて外國へと響きけむ。

今や國事多端にして、内憂外患交々臻り、陛下の御宸襟を惱まし奉る、今日の如きはなし。而かも滿洲事變に、經濟打開に、時局愈々緊急なるにも拘はらせられず至尊の御身を以てせられ、草莽七萬を親しく閱せらる。光榮何ぞ之にすぎむ。我々は須らく聖恩の優渥なるを肝に銘じ、千載一遇のこの光榮と感激とを、語り續ぐと同時に、又此の盛事に就き、聖慮の存する所を拜察し奉りて愈々胆勉是つとめ、進んで國難の打開につとめ、引いては聖慮を安んじ奉らざるべからずこれこそ我等第二の國民たる者の責務なりと信ず。

御親閱拜受の所感

福岡縣小倉商業學校第五學年 黒田正義

我々が休憩すべく、草原に腰を下した時は早や午後零時に近かつた。帶山原頭の上空は玲瓏と晴れ渡り、紺碧の空には一點の雲も無くまぶしい様な秋の陽は、日渡す限りの民草の上にさん／＼と光を降りそゞいで林立する數百の青年團旗の壯麗さは、格別であつた。昨夜來、一睡もせず、朝未だ薄暗い頃からの行軍で稍疲れては居たが腰を下しても眠る氣にはなれなかつた。やがて大隊長の「氣を付け」の號令に、我等の心は頓に緊張し一齊に立つて不動の姿勢を取つた。正に午後一時六分！啞唳たる喇叭の音は一種の森嚴さを以て響き渡り、「著け劍」の號令は發せられたやがて「捧げ銃」の號令、張り切つた氣分の中に 大元帥陛下には自動車にて御出ましに成り莊嚴なる御親閱は始まつた。間もなく我等學徒六萬六千名の分列式である。午後一時十五分、麗かな秋の陽光に輝く、高さ二間餘りの純白なる玉座に颯爽たる 陛下の御英姿を拜した時には我等は身の疲れも眠たさも何もかもなくなつてしまつて唯純真そのものゝ様になり、我を忘れて龍顏

を拜し奉つた。そして唯いひ知れぬ感激に満ちて、心は彌増に興奮する。やがて先頭部隊は行進を始める。林立せる青年團の旭日旗は輝り映えて折柄の風に、はた／＼と翻る。續く各校の精銳は校旗を先頭に、歩武堂々と行進する。數千の銃劍は秋晴れの陽にきらめき、陸軍々樂隊の奏する勇壯なる行進曲は、一種の莊嚴さを以て、聞えて來るのであつた。

かくて、玉座に御起立遊ばされたる、陛下の龍顏を拜し奉つた時、我等の心は唯緊張と感激の念のみだつた。そして唯もう一心に歩いた。天も無く、地も無く、自分の眼に映るものは、唯々 大元帥陛下の颯爽たる御英姿のみだつた。此の地、此の時、千載一遇の光榮に浴した刹那の氣持！嗚呼、天威に打たれて全身に波打つ慄へをおぼえるばかりで、我等は表現しやうとして表現する事が出來ない。然し、此の心の奥深く、強く印象づけられた氣持は、永久に忘るゝ事なく、我等は此の榮ある十一月十八日を記念すると共に堅く肝に銘じ、身命を培して御國の爲、祖國の爲に至誠を盡し以て絶大なる大君の御恩に報ひ奉らん事を、堅く心に誓つたのであつた。かくて思ひ出深き分列式の終つた後、女學校生徒並に女子青年團の代表者に依つて奉迎歌は歌はれ、やがてゆるやかに流れ來る「君が代」の莊重なる奏樂に我等も心から合唱した。かくて最後に我等民草の赤心こめたる萬歳の聲は、晴れ渡つた大空高く、山川も搖ぐばかりに筑紫の天地に響き渡るのであつた。

御親閱拜受所感

福岡縣門司商業學校第五學年 櫻井虎之進

感謝に覺め感謝に眠る一日一日を、我等は平和に幸福に送つて來た。榮えある帝國臣民として、我等の前途にも亦、希望と抱負とが輝いて居るのだ。そして、今や此の光榮の日を迎へることが出來たのだ。我等の一生の行程に於て、斯かる光榮と、斯かる名譽とが再びあるか。勇躍する胸は激しく波打つ。

御親閱場。帶山練兵場に秋の日は輝かしく照り映えて、東北の方遙かに靈峯大阿蘇を望む。幾萬舌幾十萬と集うであら

う拜觀者の群。彼等の胸も亦躍動し、感泣するであらう拜觀者の群。其等は唯帶山へ、帶山へと一路押寄せてゐるのだ。場の一隅に設けられた擴聲器。今日を晴と放送するアナウンサーの一聲一聲が、冷たい風に或は大きく、或は小さく響いて来る。青年訓練所生徒、在郷軍人、そして我等中等學校生徒。翩翩と翻へる團旗、或は校旗をかざして堂々と繰込む。さしも茫漠たる帶山の草原も集團や群集で埋められてしまふのだ。澄み渡りたる碧空。一點の雲もなき所謂日本晴だ。指揮官の佩劍がキラリと光る。憲兵の馬蹄が躍る。時しも莊嚴にマイクロホンを通じて響く臨幸の間近きを傳ふるアナウンサーの聲。時に午後一時。日章旗がしづくくと昇る。満場寂として聲なし。軍樂隊の「君が代」の奏樂。全員一齊に捧げ銃の敬禮をすれば、畏くも 大元帥陛下には御答禮遊ばさる。筋肉が硬直した。胸がつかへた。何かこみ上げて来る熱いものがこみ上げて来る。眼頭が熱くなつた。

嗚呼、此の瞬間、此の感激。我唯一人拜受して居るのではなからうか。銀杏城下に集へる七萬の九州健兒。その心臓は張り裂けるばかり、その眼は、口は、手は、唯硬直するばかりだ。水を打つたやうな静寂さだ。やがて分列行進が始まる七萬の健兒の歩調が、何時しか軍樂隊のマーチに吸込まれてしまふ。歩調は合つた。勇ましき分列は始まつた。一步一步しつかと大地を踏みしめて、前進又前進。大隊長の號令で頭右をすれば、白布の臺上遙かに拜する 陛下の御英姿。帝國八千萬の國民を知らせ給ふ一天萬乗の眞の御英姿であらせられる。風は止んだ。日は輝いた。我等の足は軽い。場を一周して舊位置に歸れば、三方より前進する奉唱隊の團。赤誠こめた少女達の奉唱する歌。そのやさしくも尊きメロデーが遠く大地を流れて来る。そして全員國歌合唱、續いて、陛下の萬歳を三唱すれば、陛下には御召自動車にて還御遊ばされる。

嗚呼。永遠に記念すべき、今日の榮えある御親閱はこゝに終りを告げた。此の喜悅、此の光榮に、誰か感泣しない者があらう。斯くして感激し感泣する時、献身奉公の志の益々堅固に、そして光輝ある我が帝國の國威を彌増しに廣め行くべき我等の抱負と使命の、愈重大なるを自覺した。

御親閱を受けて

福岡縣久留米高等女學校第三學年

若 林 靜 枝

十八日の朝が参りました。おゝ此の日こそ私共がどんなにか待ち侘びてゐた日でせう。今日こそは、はる／＼と九州にお下り遊ばした 陛下を私等が眼前に仰ぎ奉る日です。光榮ある此の日を壽ぐ如く、未明の空は次第／＼に明るくなつて参りました。菊の香高き秋空を仰いで私の胸は早今日の光榮に波うつのでした。式場に参ります間も、戸毎にはためく日の丸の國旗にいつもと異つた莊重さを感じさせられるのでした。

式場に参りますと、早多くの人が 陛下を拜まんものと詰めかけて居ります。午後一時 陛下御着のラツバが一聲高く秋空にひびき渡りました。一同整列して御迎へ致しました。廣練兵場にはぶき一つない静かさの嚴肅なのに先づ私は打たれました。隊伍の整つた男子の分列式が始まりました。一時間ほどしてそれがすみますと、いよ／＼私達の御親閱が開始されました。軍樂隊の音につれて行進する間も私の足は變にふるへがちでした。「陛下の御前で」と言ふ光榮に包まれた感激のあまりでせうか？さうです。よく考へて見ますと、私は 陛下の一赤子として此の場に参列して居るのです。どうして感激なしで居られませう。奉迎歌や「君が代」を歌つて居ります間に私は自ら身体が澄んで来るやうな氣が致しました。丁度其時眞白な玉座に 陛下の御英姿を拜して私は思はず有難さに涙が湧き出て参ります。感慨無量！やがて「君が代」の奏樂と無上の光榮にうちふるへてゐる私達の最敬禮の中を 陛下は還御遊ばされました。御親閱は終つたのです。

しかしこの感激に満ち溢れた今、私達誰一人として聲を出すものは有りません。唯々胸が一杯になるばかりです。あゝこれほど嚴肅、莊重なる式が何處に有りませう。此の感激こそ我が國民でなければ味ふことの出来ないものです。私は此の時こそ日頃口にする「世界に比類なき萬世一系の天皇を戴く日本國民の無上の光榮」と言ふことを眞に深く感じたので

す。これでこそ私の最上の望がかなつたと申せませう。何う言ひ表したら好いでせう。此の一瞬間の感こそ一生涯私の念頭から離れないでせう。この時こそ私は「日本國民と生れたことに無上の光榮を感じ、又、今上陛下御統治のもとに國運を伸張せんと努力しつゝある臣民の一人である」と言ふことに最大の誇りと幸福とを更に感ぜずにはゐられなかつたのです。そして報國盡忠の炎がこの喜に溢れた血潮の中に更に更に燃え上るのでした。

御親閱を賜はりて

福岡縣福岡高等女學校第四學年 石橋富美

明くれば十八日、天高く薄青の空絶好の日和だ。冷々とした空気をふるはして鐘が鳴る。冷きつた廊下をふみながら洗面所へ行つた。次第に朝霧ははらはれ、なごやかな朝の光が流込んでくる。碩臺校は緊張の中に息づいてゐた。あたりは言ひしれぬ引締りに満された。御親閱をあほぐ此の甌南の地に惠まれた天候、からつと晴れきつた空、私等の心はいやが上にも躍つた。全校生徒、他縣の人々も集り、愈々帶山練兵場へ急いだ。光榮の熊本市は歡喜に燃え、國旗はひら／＼と揺れ一層喜びを濃くした。帶山練兵場へ續々と集ひ来る赤子の群、又は在郷軍人、青年訓練所生など、手に／＼銃を執り軍旗を持つて堂々と參列する。その中に女學生や、きらびやかな處女會員を加へて整列した。見渡すかぎり廣々とした高原（盆地のやうにも見えるが）滿洲を聯想されるやうな平地が長く／＼延びてゐた。澄み渡つた十一月の空、遙かに阿蘇の連峯を眺め、噴煙のたなびくかと思はれる方を見渡した。榮えあるこの日、天皇陛下の御姿を拜せんと遠方より集り來た市民の群は、十重二十重に人垣をつくつた。皆は包みきれぬ喜びを抱いて微笑んでゐた。突然、天に響く花火の音、陛下の臨御遊ばされたとの傳へにて、遙か後方に列を正した私等は、御姿を拜しまつらずとも、身も心も引張り神經を尖らせた。それから次々に行はせられた分列式、畏くも御前に進む各集團、銃は燦と光り、幾千幾萬といふ銃の波、軍旗の帯、は限りなく續いた。かくして、偉大な、莊嚴な分列式がパノラマの如く展開された。遠くから眺めると銃の線が白光

色に輝いてゐた。十二集團の前進の後に愈々女子の奉唱部隊が續行した。足も軽やかに、軍樂隊のマーチに合せて進んだあゝ、陛下の御姿、微動すら遊ばされず、陛下の直立不動の御姿を拜し奉つた時、我を忘れ、場所を忘れて、たゞたゞ御姿を見守り奉つた。聖上陛下の御前、あゝ國民としてこれ程尊く喜ばしいことはない。無上の光榮に浴した我等、直ちに奉唱歌が歌ひ出された。榮えある今日の御親閱、九州各縣の女子は畏さに満され、御前で聲高らかに歌つた。隣きもせず、陛下を拜し奉る兩眼は熱くなつた。「あゝ、われら生けるかひあり」嗚呼、感慨無量、緊張の中に温い御乾徳に抱かれ、唯茫然として立つてゐた。折から起る「君が代」の奏樂、何萬の人の心は唯一つに溶け合ひ、昭和の御代を喜び聖徳を感謝して心から國歌を歌つたのである。あゝ、この感激に満ちた場面がどうして此のつたない筆で表されようか。畏くも陛下は一々御會釋を賜はつた。人々の感激は高まり溢れた。このまゝ大地にひれ伏したいやうな衝動を覺えた。萬歳々々、三唱を終へた私等は理智を失ひ全く狂人のやうであつた。たゞ尊さの餘り胸がつまり聲すら出なかつた。陛下は御機嫌麗しく御退場遊ばされた。なほ自動車の音の彼方に消えるまで、じつと失心した様につゝたつてゐた。あゝ、永遠に忘れることの出来ないこの日。天皇旗は輝いた。永久に榮えある帶山練兵場に立つて、夕日に染まる彼方此方を眺めた時、私は強く／＼一國民たる事を意識した。足下の草すら感極まつて揺れそよいでゐるやうに思へた。

御親閱拜受感想

福岡縣柳河高等女學校第四學年 堀内悠紀子

「氣ヲ付ケ」のラツパにて一齊に緊張する。今風聲を迎へ奉るのだ、大君が入御遊ばすのだ。この同じ地上を……、と思へばあまりの畏さに地にひれ伏して了ひたい思。

我大日本の 天皇陛下に、我大君に親しく咫尺し奉るといふことはどう考へて見てもあり得る事に思へない。それはあまりに勿休ない事だ。だが我等は、私は數十分の後には……何といふ幸福だ、これこそ千載一遇の幸福なのだ、否それ

以上の……、と今更ながらひしと強く／＼奥深い胸に身の幸福が湧んで来る。何といつていゝかわからない、はかり知れないこの幸福に恵まれた自分が、今始めて輝かしく、意義あり、甲斐ある姿に思はれ、自分自身に感謝したい、せずにはゐられないものに思はれる。そして又父上に、母上に。御親閲を賜はる最も幸福なる六萬の男女の若人の姿が皆私の目には輝かしく尊いものに見へる。

男子の分列式後奉唱隊の前進、莊嚴な軍樂隊に合せて行進中、純白の玉座に立たせ給ふ大君の清く、氣高く、神の如き御姿を拜しそのまゝそこにひれ伏したい思。自づと垂れた頭の儘奉唱位置につく。號令にて最敬禮、唯々わが天皇陛下、わが大君、すめらみこと、と心で強く／＼叫ぶのみ。軍樂隊の指揮にて奉迎歌奉唱。大君の前にて唱ふこの榮譽。眼には指揮官の振る鞭の先のみ、そして胸の奥底には我大君の御姿のみ。唯一度この幸福を、甲斐あるこの我等の生命を大君に告げ申さうと、無意識に聲を限りに唱ふ。

最も意味深い我等の奉迎歌を終へて最敬禮。あゝ大君、我等にこの幸を與へ給うてと深く／＼頭を垂れる。次に「君が代」幾度唱つたかわからない「君が代」を君の御前にて奉唱するのは最初であり又最後であらうと思へば又しても深い畏さ、身の幸に自然と涙がにじみ出で、胸が妙にときめく。それから熊本縣知事の「天皇陛下萬歳」の發聲にて我等も一齊に「萬歳」を唱ふ。六萬の若人の出づる限りの聲にて天も地もくつがへるやう。萬歳後軍樂隊の「君が代」奏樂にて最後の最敬禮。

我等にこの甲斐ある生命を與へ給うた天へ、地へ、すべての神々へ心から感謝申したい思でより深く頭を垂れる。號令に身を起せばまだ大君の神の如き御姿。又新しき畏さ、貴さに感慨深い。最後にもう一度 天皇陛下、わが大君、すめらみこと、心の中で強く／＼叫んで居た。

御親閲を拜受して

福岡縣大牟田高等女學校第四學年 坂元ナツ子

晩秋の色濃き肥筑の山野に、昭和六年度に於ける、陸軍特別大演習は、華々しく舉行され、畏くも 大元帥陛下には、滿蒙時局の極めて重大なる折にも拘はらず、只管、皇軍の士氣鼓吹の御思召を以て大演習御統監のため、玉歩を西陲の地に向はせられ給うた。而して光榮に浴せんと、九州各地より集まる若人達は、十七日迄に續々と熊本に繰込まれた。十七日、これ等若人の夢は、明日の榮ある日の光景となつて、圓かに結ばれたのであつた。折しも冷氣と共に深まり行く十八日の光景を、胸に抱いて、我等の意氣は彌が上に昂つた。

愈々十八日待ちし日、空はあくまで澄み渡り、天與そのものの觀があつた。東には名にし負ふ阿蘇連峰の雄姿を遙かに仰ぎ、西は果てしなく展がる肥後平野に遠く連なるところ、ここ帯山練兵場は、實に俗塵を脱した城東の一清淨地である。此の日、此の盛觀を拜せんとするもの、場を十重、二十重に取り圍み、流石に廣き帯山の大練兵場も、只これ人の波を以て覆はれてゐる。やがて各團隊は正面中央にしつらへまつれる玉座前面に、分列奉唱の廣場を圍み整列を完了した。見渡せば、校旗、團旗、訓練所旗、目もあやに林立する中を、聽て被る光榮を前にして、七萬の大部隊は、肅として陛下の臨御を待ち奉る。此の時轟く煙火一發、大國旗は秋空にする／＼と掲揚され、場内更に緊張の色を増す、肅として音なきとき、天皇陛下には「君が代」の奏樂裡に知事以下の奉迎を受けさせられつつ、玉座に立たせ給うた。聽て御親閲は開始され、壯快無比の大分列式は始まつた。喇唳たる喇叭の合圖と共に、爽快なる行進曲につれて、分列の諸隊は過ぎては現はれ、現はれ、現はれては去る。その數十隊の行進曲に伴ふ分列の雄姿は、實に勇壯、嚴肅其のもの示現であつた。分列諸隊が、みな君の御前に、今ぞ誠忠の赤心を、その一舉手一投足に現さんとする一人／＼の心持が、ひし／＼と我々の胸を打ち、思はず感涙に咽び、全身全靈の緊張と感激をこめて、行進する諸隊のその至誠、その勇武、その規律、

これぞ日出づる國の礎なりと思へば、只々感激あるのみであつた。洪大なる聖恩に浴する光榮の御親閱拜受者により描き出される分列行進は、實に大繪卷そのもの、如く、誠に雄々しくも且華麗極まるものであつた。かくて男子各部隊の分列全く終り、所定の位置に復するや我等女子中等學校、女子青年團の組織する奉唱部隊は三方より前進を始め、玉座の御前に凹形を畫きて隊形を整へ、肅然襟を正して玉座に向つて最敬禮をなす。しかる後軍樂隊の伴奏にて「あゝこゝにすめらみことの風聲を迎へまつれり」と、御親閱奉迎の歌を奉唱する。あけくれ慕ひ奉る大君の御前に、今しも尊き御聖姿をまのあたり拜みつゝあるを思へば萬感胸に迫つて、只かたじけなさに感激の涙にぬるゝばかりである。若き女性の感激に高潮せる聲は廣場に響き、我等の心からなる奉迎歌の奉唱終るや、續いて全員は「君が代」を奉唱し、次で指揮臺に上れる熊本縣知事の發聲に合せて 天皇陛下萬歳を三唱した。その聲は天柱も揺ぎ、地軸も碎けん計りであつた。一同は心の限り聖壽の無窮を祝ぎ奉つたのである。聽て全員一齊の奉送を受けさせられつゝ「君が代」の奏樂裡に御還御遊ばされた。嗚呼思へば御親閱の始めより終り迄に一時間、この長き間 陛下には御親閱臺上に御直立のまゝ寸毫の微動だにもあらせられず、神容依然として終始參加部隊に御眼を注がせ給ひし大御心を拜察するだに畏き極みであつた。これぞ上御一人なればこそ拜し得る御神容である。御親閱を拜受せる全員は、今眼のあたり御神容を拜して、光榮と感激とに無限の思ひを抱きつゝしばし風聲の還御を拜送した。之を拜觀せる幾萬の人々も、參加部隊の行動に輝く日本の行方を明かに見せられし面持ちにして、暫くは去りもやらず。帶山原頭に於ける時れの御親閱はかくして滞りなく終了したのである。嗚呼、御民われ生けるしあり、天地の榮ゆる時にあへらくもへば、と古人はうたつたが、我等も今またこの感懐を繰り返さざるを得ないのである。

御親閱拜受所感

福岡縣八女高等女學校第四學年

堀

キヨ子

十一月十八日、御親閱の當日である。廣い帶山の野、そこには嚴肅な空氣が漲つてゐた。おゝ、煙火が揚がる、高く澄んだ秋空に向つて。臨御の合圖である。集つた幾萬の人々の心は震つてゐるだらう、今日の光榮に浴するを思つて。

「臨御!!」軍樂隊の奏する「君が代」の奏樂は、靜まりかへつた式場を靜かに流れて、嚴かに響く。青年男子の正々堂々たる分列式が終つて、私達女子の奉唱である。「整列」軍樂隊の曲に合せて行進し始めた。純白の布に覆はれた玉座、神々しい御姿にて立たせ給うた 陛下、現人神におはします尊き御姿を今眼前に仰ぎ奉ることかたじけなさ、たゞありがたさに頭が自然と下つて行く。私は人も無かつた、何物も無かつた。そして恍惚として仰ぎ奉り、眞心こめて奉迎歌を高唱した。「あゝ、こゝにすめらみことの、御姿を迎へまつれり……み姿を拜みまつるかしこさに涙こぼる……あゝ、我等生けるかひあり、おほけなき今日のよき日を……」さうだ!!私達は生けるかひがあつた、この尊き日本國に生れ出で、今日こゝに生けるかひがあつた。あゝ、この光榮!!「最敬禮!!」陛下にはかたじけなくも擧手の禮を賜はつた。尊きそのみ姿、あゝ、その尊きお姿よ。私はこの大君の赤子だ、日本人だ、強い國、力強い國、或ほこりが總身を襲うた。

「君が代」の奏樂に和して「千代に八千代に……」とたたへごと申す式場全員の合唱の聲は、秋空に響き渡つて行く。續いて「天皇陛下萬歳」名狀しがたい感激に満ちた、心からありたけの聲を出して叫んだ。男女七萬に餘る赤子の聲は、帶山の野の草木を震はした。あゝ、喉に涙がにじみ出る、ありがたさ、かたじけなさ、うれしさ、尊さ、この錯雜した感情が私の全身を震はせるのであつた。たゞ涙、感激の涙、同胞よ、守らうよ、我が國を。

天皇陛下、私達は屹度々々よい日本國民となりませう、私達は一生懸命盡します。かう思つた時、涙ははら／＼と地に落ちた。軍樂隊の奏樂を合圖に、私達は最敬禮をしてお送り申上げた。陛下には一歩々々、階段をお降り遊ばされます

いつまでもいつまでもかうしてゐたい。ひら／＼と翻る天皇旗、尊き陛下の御姿、私達の脳裡に深き印象として残るありがたさ、「千代に八千代に苔のむすまで」とお祈り申し上げる私の心は感激に漲りつめてゐるのであつた。「還御」の御親閲によつて、動いて遠ざかつて行く。「天皇陛下萬歳」心の中で叫んでみた。

御親閲によつて、私は今更ながら「國」と云ふものに對する一つの確りした信念を得た。この信念こそは私の生涯を通じて、いつもよい日本人に導いてくれる力であつて、私は私の辿るべき前途に尊い光明を見出した事を確信した。

御親閲を拜受して

福岡縣三浦高等女學校第四學年

徳永三哉子

あゝ榮ある昭和六年十一月十八日。人、人、人、前も後も只人ばかりである。練兵場に着いて靜かに幾時かを待つた。定刻の一時になると胸の鼓動が早鐘の様に鳴り響いた。息づまる様に感じた一瞬、遙か彼方から嚴かな「君が代」の曲が聞えて來た。さわめいて居たあたりの空氣が一齊に緊張を示す。あゝ今こそは自分達の待ちに待つた時なのだ。指揮に従つて一步々と玉座に近づいて行く。餘り御前近く進むので何時止れがあるかとらはらした。やがて玉座に向ひ最敬禮をしてしづ／＼と頭を擡げた。あゝ聖天子の御姿が。瞬間はつとして目を伏せてしまつた。一種不可思議な靈感が體内をズーンと爪先迄通つて行つた。私のこの時のこの氣持は前から豫期する事等は到底許されるものではなかつた。「あゝここにすめらみことの……」軍樂隊の吹奏の音に連れて悦びほぎ奉る歌が靜まり返つた朗かな秋の空氣を振はして、靜かに／＼流れて行く。指揮長のタクトの先が眞晝の光線を受けてびか／＼と力強く空を切る。歌を唱つて行く裡に段々と尊い感情が高まつて行く。「かしこさに涙こぼる／＼」と二番の唱歌を唱ひ終へた時、強い感激がぐつとこみ上げて仕舞つて思はず涙がはら／＼と頬を傳つた。「君が代」を唱ひ終へて最後に萬歳を三唱した。日頃は思ふ程充分聲が出なかつたのに今日は又力一ばい天にも響け地にも徹れとほぎ奉つた。眞心こめて叫ぶ國民の聲が一つになつて強く強く青空にこだまし

た。空は澄み渡つて悠久の色が遠く／＼大阿蘇の山なみまでも續いて居る。一ひら二ひらの白雲が今日の榮ある日を祝ふかの如く、天皇陛下の萬歳を壽ぐがの如く御英姿の背後に懸つて居た。やがて御迎の自動車は爆音を残してスーッと遠ざかつて行く。人々の視線が等しく敬虔な至情の中に自我を忘れ果て、その還御を見送つた。御車がうね／＼と高低のある練兵場の彼方に消え失せてしまつても私達は猶無量の感慨に胸が一杯だつた。

少しく西に落ちた太陽が人々の感激のなみを何時迄も何時迄も照らして居た。徐々に去り行く隊伍の後には、現神の玉座の白い御臺が偉人の如く嚴かに見られた。「海行かばみづく屍……」の歌は大伴氏のみかはと強く／＼感じられて止まなかつた。

御親閲式の感想

福岡縣香椎高等女學校第四學年

渡

サ

ダ

愈々十一月十八日となりました。私達は一刻千金の思ひで、いそ／＼と帯山練兵場へ足を運びました。式にはまだ大分時間があるのに道も兩側も式場もまるで人の海でした。やがて秋晴れの空高く花火の音が轟き渡ると、思はず私達は襟を正して直立した。御召車の音が靜かな式場の空氣を破つて近づいて参りました。間もなく陛下の御英姿が玉座の上に、くつきりと浮び出ますと、式場は一齊に緊張した。其の時の私の氣持は何と形容したらいいでせうか、唯々感涙に咽ぶ許りでした。戸山學校軍樂隊の吹奏するマーチにつれて、勇氣、元氣、希望に満ちた中學生、青年、在郷軍人の分列式が始まりました。銃を肩にした彼等青年達の元氣に満ちた足の運びには、一種の力強さを感じさせられました。次には愈々私達の番です。胸には微かな鼓動をさへ感じ陛下の御前に進み出る私達の一舉一動は緊張そのものでした。分列式から私達の奉唱隊と續いて、みそなはせられる陛下は尙も直立不動の御姿勢を御續け遊ばしまして、玉座の上高く立つて居らつしやつさうであります。奉唱歌の時は勿体なさに咽喉がつかまつて歌へませんでした。唯々畏れ多い心持で一ばいでござ

いました。熊本縣知事の音頭により、萬歳の聲が其の日集つた六萬餘りの民草達の心の奥から湧き立つた。此の熱誠こめた聲が遠く阿蘇の山々に響き渡つて、光榮と感激に満ちた式が終りました。

此の日の有様が、眼の前に見る様に、はつきりと私の脳裡深く刻みこまれて、一生忘れる事が出来ません。榮えある日の本の國に生れた事が、此の日程有難く感じられた事はありませんでした。永遠に此の勿体ない日を追憶したいと思ひます。

御親閲拜受所感

九州高等女學校第四學年 占部君代

待ちに待つた榮ある朝はきた、小鳥が夜の明けるのをもどかしげにまつてゐるかの様に——私達も夜の明けると同時に床を離れた、身体を清め私共は帯山の練兵場へと歩を運びました。

廣々とした練兵場のすべてのものが、喜に満ちて活氣が溢れてゐます。こんもりとした森、或る神秘をかもし幾百年の歴史を物語る様です、いよ／＼式場に入る。赤白のんだんらの布れが美しく柵に巻かれて、その傍にはいかめしい大禮服を身に着けて居る人が右往左往して何だかもの／＼しい。さしにも廣い練兵場も人!!人によつてうすめられてゐる。國父 陛下の御英姿を拜したいと集つた赤子の群である。私もその一人として原の芝生の上に座してゐる。JOGKと太々と書いてあるのが目につく。これで各地に放送されるのでせう。私達の奉唱歌もきつと、父母様の耳に聞え、我が子の光榮ある式に在る事を喜ばれるのでせう。等々考へると微笑みたくなつた。秋晴の空は清くすがすがしい。しばらくして天皇陛下の御着の報告があり、皆塵を拂つて整列しました。學生、生徒、青訓、在郷軍人の分列式が始まりました。陛下には一大隊ごとに叮嚀に擧手の答禮を遊ばしました。

あゝ皇統連綿として今日早二千六百年、尊い歴史の輝しい事よ。私達は幸福です、御英明な天子を國父様とお慕ひ申し

て、惠の波に浸つて居ります。今我々がお慕ひ申す 陛下は親しく第二の國民の状況を御覽になりました。九州男子の強い健全を以て誇る身体と訓練とをいかに満足げに眺め遊ばした事のでせう。

嚴に「君が代」の奏樂が始まりました。次に奉唱歌も高く低くゆるやかに吹奏された。迥の日の丸の旗がはためいて居ます。我が國に於てのみ見る事の出来るシーンである。「あゝ我等は生けるかひあり おゝけなき今日の誇を……」萬世にかたり次々 ことほがむ一つ心に——歌の最後の言葉の終る時、私の胸一つばいに感激の涙があふれてとめる事が出来ませんでした。あゝ私達ほど幸の多い國民は世界にはないでせう。

御親閲を拜受して

福岡縣門司實科高等女學校第四學年 舟生愛子

九州、山口八縣下の高等専門學校、男女中等學校男女青年團、青年訓練所、在郷軍人各團體六萬六千餘名が 聖上陛下の御親閲を拜受する十一月十八日は、朝來一片の雲もない絶好の秋日和であつた。私達は午前十一時頃式場たる 帯山練兵場へ到着した。

東には遠く阿蘇の雄姿が蜿蜒として起伏し、西は満目廣漠たる肥後平野に連なり、實に都塵を避けた城東の一清淨地で既に場内は今日の光榮者で埋まつてゐた。午後一時頃、煙花一發を合圖に大國旗は快晴の秋空にする／＼と掲揚された。満場は鳴りを鎮めて息詰る様な緊張裡に午後一時十分頃、一天萬乗の君には略式自動車で多數の陪從者を従へさせられ式場に御着遊ばされた。やがて場の一隅から軍樂隊の奏上する幽玄そのものゝ様な「君が代」の奏樂が起ると全員最敬禮のうち 聖上陛下は玉座に就かせられた。本山熊本縣知事の奏上が終ると、森嚴勇壯の調陸軍々樂隊の奏でる行進曲につれて熊本師範を最先頭に各縣中等學校、青年訓練所生、青年團員、高等専門學校、在郷軍人等の順で分列式は行はれた。各種の團休旗、校旗、銃劍の林が秋陽を浴びて秋霜の様にきらめいてゐる。歩武堂々一絲亂れざる分列行進、各分列部隊

の「頭右」の敬禮に對して、陛下は一々御舉手の御答禮を賜はつた。この間長くも陛下には直立不動の御姿勢をとらせ給ひ、いと御熱心に御親閱遊ばされた。これが終つて各縣女子中等學校、同青年團凡そ一萬五千人餘から成る奉唱部隊の順となつた。私達は指揮者の號令に従つて玉座前五十米の距離まで進み凹字形に整列し最敬禮をした。遙かに仰ぎ奉るに英資英邁なる 聖天子には颯爽たる陸軍通常禮裝であらせられた。惟ふに陛下には御政務御多端の折態々蒼生の爲め龍駕を枉げ給ひ今日の榮譽を御頌け下さるかと偲び奉れば皇恩の有難さに涙はあふれ人知れず袂を絞つた。私達は軍樂隊の妙なる伴奏で御親閱奉迎歌を奉唱することになつた。私は全身全靈あらん限りの聲を張り上げて地にもとほれよ天をも衝けよと奉唱した。續いて全員「君が代」の奉唱後、本山知事は玉座前の指揮臺に上り其の發聲で 天皇陛下の萬歳を三唱した。六萬六千人の心からなる赤誠の萬歳唱和は天地に響き野山を埋め永久に榮えむ皇國と聖壽無窮を壽ぎ奉つた。やがて午後二時二分頃各縣知事及び全員の奉送を受けさせられ、「君が代」奏樂裡に龍顏殊の外麗はしく御退出遊ばされた。前古未曾有の盛儀、御親閱はかくして終了した。私は只君恩の鴻大さに感泣するのみであつた。

御親閱感想

福岡縣山門高等實業女學校第四學年

永江サヤ子

十一月十八日紫色に煙る熊本市の街を見下す帯山の練兵場に於て長くも 聖上陛下の御尊姿を拜み奉つた私達は此の仕合せな有難い御代に生れた事を心から感謝せずには居られない何と言ふ光榮、何と言ふ名譽、唯々感激の外はない。わづかに一平民の身でありながら畏くも尊い龍顏を拜し奉つたその光榮、何と言ふめぐまれた事だらう。

大阿蘇の連峯海がすむ遠景を前に清淨の白布に蔽はれた高き玉座にやがて 陛下の御尊姿を仰ぐ時私達はあまりの畏こさに思はず低頭した六萬に上る九州各縣の在郷軍人、青訓、中學生の分列式が終ると我等は凹形を描いて隊形を整へ玉座に向つて最敬禮の後軍樂隊の伴奏にて「あゝこゝに」の奏唱歌を奉唱した。若き我等女性の胸は無限の光榮と感激とに満ち

たそして最高潮せる聲は廣漠たる帯山の地にこだまし聞く者をして襟を正さしめ覺えず涙をそゝる。奉唱歌終り續いて全員「君が代」を奉唱し指揮臺に登れる熊本縣知事の發聲に合せて起る。「天皇陛下萬歳」の聲は天地を揺がし心の限り聖壽の無窮を祝ぎ奉つた。その間正に一時間身動きだに遊ばされず始終整列隊に御目を注がれた大御心拜察するだに畏き極みである。

唯感慨無量、海よりも深く山よりも高き皇恩、私達は此の有難い大御心に對して何のお報いを爲してお答へ申すべきであらうか。御親閱後の感想……私は唯あまりの畏こさに唯感慨無量とのみしか言ひ得ないのである。

御親閱に参加して

福岡縣南吉富高等實業女學校第四學年

貝ヶ石文子

掛巻も畏き極みであります。聖上陛下は御即位の大禮を行はせらるゝに際し私等民草に向つて、「皇祖皇宗國を建て民に臨むや國を以て家となし民を視る事子の如し」と告げ給うた。之れ實に君民一致の我國體の基く所を教へ給へる所以にして誠に有難しとも有難き極みであります。

聖上陛下 本秋熊本地方特別大演習御臨幸の御私等女子中等學校生徒其他の諸學校團隊に對して御親閱を賜はる旨承はりお勅語の趣旨を明かに拜察し奉る事を得て天恩の洪大なるにたゞゞ感激致しました。私は無上の感激と絶大なる榮譽の限りを今靜かに追想致します。

十一月十八日今日は御親閱の光榮ある日である天高く菊花薫る「御親閱日和」に帯山練兵場を中心として無心の山河、そして非情の草木に至る迄すべては歡喜と喜悅にみち／＼てゐる様に思はれました。私達は午前九時宿舎を發して御親閱場に向ひました。さしにも廣い帯山原頭も塗り潰した様な人の海となりました。私の心はいやが上にも緊張して今はひたすら 陛下の御臨幸をお待ち申し上げ奉る心で一杯でした。感激に満ちた私達は光榮と歡喜に胸をおどらせ兩頬を紅潮さ

せ國民としての希望を漲らせた力強い雰囲気は圍を十重二十重に取圍んだ人々の胸を壓し水を打つた様な静肅さは正に緊張の極みであります。

御發聲の通報。煙火一發。前面の大國旗は秋空にスル／＼と掲げられた。啾唳たる喇叭の吹奏。軍樂隊の「君が代」の奏樂。全員齊しく息詰まる様な緊張裡に。陛下は玉座につかせ給ふ。嗚呼何と言ふ有難い極みであらうか。何と言ふ崇高さであらうか。尊い御姿を拜し奉り自ら頭の下るのをどうともする事も出来ませんでした。やがて私共は軍樂隊の奏樂によつて統制線奉唱線にまで進みました。あるだけの眞心と音量を捧げて奉唱致しました。あまりの有難さ畏さに熱い涙が頬を傳ふを覺えました。熊本縣知事の音頭により「天皇陛下」の萬歳を三唱する其聲に天地も揺ぐかと思はれた六萬六千人の萬歳唱和は實に全九州若き男女の誠心の一致でありました。「君が代」の奏樂裡に黙禱を捧げ。陛下は靜かに御還幸遊ばされました。

私共はこゝに寶祚の榮えまさん事天壤とともに窮り無き事を祝福し奉ると同時に生ける甲斐がありまして實に千載一遇のこの光榮に浴する事の出来ました事を衷心歡喜すると共に國民的自覺を今更深め得た氣持がいたします。私はこの光榮を感謝し記念する意味からして自己の生活に對して一段の向上をはからなければならぬ事を深く心に期して止みません。以て。陛下の御鴻恩の萬分の一にも報い奉りたいと思ふ心で一杯です。

御親閱拜受の歌

福岡縣三井高等實業女學校長

近藤義夫

日本の國に一人ぞいます

天皇陛下はわれ等の父君

今しもこゝに迎へまつれり

この世始めて逢ひます幸に

阿蘇の高嶺は 焰をあげて

われ民草の 胸とどろく

白き玉座の 高きところに

天皇陛下の 大御姿は

生けるみ神か 國の鎮めか

御起立のまゝ 身動きもなく

小春日和の 長き一時

われ若人を みそなはします

大地を踏んで 男の子は進む

託摩が原に 劍は光る

優し少女が 譽れのステージ

歌をよびて 御前にひびく

あゝ生けるかひあり またなき榮えを

とこしへの若き 胸に刻まん。

御親閲拜受の記

福岡縣三井高等實業女學校第四學年

大石ハル子

……拜受前記……

菊の香はいよ／＼香り、肥の國の晩秋の色は益々濃くなつて行きました。

昭和六年十一月十八日、私達は長くも、聖上陛下の御親閲を賜はるべく前夜の夜汽車にゆられながら上熊本驛に下車しました。白川小學校と書かれた幾張かの提灯に迎へられて同校に泊ることとなりました。板張にゴザが敷いてある上に、分けて頂いた毛布を着て寒い一夜を過した思出！ゴザ一枚、毛布一枚と言つても、たやすく私達の手を渡つたものではありませんでした。熱い／＼お情のこもつたもので、お世話して下さつた方々のお骨折を察して、七百餘名の同宿者中誰一人寒いとか苦しいとか言ふものはありませんでした。あの大きな海苔まきに梅干入りの握り御飯、三度までも同じお握りをいたゞいた時は皆軽い笑ひさへ頬に漂ひました。しかしお箸がなくお握りを手に握つたまゝ私達を始め先生方まで——シルクハット、白襟紋服の諸先生方まで御一緒に食べていたゞいたのを思ひますと、私は同じ御親閲の拜受をお待ち申上ぐる日本臣民の赤子の情を、まのあたり見せつけられたやうな感じで一杯になりました。

……奉唱部隊に加はりて……

今日は南國にかつてなき晴々しい 天皇日和であります。あふるゝ如き光榮と希望とに燃える私達男女七萬の若人は、蜿蜒長蛇の列をつくつて帯山練兵場に集りました。こゝは阿蘇山下に展開された肥後大平野の一角であります。

午後〇時三十分群る群衆に「氣を付けッ」の號令がかかりますと、想像しきれない程の靜寂！莊嚴！が場内に底深く流れてきます。一發の煙火はとゞろき國歌の奏樂がつゞいて聞えます。少女十七にして初めて味ひみる國家意識！堅くなりました。捧立ちのやうになりました。裨筋が寒くなりました。正に午後一時十六分、わが一天萬乗の 天皇陛下には今

しも御親閲場に臨御遊ばされたのであります。頭はおぼえず低く垂れ下りました。涙さへ落ちて枯草をうるほしました。高い／＼純白の玉座のあたりを背のびして仰ぎのぞみましたが、まだ遠くて 陛下のみ姿は拜まれません。男子の分列式が始まりました。小春日和のかけらふが、五萬五千といふ大部隊の剣先にチラ／＼と波打つてゐます。大地を踏み且つめて一步々々玉座の方へ行進される意氣、やがては國民の意氣、かくまでも堂々たるものか、雄壯なるものかと驚き且つ感激にふるへました。陛下のみ姿がだん／＼と拜されるやうになつてまゐりました。分列部隊に對して一々舉手の御答禮を賜はつてゐられます。私達は四大節の折學校でいつも御眞影を眞心こめて拜し奉つてゐますが、いまだかつて御舉手の御答禮も遊ばされない 陛下は日本の現つみ神でゐらせられます。その大み神の御手が一々私達民草のために動き遊ばすかと思へば、私はつと胸がふさがりました。陸軍々樂隊の奏する分列行進の曲はやんで優美なメロヂーに變調され、私達奉唱部隊はやさしい足どりで行進し始めました。私は列の先頭にゐて私が一番よく氣をつけて、列の間隔を取り進まなければ列全体が亂れるのだと氣がつくと、私はそればかりに氣をとられて恐る／＼行進しました。九州沖繩各縣の一萬七千餘名の女子奉唱部隊は、四字形に三方から玉座の方へだん／＼と近くなつてまゐります。陸軍通常禮裝の 陛下には天顔殊の外麗はしく拜せられます。私達の破れかゝつた粗末な靴、色あせた洋服、名もなき僻郷の田舎少女……たゞ勿休ない氣持で天顔を拜しながら「あゝ今しすめらみことの……」と奉迎歌を歌ひ始めました刹那、胸がせまり涙が出て歌聲さへ低く——それでも至誠にあふるゝリズムが私のからだ全体をゆり動かします。

陛下はなほ直立不動の御姿勢をつゞけてゐらせられます。玉座の左側には菊花の御紋を繡ひとつた 天皇旗がへんぼんとかゞやいてゐました。「……あゝわれ等生けるかひあり……おほけなき今日のほまれを……」だん／＼と朗らかな調べで奉唱しますとき、きつと／＼ 陛下は私達の奉唱歌のお詞を一々お聞きとり遊ばされたとの自信をさへ持つやうになりました。最後に男女一齊に聲をそろへて「君が代」を 陛下の御前で御奉唱申上げ、つゞいて「萬歳」の三唱をいたしま

すことは、此が私達の一生に與へられた唯一つの光榮であり機會であらうことを小さな胸にやきつけて、火の如く熱く強く御寶算の無窮を壽ほぎ且つ歌ひ奉りました。天の神様、地の神様を始め、ラヂオの電波によつて日本の津々浦々から世界の同胞までも私達の真心こめたこの聲が完全に聞きとれたこと、信じました。かうして御親閲は感激の涙で滞りなく終りを告げ、全員最敬禮の中に、陛下は玉座を御退下遊ばされ、軍樂隊の國歌奏樂裡に御奉送申上げました。時に午後二時十分。晴れわたる太陽の如くわが國をかげ日なたなく統べ治め給へる 天皇陛下……遠く離れし御慈母のふところに始めて抱かれた日の如き甘美な愛着と誇らしさがいつまでも私の魂を捉へました。

……御親閲後記……

御親閲拜受もすみ、再び夜行列車で二日振りに家にかへりますと、母上と姉様は火までおこして寒い真夜中を待ちわびていらつしやいました。挨拶を終へて上にあがりますと、旅のつかれも忘れはて、天皇様や母上様方の深い御恩が今更の如くわかつて熱い涙にむせび泣きました。學校では御親閲拜受の報道會が開かれ、校長先生のお話には生徒一同沈黙して誰一人さやくものもなく、唯先生の聲のみが講堂一杯にみぎりあふれて、其の力は堅い壁に反響するやうでありました。「……天顔ニ咫尺シテ奉迎歌奉唱ノ光榮ニ浴セリ……」といふ御記念狀授與の式も行はれました。私達四年生の廊下には新らしく、御親閲拜受記念の大鏡がかゝげられました。私はその鏡の前を通る毎に、陛下の尊くも清い御真心の姿を拜し奉るのであります。更に四十名の拜受者一同は長くも御奉安所の御前で記念の撮影をもいたしました。

あくまでもまのあたり 聖上陛下の御尊姿を拜する光榮に浴した私達は、春三月母校に盡きぬ思出をのこして卒業せねばなりません。が女學生時代を飾るこの譽だけは永久に胸にたゝみ、語りつぎ、言ひつぎ日本女子の正しき道を踏んで、深き尊き大み恵に御奉答申上げることゝに謹み畏みてお誓ひ申上ます。

御親閲感想

福岡縣田川高等實業女學校第二部第二學年 宮崎 千代子

昭和六年十一月十八日、畏くも 今上陛下御親閲を賜ふの日は愈々來た。御親閲參加を差許さるゝ旨の報に接して月餘朝に夕に指折り數へてはこの光榮ある日を如何に待ちわびて來たことであらう。我等一行は感激に燃ゆる胸を押へながらひたすらに晴の帯山練兵場へ急いだ。

この日空は片雲なく、晩秋の陽光は緩かに流れて爽快の氣溢るゝが中に、自らまた言ひ知れぬ緊張を覺ゆるのであつた東遠く阿蘇連峯の雄偉なるを仰ぎ、西廣漠たる肥後平原を望んで、帯山は實に城東唯一の淨域である。時刻次第に切迫し正午に近くなれば、さしにも廣き練兵場も 陛下の御尊影を拜せんものと雲集する蒼生を以て忽ち埋められて仕舞つた。指定の位置に整列した我等は、嚴肅な空氣の中に起立して、つゝましくひたすら行幸を待ち奉るのであつた。やがて定刻「君が代」の奏樂が始まり、聖上陛下には全員最敬禮裡に臨御あそばされたのであつた。いとも紳々しき白木造りの玉座に進ませ給ふ 陛下は、都を出でまして、こゝに旬日、その間度々の行幸に聊かも御疲勞の御模様なく、龍顏殊のほか麗はしく拜された。愈々御親閲式は始まり、勇ましき軍樂隊の奏樂につれて、隊伍整然、大分列式は開始された。指揮にしたがつて我等は 陛下の御前に参進し恭しく奉迎歌を奉唱したのである。「一天萬乘の大君今こゝにおわす」と思へば自ら頭は下り唯々恐懼して感激の涙あるのみであつた。最後に全員一齊に陛下の萬歳を三唱し、その聲は九州全土に響き渡るかと思はれるほどであつた。やがて 陛下におかせられては我等赤子の心からなる奉送を受けさせられ、御還幸あそばされた。而してこゝに無事御親閲式は終了したのである。

あゝ、この聖恩!!身に餘る限りなき光榮!!この廣大無偏なる天恩に對し奉り、我等は何を以てお對へ申上ぐべきであらうか。

御親閲を拜受して

福岡市春吉青年訓練所

山上七郎

闇の中に白くつきりと雄大に構えてゐる奉迎門、彌が上にも壯麗に飾られ清められた街路、翻翻とひるがえる日章旗此の千載一遇の行幸を仰ぐ歡喜が先づ驛前に溢れてゐる。陛下を迎へし熊本の町は平和の中に過ぎて行く。

やがて光榮に輝く御親閲當日の朝日は氣持よく、すくすくと昇る。我等の生氣愈々昂り、式場なる帶山練兵場に行進を續ける。右や左の稻田の跡などに多くの露營舎が見え、露營から醒めた人々を見た時深い感激に打たれた。

やがて御親閲場に着く。先づ目を驚かした事は參集した者の多い事であつた。見渡す限り人の波、團旗の炎、見る私の胸は固くなつてしまつた。御親閲拜受者六萬六千と言ふに拜觀者式場を十重二十重に取り巻いて居る。唯々感激に心躍り思はず聖壽の萬歳を絶叫したい感が起つた。

秋天高く一點の雲もない日本晴の好天氣、遙に望めば靈峯大阿蘇の連山、晚秋の山野は繪の様に榮光に輝き實に感慨無量である。かくて整列も終り只管御臨御を御待ち申上げてゐると啾啾たる喇叭響き渡れば數萬の若人等不動の姿をとる此の時煙火一發、スル／＼と大國旗は秋風に高く掲揚され肅として聲なし。軍樂隊の「君が代」奏樂の裡に御英姿颯爽として玉座に着御あらせられ、やがて分列式始まる。天皇旗幟として輝き莊嚴なる中にいとも麗しき龍顏に對し「頭右」の敬禮にて行進し行く。至尊のおそば近きが畏れ多く自分の足の動きさへ覺えず、有難い感激に満たされて元氣百倍、此の帝國にどんな事が有らうとも此の身は君國にあくまで盡くすぞといふ決心が今更の様にみなぎり溢れる。其の感激をどうすることも出来なかつた。

あゝ同胞八千萬が等しくお慕ひ申す 聖上陛下を拜し奉り總てに感謝すると共に御親閲に際しては只「感激」といふ二字にある報恩感謝の感想が湧いて止まぬのみである。

聖上陛下御親閲參加所感

福岡市松原青年團

野田克己

陛下の行幸を壽ぎて、瑞光漲る熊本に於て、鹿兒島縣を除く九州沖繩八縣下の、高等専門學校、男女中等學校、男女青年團、青年訓練所、在郷軍人、各團體六萬六千餘名、聖上陛下の御親閲を拜受す。此の光榮に浴せんとする若人達は御親閲日、十八日早朝より、東は遠く阿蘇連峯を仰ぎ、西は限りなき廣漠たる肥後平野に連なり實に俗塵を避けたる一清淨地たる帶山練兵場を埋めんばかりに、式場西端の玉座を正面として整列し、盛典を拜觀せんとする人々は式場を十重二十重と圍みつゝある時、勇ましや煙花一發、忝けなき大日章旗は青空高く掲揚された。畏くも、陛下には略式自動車兩簿によらせられ、軍樂隊の奏する「君が代」の奏樂裡に各縣知事の奉迎を受けさせ給ひ。式場に着御。場内中央の玉座に就き給ふ。仰ぎまゐらす御英姿の尊さに感激の涙湧き出づ。神彩四邊をたゞよふ行進曲の勇ましき調は朗々として六合に満ち溢る。つどへる民草は若き帝の御英姿を拜し奉つて、一しほの心強さを覺えた。陛下には菊花大綬略章を佩ばせられ天機殊の外御麗しく御擧手の御會釋を賜ふ。かくして軍樂隊の奏する陸軍行進曲の音に連れて熊本師範を先頭に各分列は續く、玉座の傍に侍立せる各縣知事より各分列部隊の縣名を奏上さるる毎に、畏くも、陛下は一々御首肯遊ばれつゝ分列部隊の「頭右」の敬禮に對し、御擧手の御答禮を賜ふ。次で各縣女子部隊は玉座の御前に整列して、奉迎歌を奉唱し、續いて莊嚴なる「君が代」を奉唱した。次で本山熊本縣知事の發聲により、天皇陛下萬歳を三唱し、陛下には、龍顏御麗しく全員の奉送裡に帶山練兵場を後に還御遊ばされた。おそれ多くも、陛下には約一時間玉座に御直立の御姿勢にて、少しの御身動きもあらせられざる、あの尊き御英姿こそ、實に神々しく拜せられ、我々一同は恐懼の極み、只感激の涙に咽ぶのみであつた。その間申すも畏き事ながら、我等日本青年に對する深き御信頼の御氣色のうかゞひ奉られたのは何たる尊いことであらう。先には我等青年に忝くも御令旨を賜ひ、今また國事多端の折にも拘はらず、御親閲を仰ぎ奉る

思へば神武天皇より、二千五百九十一年の星霜を重ねながら發刺たる建國の大精神が永しへの若さを以て、天地の間に磅礴たる事は何たる幸福であらうか。我等青年はこの尊く崇き御親閲の感激を永遠に體現して皇國の彌榮を壽ぎ奉ると共に忝き、大君の御信頼に報ひ奉らなければならぬ。

御親閲拜受感想

久留米商業公民學校 麻 生 昇

雨天の日には天候を案じ新聞に「行幸御取止」の文字を見出しては事なからん事を祈りし甲斐あつて我々青年の光輝ある御親閲を拜受すべき十一月十八日は來た。

帶山一帯を巡る大阿蘇の連峰は薄くかすみ空に一片の雲もなく遠山彼方より吹來る風は氣持よく我等の頬を撫で、過ぎ實に絶好の秋日和である。○時半今日の一大盛儀に參列すべき各團休は遙かに東面せる玉座を遠卷にして整列した。見渡せば雲霞の如き人の集團と彩色様々の標旗、陽に輝やく銃劍の林が野の末々まで續いてどれ程居るのか想像も出來ない。時はうつる總べての用意は出來た突如號音一發大國旗は青空高くスル／＼と引揚げられやがて軍樂隊の「君が代」奏樂裡に 陛下には清淨雪を欺く白敷布の高き玉座に肅然として立御あらせ給うた。滿場靜寂只錦旗のひら／＼と風に翻へるのみ。今眼のあたり行幸を仰ぎ御英姿を拜して萬感胸に迫りかたじけなさに涙下るを禁じ得ない。一時十分合圖の喇叭と共に大分列式は始まつた。各中隊は玉座御前通過の際頭右の敬禮を行ひつゝ分列を行ふ。畏くも 陛下には玉座の上から一々之に御會釋を賜ふ。我部隊は分列を終りはや所定の場所に到着した。玉座の御前は未だ後續の部隊が次から次へと續いていつ盡きるともわからない。歩武堂々と分列を行ふ若人の元氣に滿ち滿ちた様に何となく心強い感じがした。女子の感激に高鳴る奉迎歌奉唱は聴く者覺えず涙を催し尊嚴なる全員「君が代」の合唱には思はず頭を垂れ次で天地も揺ぐばかりの「天皇陛下萬歲」の熱叫三唱起り再び起る「君が代」の吹奏裡に 陛下には御退出遊ばされた。時二時十六分。御親閲

開始より終了に至るまで正に一時間、其の長い間 陛下には御親閲臺上に終始直立不動の御姿勢を頼させ給はなかつた事は實に畏き極みであつた。今日の輝く盛儀を拜し、しみ／＼我國休の有難さを感じた。

顧みるに、外交に經濟に思想に時局極めて重大なる今日、我々青年は忠君愛國の鐵石心を以て帝國臣民としての自己の職分を全うせん事を 陛下の御前に誓ひ御親閲を拜受した。かくして歴史的大盛儀はめでたく終了した。

感想

久留米市立節原訓練所 半 田 弘

曇りがちであつた阿蘇の靈峯も今日は山の頂さへ見せて、晩秋の爽かなる風は靜かに肥後の平野に吹き渡つて居ます。今日しも十一月十八日此所熊本の帶山練兵場にては全九州下及山口沖繩兩縣下の我等若人の御親閲を遊ばせられたのであります。龍顏を拜し奉らんとして集まるもの無慮幾萬、其の中に加はる事を得た私の光榮何者に譬ふべくもありません。たゞ／＼感激の外はありませんでした。僅かな睡眠時間を熊本市に送つた若人達は躍る心をおさへつゝ練兵場指して集まつたのであります。さしにも廣き帶山練兵場も一時若人によつて埋まらんかとも思はれる程でした。はるか西の方を見渡せば白木造の玉座には寒からぬ秋風と軟かに照り來る秋の陽とが相和して一入若人の心を靜めます。何時しか立てられたる天皇旗、帶山原頭高くひるがへりはた／＼と肥後の平野になり響いて居ます。その中愈々玉座の前に立てられた高き旗竿の根方に輝かしき日の丸の御旗が結びつけられました。やがてすらく／＼と竿を傳つて昇りゆく日の御旗に思はず不動の姿勢にかへり、心の底からこの尊く美しき日章旗に對して敬意を表すると共に何とも云ひ得ない感激の情を如何ともする事が出來なかつたのであります。見渡す限りの人波の先頭には色とり／＼の訓練所旗、在郷軍人旗、青年團旗等目覺むるばかり美しく列を正して連つて居ます。今か今かと 陛下の御姿を待ちわびる事數十分、突如練兵場にひびき渡る軍樂隊の「君が代」の吹奏。はつと玉座に面を向くれば今我等が赤誠こめて待ち奉つた 天皇陛下には靜々と玉座に向つて玉體

を運ばせ給ふ。昨夜からの疲れに幾分氣の弛みかけて居た私も瞬間思はずビツと不動の姿勢にかへりました。居並ぶ幾萬の若人も此の時ばかりは咳一つするものもなく、静寂森嚴の極、實に神境を行く心地がしました。やがて晴れの御親閱分列式は始められました。我が青訓隊も愈々、玉座近く迄進みました。軍樂隊の吹奏する音に合せて進み行く幾萬のますらを一足は一足に軽く心は落着きます。何を考へる餘裕も有りません。考へ様ともしませんでした。心中はたゞ

天皇陛下と云ふ事で一ぱいです。「頭ア右ツ」大隊長の號令一下たゞ一齊に我々の眼は玉體に注がれました。

あゝ我等の「大君」思はず知らずまぶたが熱くなりました。何が故の涙か私には自分ながら分りません。嬉しさの餘り感激の餘りと云ふより外ありません。是ぞ眞の神秘境だらうか、たゞ深き感激に打たれてしまひました。男子の分列式が終つて次に女子の奉迎歌奉唱がありました。熱誠こもる心から流れ出づる音色は實に阿蘇の峯をも解けしめずやと思はれる程美しく清らかで有りました。陛下の御心を慰め奉る乙女等の奉唱は我等の分列式と相俟つて今日の御親閱中の一大偉觀でありました。やがて御親閱最後の萬歳奉唱にうつりました。現實の神を前にして聲を限りに若人が叫ぶ萬歳の聲、さすが九州全土もためにゆるがんと思はれました。あゝ言ひ様もない喜び、無上の喜び、我等は陛下に捧げた休だ。まだ御若く渡らせ給ふ陛下の御爲めに永遠に榮ゆべき日本の爲めに我等は働くのだ。そして我が日本に覆ひかゝる幾多の難關を我等の手でことごとく拂ひ除け陛下の御心の寸時でも安らかにまします様努めなくてはならない。春秋に富ませ給ふ天皇陛下を戴く我日本が益々世界にその國威を上げる事を祈りつゝ。

御親閱拜受感想

久留米市久留米青年訓練所第四年次 馬場政喜

大阿蘇を遠く東方にかすませて帯山練兵場は秋光深く澄み渡つた。此の日の光榮を仰がむとして、各地より集ひ來つた無數の校旗、青訓所旗會旗……色とりどりにひるがへる様は壯觀そのものゝ清々しさを思はせた。萬端の準備すでにと

のひ整然としたる場内のはて、はるかに純白の玉座が拜せられた。見渡す東西南北人々の波だ……午後一時……間近しと思ふ頃は、廣漠とした場内は眞闇のやうな静けさに變つた。咳一つなく、溢るゝやうな誠心を込めて微動だになき人々の姿……すべての心が一致し躍動しつゝも、澄み極まつて居るのだ。

正に一時十五分しんとして打ちつゞく人波のはて遠く、御着を報ずる皇砲が、かすかに私の耳を射た。……時私の心はいやが上にも引きしまつて居た。昨夜からの疲労もすでに清淨されて居る。たゞ眼に映する高く……掲揚されてゆく日のみ旗が莊嚴にひゞくラツパの音と共に、如何に私の心に崇高さをおぼえせしめた事か。「あゝ此の心だ」私は心のそこより叫び出したいやうな衝動に驅られた。すべての邪心をはらひ切り、何もかも忘れ切つて相とけあつた、人々の魂の尊くも美はしき事よ。私の心は、偉大なる力によつて強く……釘止されて居るやうだつた。數萬の人によつて埋めつくされた荒茫たる此の場内に高く低く流れ來る音樂隊の氣高き奏曲……合して進む歩調も確かに……此所ぞわれとわが努力を全身にみなぎらせて行進する玉座近く……私達の前に立たせ給ふ陛下の御姿行進しつゝも仰ぎ見し御尊影のあゝ此のかしこき極み……私の心はたゞ感激にふるうのみだつた。此の心ぞ、決して忘れるな自分に聞かせ自分に答へた。熱誠こめた人々の口からほとばしり出る「萬歳」の叫びは火の如き威力をもつて練兵場の天地を壓して燃え上つた。私はいつとなく兩眼ににじみ來る涙をおぼへた。

所感

門司市聯合青年團 澤村文範

秋光高く澄み渡り菊花は紅黃白紫と咲き誇りし時畏れ多くも 聖上陛下にましましては國事御多端の際肥筑平野に於て陸軍特別大演習の御統監の爲め熊本に行幸遊ばされ其時青年團員中等學校青年訓練所生徒等にも御親閱を賜はり我等門司市聯合青年團拜受者十名は原田理事の引率のもとに十七日午後九時四十分團長其他の諸氏に見送られつゝ門司驛を發し御

親閱式場たる熊本に星を戴きて到着せり。

而して各所より参集せる拜受者六萬餘は廣漠たる帶山練兵場を埋め午後一時十分煙火は打上げられ場内外に響き渡り陽光は目のあたりに光榮を待つ我等を輝がしく照りつけるや 聖上陛下に於かせられは自動車兩簿にて式場西端に御着御遊さるるや玉座に着かせられる英姿を拜し奉るを得たるは歡喜の極にして畏れ多くも我等國民を赤子の如く慈しみ給ふ唯恐懼感泣の外應へ申すべき術を知らないであります。

我等は安泰にして健全なる國家を背景とし其の限らない保護の下に生きることの安全と幸福とを痛感し愛國心の情念を熾烈し祖國傳來の精神を享けて皇室に對する一層の忠誠を勵まねばならぬことを痛切に感じたのであります。

御親閱を拜受して

門司市白野江青年訓練所 下 方正 一

熊本!! 帶山練兵場!! 御親閱!! 等々頭に描きながら我等青訓生拾七名は濱田教官指揮の下に乗車した。千載一遇の光榮に浴する歡喜に満ち充ちた若人を乗せ午後九時四十分熊本めざして發車した。

我等六萬六千が御親閱を仰ぐ拾八日の帶山の空は正に秋空一碧東に大阿蘇の雄大な巨姿が迫り西に金峰山一帶瑞雲欄引き絶好の秋日和煙火一發大國旗が天空高く翻り莊重な「君が代」の吹奏がゆるやかにながれて午後一時十分うららかな陽光をあびて銀色に光る高さ二間あまりの純白な玉座に畏くも 天皇陛下の颯爽たる御英姿を咫尺の間に拜して感激に胸を打たれた。軍樂隊の莊重輕快なるマーチが吹奏され茲に勇壯美麗極まりなき分列式が各縣ごとに行はれた。一時三十分我が縣下中學生が玉座前を行進し引續き青年、青訓、郷軍の集團が行進する。いづれも隊伍整然士氣旺盛盛銃剣は日光に光り各團旗は林立し御親閱の大繪巻物は繰りひろげられた。一時四十分より女學生女子青年團の「君が代」奉唱御親閱奉迎歌の奉唱あり終りて本山熊本縣知事 天皇陛下萬歳の奉唱と共にこれに和して原頭をゆるがす萬歳の轟きは民草の眞心をこ

めて天地を壓し遠く阿蘇の山にもこだませよとばかり響いた。畏くも 天皇陛下には御親閱遊ばします其の間約一時間直立不動の御姿勢で御みそなはし遊ばされました。

我等はあまりの忝けなさに心中感激に満ち充ち今後この光榮をいつまでも胸中深く刻み込み 天皇陛下の御爲皇國のためこの身を捧げる覺悟であります。かくして光榮に満ちた御親閱も無事に終つた。

御親閱感想

小倉市立第二青年訓練所 林 義 澄

九月中旬、訓練H、學科の終了後和田主事先生より御親閱参列者として推選され身体に注意するやうにと申されました身に餘る此の光榮に謹んで参加を御受け致しました。其の後は身体に注意し、心を正し、ひたすらに光榮の日の來るのを待つてゐました。豫行打合せも終り十一月十七日身を淨め此の光榮を無事に果さん事を神に祈りつゝ熊本目指して出發致しました。翌朝未明に天皇陛下の御駐轡し給ふ熊本市へ第一步を印した時胸の高鳴るを覺え思はず襟を正しました。

秋の空高く晴れ渡り東に遠く阿蘇の靈峯を望み、西に金峯山頂瑞雲たなびく午後一時十五分氣を付けのラツバは帶山練兵場に響き渡りました。私達御親閱を受ける者は皆一齊に緊張せる裡に先頭護衛のサイドカーは爆音を響かせながら入場續いて陸軍々樂隊の莊重なる「君が代」は吹奏され、御召自動車は靜かに御入場。天皇陛下には高さ二間餘りの純白なる玉座に立たせられました。英風颯爽たる 陛下の御姿を拜しては唯感激の他なく六萬數千人を擁する大練兵場は肅として聲なく今日を晴れの光榮に浴する私達の心は躍りました。捧げ鉢の號令と共に軍樂隊は「君が代」を吹奏し後輕快な行進曲によつて勇壯なる分列式は始められ各學校團体を代表する校旗、團旗は風に翻へり次々と行進は始められました。分列行進中はいさゝかの滞りもなく眞心こめて行進し新位置に停止の後始めて額に汗の出づるを感じました。「君が代」奉唱、女子團体の奉迎歌奉唱も終り、本山熊本縣知事閣下の發聲に和して咽喉も裂けよとばかり「天皇陛下萬歳」を三唱し

唯感激の裡に式は終りました。

思へば第二青年訓練所生徒多數の中より選ばれて千載一遇の身に餘る光榮に浴し名譽此の上なく唯々感激し此の光榮を永久に心に刻み君の爲め國の爲め献身奉公以て皇恩の萬分の一にも報ひ奉らんことを深く心に誓ふ次第であります。

御親閲拜受所感

小倉市青年會員清水文會 廣 吉 定 之

身に餘る御親閲拜受の光榮に千載一遇全く夢の如し。毎日心を清めかくて光榮の日を夢想せり。前日來の雨は名残なく晴れ渡り秋の日は心ゆくまで澄みきれり。忘れもせぬ昭和六年十一月十七日午後十時五分小倉發臨時列車にて熊本へ直行す。驛頭廣場を飾る純白の奉迎門、徹夜營業、大演習氣分は未だそこに見受けられ力強き呼吸をうかゞふを得。學生、青訓、青年團、在郷軍人と奉竹小學校へ。木炭が校庭にたかれ時々ハシル音のみ靜寂を破りぬ。

ほの白くやがて明け行く東の空、自然は全九州、山口の若人を美しく清き、素朴の中に迎へしなり。地に咲き誇る黃菊白菊、天高くなびく鱗片は五色を波うたせ、清くすみきりし秋の日は若人の心を洗ひぬ。すがすがしい光榮の日よ。愈々商業學校にて隊伍を整へ、堂々七列の陣にて帶山練兵場へ。

取入の後に見る露聲の跡、廣漠たる熊本の底地遠く朝霧につままれし外輪山沿道にむらがる人波、場をとりまく赤子の垣、土下座せる老婆あり、腰辨當杖にすがれる老人あり。今日の光榮に浴せんものとその拜觀者はさしにも廣き帶山練兵場を十重二十重とかこみぬ。場は又赤子又赤子もてうすまりぬ。白銀の玉座目に照り映えていと清し無言の儘進みぬ、やがて玉座正面の所定の場所につく。この時日は次第に天空に高く天女の羽毛もて一掃せるにや一片の片影だに認めず快なるかな日本晴轟砲一發煙火はあがりぬ。

轟聲阿蘇にこだましてものすごく白煙次第にうすれ行き限りなく廣き肥後平野に流れぬ。白頭くつきりとうかびし青天

に、純正潔白なる愛國の至誠を表明せる日の丸の國旗は、嚴かに揚げられ風に翻りて勇まし。勇壯なる軍樂の調一天萬乘の大君には玉座に進ませ給ひぬ。大君の進ませ給ふ其の颯爽たる御英姿今眼のあたり拜し得るだにおそれ多き極みなり。莊重なる國歌吹奏!!熱き涙のこみ上るを覺ゆ。やがて勇壯美麗なる軍樂と共に分列式は始まり六萬六千の全九州山口の若人は東は遠く阿蘇連峯の巨姿を仰ぎ、西かぎりなくひろがる肥後平野につらなる、俗塵を拂ひしこの帶山の清淨地にて聖天子の御親閲を仰ぐとは何たる光榮ぞ!!赤誠あふる、堂々たる其の行進は、全く緊張勇壯の極みである。各團體の「頭右」の敬禮に一々御擧手の御會釋賜はり誠にかしこし。かくして一時三十八分女子中等學校生徒女子青年團の奉唱歌は、恐れ多くも玉座御前に凹字形に整列し戸山學校軍樂隊吹奏裡に四千五百七十餘人の赤誠は秋空一碧の青海に白銀の玉をころばすかとあやまたる。かくて再び「君が代」の壯調に六萬六千の若人はこれに和し、聖壽とこしなへをことほぐ萬々の唱和は、大阿蘇もゆるげとばかり轟きぬ。

深く心にきざみこまれし御親閲の大繪巻ものこそ、我が生涯を通じての無二の寶物にこそあれ、この尊きこの得難き劇的シーンにひたりし我等若人は感激に咽ぶと共に、聖恩にむくゆるの覺悟なかるべからず。

御親閲感想

小倉商工專修學校 定 岡 清 五 郎

昭和六年十一月十七日の夜行列車十時五分にて、私は小倉商工專修學校を代表し、小倉市役所青木氏に引率されて、小倉驛を發車し、翌十八日午前三時四十三分無事熊本驛に着いた。各縣の在郷軍人、青年團、青訓、各中等學校、處女會の代表者約六萬六千人の願が叶つたのか、此日練兵場は日本晴れの絶好の秋日和で、晴れの御親閲を仰いだ。純白の玉座に天皇陛下の御英姿を拜し、陸軍軍樂隊の行進曲の吹奏に依り、各部隊の分列式が始まつた。中等學生、其の他各種團體の分列式、女學生、處女會の奉迎歌を了り、我等六萬六千人は誠意を以て「君が代」を合唱し最後に「天皇陛下萬歲」を唱

へた。私は心の底から萬歳と叫んだ後、何と言つて良いか、何とも言ひ知れぬ感情にうたれた。御親閲を了へる間約一時間に亘り、畏くも 天皇陛下は玉座に直立不動の御姿勢で、御親閲を遊ばされた御英姿を拜した時、私は唯々有難さに何とも言はれない強い感激を以て満たされたのであつた。

御親閲感想

若松商工専修學校 諸 富 潔

帯山の空は正に秋空一碧、大阿蘇の雄大な巨姿遠く東に仰ぎ練兵場は見渡す限り人と旗の大洪水であり。正面には純白な玉座殿として存し若人の意氣彌が上に昂れり、中空に炸裂する煙火の合圖と共に秋空高く大國旗翻り莊重な「君が代」の奏樂裡に玉座に就かせられた。畏れ多くも大空に投影したる凛々しい 陛下の御尊影を拜した刹那電氣のやうな強い感激が身体中を震はせた。此の時建國の古より傳はつた大和民族の血潮は全身を脈々として波打ち傳はつていつた。

陛下には我等代表者に御擧手の御會釋を賜はり餘りの有難さに只感涙に咽ぶのみで御座いました。雄にして壯雅にして快なる軍樂隊のマーチに連れて分列行進は開始された「頭右」眞近に仰ぎ奉る目に直立不動颯爽たる御姿勢にて御擧手の御答禮あそばす御英姿を拜した時あまりの神々しさに胸はせまり目はかすみ感激々々只もう湧き躍る感激に打たれました。瞬間 天皇陛下のため御國のため此の一身を捧げることが盟つたのです。各代表歩武堂々 陛下の御前で頭右の敬禮をなし次から次へと繰展げらるゝ分列式の壯觀さに青年の士氣絶大なるを思はしめ期せずして外敵何ぞ恐るゝに足らんを強め、極に達した喜悅の涙さへ催しました。畏れ多いことながら 天皇陛下には連日の秋雨も厭はせられず大演習御統裁を終らせられ次では縣内各地に行幸遊ばすなど御玉体御疲れの折柄にも拘らせられず御親閲遊ばします間約一時間直立不動の御姿勢で御みそなはし遊ばされました。斯くの如き御精勵は實に我等青年振武の御聖旨と國民御愛撫の大御心を垂れさせ給ふ聖慮の外なく眞に有難き極みでございます。この日の光榮と感激を永久に肝銘して 陛下の大御心に添う様努力する覺悟でございます。

御親閲に就いて

若松市古前青年團 岡 田 敬 次 郎

畏れ多い事ではありますが御親閲に就いて千載一遇の光榮に浴した私の拙い所感を述べさして戴きます。

天皇陛下の式場に御着と共に煙火一發發せられた所附近に居合はせた數十の雀は支那兵のやうに後も見ず一散に飛び去つた。是神代時代に神武天皇の河内より大和の國に入られ賊の大將、長崎彦を討ち給ふ時何處より飛來したか金色の鴉が天皇の持ち給うた御弓の先に止り其の光の強く輝いたので賊ども戰ふ事出來ず遂に破れた様に雀が 天皇陛下の御威光に恐れ飛び去つたのであります。否鳥類ばかりではなく草木は頭を垂れ私等も亦自ら襟を正さずには居られませんでした。青年訓練所が設置せられ、又中等學校以上に現役將校が配屬せられて以來我九州に於ては空前の盛儀で在郷軍人は勿論學生青訓生の大多數御親閲を拜受した。昔ならば土下座してゐた私等の「頭右」の敬禮に對せられ、天皇陛下には一々御擧手の御答禮を賜はりました。且又一時間といふ長い間にわたらせられた事はあまりの忝けなさと有難さに感激しまして何んと申し上げてよいか判らないくらゐの有難涙にくれました。この光榮を私等の胸底激く刻み込みまして 天皇陛下の御爲め御國の爲めこの身を捧げる覺悟であります。

拜察するだに畏れ多い事ではありますが 天皇陛下にはあの歩武堂々と勇壯なる分列式を御親閲遊ばしまして如何に學生青訓生が日常訓練してゐるかを思召された時必ず御満足であらせられた事と思ひます。又女學生女子青年團が御親閲奉迎歌を熱のある一聲も亂さず奉唱した。即内助者として協力一致 天皇陛下の御爲に盡す事の表示でこれを思召された時も亦必ず御満足であらせられた事と思ひます。

現時日支紛争の次第に險惡になり所々至る所に兵火を交へたが何時も勝報ばかりであります。これは即ち 天皇陛下の

菊の御紋のはいつた進銳な武器を持つてゐる我軍が敗戦するやうな事がありませうか、勝つのが當然であります。天皇陛下の自ら一兵卒に至るまで指揮し給ふのと同様で悪戦苦闘を続けても最後には、天皇陛下の御威光により必ず我日の本の勝利であると信じます。私の兄もこの度在郷軍人として御親閲の光榮に浴しましたので喜んで家族に申してゐます。「御親閲を拜受したから何時出征しても心残りはない」と。否兄一人ではない總ての在郷軍人はこの光榮に感激しいさ鎌倉となれば尙一層勇み立つて出征し、天皇陛下の御爲御國の爲に身命を捧げるであります。又第二國民である私等も令旨を遵守し國內にあつて國防産業生産に奮闘を持續し愈々最後には何れの國とでも一戦をも厭ひません。

御親閲感想

大牟田市私立三井四山訓練所第三年次 小 川 嘉 男

昭和六年十一月十八日これぞ千載一遇の佳日。御親閲場である帶山練兵場に於いて時計を見れば午前十一時。暫く休憩があり中食を済ました。正午になると帶山練兵場は異様に緊張し各中隊は整頓を嚴重にしました。やがて遙か向ふの玉座の方では騎馬の人があちらこちらにと走り出します。はや、天皇陛下には臨御遊ばさるのかと心を躍らせて待つてゐる中合圖の花火は打上げられ今迄の心臓の動きも冷水を浴びた様にしーんとなつてしまひました。その嚴肅な感じに打たれたる間もあらず玉座の方には御召自動車靜かに來ました。遙かに拜すれば夢か現か將又心の思ひからであらうか、陛下の御姿はつきりと私共の眼底に刻まれたのであります。神か佛か眞實に神々しくて筆や口では言ひ表はす事が出来ない感じに打たれることしばし今度は右より順次に分列に移りました。軍樂の音に合せて足踏みしてゐるうちに私共の番が來ました分列發起點を出しました。お、君の御前であります。「頭右」をした時にお、畏れ多くも、陛下には擧手の禮で私共青年の分列を御受け遊ばされました。何たる感激でせう。血は一時に逆上し私共は無我夢中でした。一死以て君恩に報する一念の外何ものもありませんでした。女子の奉唱歌の時が來ました。帶山練兵場は何の物音もなく唯女子青年、女學生徒の奉

唱歌のみ帶山の天地に播ぎ渡りました。私共の心は再び冷水を浴びたやうになり感激の涙はとめどもなく落ち誰一人口を利く者もありませんでした。奉唱歌の終るや私共の「君が代」は吹奏されました。私共は心からなる合唱をしました。終つて天地も揺がす萬歳三唱。天皇陛下には總員敬禮の中に御機嫌置はしく御歸還遊ばされました。あの感激を思ひます。私共はこの千載一遇の御恵みに浴した事を永久に記念し忠孝一途、擧國一致して皇國のため盡さんことを期する次第であります。

御親閲感想

戸畑市青年團 花 田 武 雄

寒夜の露營にとろ／＼と圓らんだ明方の夢さめて見れば何處ともなく薄明が校庭を満たして居た。秋の末の曉の地面の冷寒さと一緒に兩本の朝は今愈々明け放たれて行くのである。見る間に明るさが濃くなつて行く。空は今日の光榮を祝福する様に金屬色に晴れ渡り浮び上つた若人等の容貌は身内から起つた歡喜の色に何れも包みおほせない活々とした感じが漂つてゐる。冷清な空氣が淡い朝もやに四面を満たして居る。殘星は今早や消え去つて昨夕の殘骸は跡形無くなつた。朝の大氣を心から一ぱいに呼吸した我等は露營の疲れも忘却して新しい希望に心を湧かした。此處は小學校の校庭である校舎の瓦が輝きそめた頃一緒に屯した我々の大隊は朝の光に旗旗をなぶらせ乍ら此處を出發して次の集會場に向つた。黒ずんだ道路に並んだ昔風の郊外の家々には軒毎に國旗を掲げて、聖駕を迎へ奉つた歡びを表示して居る。道路を往來する人や車も今日はそは／＼しく感ぜられる。第二の集會場である縣立商業に到着する迄には小一里の道程を歩んだ。此の邊りの往來は既に可成の混雜を呈して居る。自動車がすれ違ふ。一張羅に着飾つた女達が往く。八時過ぎには校庭に入つて此處で隊形の編成を終つた。洗面や朝食も此處でやつた。落着いた秋の朝日であるのだが、それも今日は晴れ切つた空から我等の膚に、汗ばませる様に感ぜられる。此の儘で我等は暫時休憩した。我等は朗かな氣持で語り合つた。再び時間が

來て校門を出て、今日の式場である帯山の練兵場に向つた。代表旗を先頭にかざした若い男達の隊伍が幾團も幾團も練兵場に通じた一本道を前進した。道の左右に擴がつた田園は秋である。野菜畑だ。桑の木畑の寂れて居る風情も畦々に立つた木の梢の葉枯れたのも。礫多い道路であつたが人の流れに土埃が舞ひ上つて居る。各隊毎に旗が燦々と朝日を受け乍ら人波の上を泳ぎ流れた。場に近づく頃には拜觀の老幼男女が詰めかけて居る。氣早な抜目無しの物賣りが道路の側に店を張つて居る。刈田の中には幾張もの天幕を立て連ねられて居た。近縣中等學生達の露營地だつたらう。午前十時過ぎには場内に入つた。短い秋の芝草に覆はれた帯山の廣袤たる原頭は今日こそ晴れの我等が式場として大地を固く締めつけて居る。銃を執れるは學生、青訓集團、カーキ服の在郷軍人團の波の先頭には旭日旗が靡いた。青年の集團も後れじと若さのシンボルの目も綾なる團旗を旗々と原頭の秋風に打ち流した。早渡せばさしも廣き帯山の原頭も此の日馳參せる男の子達の澎湃たる人波に半ば埋め盡されてしまつた。此の日此處に螺集せる若人の數無慮六萬。場を廻りて此の日の光榮を見奉らんと集ひし拜觀の大衆、十萬を越えしと云はれた。場の西北緩丘の中央正面には雪白の布もて覆はれた今日の御座所が高々と設けられた。仰げば遠く北より南に連つた肥後の山脈が一片の雲さへ見せない秋の蒼空にくつきりと浮び出て居る。顧みれば東の方原頭の小草消え去つて遙けき彼方外輪山を超えて聳え立てるは靈峯阿蘇の山容が、それかと思へるかそけき白煙を昇して、巍然として形をあらためて居る。我等は此の晴れの場所御親閱をかたじけなうする事の歡喜を沁々と感じた暫憩の後定位置に整列を完了し緊張の數刻を待つた。やがて午後零時半頃式場御座所近くに設けられた大マストに日章旗する／＼と昇つてはためけば、嘯唳たる喇叭一聲高く高く原頭の空から山野を響き渡つた。各集團からは隊長の號令が次々に聞える。嚴肅の氣は廣い場の隅々に迄覆ひ盡して聲咳一つに無い。原頭の萬草もしばし小ゆるぎもしなかつた。

一時十六分、折しも湧き起つた陸軍軍樂隊の奏でる「君が代」の曲は肅々たる原頭の空氣を打ち震はせて餘韻は遠く山脈の涯迄傳はつて行つた。我等の心が樂の音に吸ひ寄せられる頃遙か南面の丘陵を越えて先頭車を従へさせられ赤塗の鳳輦は式場に着御。陛下には直に玉座に着させられた。一段低い玉座の下には旗手の捧げ持ちたる天皇旗が秋の日ざしを受けて燦然と輝く。「捧げ銃」の敬禮裡に陛下を奉迎し、熊本縣知事は「御親閱を仰ぎ奉る」旨を奏上した。その頃軍樂隊は勇壯輕快なる行進曲を奏樂し始めた。先頭部隊はすでに奏樂につれて原頭の草を踏み乍ら、場の北隅より行進を始めて居る。大分列式は開始されたのだ。噫此の日の壯觀。此の日の光榮。各隊は各隊に續いて行進して行く。打ち踏む大地はよろこびに震へる如く、砂ほこりを湧き立たせて幾萬の足並に呼應した。劍光甞影は秋の午後の陽光にきらめき動き幾百幾千の旗旗は目も綾にゆれて勇躍し大君の御前になびく。砂塵に目もくれない我等の心は一に歸してしまつて足並は只大地を力一ぱい踏み續けた。御前を頭を右にして通る時我等若人の眼頭は熱く涙ぐんで居るのだ。奏々と卷き起り、卷き起る。樂の音は夢の様に我等が耳に傳つて来る。さく／＼たる足並は是と合奏をする。我等は我身であり乍ら此の場合に全く遠つて居た。嚴肅さが身を包み盡して居ながら魂は宙に躍り上つて居た。我等は只、感激の頂上にあつた。かくて我等男の子等の三十八隊の大集團の大分列が終つて前位置に歸れば續いて女子中等學校、女子青年團よりなる奉唱隊は場の東南隅より玉座正面に進み出て御親閱奉迎歌、「嗚呼此處に 天皇の鳳輦を迎へまつれり」とあめつちに響けと奉唱すれば萬場の人波は新なる感激に心を埋めた。次で我等十數萬の赤子は諸共に聲高々と「君が代」の國歌を合唱し奉り、陛下の萬々歳を三唱したしばしは天地もとろいて居た。二時十分。最敬禮裡に陛下には式場を御發聲。我等は光榮の御親閱を長くも滞り無く仰ぎ終りて陛下を御送り申上げた。遂に御親閱は終つたのだ。我等は胸をなで下して居た。

噫思へば我等は今日程自分の心の底にある力強さを感じた事は無い。我等は此の國に生を享けて此の國とは結局不離のものである。例へば身は異郷の土に横たへんも彼が生命は永遠に結ばれて此の歴史輝く帝國と共にする運命を負うて居る。我等は今日此處に帝國の力強さを目のあたりに見た。世の識者よ徒に憂ふるを止めよ。人道は將に廢頽し思想は日々混沌たり。されど徒に憂ふるを止めてその根底を見詰めて君が爲す事を盡せ。頭を廻らせば、東亞の不逞漢我が保權を蹂躪し去り我が生命線をおびやかさんとして居る。列強又、其の聲の吻々たるを聞く。されど我等は憂へない。我等は自身の

力を信じて居なければならぬ。そして正義と人道の前に敢然として行手に進めばよいのである。光榮の歴史と名譽の前に。

我等は熊本の空に秋の陽の愈々傾きかける頃互の心を結んで光榮の日の歸路に就いた。

御親閲感想

糟屋郡須恵公民學校 印 藤 誠

熊本帯山練兵場に於て、畏くも 天皇陛下の御親閲を拜受する、九州(鹿児島を除く)山口縣の在郷軍人團、男女青年團、青年訓練所、中等學校生徒の代表者約七萬人の中に須恵公民學校から私が加はることを命ぜられた時、私は生涯の最も光榮に浴する機會だと欣喜して其の日の來るのを待つて居た。

昭和六年十一月十八日、御親閲を仰ぐ日は來た。連日の雨名残なく霽れて秋空高く晴れ渡つた絶好の秋日和。煙火が上ると同時にうららかなる陽光を浴びて御座所の左側の檣頭高く翻る日章旗。莊重なる「君が代」の吹奏がゆるやかに流れて來る午後一時十五分、純白に光る玉座に 天皇陛下の御英姿を拜し奉る。餘りの忝けなさに身体は緊張し餘りの光榮に恍惚と我を忘る。廣き練兵場を埋め盡せる七萬の若人は誰一人として微動だにせず嚴肅なる静けさを現した。やがて軍樂隊の輕快な行進曲の吹奏裡に分列式は開始せられた。「分列に前へ進め」の號令に我等の血は勇躍した。力強く芝生を踏み鳴らして進んだ。御座所は近い。「頭右」の聲に血の循環は極度に達し呼吸の止まるを感じた。謹みて拜すれば、聖上陛下には舉手の禮を賜はつた。我等は唯感激で胸が一ぱいて御座所の前を過ぎた。二度向をかへて定位置につき。奉迎歌が終つて本山知事の音頭で 天皇陛下の萬歳を奉唱—我等は精一ぱいの聲をはり上げ熱誠をこめて三唱した。其聲は天地も揺ぐばかりであつた。此御親閲の長き時間、畏くも 陛下には嚴然たる直立不動の御姿勢にて各隊毎に懇なる舉手の禮を賜はつて御親閲遊ばされた。此神々しさを拜し御盛徳の程を拜してたゞ忝さと有難さに胸が一ぱいである。

吾々は此光榮と御恩澤を心の奥底深く刻み込みて、一天萬乗の 大君の御爲、大日本帝國の爲に一身を献げと善良なる國民たり忠良なる臣民とならん事を誓ふのである。

御親閲を仰ぎ奉りて

糟屋郡須恵村海軍炭礦青年團 稻 永利 雄

待ちに待たれた御親閲拜受の日は來た。今日、昭和六年十一月十八日。九州沖繩及び山口各縣の青年訓練所、中等學校在郷軍人、男女青年團、それらを代表するもの六萬六千人、さしにも廣き四十四萬坪を有する帯山練兵場も、これ等の御親閲拜受者を以て埋められてしまつた。秋空高く、白雲まばらに晴れた絶好の秋日和である。

時午後一時十五分。煙火の合圖によつて大國旗が檣頭高くかゞげられ莊重なる「君が代」の吹奏裡に、畏くも玉座に 天皇陛下の御英姿を拜し奉つたのである。軍樂隊のマーチの吹奏によつて次ぎ次に分列式は行はれて行く。やがて吾等の部隊となる緊張の極に鮮く顔、強く大地を踏み行く脚並。「頭右!」おゝ咫尺の間に龍顔を拜し奉る、何たる光榮、忝けなさひし〜と胸にこみ上げ、曠自然にうるみ、その森嚴莊重、その神々しさはとても筆舌に盡すことは出來ない。

この千載一遇の光榮に浴した私は、この感激をいつまでも胸深く刻みこみ 陛下の善良なる國民たらんことを心に深く誓ふものである。

御親閲感想

遠賀郡中間公民學校第四年次 石 田 守

日の本の國に生を享けたる吾等が一生の榮ある御親閲を拜受する日、朝來より片雲だになき快晴に恵まれ東は遠く阿蘇連峯の雄姿を仰ぎ西は限りなき肥後平野に連り實に俗塵を避けた城東の一清淨地、熊本帯山練兵場は若人の感激と歡喜に

包まれた。昨夜來より鐵道輸送大計畫の下に練り込んだる各種団体は感激に満ちた一夜を明かして續々と集る總數六萬六千人午後零時には式場西端の玉座を正面に吾等九州の若人は整列を終へさしも廣き練兵場も人の海原と化した。若人の顔には御親閱を仰ぐべき感激に満ちた光榮と歡喜に胸を躍らせながら式場寂として聲なき中に已在るを忘るゝの概があつた。此時煙火一發を合圖に大國旗はする／＼と掲揚され滿場を壓する息詰る如き緊張裡に午後一時十五分略式自動車兩簿に依られた。陛下には式場に御着、場の一隅よりは軍樂隊の奏する「君が代」の奏樂が起り全員最敬禮の中に玉座に就かせ給うた。仰ぎ奉るも畏き。陛下には天顏殊の外御麗しく御舉手の御會釋があつた。次で吾等若人の分列行進は開始された。陸軍軍樂隊の奏する陸軍行進曲に連れて各種団体は順次に勇壯且活潑に分列行進を行ひ。陛下には親しく吾等分列部隊に一々御舉手の御答禮を賜はつた。分列式が終るや女子青年團の奉迎歌の奉唱あり續いて全員「君が代」の奉唱をなし熊本縣知事の發唱にて。天皇陛下萬歳を三唱し六萬六千の若人の心からなる赤誠は天地に轟き聖壽無窮を壽ぎ奉つた。やがて二時三十分感激に満ち満ちた全員の奉送を受けさせられ「君が代」の奏樂裡に還御遊ばされた。

嗚呼春秋に富ませ給へる。陛下の御英姿は吾等の胸に永久に此の日を期して残るに違ひない。御親閱は終つた、昨夜來の疲労も何等の影を見せず一生の念願たりし御親閱に參列して光榮ある此の日を終る事の出來た吾等は唯感激あるのみであつた。時將に重大なる秋に當り親しく御親閱を賜はる陛下の大御心を拜察する時、吾等青年の血は祖國日本のために我等の使命を想起する切なるものがある。日支衝突やうやく深刻化せんとする今日我等は決して油断してはならぬ。吾等は御親閱に於ける。陛下の御趣旨に副ひ奉つて益々心身を鍛練しやがて來る可き萬一の場合に役立たせなくてはならないのだ。御親閱は吾等青年の反省を促し下さる覺醒期だと云つても敢えて過言ではあるまい。

御親閱感想

遠賀郡中間青年團員 餅田友之助

私が遠くの日より唯待ちに待つた光榮の日十一月十八日未だ明けきらぬ午前三時過ぎ無事熊本驛に第一歩を印する事が出來た。驛前には。陛下歡迎の門が強い照明に照り映えて明るく輝いてゐた。外は車中で思つたほど寒くはなかつた。靜かな廣場も續々として降り來る學生生徒によつて喧嘩をきわめる。私達は一團となり休息所たる春竹小學校に向つた。明るい廣場や暗い小路も唯黙々として行進小學校に着いた時は四時も大分過ぎていた。教室内はもう先着の青年團員や學生生徒によつて滿員である。やむなく校庭の焚火を圍んで夜明けを待つ。腹もすいたので皆と暗い廊下でまだ早い朝食をなす。待つ間もなく夜が白めば再び隊伍を整へ熊本商業學校に到着す。校門を入れれば大きな蘇鐵が巨人のように、つゝ立つてゐた。此處にて最後の準備を完了した我等は躍然として帶山練兵場に向ふ。

練兵場近くには幾百となく學生生徒の露營のテントが朝風に、はた／＼と翻めいてゐる場の内外共人の洪水だが場内の廣大なることも驚くばかりである。零時を過ぎてより。陛下の臨御も近づいたので直立して待つた昨夕より立づめの行程でもすれば体がだゆくて、坐り込みたい程だったが突然轟然たる號砲が式場西端より秋空高く鳴り響けば正面の橋頭高く日の丸の國旗は上る私の胸はにわか高鳴る。待間もなく遙か西端に兩簿の先驅を見るや氣をつけの喇叭は嘯唳として響く場内水を打つたる如く靜まり私の体も不意に強い力を全身に打込まれたもの如く緊張す。續いて軍樂隊の「君が代」の曲がどこか空中の一角より自然に湧き起るが如き莊重なる音を奏樂する中を兩簿はしす／＼と御着御あらせられる。私は身内がじんとして其の莊嚴さにうたれた。大隊長の聲に遙かの玉座に敬禮をなす。再度奏する「君が代」に完全に其莊嚴の氣が融け入つてしまつた。一轉此度は愉快に亦勇壯なる行進曲が軍樂隊によつて奏せらるれば足なみ捕へ歩武堂々と皆一齊に分列行進を開始す。幾萬の劍尖陽光に閃き旗影亦幾百ともなく輝く中に長蛇の如く蜒々として行進す。我等の誇

り彌が上にも高し、愈々玉座も近づけば大地も破れるばかりに力強き行進をしつゝ大聲頭右の號令に首も、まがれとばかりに右を仰げばかしくも高臺より擧手の禮をたまはつた。陛下の御英姿始めて拜する事が出来た。神々しき玉顏其の刹那の感激こそどうして言ふことが出来よう。今私が思ひ出さるゝものは其の刹那の陛下の御英姿のみである。場内一巡し元の位置に着きつゝ尙私は感激にふるへつゝ若しあのような感激を受ける事が私の行爲によつて出来得るなれば假令其れが死であらうと何であらうと辭しはせぬと思つた分列も終つてより場内幾千人の女子青年團員や女學生徒の眞心こめて歌ふ奉迎歌が妙なる旋律を漂はして來れば亦わけもなく深き感激を覺え其の餘韻翳々として何時までも心に残る。歌を終れば亦軍樂隊の演奏につれて全員一齊に「君が代」を奉唱次で「天皇陛下」萬歳の聲に天地も破れとばかり三唱す。斯くして式も了り御座乗の自動車はしづくと去つた。私は何時迄も見守つた。そしてしばし無限の思に瞳を下しつゝ靜かに今日の盛大な感激に満ちた光景を思つて見た。亦つくづく今日の御親閱開始より終了に至るまで永い間かしくも直立のまゝにて我等にも親しくお目を注ぎ遊ばした。陛下の聖慮の事何等地位なく學問なく亦人格も充分でない私等にも青年なるが故にかく御仁慈を垂れ給ひ亦御期待下さる事を拜せば特に東亞の風雲急を告ぐる時尙一層の赤誠を以て聖慮に副ふ可く深く強く感じた。あの刹那の感激は今尙私をして興奮の渦中より脱し得させぬものがある。

御親閱拜受所感

嘉穂郡穂波青年訓練所

城石孫五郎

肥筑の平野を南走する我が特別列事は十一月十八日午前三時矢の如く熊本驛に着いた。左を見ても、右を見ても今日の佳き日に大元帥陛下の御親閱を拜受せんものと隊伍整然として豫定行動をとりつつ肅然として晚秋の曉靄を縫うて帯山練兵場へ進んだ。

見渡す廣袤東に阿蘇の噴煙を眺め南に白河の溪流を擁する帯山の原頭には早數萬の拜觀者と六萬數千を越ゆる御親閱拜

受者を以て満たされてゐる。秋の空は彌が上に高く、紺碧の盡くる所より一臺の飛行機は爆音も勇ましく直進し來り、我等の上空には施回飛行北方をさして姿を消した。我等は暫く休憩する間に煙火の合圖と共に陛下御來臨の近まりしを知り、隊伍を整へて今か今かと精神緊張の内に御待ち申した。

午後一時を過ぐる十分、喇叭たる喇叭の音と共に、日章旗は高く掲揚せられ氣を付けの合圖にて、十幾萬の蒼生は寂として一語を發せず。我等心身は感激と感謝の念にて微動だにもなし得ず、停立數刻玉座に御英姿を拜し奉る事を得た。一同最敬礼。陛下には擧手の禮を賜はつた。嗚呼一天萬乗の大君の御前に此の賤しき我等が拜する事を得たる有難さを感じし時、唯々感涙に咽び、胸奥の閉鎖を感ぜしのみであつた。右方部隊より分列式が開始せられ吾等三十四中隊行進愈々陛下の御前にて「頭右」の號令一下注目、陛下には龍顏麗はしく擧手の御答禮を賜はる。御英姿の神々しさに再び熱涙の止む所を知らなかつた。唯々有難い。恐れ多い。

君國のために必死の忠を盡す覺悟が頭に叢々として起り國民の心の奥底には大日本帝國は強い。勝つ。といふ信念が流れてゐるのを直覺した。

一同は整列線に集合し陛下の御前にて「君が代」を合唱し、萬歳を三唱して御親閱を無事に終ることを得た。陛下が斯くも深く吾等青年に意を用ひられしことを思ひ此の國家重大なる現在に於て我等青年たるものは一層一致團結以て將來の日本帝國の前途の榮隆に一身を捧げ奮勵努力皇恩の萬分の一にも報ひん覺悟を堅くしたのであつた。

御親閱に際して

朝倉郡久喜宮村青年團

橋詰森市

時は昭和六年十一月十八日銀杏城下熊本阿蘇山麓の曠野は快晴の秋天に恵まれ微風ゆるやかにそよめいてゐる。此處は熊本市外帯山練兵場である。今日こそ日頃仰懸けて祈り奉つて居た大君を今數分の後目前に拜し奉るかと思へば前夜特別

仕立ての臨時列車に滿載され疲労した體も一時に安くなり仲々とした氣持で刻々に迫る御鳳輦を今か／＼と待ち奉つた折しも午後一時過ぎズドンと一發威勢よく煙火は揚つた我等の前面右斜よりは熊本放送局のラヂオが陛下の御發聲を報じた、宏大なる練兵場の一隅よりは戸山學校の軍樂隊が調べも爽やかに「君が代」を奏樂し始めた。聽て陛下の御召自動車は靜々と玉座近く進んで行く、萬場はシーンとして咳一つする者もない。聖上陛下は一同最敬禮の裡に玉座に立たせ給ふ。我等の全身全靈は極度に緊張した、我等の目には言ひ知れぬ滿悦と感激の涙さへ浮んでゐる、幾萬の若人は一齊に「君が代」を合唱した學校での「君が代」と今日の「君が代」其の氣持ちに於ては今まで曾て無い差があつた。それより勇壯なる軍樂隊の行進曲につれて分列行進は次から次へと玉座の御前を秩序よく進んだ。凡そ一時間にして分列式が終ると女子青年や學生等は牙へ切つた朗らかな聲で奉迎歌を奉唱した。そして最後に陛下の萬歳を三唱した心の底より湧出づる幾萬の聲は遠く阿蘇の山迄も響き渡つた。午後の二時三十分頃一同感激と感謝の裡に御親閱は終つた。

今や滿洲の野には我々同胞忠勇の士が日夜勵精護國の爲めに奮闘せられてゐる、此の國家多難の秋に當り我が九州の青年男女は 大元帥陛下の御前にて光榮ある御親閱を仰ぎ奉つたのである。我等の心は彌が上にも感謝と悦びに滿たされた此の心、此の意氣とを以て舉國一致我が帝國の多難を打開し榮えある祖國御仁慈深き大君の御爲めには一命は何時でも捧げ奉る覺悟である。

御親閱拜受の所感

嘉穂郡桂川村株式會社麻生商店谷田青年團

稻

谷

實

昭和六年十一月十八日御親閱參列の爲、私等嘉穂青年團一行二十八餘名は十七日午後十時三十六分芳雄驛發五六號臨時列車にて途中無事翌午前三時十五分熊本到着、徒歩約一時間餘にて春竹小學校に着き少憩後中隊編成の爲某商業學校に集合し御親閱に關しての諸注意事項を受け十時出發約一時間後式場帶山練兵場到着。

式場の西南には白布にて覆はれた陛下の玉座が一段高く設けられてゐます。時間の過ぐるに隨ひ廣濶たる場内は受閱者並に觀覽者にて埋められ各縣の團旗は幾百ともなく晩秋の空高く美しく輝いて異彩を放つてゐます。十二時十五分煙火一發場内に響渡れば全員不動の姿勢をとり大國旗は徐々として掲揚され今日の光榮を祝して居るものゝ如く秋風に柵引いてゐます。同時に戸山學校の軍樂隊の「君が代」の吹奏と共に天皇陛下には文武百官を伴はせられ御着聲遊ばされ玉座に御着席遊ばさる全員最敬禮をなし「君が代」の奉唱一回にて直に分列式に移る樂隊の行進曲に先づ熊本の各専門學校より初まり暫くして我等五集團の順番に來れば指揮官の聲も一入緊張し分列に前へ進めに足並を揃へ元氣良く足の疲労も知らぬが如く歩武堂々天地を壓し勇往邁進の氣象を表はし數百名よりなる大部隊も全員の自覺は恐ろしいもので豫習無きにもかゝらず隊伍を整へて玉座近くに來る、頭右の號令と共に全員玉座に向ひ注目敬禮する此の時恐らくも陛下には御英姿颯爽たる御軍服姿にて御擧手の會釋を賜はる、瞬間私は玉顔を拜し奉り玉体の益々御健勝に亘らせらる事に、思はず感涙に咽び只恐懼の外は有りませんでした、陛下には長くも分列式の長時間に涉り御機嫌麗はしく玉座に直立せられ、各縣の團体に均しく擧手の會釋を賜はつた分列式終れば處女會女學生よりなる奉唱部隊は稍前進し軍樂隊に合せて奉唱歌を唱和す終れば熊本縣知事の發聲にて天皇陛下萬歳を三唱し全員之に唱和すれば一大音響と共に四方の山野を震駭せしむ時に御親閱終了二時なり各團は逐次解散して歸途に就いた。

帶山原頭の感激

浮羽郡山春青年團員

野

鶴

好

人

昭和六年十一月十八日、目下陸軍特別大演習御統監の爲、熊本縣下に行幸遊ばされ給ふ。聖上陛下の御前に我等六萬の民草は御親閱の光榮を辱ふする。秋の陽は白く光つて大氣は水の様に透明だ。廣衍な帶山練兵場にまがきの如く堵列する各種團體、數限りない團旗が風にはためき陽に映ゆる。實に壯大な景觀だ。

午後一時整列、服装點檢。遠く御野立所のあたりに國旗が掲揚される。御親閲開式の煙火が秋天高く打上げられて人々の群に一しほの肅正が保たれる。襟を正し、心を引締めて待つ間もなくいとも莊重な「君が代」の軍樂合奏が流れて來ると「氣を付け——つ」六萬の集團は水を打つた様に沈靜だ。やがて大廣場の一端から先驅のサイドカーが勢ひよく滑り込んで來て、ついでよく訓練された數臺の護衛のサイドカーを側に、陛下の御車が到着する。斯くて、陛下御到着のラツパが一般に吹き鳴らされるといふと嚴肅な、陛下の御軍服の英姿を遠く白布をもて白くおほはれた壇上に拜し奉る。「捧げ銃！」銃を持たぬ我等は恭しく最敬禮を行ふのだ。陛下には恐れ多くも擧手の御答禮を賜はる。正に莊嚴な寮圍氣を感じながら、暫く玉休を拜し奉れば……お、その肅々たる神氣！神々しく緊張した氣魄！萬感交々湧き出でて、夢の如く現の如く如何とも云ひ表はし難きインスピレーションに打たれて、濛とした感喜迫り實に感きはまつてグツト喉元に熱い物が込み上げて來て喉が熱くなる。唯々、「かたじけなさに涙こぼるゝ」の感懷だ。あゝ、今、陛下の玉休を眼のあたり拜し奉りて我々は我々萬民の「生の強さ」を感受する。帝國八千萬の魂が斯く、陛下の御元に融合緊注して、今陛下と我等は一心萬休だ。畏れ多い事ながら我々の血は、今、陛下の御血を直ちに感じて流れるのだ。誰かこの感激に浴して不健全な思想に汚れ、非國民的汚濁に染まうか。帝國萬民の血は強く流れ、強く熱してゐるんだ。この感氣、このスピリットこそ萬古不易の我が日本帝國の根柢であり、本領である。

やがて分列式に移る。軍樂隊の行進曲合奏裡に、團旗の流れ、學生團の武裝整然たる行進、銃劍の銀白な光り「頭！右！」指揮官の感動的な號令！各集團の敬禮に、陛下には一々御答禮を賜ひ、畏れ多くも一時間餘の長時間を、壇上に御立ち遊ばされて、實に恐懼の至りである。男子集團の分列式了つて、女學生、女子青年等を以て組織された女子集團の御親閱。前面、兩側三面より、玉座近く進み寄つて、奉迎歌合唱。感激に熱した心の限りを捧げ奉り、聲の限りを盡して唱ひ壽く。歌聲は澄切つた秋空高く、遠く、しかも清く響き渡つて、陛下には御麗しく御感喜遊ばされ賜ひしと推察し奉る。それより「君が代」を合唱。熊本縣知事の音頭にて、「天皇陛下萬歲」を三唱。六萬の群集が壽き奉る萬歲は、天にこ

だまし地にとゞろき、聖壽萬歲、帝國萬々歳の氣概は均しく六萬の胸を打つて、一天萬乘の陛下の御元に、統べ給ふ我が日本帝國の堅實な歩みと、光耀の歴史に彩られた我等の生活とを、力強く感じないものはなかつたであらう。お、！仰げば白熱の太陽は仲天に燦然と輝いてゐるではないか。天皇は我等にとつて、宇宙に於ける太陽だ。再び云ふ。「我等は斯くて、力強き生を感じるのだ」

「君が代」の合奏裡に、陛下の御車が原野の外に消へし後、解散せる群集は練兵場一杯に散り満ちて、未だ尊き残り香をかぐかの如く、蠢き動いてゐる。亦深く刻まれた印象を味ふのか、語るのか、處々にうづくまつた塊がある。時恰も滿蒙の天地急を要する時、我等の感懷や無量である。遠く眼を放てば、大阿蘇の連山はかすかに秋氣を帯びて、

靜かだつた。

御親閲拜受の感想

三浦郡青木村青年訓練所 富田市雄

十一月十七日午後八時菊池、平田の兩兄に誘はれて柳河驛に至る發車時刻に約二時間の餘裕あり、三人の意見一致して矢部川驛まで歩行することに決す。今まで雲に包まれてゐた月は次第に姿を表はし、晝にも負けない光線を投げ與へた、僕と菊池兄とに通行人が通りすぎて我々を振り返つて物珍らしげに眺める、しかし二里の道を歩くのだ、そんなことに氣も取らず、約一時間の後目的地に着く。矢部川驛には在郷軍人の人々約四五十人、汽車の來るのを待つてゐた、何れも陛下の御英姿を拜すると云ふ喜びと光榮を云ひ知れぬ顔してゐた。午後十一時十分、中村松太郎氏の指揮の下に四十二號列車に乗車、約二時間の後熊本驛に着す。熊本驛前には大きな奉迎門を設け、本通りの兩側には杉檜松等の小さい草花の花畑を設けたるも外郷に來て珍らしいものであつた。午前三時半歩行にて約一里餘なる春竹尋常小學校に至る、我等は三十五中隊に編成され、階上の一室にて寝ることを命ぜらる。時既に四時、久留米市青訓、其の室に満ち、我等はついに廊

下にて居眠る。五時再び校庭に出づ校庭には中學校生徒さん達が昨夜野宿したのか軒下に固まつてゐる、そのたき残りの燃えてゐるのに身を温め、それより順次各集團の場所に向ふ、我々は熊本縣立商業學校の第五集團の豫定地に午前八時着す。僕は靴の爲豆五つ出来涙の出るのを心抱し、此處にて福岡縣青年團、訓練、中等學生等整列し、空腹を満たし、午前十一時いよゝ大目的地たる帯山練兵場に向ふ。

兩側の田畑は皆人馬の爲に踏みにつられ、桑畑も、ごま畑も、野菜畑も、何一つとして青々とした元氣な姿をしてゐる畑は見受けず、此の惨めな光景を望んでは、小學校時代に習つた讀本のベルダンの光景も眼前に浮び、これに死人の山をなさば如何に其の大戦が激しかつたかを想像するに足る。

○時三十分規定場所に整列し大隊長の注意あり、後靜かに 陛下の御來臨を待ち奉る、砲聲一發やがて 陛下の御風箏師團司令部の御門を發せらるゝの報なり。午後一時喇叭吹奏不動の姿勢を取り、戸山軍樂隊は「君が代」奏樂 陛下玉座に着御あり、各縣知事最敬禮を行ふ、此の時吾等は捧銃をなす。軍樂隊は「君が代」を奏樂、僕は近視眼のため龍顔を拜することを得ず、天氣晴朗なれどもかすみて拜せられず、在郷軍人の話によれば、少し分つた日ならよく拜見せられるとのことだ、それより熊本縣知事前進、今日の御親閱を仰ぎ奉る旨を奏上す。軍樂隊は行進曲を奏し、所定の位置に着く、我々の部隊は分列式を開始す。先頭は學生其の銃剣は秋のすゝぎの穂より尙美しく、この姿を見て我が國は今度の支那との戦争に勝つ自信あり。我々第五集團は大隊長少佐豊島俊輔氏の號令一下勇ましく前進す。陛下の龍顔を拜する、これ臣等生涯の最慶事なりと喜び勇んで、襟を正し、頭右の號令にて今まで亂れてゐた歩調が一つとして雜音を混へない様になつた、これ 陛下の稜威の然らしめしものなり。はるかに答禮遊ばされし時、尊顔を拜せんと今まで思を抑へてゐたのに、辱けなさに涙湧出で、ついに龍顔を拜し得ず、李王殿下及び諸宮殿下諸大臣、或は縣知事閣下等のお方々も拜する暇なく、有難い心で一ぱい頭も上げ得ず、分列式も終る、それより奉唱部隊の前進奉唱歌の合唱、九州一圓より集つた處女會、女學生彼等も一生に一度の光榮であらう。奉唱歌終り、軍樂隊「君が代」の第一節奏樂があり續いて全員これに

和して奉唱す。熊本縣知事の音頭にて萬歳を三唱し、喇叭一聲「君が代」の奏樂にて敬禮す、この時 陛下の鹵簿式場を御通過になる、それより一同退散す。

思へば帝國軍人が身を忘れ家を忘れ御國のため戦場に忠死するもかゝる 陛下の尊嚴な御英姿と恩情とに報ひんとする報恩感謝の念に外ならないのだ、僕も此の名譽ある機會を以て目的を貫徹せん。

御親閱拜受所感

青年訓練實施三浦郡川口實業公民學校 松本喜代次

過ぐる十一月十七日午後十時柳河驛を發せし汽車は三浦郡青訓生、青年團及び各地方の團員を乗車せしめ矢部川に到着下車し數十分にて下り列車に再び乗車し熊本に向つたのであります。我等一同を乗せたる汽車は町村部落人の夢を破り長蛇の如く線上を走ること二時間半にして漸く熊本驛に到着下車致しました。廣々たる驛前も各方面の拜受團體が到着して大混雜をなしてゐました。我が團は整列後電光白晝の如き熊本市街に歩を進め、約一時間餘りにて春竹小學校に着く、此處は福岡縣下の青訓生及び青年團員の集合地でありまして係員の指導により各團體は教室に入り休憩し、朝飯すまし夜の白むのを待つたのであります。團体は四列に整列し、團旗を先頭に商業學校に向つたのであります。此處にて各團體は中隊長にわたりまして命令により數時間休み十一時頃出校致しまして帯山練兵場に向つたのであります。附近に至りますれば群衆蜘蛛の巣を散らしたるかの如く我先にと式場に集つてゐたのであります。着くと各部隊一定の場所に到着し周圍は一般拜觀者によつて人垣をつくられてゐたのであります。我中隊は正面に着席し晝飯をすまし式の行はれるを待つたのであります。

午後一時煙火一發合圖に一片の雲なき大空に高く日本旗が掲げられたのであります。おそれおほくも 天皇陛下には高臺に御登り召されたのであります。特別目を引く戸山學校の軍樂隊の「君が代」の合奏が行はれ、さしも廣き式場に合

奏の音、私の胸の呼吸の外には物音一つだに聞えず真に各自は緊張したのでありました。此の時私は或る一種の豫感に打たれまして、たゞ直立不動の姿勢をとりまして 陛下に注目したのであります。「君が代」の合奏が終りまして熊本縣知事の挨拶によりまして熊本縣下より順次に分列式行はれ、終りまして女子部隊は三方面より前出して奉迎歌を奏上し奉つたのであります。拜受者の「君が代」の唱歌ついで喇叭合圖によりまして天地もくつがへらんとする萬歳三唱がとなへられたのであります。遠方より聞きまじたら砲彈のとどろくが如く聞えたのであります。私も眞の腹底より破鐘の如き音を出して三唱致したのであります。萬歳が終りますれば 陛下は自動車に召されしづくと退場遊ばしたのであります。我が團は三時半頃退場致しまして歸途水前寺に立寄り五時まで休息し午後七時集團所に到着しましてそれより驛に向つたのであります。

うすら寒き驛前に各團体は集合整列し上り列車の來たるを待つたのであります。十時二十五分黒煙もろとも發車し名残惜き熊本を後にして別れたのであります。

御親閱拜受の感想

三浦郡蒲池村青年團員

與 田

一

秋附の十一月、長くも 陛下には時局重大、國務多端の折からにも拘らせられず、只管に武勇振興のかしこき思召を以て、肥筑平野に行はせられたる陸軍特別大演習御統監の爲め、九州の地に行幸遊ばされたり。時に四百萬の民草の歡喜措く處を知らず、喜悅に満ちたる感激もて、聖駕をお迎へ奉れり。陛下また大御心を教育振興に垂れさせ給ひ、青年子女の御親閱を拜受するにあたり、我村に於て村長の推薦により不肖はからずも拜受の榮譽を荷へり。これ千載一遇の光榮にして感激と喜悅交々胸にせまり又その責任の重く且大なるを思ふ時堅く熱誠以て其の任を果さん事を心に誓へり。喜びの十七日、人々安らげく夢路をたどる頃、訓練服の正装に身を固め停車場へと夜路を急ぐ。車中の集ひは吾等と光

榮を共にする各地の青年にして、立錫の餘地なき有様なれど、これも御奉仕の爲と不平を云ふ者とな、深夜二時を過ぐる十五分感激深き熊本驛に着す。驛前の裝飾電燈畫を欺くばかりの中に奉迎門の豪壯さ先づ驚を喫す。市中を東へと急ぐに道路の整備、町門の奉迎裝飾は至善を盡し、文明文化の粹をつくせしを、聖代のありがたさ、いと身にしみたり。行路一里餘春竹小學校々庭に至り、中隊編成成る。時既に三時半、荒庭の中に疲足を伸ばすこと二時間、噴空前の一大盛儀輝く御親閱の光榮に浴するの日、昭和六年十一月十八日の朝は朗かに明けわたり、吾等の意氣愈々壯なり。東へ又一里餘の行程商業學校に着く。此處に於て大隊の編成、御親閱式豫行演習を終へ、榮ある御親閱式場たる帶山練兵場へ向へり。帶山原頭には早や 陛下の御尊姿と御盛儀を拜せんと呼群衆の中を、堂々隊伍を整へ入場する壯觀又實に言語に絶す見渡せば雄姿大阿蘇連峯の麓に展開したる清淨の地は、仲空高く和風そよぎ、秋陽朗かに照り映えて聖上の着御を待ちける赤心の民草は、數萬を以て數ふべく只人の波、人の海とや稱すべきなり。午後一時煙火轟く、着御の時刻や迫る。身血湧き肉躍り限りなく人心緊張するを覺ゆ。かくて數分玲瓏たる喇叭の音響き渡れば、迂るが如き風聲の着御を拜す。莊重なる軍樂隊の「君が代」吹奏裡に、日の丸の御旗は意氣揚々として高空に掲揚さるゝと見る間に、うらゝかなる陽光を浴びて銀色に光る玉座に長くも 聖上陛下の立たせ給ふを遙かに仰ぐ。その凛々しき御雄姿目のあたりに仰ぎ見て、この光榮と歡喜に感極まり、かたじけなさに自づと頭下るを覺ゆのみ。再び起る「君が代」の緩やかなる音律に滿場肅として聲なく帶山原頭神氣に迫る、奥床しさ。

顧みるに幼時より身にしみぬる「君の爲ならば」といふ一語の教訓たるや、更に印象を深くしたり。次で軍樂隊の輕快なる行進曲の吹奏に伴ひ、先頭に標旗をかざしつゝ分列式は始まり。一糸亂れざる隊伍、その身は恰も軌條にあるが如く、玉座の御前通過の際「頭右」の敬禮を行ひつゝ行進すれば 陛下には一々擧手の禮を賜はれり。深窓九重に雲深き 陛下の御龍顏を餘りにも間近に拜し、吾等が上に御目をお止め遊ばす大御心を拜察して、身の光榮をつくづく感じ、轉た第二國民としての責任を深く自覺せしは、強ち吾一人にあらざるなり。分列式終り奉唱部隊のいと

ごそかなる「あゝこゝにすめらみことのみくるまを」誠心より送り出る奉迎歌を聞いた時、唯々感慨無量、幾十萬、歌ふ者、聴く者、感激に腫潤はせぬ者としてなかりしを思ひ、陛下におかせられても御満足の程を拜察し奉り感咽してとめどもなく吾頬を濕はす。續いて全員に和して「君が代」を奉唱し、「天皇陛下萬歳」と心の限り聖壽の無窮と聖代の彌榮を祈り奉れば、陛下には民草一齊の奉送を受けさせられつ、「君が代」の奏樂裡に御退去遊ばされたり。時に二時十分。御親開始まりてより正に一時間の長きに涉り御親閱臺上に微動だにさせ給はず、いとも御熱心に御親閱遊ばされし、陛下の御心仰ぎみるだに畏き極みにこそ。

あゝこの光榮と感激とに無限の思ひを抱きつゝ、御奉送申せし不肖は蒲池村代表者として其の責任を果し得たことを喜びとなすと共に吾が國二千五百有餘年來の祖先が只君の爲、國の爲めに、忠節を勵み世界に類なき皇國となせる輝く日本の臣民として、その遺澤をうけし吾等はよりよき日本を建設する事を將來に誓ひ得る事を喜べり。あゝ生を皇國に享けたる吾は榮あるこの日を生涯の記念とし吾が最善を盡し君國の爲に奉仕せん事を誓へり。

御親閱に参加して

八女郡中廣川村青年團員

加藤 由太郎

秋空清く澄みて片雲だに無く薫風和やかに流れて地上を淨む。陽は燦として輝き瑞氣九天に滿つ、此日十一月十八日正午を過ぎる正に一時、號砲高く天地に轟けば空高く國旗は掲揚せられ場内齊しく聖駕を迎へ奉らんとして肅然。聲を吞む軍樂隊の吹奏する國家に胸の鼓動は高まり赤血の身中に奔流するを覺ゆ、錦旗を拜するや頭自ら下りて唯無念無言、仰ぎ見奉れば御英姿は早くも玉座に立たせ給ふ。感涙雙眼に溢れて龍顔を拜し奉るを得ず。萬感胸にせまり筆舌に盡し難し。やがて軍樂隊の奏する陸軍行進曲に脚いとも軽く、至誠奉公の念いやが上にも昂り、威風堂々晴の分列式はいとも嚴かに進み行きぬ。やがて幾萬の處女の奉迎歌に再び莊嚴の氣場内に滿ちぬ、かくて、聖上陛下には全員歡喜感激の内に御還幸

遊ばされたり。

噫！今日の佳き日に此の光榮に浴したる吾等の喜び何にかたとえん。吾等の幸福何にか比べん。一身を献げて皇國の爲めに盡さん事を誓つて筆を置く。

御親閱拜受の感想

八女郡中廣川國民學校

末 安 工 一

午後一時十分戸山軍樂隊の嚴かな「君が代」吹奏のもとに廣茫たる練兵場に集る十萬の同胞微動だにせず御待ち申し上ぐる中に肅々としてすべり入る御召自動車に、天皇陛下の御臨場を迎へ奉りました。着御の、陛下には遙かに仰ぐ玉座に御立ちあらせられ、いとも莊嚴なる直立不動の御姿勢のまゝ、實に一時間の久しきに亘り六萬七千の若き國民の分列式を受けさせられ、一々御丁寧なる御答禮あらせられ親しく御親閱遊ばされました。私共は隊伍堂々として、陛下の御前に進み頭右の敬禮を以て龍顔を拜みましたとき遙かに御答禮の壯たる御英姿に接し感涙の胸にせまり眼にあふるゝを覺えました恐れ多けれども御若き、陛下に於かせられても、幾萬の青年が御親閱の喜びに溢れ隊伍堂々御前を分列するをみそなはせられてはひそかに頼母しく心強く御感じあらせられたこと、拜察いたしました。私は我等の如き微賤にして御英姿をまのあたりに拜した此の上もない聖恩に泣き、心から湧き上る有難さを覺え感謝の念に堪へませんでした。悦びにとめどもなく涙がにじみ出しました。此の有り難き御親閱に青訓生徒の全員を参加させて貰つたらと思ひました。全國幾十萬の青訓生徒が奮起して此の御仁慈の大御心に拜謝しつゝ、御宸襟を惱まし奉る滿蒙問題、國家經濟問題、國民思想問題も我々青年の一致團結に依つて突破解決して叔慮を安んじ奉らねばならぬと覺悟しました。實に今や吾々青年が奮然として起ち青訓の成績を振起し以て忠良なる臣民たるの赤誠を表はすべき時だと考へます。

斯くして赤子八千萬の同胞が億兆一心神の鬨き給へる皇國の礎を固めんため澄み渡る大空の如く、指し昇る旭の如く廣

き心と赤き心とを以て互に輝き合ひ照し合ひ熱し合ひ一人の怨み争ふ者もなく、一人の荒み怠る者もなく、「總和親總努力」の國風を作興して山の奥海の邊りに至るまで皇國精神を漲らしめ以て我皇祖皇宗の御遺訓に違ふことに努むべきであります。

ふた、び御親閱を拜受して

京都郡犀川村青年團長

大 脇 駿 一

天高く風爽かに大阿蘇山麓の曠野は、秋色今將に酣である。國軍の威容をこの地に展開する大演習御統監の爲め、聖駕を不知火の筑紫に進め給ふ。九州健兒の意氣爲めに天を衝く。大森未だ銀杏城に駐し給ひし十一月十八日、連日御繁忙なる御日程をお割き下され特に我等九州の若人を市外帯山練兵場に召されてその壯容を御親閱遊ばさる。お、何たる光榮ぞ願れば菊薫る昨秋宮城前廣場に召されて御親閱を拜受した。歳餘ならずして再びこの榮譽を拜受す。感激措く能はず。

この日空は拭ふが如くコバルト色に晴れ渡り爽かなそよ風は心地よく場を吹いてゐる。東を望めば遙か彼方に大阿蘇の峯、これを周る外輪山、世界一の大火山といはる、雄大なる姿で聳えてゐる。其の間に開けた肥筑の大平野の中にこの帯山練兵場はやゝ小高い位置を占め九州の絶好の秋色を一眸の中に集めて、今日の御親閱を壽ぐかの如くに麗かな日光を浴びてゐる。今日此光榮を受くる者無慮六萬七千と註せられた。生を日東帝國に享け昭和聖代に會ひたる我等の幸福さを痛感せざるを得ない。若人の面には歡喜と感激の色漲る。定刻莊重なる「君が代」の奏樂この曠野に起ると共に風聲肅々として式場に着御あらせらる。大國旗掲揚の何と森嚴であつたことよ。全身靈自ら緊張するを覺ゆ。本山熊本縣知事玉座の前方に進み御親閱を仰ぎ奉る旨を奏上してこゝに勇壯活潑なる分列式の大繪巻物は繰展げられた。二千餘の大集團が各縣別各團休毎に「頭右」の敬禮をなしつゝ玉座の大前を過ぐ。あゝ何たる恐懼ぞ。陛下には一々擧手の御會釋を賜はるとは、仰ぎ奉る御英姿。萬世一系の皇統を繼がせ給へる大君を今日まのあたりに拜み奉りおかすべからざる御威徳と慈父

の如き御温容を伺ひ奉る。長けれども御休格の勝れて御立派なるに一入の悦びを感ず。大集團は次から／＼と整然たる秩序と規律で足並軽く大波の靜かに寄するが如く恰も大地の靜かに波打つが如く展開されて行つた。此間約一時間長し微動だにも遊ばさず終始直立不動の御姿勢を保ち給ふ。到底微賤の我等の學ぶべくもあらず。如何に平素の御日常が御規律正しく且又御嚴格なるかを恐察し奉る。萬感交々胸に迫り眼に白玉の靈を止めたるを如何ともする事出来なかつた。遙か三方より進み出たる女子青年の奉迎歌奉唱隊は牙え切つた秋の空氣を波打たせて心の底より迸り出づる聲は一段の階調となり言ひ知れぬ感激に肺肝を打たる「君が代」の奉唱の莊重なりし事よ。かくて國運の隆昌と聖壽の無窮を慶賀し奉る。萬歳を天地に響けよと三唱して榮ある今日の式を終る。「君が代」奏樂裡に金色輝やく天皇旗を先頭にしづ／＼と進行遊ばさるゝ玉車を奉送し奉る。感想文をものするに餘りに大なる感激にして拙き筆舌のよく表すところではないが、

一、一時間餘の長い間恐れ多くも不動の御姿勢にて微動だも遊ばされず加之我等に對して一々御會釋を賜はりたる事最も恐懼肝銘せる事である。

二、軍樂隊の演奏に合せて國歌合唱の森嚴にして崇高なりし事は其の二である。

三、御英姿を目のあたりに拜し奉りて眞に神々しさを感じ自ら心身の緊張を感じ、陛下の御前を通過の際は我れも又神の如き氣持す。即ち心中只無一物にして一點の俗念もなかつた。

四、中等學校の生徒武裝雄々しくになへる銃劍枯野のすゝきのそよ風になびくが如きを見て又國家の中堅たる在郷軍人が朝日の會旗も鮮かに歩武堂々御前を通過するを眺めたる時恐れ多くも陛下の大御心の程を恐察し奉りて只々感泣するのみであつた。

時も時なり滿蒙の風雲急を告げ我が國は今や重大なる時局に直面してゐる。雪の曠野に護國の爲め又我等同胞の爲め我が忠勇なる將士は鐵火を潜り、身骨に徹する酷寒に曝され東奔西走南戦北馬の健闘を續けてゐるのである。我等國民は益々努力協力、舉國一致この一大難局を突破し底力ある覺悟決心を固く／＼把持せねばならぬ。此の意味に於て我等は熱烈

なる忠誠と澁刺たる意氣を大御前に展開して謹みて御親閲を仰ぎ奉つたのである。かくして我等は彌が上にも榮ゆる燦然たる國運を限りなく進展せしめ以て國家を磐石の安きに置き又以て聖恩の篤く深きに對へ奉らんと堅く誓ふ。此の度の感激を永く保持し相共に時難に處する決心と覺悟をいやが上にも固くし剛健眞摯なる態度と實行とを如實に現はすことを期して止まないものである。

御親閲拜受の所感

築上郡友枝青年訓練所

峰

秀

雄

夢の間にも忘るゝ事の出来ない、皇恩、訓練所に通つては彌尊き奉安殿に額づき遙かに大君みます東の空に心を寄せ、明け暮れに敬ひ慕ひ奉る、今上陛下今秋の大演習に九州御西下と知るのみにても心勇み氣あがるに更に我等青年男女學生各團體に御親閲を賜はるとの御惠を拜し友枝村青年訓練所を代表して不肖その選に與つたといふ、其の幸運と光榮とに只管感涙の下るを覺ゆ、不肖一家老祖父母及父母の嬉然たる様も感激一杯のことに外ならぬ。一家をあげ唯々十一月十八日御親閲拜受の日の速かに來れかしと念じ持つ緘にも振る斧にも一層の生氣が感じられ夕餐の話題にも豫想談でもちきつた。精進潔齋して一日千秋の思ひで待ちに待つた。愈々祖母と母との心盡しの辨當の重みにも、至誠の溢れを知り「しつかり務めて拜んでおくれ」との言葉の端にも涙さへ見えた。心勇み輸送列車に送られて午前三時十五分中學生徒の團體に續き熊本驛頭の人となつた。緊張した氣分、歡びに満ちた熊本市街、電燈の色にも種々の裝飾にも大君奉迎の至誠の崇高さが偲ばれて心踊る、正々堂々長蛇の一隊、帶山練兵場に入場した、會旗團旗校旗訓練旗等絶好の秋晴れの廣場を埋め壯觀實に名狀することが出来ぬ。

やがて 天皇陛下御發聲の通報により幾萬とも知れぬ全員拜觀者一同水を打つた如く靜まりかへり、咳一つもない森嚴さ、その中を軍樂隊の奏する「君が代」の奏樂の裡に玉座着御御尊休を拜し奉つた一同、何かの靈感の通ぜる者の如く一層

緊張しその溢るゝ靈的の感應のよく大練兵場を包み我九州にみなぎり神州に全世界に波及するを覺えた、神々しき極みに我獨り拜せるの有難き感境、隣に人なく團體中の吾なるを忘れ唯々感慨無量、感涙爲めに下るのみ、筆舌よく此の心境を盡さざるを遺憾とす。分列拜受の後、「君が代」の千代八千代を壽ぐ全員の意氣天を衝く萬歳の誠心に東帝國九州健兒の慨、親しく天聽に達し奉つたことと拜す。

海行かば水つく屍山行かば草むす屍大君の邊にこそ死なめかへり見はせじの古歌今更思ひ出でなつかしく實感即ち体験を先人の唱へたるに感服す。

玉休を拜し天壤無窮の皇運の彌榮え彌久しきを奉じ愈々粉骨碎身以て、皇恩に對へ奉るの心を堅くし一層職業的進展に努力すべき明かき進路を得て尊き心境にひたつて始終した。以て所感として記す。

御親閲を仰ぎ奉りて

福岡縣福岡市警固女子青年團員

大

島

綾

身にあまる光榮にかぎりなき感謝の念をいだきつ、皆様と帶山へ着きました。あの神秘的な山阿蘇を東にかぎりなくひろがる肥後平野を西に持った帶山は御親閲に相應しい聖地である事よ、空はかぎりなく晴れわたり一片の雲さへもなく天地もこの日を祝ふ様になんとめぐまれた今日よ胸がおどります、午後零時すぎあの雄々な阿蘇の連峯を背景にして整列しました。

この時煙火一發大空に向つて發揚される／＼と大國旗が秋空に向つてかゝげられました、さしもあれ程の人数なのに水をうつた様に肅として音がありません一時十分 天皇陛下御着の號令が下りました。身体がおのづと引締つてこぼはつた様になりました。玉座にお着き遊ばされたのがかすかに見えますやがて軍樂隊の、「君が代」奏樂につれて全員最敬禮をしました軍樂隊が奏する陸軍行進曲につれて男子學生の分列式が行はれました五萬人と云ふ多勢なのに一糸みだれぬ行

進實に感歎の聲をあげずにはおられなかつたのでした。

一時四十分あゝいよゝ私達の番だ前へ進めの號令にて凹字形になつた私達一同は、玉座御近く進みました。最敬礼の號令が下ります。このまゝあげるにはあまりに勿体なさすぎる様な氣がします肅々として聲がない時朗らかな音楽がしますあゝ何とした光榮でせう。私達にまでも私にまでもこの光榮かと思ふ時喉がつまつて歌が出ません。あゝ此處にすめら尊の御姿をおろがみまつれりと歌ふにつれ涙があふれさうです聲がふるひます今日のあたりに御姿を拜してかたじけなさに涙がこぼれます、えゝさうです、誰か一寸私の身体にさはつたなら、あふれ出る感涙をどうする事も出来なかつたでせう。忠義を致します身命を賭して御奉公申上げますと叫びたい様な何ともいへぬ氣持にうたれました、今までにこんな清いこんな純なげがれない心になつた事があるでせうか、いゝえ一度もありません、あゝ私のけがれは、そしてみにくさはこの廣い大空の彼方に逃げ去つたんでせう。私の心私の氣持は何にたとへていゝかわかりません。あゝ出来る事ならいつまでも地にひれふしてこゝから去りたくありません。

よろづ代に語りつぎつゝことほがむ一つ心にほんとはさうです、やがて萬歳の聲は大空にこだましてひびきわたりますあまりな感激に思はず手があがりそうでした。この心この氣持は私の一生を通じて忘れる事の出来ない深いゝ思ひ出となるであります。おそれおほくも、天皇陛下には私達御親閲中一時間あまりも風強い高臺に直立不動の御姿にてたゝせられ御微動だに遊ばされなかつた事を思ひます時只々感激の外ありません。式が終りましたからもまだおられられる様な氣が致しましていつまでもゝ此處から去りたくありませんでした。

御親閲拜受所感

小倉市女子青年團足立支會員

依 田 正 子

私達が 聖上陛下の御親閲を拜受致しました十八日は、朝から片雲だにない。實に快晴に恵まれました日で御座いまし

た。これも偏へに、聖天子の御稜威の現はれと深く感激を致しました。

此の日、私達十三集團は、午前八時半に、帶山練兵場へと、宿舎碩豪小學校を出發致しました。見渡す限りの肥後平野晩秋の自然美は野に山に其の色を濃かにして、盛裝を凝らした街巷戸口、奉迎する民草の面は、光榮と歡喜とに輝き、天地を擧げて今日の佳き日を賀ぎ奉つて居る様で御座いました。前日は大變遠い様に思はれました練兵場も、今日は何だか近い様な氣持が致しました。練兵場に着きますと、外國武官の方々自動車で乗りつけて居られました。私達が整列を終へました時には、さしもに廣い練兵場も埋めつくされ、各種團體旗が林立して朝風に揺れて居るのも何ともいへぬ景で御座いました。其の水を打つた様な静けさの裡にも、中堅國民としてその責任の自覺に湧く、力強い嚴肅な雰囲気立罩め、茲數刻の後には我が 聖天子を迎へ奉つて、畏れ多くも其の御親閲を仰ぎ奉るのであるかと思ひますと、言ひしれぬ光榮と歡喜に、胸は唯ときめくばかりで御座いました。「氣を付け」の號令に、私達は思はず襟を正しました。同時に、一發の煙火を合圖に朝風に飄りつゝ日の丸の大國旗が掲揚され、満場は息詰る様な緊張に戦いて居ます。場の一隅から、戸山軍樂隊の奏する典雅そのものゝ様な「君が代」の調べが湧き起り、私達の心をこめての最敬礼の裡に、畏くも陛下には玉座に着御あらせられました。やがて(〇時十五分)各縣男子中等學校、高等專門學校生徒、在郷軍人等の分列式が行はれました。瑞光に映える帶山の原頭に、大元帥陛下の御前を、背囊「着け劍」の武裝も雄々しく、新興日本の氣魄を満面に漲らせつゝ、威風堂々と分列行進して行きます。朝日の光に白光をきらめかして劍林が行進します。劍鞘の擦れ合ふ音!ザクンと大地を踏みしめて行く靴の音!その勇壯凜然とした分列振りを目のあたりに見ましては、唯々何とも言へぬ力強い、頼母しい感じに打たれるばかりで御座いました。それと同時に亦、私達も男子の方に負けない様に、女性としての力強い何ものかを養はねばならないと言ふことを泌々と自覺させられました。此分列式の壯觀さを、外國の方々に見られた事が、却つて誇らしくさへ感ぜられました。又 陛下に於かせられましたは、各分列隊に對して、一々手々の禮を以て御答へ遊ばされていらつしやいました。私達は、其御姿を拜し、其大御心を偲びまつり餘りの有難さに、唯々

感激に咽ぶ外は御座いませんでした。其の次に、奉迎歌合唱、各縣女子中等學校、女子青年團等の私達女子部隊は、軍樂隊に先導されて長くも玉座の御前四十米の所まで参り進みまして、凹字形に整列を致しました。踵を上げて、玉座に在す陛下の御英姿御龍顔を拜し奉りました時には、感激と言つてよいか、歡喜と申してよいか、言ひ現はすことの出来ない勿体なさ、辱けなさにひとりで涙は頬を傳ひ、恐多さに頭は下がるばかりで御座いました。晴れの御前の合唱とて、奉迎歌の歌詞が、陛下によく御聽とれ遊ばす様にと念ぜぬ者とはなかつたので御座いましたが、いよ／＼現實に陛下の御前に立ちましては、「歌詞」のことも「調子」のことも念頭を去り、思はず知らず、ひとりで唇を衝いて流れ出るので御座いました。

長くも陛下に於かせられましては、約二時間（終りましたのが二時十分で御座いました。）もの長きに亘りまして、終始、直立不動の端然たる御姿勢の儘で、私達を御親閲遊ばされました。其の深く厚き、有難き大御心を拜察し奉りましては、感奮感激せずには居れませんでした。

今日の此の日の、此感激を、何時／＼迄も胸に藏め、出来ない乍らも努力をしまして、此大御心の萬分の一にでも副ひ奉らねばならないと、深く／＼決心を致しましたことで御座いました。

御親閲感想

大牟田市第六尋常小學校區處女會員 坂 口 隆 子

謹んで昭和六年十一月十八日帯山練兵場にて行はせられました御親閲の感想を申し述べやうと存じますが、初めて浴し得ましたあの御親閲の宏大無邊な森嚴さ有難さはとても私の拙い筆にて現はす事は出来ません。只々この無上の光榮と限りない感激とを感謝の中に書きつらねたいと存じます。

十八日正午、私達女子青年團員一同は此の終生の光榮に浴します感激に、肅然襟を正しまして畏れかしこみつゝ御親閲

の時刻をお待ち申してをりました。午後一時、啾唳たる氣をつけた喇叭が響き渡りますと軍樂隊の嚴かな「君が代」の奏樂の中に 天皇陛下には静々と玉体を御親閲場に運ばせられました。玉体近く天皇旗は燦として輝いてゐます。其の神々しさ、莊嚴さ、胸の高鳴りを覺えずにはゐられませんでした。やがて分列式は開始されました。六萬に餘る若人が軍樂隊の勇ましい行進曲に合わせて歩武堂々と分列行進します。其の勇ましさ、嘸かし 天皇陛下には御心強く御満足に思召された事でございますと拜察致しまして何とも云ひ知れぬよろこびを強く／＼感じました。次に軍樂隊の行進曲につれて、私共一萬五千の奉唱隊は 陛下の御後へと進み出で指揮官の號令にて、眞心を籠めた最敬禮を捧げました。「なほれ」の號令に、靜かに頭を上げました瞬間あまりにも目近に龍顔を拜し奉りましてひし／＼と迫り来る畏さに、自ら下つた頭を再び上げ得ない深い／＼感激を覺えていやまし出ます涙をどうする事も出来ませんでした。この感激の中に「あゝこゝにすめらみことの」と奉唱歌を歌ひました。けれども感極まつて聲が出来ます只涙のみ流れて心中全く無我の状態でございました。最後に熊本縣知事の發聲に合せてあの廣大な帯山の練兵場もゆるぐばかり心から 天皇陛下の萬歳を三唱しました時、全員の眼には又新なる感激の涙が光つてゐました。天皇陛下には大演習御統監の御多忙の御身であらせられたがら私共にかうして御親閲を賜うたのでございます。詢に畏れ多い事ではございますけれども、陛下には將來國家の中堅となるべき私共青年男女に對し、いかに御期待が厚くあらせられるかを窺ひ奉る事が出来ます。

この有難い大御心に對し餘りにも自分の足りなさを思ひました時誠に恐懼に耐へませんでした。そして今後益々日本女性としての修養に努め御厚恩の萬分の一にも報ひ奉らねばとの感を深く致しました。あゝこの光榮に浴し得ましたこの日永久に忘れる事の出来ない感激の日であり、記念の日でございます。

御親閲式に列して

八幡市中央區處女會員

内山 静枝

嗚呼思へば十一月十八日こそ私の忘るゝ事の出来ない熊本に於ける御親閲式の日であつた。この日天はあく迄も澄み渡り、霜月の太陽はうらゝかに奉迎を賀し地には菊香り實に恵まれた絶好の秋日和であつた。莊重なる「君が代」の調が響き渡ると、やがて高さ二間餘りの純白な玉座に、畏れ多くも 聖上陛下の御英姿を拜し奉る。この瞬間何とも言へぬ神々しさに胸がせまり今日此の榮譽を賜はつた事がこの上もなく有難くて唯々感激に満ちて涙がこぼるゝばかり。やがて軍樂隊の輕快なるマーチに合せて私達女子青年團の行進が始まり、後陛下の御前で君が代、奉迎歌の奉唱を致しましたが、この間も唯々凡てが有難くて感涙に咽ぶのみであつた。熊本縣知事の 陛下萬歳の聲に初めて我にかへり、眞心こめて天地も砕けよと許り力一杯の聲を張り上げて萬歳を三唱した。

私はこの千載一遇の光榮を永へに胸底深く刻み込み 陛下の御爲、御國の御爲、か弱き女子とは申せこの一身を捧ぐるの覺悟を一層深くしたのでした。

御親閲

若松女子青年團 大城 谷 文子

一日千秋の思ひで、お待ち申上げて居りました 聖上陛下の御親閲を拜受する十八日は、朝から片雲さへない快晴に恵まれて、私共の意氣は益々昂りました。式場の熊本市外帯山練兵場は、東は遠く阿蘇連峯の雄姿を仰ぎ、西は限りなく展る肥後平野に連り、俗塵を避けた御親閲を受けるにふさはしい、一清淨地でしたので、尙一層神々しく、あらたかな氣持になりました。

九州に於て、空前の盛儀である御親閲の光榮に浴する私共七萬人は、今かと時の來るのをお待ち申して居ります時、花火一發を合圖に、大國旗は秋空にするゝと掲揚されました。その瞬間、光榮と歡喜で胸は一杯になりました。中堅國民たる希望を漲らした力強い雰囲気は、場の周圍を十重二十重に取囲み、各種團休旗の林立、水を打つた様な靜肅さは、緊張の極みだと感じました。午後一時十分陛下は式場に御着遊ばされ、一隅より軍樂隊の奏する「君が代」は、幽玄そのものゝ様に感ぜられ、其後「君が代」を聞く度に、以前より一層莊嚴な感に浸る様になりました。いよゝゝ分列行進が始まり、勇壯な繪巻物が展開され、後姿を見送る私も、對外國家多端の折柄實に心強く思はせられました。續いて私共も軍樂隊に導かれて、玉座御前に進み、奉迎歌、君が代を奉唱しました。餘りの神々しさに聲もかすれて、只々感激に胸を打たれました。奉唱部隊に加はつてゐる事も忘却されて、畏れ多くも 陛下と自分のみの感じでございました。最後の「君が代」の奏樂につれて最敬禮を致しました時は、餘りのかしこさに、湧き出る涙を止める事も出来ませんでした。それこそ「感激に滿つる」とでも申しませうか、とても此の時の氣持はつたない言葉や、筆で表はす事は出来ません。終りに萬歳を三唱して聖壽無窮を壽ぎ奉りました。

此の無上の光榮に浴し得た事は、如何なる好運の廻り合せかと、只々感謝してゐます。此の様な光榮は、一生ひいては子孫の光榮と深く感謝し、如何にしてか天恩の萬分の一でも、こたへ奉りたいものだといひしゝと感じさせられました。

御親閲の榮を賜はりて

戸畑市處女會

西 まき

十一月十八日、今晚夢現の内に雨の音を聞きぬ。不安に高まる胸の鼓動を靜めつゝ、窓を開けば冷やかなる朝風兩頬を拭ふ。空には靡げなる星の光が、殘光を残して今日の良き日を祝福するかの如く……。かくて輝かしい御親閲の朝は我等の頭上に訪れり。午前九時、長崎縣の女子部と共に碩臺小學校校庭に集合。指揮者の命にしたがひ縦隊にて帯山練兵場へ

と向ふ。練兵場内には最早各學校生、在郷軍人、青訓生、所せましと陣取りたり。我等奉唱部隊(第一奉唱隊)は場の北隅に着す。

正午前には場内に全部集合し、午後零時三十分場の西北端中央部に設けられた御座所前面に一齊に整列を終る。拭うた様に晴れ渡りたる秋空高く、幾百十の校旗、團旗が眼も綾に風にはためく。

かくする内に合圖の砲聲鳴り響けば、式場正面の大マストに高々と掲げられたる日章旗!! 大空高く聳へて翻翻とひるがへる。緊張裡の内に啞唳たる喇叭の音律が場内一面に流れ渡る。燦として輝く天皇旗の元、軍樂隊の奏でる行進曲と共に勇壯極まりなき大分列式が開始された。昇日に照り返る銃剣! 戦場に臨む闘士の様に緊張し切つた顔! 顔! 又顔!!! 皆喜悅満面に漲りて若人の血をいやが上に湧き立たす。無事三十八隊の分列式も終れば待ちかまへたる我等奉唱隊、赤線鮮かな服装の戸山學校軍樂隊の指揮につれて啞唳たる樂の音に導かれながら、北方、東方、南方の三方より集團となりて玉座の御前にと進む。總指揮官の命の下に、遙かに御姿を拜しつゝ最敬禮。千載一遇の光榮に浴し有難さ身にしみ「嗚呼こゝに天皇の鳳輦を迎へまつれり」の御親閱奉迎歌も聲に得成らず、たゞ只管に感泣す。奉唱終りて最後に數萬の若人共、一齊に「君が代」合唱。本山熊本縣知事の前唱につれ、「萬歳三唱」を唱ふ。知事行事終了の旨奉後、全員最敬禮裡に「君が代」吹奏にて御奉送申し上ぐ。

畏れ多くも 陛下には還御の奏樂終らせらるゝまで御直立のまゝ御過ごさせ給ひ奏樂の終ると共に、舉手の御答禮を賜はりて御靜かに御鳳輦へと歩をうつさせ給ふ。再び「君が代」吹奏。全員目禮の裡に御龍駕を廻させ給ひて練兵場を御退出遊ばさる。かくしてこゝに榮ある御親閱も恙なく終了せり。練兵場より歸る際、藤崎宮に御成らせ給ひ、再び御龍顔を拜みまつりて、とめどなき感涙にむせび泣く。重ね々々の御光榮にあづかりたる我身の幸を喜ぶ。拙き筆にて御親閱所感の一端を述ぶ。

御親閱拜受の感想

遠賀郡遠賀村處女會 上野 なみ

紅葉深き十一月十八日あゝ!! 此の日こそ一生忘れる事の出来ない感激の日で御さいました。片山里の數ならぬ私が御親閱を拜受する事の出来ましたのはひとへに皆様の御恩と深く感謝いたしました。嬉しさ有難さに胸は一杯でございました。早朝身を淨め大空を仰げば一抹の雲も止めないうららかな小春日和、天も此の榮ある日を御恵み下さいましたのでせう。宿舎全体に漲る緊張の中に朝食をすませました。喜びに燦然として輝く阿蘇の連山を打仰ぎながら練兵場へ向ひました。やがて天皇陛下には帶山御着裝「君が代」の奏樂裡に玉座に立たせ給ひました。幾萬の拜受者は聲を呑み莊嚴そのまゝでありました。各種團休に對し一々御舉手遊ばされる一天萬乗の大君様の御英姿を拜した時あゝ! その刹那感激に胸は迫り畏こさに涙は止めどもなく頬を傳ひました。奉迎歌を奉唱する私達は涙で聲も出ませんでした。國家蒼生のため日夜御軫念遊ばされる 陛下に對し今日のこの感激を深く身にしみ御宏恩を夢にだに忘れてはならないと心に誓ひました。最後に力強い萬歳の叫びにゆるぎない國の榮えを永久に祈りました。萬感胸にせまり拙い筆には何とも申されません。唯々有難さが身にしみました。

御皇恩に浴して

嘉穂郡庄内村處女會員 安藤 あさ子

十一月十八日、私達一同には最も幸福であつた日でさうして喜ばねばならない日、又記念すべき日であると思ひます。私達一同は十一月十六日夜行列車にて 今上陛下のまします熊本へと向ひました。今私達は恐れ多くも 陛下の御座所へ足を運んでゐるのだと思ふと何だか心がさほして落着かれませんでした。原田を過ぎ遂に熊本へ翌日午前三時六分に

着きました。私達總員は一人も故障なく宿舎の碩臺小學校に着きました。此所にて諸注意を受けました後奉迎歌の練習が行はれました。さうして其の日は先生の御指導を受けまして色々な名勝の見學を致しました。特に熊本城を眺めました時昔の西南戦争が思ひ浮べられました。翌日意氣天をつく様な元氣まで恐れ多くも陛下御臨場の帶山式場に着きました。拜觀者まさに數萬を越へあたりの空氣は人々の爲薄暗くなる許りでありました。

突然一發煙火は熊本の野邊に高く鳴りひびきましたと同時に私達一同の處女團は直立の姿勢にて今上陛下を御迎へ致しました。此の時すでに涙が胸からこみ上げる許りでありました。數分の後觀兵式が行はせられました。其の間恐れ多くも陛下には立派な御英姿を以て我等を御親閲あらせられました。やがて私達の氣を吐く奉迎歌となりました。あらん限りの力を盡して奉唱致さうと思つて居ました奉迎歌が遂に來ました。私は一心になつて歌ひ出しましたが一節二節まで行き此れからは少しも聲が出ず唯涙が顔をつたふ許りでめりました。さうして恐れ多くも陛下の御顔は涙の中に薄く拜する許りでありました。さうして奉迎歌も無事終りました。後私はつくづく「この涙、顔をつたつて落ちる涙こそほんとうの日本人です。ほんとうに大和魂を有する眞人間です。この涙こそ常にわすれてはならない涙であります。この涙をもつて將來忠實なる處女として務めて行きたい」と思ひました時再び涙が顔をつたつて落ちて來るのををばへました。後萬歳三唱がありました。この萬歳も又人の心をえぐる様で又天をも破る意氣でした。かくして終に貴き、めでたき此の一日も無事に終り私達一同は恐れ多くも現つ神のまします御座所を遠く拜しまして、懐かしき熊本を後にし無事揃つて歸省致しました。

興つて行く日本の國体を今思ひますとつくづく涙の出るのををばえ、押へる事が出来ません。

この感激を永久の力に

浮羽郡千年村處女會 江藤 イツ子

昭和六年十一月十八日は私の身にとりて生涯忘れ得ざる記念日でありますと共に心の緊張を促す誠に尊い日でございます。秋空高く晴れ渡りて帶山練兵場に集る群集も總ては光り輝いてゐました九州各縣在郷青訓學生男女青年團併せて六萬有餘の若人長き御親閲に参列させていただきましたことは誠に無上の光榮であります。ほんとうに幸福すぎる自分を感謝いたしましたので御座います。さしに廣き練兵場に翻る帝國在郷軍人分會旗。銃劍をもつ學生の分列式あの勇ましさに大和魂そのもの、發露でした。何と力強い日本の將來でせうか前途が希望と光明に輝いてゐました分列式が終つて私共奉唱隊は軍樂隊の行進曲に合わせて秩序正しく整列し「君が代」や奉迎歌を合唱いたしました萬歳三唱のときの氣持尊き極よ天地を揺がすばかりの大聲で三唱いたしました。

此の光輝ある國此の御聖徳の洪大無邊なる聖代にその生を享けた我々國民の幸福、あゝ感慨無量萬感胸にせまつて我れ知らず感涙に咽びました偉大なる今日の感激と印象とを永久の活力として修養怠らず自奮自闘第二の國民として大に向上發展につとめて國運隆盛の一端に資したいと誓ひましたこの胸の奥底から湧き出づる感涙と歡喜は到底私の如き淺學薄識の者では筆紙に盡し得ないのでありますこれこそ實に永い歴史を有する尊い我が日本精神だと思ひます。

御親閲拜受の所感

三浦郡川口村女子青年團 植松 チエノ

晩秋の色濃く菊花愈々香る昭和六年拾一月拾八日、此の日こそ私達少女の終生忘れる事の出來ない日であります。遠き西南の偏地にあつて、まして愚かな身の一小民にまでも陛下の御恵みを垂れさせ給ひて恐れ多くも御親閲拜受の出來た

ことは、實に千載一遇の光榮に浴したわけでありませう。

御親閲當日の昨夜私達一行は午前零時幾分かのとぎすました蒼空の下を感激にむせぶ胸、喜悅に戦く休をのせて十七日の臨時夜行はまつしぐらに熊本をさして進んで行つた。緊張しきつた氣分で息づく内列車は愈々御親閲主地に差入つた。夜はまだ猛き午前三時、青白く牙を渡つた肥後平野の冷氣をふるはせて「上熊本々々」と呼び歩く驛員の聲、廣き驛内にこだまして之にやきつく、驛夫の聲にすいつけられて乗客は皆ぞろ／＼と吐き出される。私も其の中に入つて歩いた。夜の冷氣は車内で上氣した頬をひんやりなせる。拍子にあはじめて 陛下の御恵み益々高き熊本の土地をふまへたのかとほつとした。過ぎよ時刻早く、早く、もどかしき幾時は過ぎて、御親閲の日は來た。碩臺の合宿所で身を潔めた一行は果て知らぬ曠野渡鹿の練兵場を過ぎり、はじめて帶山の練兵場につく、私達は汗ばんでゐた。そして、陛下の御出でましを心して待つ。一齊に吹きなされる喇叭にブル／＼／＼と打震ひ、血行とゞまりて唯胸の心臓のみ彌ましに打ち震ふ。

あゝ今一ほんとうに今こそ 陛下の御姿を拜ませて頂いた。有難さ尊さ見に湧きて、眼がしら熱し得いははぬ氣持此の間私達は世界で何物にも替へ難き極大の幸福感にむせびました。此の心此の氣持唯有難い尊の二字のみで云ひ盡せぬ不甲斐なさを深く恥ぢ入るばかりです。奉迎歌の初句、のどもとにつまり、感激の涙頬を傳ふ。あゝ生きた甲斐があつた。ほんとうに今日のほまれは生きてこそ味はれる幸福であり喜びである。今こゝに 陛下の御尊大なる御姿を拜し奉つて雲一片なき青空も廣漠たる帶山の練兵場も輝く、輝く、喜びに満ちて。

御親閲を賜はる私達も天地の光に浴して、一層確實なる日本國民としての、希望を燃やし帝國の少女として 陛下の爲にと強く／＼ちかひました。

御親閲は終つた 陛下の鳳輦は靜かにすべつて行在所さしてお進みになる。見送る私達皆感慨無量。帶山の風は冷たくさわやかに私達の顔をなで／＼くれた。

御親閲を拜して

八女郡中廣川村女子青年團員 山崎 たつよ

榮光にかゞやく旅の二日目の朝は一片雲も止めない御幸日和でした。すばやく朝食をすまして十時近く一同整列して帶山練兵場へと急いだ。何處も彼處も道路といふ道路は帶山へと急ぐ人の行列ばかりでした。今度の光榮を辱うする熊本市民の喜悅が嚴肅な空氣の裡にもよくうかがはれるのでした。十一時過ぎ光榮の地に着いた。滿洲の高原を思はせる練兵場には今日の限りなき御恵に浴する幾萬の拜閱者傍觀者でぎつしりでした。

晝食後暫時休憩して午後一時御出門の煙火があげられるや一同整列一せいに緊張した。こうして同胞の願ふ所は一刻も早く至尊の颯爽たる英姿を拜し奉り事の無事に終るのを祈りました。やがて戸山軍樂隊の奉奏と共に 陛下の御出御、玉座にお立ち遊ばされ拜閱の式は始められた。幾百本とも知れない軍旗校旗の美しさ、行進する足音の勇ましさ、あゝその壯觀、私達の胸はぐつとこみあぐる有難涙に塞がり思はず目がしらが熱くなるのでした。次に奉唱隊、即ち私達の拜閱式でした。軍樂隊の奉奏の音と共に一定の場所まで行進した時、至尊の英姿は目前に拜されるのでした。噫！なんとといふ神々しさ、おごそかさ、たうとさ、ありがたさでせう。

誰かの和歌に「何事の在しますかは知らねども辱しけなさに涙こぼるる」とある様に、こよなき御恵に唯感激に満ちた涙が頬をつたはるのでした。殊に 陛下におかせられましたは時世の危機に際しいたく御心痛遊ばされ御心のやすみまず暇さへあらせられぬ折、かうして卑しい民草の爲めにお慈み下さる聖徳の高きに今更感激させられるのでした。限りなき陛下の御恵に浴し榮ある歴史を有する神國に生れた私達は日々に進歩する時世におくれない様勤儉貯蓄して、女子としての本分を忘れず精進せねばならない事を深く／＼感じさせられました。

天高き晩秋の野に感激に満ちた數萬の民草の天をも破ぶるばかりの萬歳と共に無事に拜閱式は終りました。記念すべき

帶山練兵場での榮光よ、十一月十八日よ、永久に六萬の同胞の胸に深く印象づけられた事だらう。

感激の日

山門郡沖端村處女會 吉 川 秀

嗚呼!!十一月十八日 光輝満ち溢るゝ日森の都熊本の帶山練兵場は秋光輝き渡りて、東方に聳ゆる大阿蘇の連峯も、西方金峰の山々も歡喜に輝いてゐる。原頭高く翻る大國旗は今日の欣喜を象徴するかの様——

午後一時三十分!碧空に響渡る煙火一發 天皇陛下の御着坐、未だ御姿を拜せざるも身は迫り胸は愈高鳴り始む。軍樂隊の壯重輕快なマーチが吹奏せられ、こゝに嚴肅な御親閱始まる。六萬の若き赤子肅々として、整然たる歩調の音のみ:斯くして勇壯極まりなき分列式終る。ついで私ども奉唱隊前進。

嗚呼!!何たる神々しき御姿!陽光を浴びて銀色に光る純白な玉座に嚴然と御直立遊ばされる 陛下。日夜畏み奉る 天皇陛下の颯爽たる御英姿を今咫尺の間に拜して、忝けなさ有難さに身は戦き涙溢れ出で懸命に唱ふ奉迎歌も喉につかへてとぎれがちとなる。……終りに本山縣知事の精一杯の 天皇陛下萬歳の聲に和して七萬の民の眞心こめた萬歳の轟きは 大平原を揺がし天地を壓するばかり。こゝに涙ぐましくも美しく力強き大和魂の眞の姿を見る。

憂國の人よ!!この憂國の若人の力強き絶叫を聞かずや、一天萬乗の大君を載く我等國民の矜誇と歡喜のひし／＼と迫り來るこの叫を——聖き國日本、永劫に太陽と共に輝け!斯くして崇嚴な御親閱式終る。御親閱遊ばされる事約一時間 陛下には御直立不動の御姿勢で御みそなはし遊ばされ、又一々御會釋を賜ふ。餘りの忝さ物體なさに胸迫り御盛徳の程拜察するだに畏れ多い極みである。

懐しき國歌奏樂裏に還御遊ばさる。永遠に絶ゆることなき「君が代」の音は遠く原頭に餘韻を引いて胸にしみ入る。

光榮の日の、この感激よ、清淨なこの身と、心と、終生深く心に刻して、あらん限りの力を盡し、我が日本の本のかため

の爲微力ながらも貢献し、 聖上の御高恩の萬分の一にも御答へ申さんことを誓ふ。

御親閱拜受の光榮に浴して

築上郡友枝村處女會 高 野 正 代

熊本平野に於ける大演習、十八日には特に私共各種團体に御親閱を賜はるとの有難きおぼし召し、我友枝村の處女會を代表して此の光榮に浴する通知に接した時は、ほんとに飛び立つ思ひがした。短い日も長くその日の來るのを待ちに待った。愈々出發の日は來た。同郡三名の代表者は京都郡の團体に加はり熊本へ向つた。熊本では通る道筋、人々の足どりに何となく緊張味が見え至誠奉迎の跡歴然たるに一種言ふべからざる感にうたれた。

十八日黎明の帷は熊本碩臺校にも開かれ風も穏かに惠まれ的好天氣、一同起床の面には前日來の疲勞もなく苦痛も忘れ只々歡喜に満たされてゐる。朝の行事を終へ帶山練兵場に急ぐ。雲の湧く様に何處からともなく此の御親閱場に集ふ方々各種團体を見る時先づ何といつても皇國の尊さを感じずにはゐられぬ。所定の場所に整列して一糸亂れざる場内にも幾百十の旗旒がその威風に示すが如く、心より誠より待つ集團の緊張味もうかがはれる。

やがて秋晴の天空に一聲高き煙火に 陛下の入御を拜し「君が代」の奏樂裡に玉座につかせられた。燦として輝き渡る天皇旗。至上至尊の御玉体を拜し奉つた時、一時に暈のうるむを禁じ得なかつた。男子部の勇壯なる大分列式、時餘に亘る時 陛下には一々團体に御舉手の禮を賜はつた。續いて女子青年團女子中等學校生徒の奉唱隊は御前に進み「あゝこゝに天皇の鳳鸞を迎へまつれり」と奉唱する時、眞に一人の聲のその如く億兆一体とは外ならぬことと思ふた。奉唱する私共は無我の境と申しますものを始めて知つたと申上げたいので何を奉唱してゐるか、よいかそれさへ分りませす只々誠心のまゝでした。嬉涙をうかべ歌ふものが少なくありません。次に全員にて「君が代」を合唱しましたが、これ又尊嚴の氣にうたれて、此の至誠の聲は天聽に達し澄み切つた空に大阿蘇の連峯にも響き渡つた事と思はれます。陛下には畏く

も長の時間親しく御親閲を賜はり午後二時十分全員最敬禮裡に、龍顔いとも麗はしく御還御遊ばされました。私は團員の一人として此の光榮に浴し、親しく御英姿を拜し奉り感謝と感激で一杯で此の心此の境地はとても筆舌に盡せませんが永久に胸に持して、修養に努め自己のため國家のために出来る丈の力を盡し、御聖旨の萬分の一にも報いたいと心に誓ひました。

御親閲に感激して

築上郡合河村女子青年團員 柏木チトセ

本秋熊本縣下に於ける陸軍特別大演習に際し 聖上陛下御親閲の光榮に浴して早や二旬、何とも云ひ難い感謝と感激に胸一ぱいの私は、今一人靜かに大君の尊い御雄姿をはつきりと心の中に拜しながら、莊嚴極みなき彼の式場を偲ぼうとしてゐる。

しめやかに降り注ぐ前日來の雨は不思議にも麗はしく晴れ渡りて、御親閲日和に帶山練兵場を中心に凡ては喜悅と歡喜にみち／＼てゐる。奉迎しあぐべく我等青年代表團員は、列を正し次ぎ次ぎに晴れの式場に向ひ、定められた位置に着く「氣をつけ——」の號令とひびき渡る喇叭の吹奏裡に 大元帥陛下には玉車に召されて着御あらせ給ふ。やをら陛下は設けられたる高き玉座に上らせ給ひて、六萬三千の全九州の若人を御親閲あらせ給ふ。

嗚呼、この有難き御思召を何と感謝しよう、誠に有難き極みである。御姿を打ち拜みつゝ胸にせまり來る感激におのづから頭を垂る。

先づ男子青年團員の分列式も約一時間程にして終了、遙かに機の到るを待ちわびし我等女子青年團員は、指揮の下に御前に進む。熱涙頬を傳ふるを覺え、全身自らこり固まるを覺ゆ。あるたけの真心とあるたけの音量を捧げて、「奉迎歌」を和しうたふ。大地ためにふるひ、晚秋の碧空ゆるぐかと覺ゆ。熊本縣知事の音頭に和し、天皇陛下の萬歳を三唱す。湧

きかへる萬歳の聲は、全九州若人の一致であつた。至誠至純の血潮の叫びが、靜まりかへる式場の緊張を破つたその瞬間に於ける至尊の御滿悦は如何ばかりであつたでせう。「君が代」の奏樂裡に默禱を捧げ、光輝ある歴史を崇め國運のいや榮えまさん事を念じた。そして深く／＼我と我が心を見入つた。

生ける甲斐ありて今日のほまれをことほきつつ責任の重大なるを感じ、日日の修養を務め、向上の一路にいそしまねばならぬ氣が湧然として起つた。

すべての行事を終へさせ、やがて御還幸遊ばされたのであるが肅然たる式は、あらゆる意義を私共若人に残して目出度終りぬ。

今までのあたり大君の御寫眞を拜し、何物にもかへ難き榮譽の限りを偲び奉り忠實な真心を捧げて天恩の萬分の一に報ひたいとひたすら心に念じつゝこの稿を認む。私は今感激に胸一ぱいである。

御親閲を拜受して

行橋町處女會 吉村のぶ

光榮に輝く昭和六年十一月十八日は六萬五千餘の御親閲者の限りなき歡喜と感激の裡にいとも朗かに明けた。この日朝來より肥筑の空は小春日和の陽光麗らかに晚秋の山野は錦繡を織りなし遙に望めば靈峯阿蘇は繪の如く今日を晴れと飾られた熊本市は一入榮光に輝いた。千載一遇の御親閲を拜受する者、今日の行幸を拜み奉らんとする、老若男女の群で、さしにも廣い帶山練兵場もうづめられた。

午後一時行在所御出門の號砲は全市にひびいた。御到着が愈々切迫すると刻一刻秒又秒場内は水ももらさぬ緊張の極、天皇陛下には御機嫌麗はしく七萬の民草の迎へ奉る場内に御着き遊ばされた。續いて起る「君が代」の奏樂、全員最敬禮の中に西端に設けられた玉座に長くも御直立遊ばされると、御親閲は開始された。堂々と一糸を亂さぬ分列式の壯觀莊嚴

は筆舌では言ひ盡くせなかつた。私共奏唱隊は軍樂隊の勇壯な調に合せて指定の場所に着いた。陛下の御英姿を拜し奉るに唯々感激の涙が胸にせまるのを覺えた。心を籠めて一萬幾千の若人は奉迎歌を天聞に達せんものと奉唱した。「ああ此處にすめらみことの御姿を」と奉迎歌の進行につれ、かしこさが、ひし／＼身にしみて聲も思ふ存分出なかつた。「あゝ」と我に返つた。總員の「君が代」が愈々莊嚴の極致へ進んだ。陛下の御前で奉唱した「君が代」こそ一入意味深きを感じさせられた。ひたすら聖壽の無窮を祈りつつ熊本縣知事の發聲で七萬餘の民草は叫ばんばかりの萬歳三唱これこそ私共の心の奥の奥から迸り出た赤誠の叫びであつた。私は最後の最敬禮を申上げた瞬間今一度御尊姿を拜したきものと、頭を擧げ玉座を拜せば陛下には御擧手の御答禮を全員に下さつた。何んと有難い大御心でせう。この壯觀森嚴は永久に忘れられぬ事だ八千萬の同胞よ祖國を愛しませう。今や思想の波は吹きまくつてゐる。内外多端の秋各地の行幸仰せ出されし大御心の程を拜し奉つて、益々健實な國民性の涵養に努めて御聖志の萬分の一に、そひ奉る信念と自覺を深く／＼した。嗚呼今日よき日を永久に

御親閱を拜受して溢るゝ喜び

三輪村處女會員 糟谷壽子

あゝ此處にすめらみことの……奉迎歌を奉唱しながら玉座を拜した時餘りの有難さに胸の塞がる想ひがして高らかに聲張り上げてと思ひつゝ容易に歌へなかつた。感激、歡喜、感謝私の小さな體は餘りの喜びに打ふるへて自然と湧き出る涙に玉座の上の陛下の御姿も遙けき彼方に連る山々も涙の中に朦朧として見えた。廣い／＼帯山練兵場を埋め盡くす程に集ひ來つた私達若人の胸は等しく溢れる感激の涙にうるほされてゐることを嚴かなまでに張り切つた空氣にしみ／＼と感じさせられた。幾萬と數へる人の一人々々の胸に雷光のやうな早さで或る心靈のひびきが傳はり、相寄り合つた幾萬の魂は其のまゝ陛下の御胸に飛び込んで行つたであらうことを私は信ずる。涙ぐましいまでの嚴肅な空氣に打たれて暫し足

下の雜草のそよぎに目を落とし頭を上げることが出来なかつた。

あゝ私も天皇陛下の赤子の一人なのだ數限りない陛下の御恵みに對して爲さねばならないことは山程あるのだ、と今更のやうに痛切に感じさせられる。再び三度仰ぎ見る玉座の上に陛下は始終直立の御姿勢で御立ち遊ばし午後一時過ぎの太陽は此の日の喜びを祝福するかのやうに陛下の御英姿の上にも其の御英姿を拜せんとする民草の上にも平等に軟かな光線を投げかけてくれ、心地よく吹き渡る晩秋の風は玉座の天皇旗を燦として吹き靡かせ燃え立つ歡喜の叫び萬歳三唱の聲を熊本市の上否それよりも遠く／＼全國津々浦々まで吹き送つて呉れたことだらう。あゝ我等生ける甲斐あり……歸りの道すがら足音軽く奉迎歌を口吟みながらしみ／＼とかう思つた。今日の此の幸福も日本國民なればこそ。と

大
分
縣

目次

専門學校……………	(七九)
師範學校……………	(一〇)
中 學 校……………	(一三)
高等女學校……………	(三一)
實業學校……………	(五二)
青訓及青年團……………	(五四)
女子青年團……………	(七四)

御親閲を拜受して

大分高等商業學校 田 中 忠 光

昭和六年十一月十八日午後一時、人に埋る帯山練兵場には朗かな緊張と歡喜が漲る。幾百條となく續く旗の流れ、秋空に光芒を放つ銃剣の林、莊嚴の氣に打たれて洩れる深い吐息、國民的感激は今や最高潮に達せんとする。此日武裝の下に大元帥陛下の御親閲を拜受する我等の欣喜と勇躍は禁ぜんとして禁ず能はざるものがある。遂に碧空に浮き立つ純白の高臺に端然と立たせ給ふ御英姿に咫尺し奉る時は來た。御若さ其物の中に無限の威嚴と神聖を藏し給へる。陛下には、畏しや我等に擧手の禮を賜はる。緊張と感激の極、歩の進むを知らざるうちに、我等ははや御前を遠く過ぎ去つて居た。

己に歸つた私は先づ身の光榮と幸福とを泌々と覺えた。聖代の餘澤とは云へ餘りにも大なる光榮ではないか。我等はただ陛下の御氣稟に跪伏致し度き心地である。秋陽の中を着劍擔銃して一步一步踏み出す自分を見出すとき私は思はず武者振ひした。聖慮と赤誠の精神的脈絡、嗚呼錦旗の赴く所何處迄も、大君の邊にこそ死なぬ我等は決して顧みはしない。踏付ける大地が寧ろ滿洲の野でさへありたい。

やがて國民感激の堰は一時に切られた。萬歳！萬歳！萬歳！火の國の天地はどよめきにどよめく。友の眼に、我が眼に露が輝く。若き學徒は遂に感泣したのである。

みたまわれ生けるしるしあり天地のさかゆるときにあへらくおもへば

此の歌はかねてより愛誦して居た。然し今汗ばんだ身体に秋風が渡るとき、私は「御民」と云ふ氣分を一入深く味はつた。單なる生活の喜びを超越して陛下てふ偉大なる柱を意識し、是に歸依していのちする喜びに到達したからである。終りに臨み此の光榮に浴せし我等は叫ぶ。陛下に接し奉りて現つ神なる感は愈々深い。御神格と御人格の渾然たる融和を、皆の矛盾もなく感得したる我々は、國民道德より宗教生活への發展の契機をも亦、極めて自然的に體得するもので

ある。三千年來流れ傳はつたやまと血潮は高鳴る。此の血潮で建國した日本帝國の理想の實現は、懸つて我等の双肩にあるのだ。我等の陛下は春秋に富ませ給ふ。我等も若い。思想に、内治に、外交に、國事多端たりとも青年日本は正にこれからである。

御親閱を拜受して

大分縣師範學校本科第一部第五學年 手 島 充 實

宿營地各所に響き渡る勇ましい起床喇叭に露營の夢は破られた。幕舎を出て、集團本部の前に整列する。冷たい空氣が眠い眼を覺ます。待ちに待つた日も愈々來たのだ。未だ明けやらぬ東の空には、竿頭高く國旗が掲揚せられた。一同最敬礼をする。夜の明けはなれると共に愈々氣分のすが／＼しくなるのを感じた。午前七時半宿營地を出發して熊本中學へと向ふ。此處は我等大分縣の集團。即ち第六集團の集合地である。十時過ぎ全部整列して帯山練兵場へ向つて出發する。練兵場の周圍にはもう拜觀者が黒山の如く集つてゐる。胸に着けた黄の布に16なる符號を入れた徽章を見せて、狭い入口を通り御親閱場に入る。廣い練兵場の中央に純白の御親閱臺がしつらへてある。あの臺に御立ち遊ばされて御親閱を賜はるのだと思へば既に感激の涙を覺える。靜かに第六集團と指定された位置に就き、又銃して休憩する。零時半頃整列着剣して、陛下の臨御を待ち奉る。

一時頃から鹵簿奉迎の喇叭と覺しき微かな調が次第に近づいて來る。一時十分過ぎ「氣を付け」の喇叭が響き渡り、數萬の御親閱拜受者一齊に襟を正し滿場肅として聲も出ない。續いて起る「君が代」奏樂裡に御召自動車に御着きになる。金色燦然たる天皇旗を先頭に、聖上陛下には長くも玉歩を御親閱臺に運ばせられ、臺上に御立ち遊ばされる。一天萬乘の大君を御迎へ申上げたる十幾萬の臣民の感激は最高潮に達する。至誠こめた最敬礼「捧げ銃」が終ると、間もなく輕快なる軍樂の吹奏と共に御親閱が開始せられる。我等第六集團も「右向け右」をして行進を起す。左へ二度の方向變換によつ

て愈々分列線上に來る。軍樂が近く聞え出した。緊張した精神が愈々緊張してくる。歩調も自然と強くなる。「頭右」翻と翻る錦旗を傍に、白く輝ける九尺の玉座に、嚴然と御立ち遊ばされた。聖上陛下の神々しい颯爽たる御英姿を拜し奉り、侵すべからざる御威容を拜した時は、唯、神としか思はれなかつた。實に現人神であらせられ、現御神であらせられる。胸中から溢れ出る感激の涙は禁ずることは出来なかつた。唯榮ある御代に生れ合せた吾等の幸福がつく／＼と感ぜられた。總ての分列式が終つてから女學生の奉迎歌奉唱である。晴れやかなマーチに幾千の女學生が三方から進み出て、陛下の御前方に凹字形に並ぶ。緩かなしかも力強い調は地に溢れ空に滿ちて、九州幾百萬の赤子の聲として至尊の御耳に達し奉つたことであらう。續いて「君が代」の齊唱がある。數萬の若き赤子の大合唱である。幸多き君が代の秋に、限り無き御聖徳を謳歌する大合唱である。最後に熊本縣知事の發聲で「萬歳」を三唱する。私はあらん限りの聲を出して叫んだ。金峯の山に、阿蘇の連山に木靈せよとばかりに。腹の底から躍り出る「萬歳」の聲は歡喜そのものであつた。最後の最敬礼があり、續いて起る「君が代」の奏樂裡に陛下には大本營に御歸還遊ばされ、御親閱拜受の式は閉ぢられた。一同はこの美はしい感情を亂すまいと、黙々として退場宿營地へと歸る。

今つく／＼と當時の光榮を胸に懐ひ起して見ると、感激の涙に咽ぶのみで、唯「有難い」と申す外はない。私達師範學生は將來國民教育の重任に膺る譯であるが、此の日此の時の感激を永久に胸に秘め、第二の國民たる兒童達に此の光榮を頒ち、忠良な臣民として皇國の爲努力する人物を作り上げたいと念願してゐる。

御親閱を拜受して

大分縣女子師範學校本科第一部第五學年 安 東 ハ マ

度み立てる阿蘇のむらやまは錦の裳裾を引き、うすぎぬの風に悦びを讃ふる芝草のゆるぎ、限りなき淨らかさを見せる秋の青空、遙か彼方には紫の雲が棚引いて居る。歡喜と光榮とに張りつめた弦のやうな私達の胸は、唯々感激の鼓動が高

鳴つてゐるのであつた。

やがて天つ御空に嘯唳と鳴り渡る喇叭の音につれてマスト高く日章旗は掲げられ、白日の陽光にかゞよふ銀色の御座所は長くも九尺の高さに拜せられた。

あゝ今し英姿颯爽として崇高なる至尊の御影を拜する畏さよ。

あゝこゝにすめらみことの 鳳釐を迎へまつれり

み光に阿蘇の高嶺も 有明の海もかゞよふ

あゝ今しすめらみことの み姿を拜みまつる

み恵のいかなる幸か かしこさに涙こぼるる

あゝわれら生けるかひあり おほけなき今日のほまれを

萬代に語りつぎつつ ことほがんとつ心に

力の限り熱誠籠めて歌ひ申上げた奉頌歌に熱涙はとめども盡きず落ちた。最上の歡喜と光榮とに浴して、心をそのまゝに歌つたので感泣せずには居られなかつた。

この日御親閱を賜はつた六萬二千の若人の幸福、それは決して個人々々の悦びではない。帶山練兵場も阿蘇の山も裂けよとばかり叫んだ萬歳の聲が天にこだませる音が一つなるが如く、満ち溢れた民草の一つの偉大なる生命の感激である。

この感激！私は之を言ひ盡すべき何ものをも持たない。それは唯われらの至尊と、限りなき鴻恩に恵まれたる赤子の一体愛の表現であると感ずる外には……。

はるばると筑紫の國に至尊の御風釐を拜してより如何に今日の日を希望を以て憶れたことよ。私共はこの感激の時を永久に忘れない。そして今更乍ら萬世一系の連綿たる皇統をいたゞき奉つた我が國体の尊嚴を思ふ。そして此の深き眞實、涙の感激に浸り得る我等大和民族の幸福を思ふ。これこそ日本人にのみ與へられたものである。感激に張りつめた全身全

靈。この忠君愛國の熱情を以てすべてを焼き盡さねばならぬ。若きいのちの溢れ出る力！よろこび！光榮！私共生涯の御奉公。それは若き日の今日この時にうけた感激を基とせねばならぬ。

今や滿蒙の地に戰雲漲り、極東は世界環視の的になつて居る時、私達の同胞は戰士は、死線を越えて零下數十度の極寒の地に國家を守護してゐる。あゝ我等微力ながらも 陛下の赤子として直接間接、國家のため死力を盡すべき使命を持つてゐるのである。

翻る御旗、微動だになし給はぬ至尊の御英姿、今も尙彷彿として眼前に拜せられる。千載一遇の此の盛典に列し得たる光榮よ！盡忠報國の熱涙を制し得なかつたあの心境、あの尊い印象は一生涯私の心の内に一つの信仰となつて燃えることであらう。私共はこの尊い閃きを強く第二國民に傳へ、陛下の赤子として生涯君恩に報い奉らねばならない。と強く固く決心せずには居られませぬ。

御親閱を拜受して

大分縣立大分中學校第五學年 小 川 壽 吉

夢の如し。西陲の一學徒として本日この光榮に浴せんとは。碧空に一雲なく地上燦然として榮光を布く。こゝ帶山練兵場に集ふ六萬の人々は千載一遇の今日の光榮に歡喜と誇りとに輝く。

午後一時、嘯唳たる「君が代」奏樂裡に 聖上陛下臨御し給ふ。純白の玉座に立たせ給ふ御英姿、實に天神の正統を繼がせ給ふ至尊の御姿、仰ぐさへ尊く畏し。天皇旗は雄風に翻つて菊花燦たり。やがて起る分列の樂の音、行進又行進。こゝに展開する光榮の繪巻物。恍として己を忘れ肅として襟を正しぬ。畏し畏し御姿を拜するさへ無上の榮譽なるに、一隊毎に御會釋を賜ふ。而して其の一員に我あり。光榮何をか加へん。感激何物か如かん。靜かに起る奉迎歌の波。歡喜の女性かさゞぐる赤誠の歌、和氣の聲、緩やかに帶山の丘に反響しつゝ餘韻遠く大空に流る。續いて起る「萬歳」の叫び。こ

れぞ今日の光榮の人々がさゝぐる聖壽のことほぎ、神の使命。山嶽江海是に唱和して日月も共に揺らぐが如し。嗚呼眞に夢の如し。今日こゝにかゝる光榮に浴せんとは。恐らくは我が生涯の最後の一言たると共に又後世への傳言たるべし。莊嚴其の儘なる至尊の御姿を拜したる一瞬に我が心身共に清淨の心情を保ち得たるを喜ぶ。

嗚呼畏き 聖上陛下の御動作よ。總てが無言の御教訓無言の御模範にてあらせらる。たとしへなき至尊の御身をもて露天の下に一時間にも餘る立御、些の御微動さへ遊ばされぬ御態度、心なくして誰か仰ぎ得べき。天晴れたりと雖も、候正に寒冷、玉座のほとり風颯風たり。あゝ恐懼。あゝ感激。

ひそかに聞く。此の帯山の地たる古への託摩ヶ原にして五百五十年の昔、天歩艱難の當時、西陲の孤臣菊池氏の一黨が玉葉を奉じて必死の奮闘をなせし處と。忠義の英靈既にこの地に薫ず。今日復一層の感なからんや。今や我が帝國は世界の難局に逢着し、千載の危機に際す。この秋にあたつて天神の使命を傳へ新日本の建設を宣揚するは我等若人の任務なることを覺悟し、この光榮の機會に於て御稜威畏き 聖上陛下の御爲めに粉骨碎身の奉公を誓ふあるのみ。

御親閱を拜受して

大分縣立中津中學校第五學年

原

勇

策

昭和六年十一月十八日、あゝ此の日こそ、我等の忘れ得ざる輝かしき光榮の日である。畏くも 天皇陛下には、此の日熊本帶山練兵場に於て、我等九州の學生七萬を親しく嚮はせ給うたのである。此の光榮！此の感激！深く深く全靈に徹して決して消える時はないであらう。

秋の空は飽くまで高い。瑠璃色によく晴れ渡つて、その蒼穹から、太陽が燦々と地を照してゐる。暖い明るい陽光だ、瑞光といふのだらう。その瑞光を浴びて、千載一遇の光榮に胸は高鳴る。集合・整列・編成、そしてやがて着剣した。林のやうに並び立つた白刃の光芒は嚴肅だ。光榮の喜びに心は益々高調子に躍る。だが何だか恐ろしい神威に心も身も戦き

無駄口をたいたたり、惡戯したりするやうな不眞面目な気分は無くなつてしまつた。御親閱の時刻は刻一刻と迫る。呼吸さへもつまる氣持だ。

時に一時十五分、陛下着御の合圖の花火が空の高くで炸裂した。異常な緊張裡に「氣を付け」の喇叭が嘯と響く。續いて起る「君が代」の奏樂につれて、僕はなんだか、ぞくぞくする嬉しさを心に感じながら、僕の體軀は一時に硬直した。見よ！我等が、平生九重の雲深き内のみ欽仰し奉れる 天皇陛下が、今こそ、夢ではない、幻ではない、正に現實に、我等の眼前の純白に輝く玉座の上に御姿を現はし給うたではないか。我等は 陛下に對し、捧銃の敬禮を奉つた。秋の日を吸うて冷たく光る幾萬の白刃の林は、微動だにせず、嚴肅、森嚴な氣が場を壓したこの數分。聽て起る軍樂隊の勇壯な行進曲と共に、我等の分列行進が開始された。踏みしめる歩調の一步は一步より力強く、あの式場を、雪崩の如く、潮の如く、勇壯にして雄大なる分列行進である。感想とか所感とか云つて筆を取つて、いくらあせつても、僕みたいな者では、我等が行進して玉座の正面に到り、その上に畏くも直立し給へる 陛下に注目し奉つたその瞬間の感情を表す事は全く不可能だ。その瞬間には、何も彼も、あらゆる總ての事は腦裡から消えてしまつた。それどころか、今自分は御親閱を受け、斯くして 陛下に注目し奉つてゐるのだと云ふ自覺さへも消えてしまつた。僕には、唯僕の全靈が凝つて爛々と燃えた二つの眼があるのみだつた。實際注目したとは言ふものゝ、僕には尊姿の細い點までは、決して拜み得なかつた。あの御劍や御勳章は、御佩用遊ばされたかどうか、そんな事はわからない。唯辛うじて、神々しい尊姿のみが、印象され得たにすぎなかつた。今になつて考へて見ると、こんな事は我ながら實に不思議の様だ。友人達も矢張りさうであつたさうだ。僕があゝの瞬間左右を振り返つて友達の顔を見たなら、その何れもが、眼は異様にきら／＼と輝き、口は裂ける許りに嚙みしめた常ならぬ形相をしてゐるのに、驚いたに違ひない。

斯うして、我等が九月以來待ち焦れてゐた、光榮ある御親閱も了つた。了つて後、僕は狂はしい感激の波にゆられながら痛切に心に感じた事は、平凡ながら、矢張り日本國民としてこの 天皇陛下の赤子と生れた幸福といふことであつた。

帝國日本。その日本の有する最大最高の光榮と誇りとは、なんと云つても、この 天皇陛下を戴くことの外には有り得ないことがよくわかつた。菅公が筑紫の配所より尙 天皇をお慕ひ申し上げた心情も、廣瀬中佐が、旅順港外笑を含んで船上に上つた忠誠も、今にして始めて私の心に汲みとることが出来た。

あゝ、この 天皇陛下を上に戴く我等の幸よ。「何事のおはしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるる。」あゝ、涙こぼるる。この神秘的感激は、肝に銘じて決して忘るることなく、我等の心弛む時はこれを新に思ひ起し、更に發憤して身心の修養に力め、他日 陛下の忠良なる臣民となりて 陛下の限りなき御恩寵に對へ奉らうと心に誓つた。

御親閲を拜受して

大分縣立宇佐中學校第五學年

都 留 松 男

我等の一代の光榮、實に千載一遇の時にゆくりなくもめぐり會ひたるは、實に我等が誰よりも幸運と言はなければなりません。我等が此の世に生を受くる事に、一年の遅速があつたならば、我等の光榮は永久に取り逃がさなければならなかつたのであります。私は私の此の光榮を聞いての父母の喜びと、勸告に對して、心から感謝致しました。「一生一代の光榮を擔ふべく身體を大切にせよ」と、忠告された時、私は自然に心が引きしまつて來ました。私は會ふ人毎に、知人に、一代の名譽を話し廻りました。それは私に取つて、單り胸に秘めておくには、餘りに大きな期待でしたから。

十月になつてから豫行演習があり、本格的に緊張が加はり、我等の一舉一動は 陛下の御眼に留まり、宇佐中學の名譽に關する實に重大なるものと自覺した時、我等宇中の健兒の負けじ魂は發揮せられ、我等の演習には一種の凄味をさへ帯びて來た。又先生方の御指導は見る目もいたはしい程でありました。又自分自身にも細心の注意を拂ひ、此の自分が此の身なりで御親閲が出来るであらうか。と、さへ考へる事もありました。かくして、私は一日も早く九州に錦旗のひるがへらん事を、心ひそかに祈りました。宇佐八幡の薄暗い森陰を通りながら自分の幸福を感じつゝ、聖上陛下の御上に幸あれ

かして祈りました。——昔忠誠な和氣公が、 天皇陛下の勅命を受けて、宇佐八幡に御使して、一心にお祈りした「誠の心」が遂に神を動かした、其の誠を深く心の中に持ち續けながら——。突如として平和の夢は破れて、滿洲事變が赤き夕日の下に展開せられ、我が未曾有の國難が襲來しました。私が教員室に於て「聯盟理事會開催につき 聖上陛下九州行幸おとりやめの奏上か？」の號外を見たのはそれから間もない事でした。そして私は驚きと失望とで一ぱいになりました。今までの大きな期待は裏切られて、奈落の底につき落された様な気がこみあげて來ました。一代の光榮 天皇陛下の電顔を眼近く拜し奉る日も遠からずと喜んだ日も夢と消えたか。と、思ふと、悲しくなつて來ました。教室に歸つて之を皆に話した時、「何!!」と言つて驚歎して落膽した様でした。父にも告げて、感傷的な日を過した。が、やがて「聖上陛下豫定通り行幸」の報を得て私の喜びは又格別でした。此の時だけは、あの薄暗い宇佐八幡の森も明らかに見えませんでした。やがて我等の赤誠の反映により、大元山も紅葉する晩秋となり、いよ／＼ 聖上陛下を我が筑紫の不知火の地にお迎へする事となり、我等の心はいやが上に感激して、海路安かれと、帝國守護の大神宇佐八幡にお祈り致しました。やがて一日千秋の思ひで待ちし當日もおとづれて野山に立ちこむる雲も、我等の御親閲を祝ひ顔でありました。私の喜びも大に崩え出で始めたが、心の底には一種の不安がありました。之れに伴ひ健康に心配がありました。大焔はく大阿蘇の地に、我等の汽車は野山を越えて進みました。かくして最初の熊本に第一步を印しました。我等は水前寺驛頭に於て、阿蘇山御登山の聖上陛下を御見送り致しました。私は御親閲以前に 聖上陛下を拜せようとは夢にも思ひませんでした。始めて之を聞いた時、私の心の中には二重の喜びが有りました。私は心にあふれようとする喜びを包み、緊張した精神を以て聖駕を一時間前から待ちつゞけました。前以て教官から「陛下におかせられては向ふ側におむきになつてゐる」と言ふ注意をうけました時には、少しく失望致しました。息づまる緊張裡に、大分縣兒のお迎への中に御召列車は肅々と通過せられました。ところが前の注意に反して、わざ／＼玉體をお起立遊ばされて我等に答禮を賜はつてゐらせられるのが無私の捧銜をしてゐる私の眼にはいりました。其の姿の神々しさ——私は夕方の、又雪の宇佐八幡の神々しさを知つてゐる——それにも勝

る或る神威にうたれました。或る感激が心の中にただよみました。そして上 天皇陛下が、いかに我々下人民に對して御心を注がせ給ふかと言ふ事を充分に認め得る事が出来ました。我々がかく偉大な御聖徳の 陛下を戴き此の光輝ある歴史と、宇佐八幡の靈地に於て、學校に集ふ事の出来る幸福をしみく感じました。そして命を捨て、此の御國の爲、君の爲につくさうと言ふ一大決心が心の底にもえ上りました。そして自分が滿洲に修學したる時の日本人としての幸福の意識より、まのあたり 今上陛下の尊顔を拜したてまつつて、日本人としての幸福の意識が數倍強くわき上りました。一方に於ては恐れ多いことだが、私は肉親の父に對する様な一種の親しさが心の中に流れ始めたのを、禁ずる事が出来ませんでした。私は驛頭を離れて野營地に於ての準備中に於ても、前の心持が長く引き續けられて居りました。太陽が西に沈んで、侍從武官が正式に派遣されたと聞いた時、私の心の中には涙がうかびました。かくの如く我々の上に、大御心を注がせられることを考へると、實に 陛下の御仁慈の御心が偉大であらせられるのを悟ることが出来ると同時に、將來の大日本帝國は、我青年が双肩に擔はねばならぬと言ふ、我々に重大な期待をかけさせられ給ふ大御心であらせられると拜察いたした時、誰か感泣しないものがあらうか。そしてその重大な任務に對して奮起しないものがあらうか。私は和氣公の忠誠を以て之にお答へしようと深く心に悟りました。鶴鳴を告げて、赫々たる太陽が東天はるかにさし昇り、霜朝の景色は 陛下の御幸をお迎へする様でありました。絶好の御親閱日和にめぐまれた我等の幸は又甚大でありました。やがて午後一時には帶山練兵場に皆整列致しました。七萬の眞心は一体となつて、遂に帶山練兵場頭に英姿をお迎へする事ができました。我等の非常な感激は、一時間有餘不動の御姿勢を以て、少しも御動きなされなかつた神々しさで、實に我等に現神であらせられると言ふ信念を興へられた事であります。陛下は國民に進んで模範を示し給ひ、我等によい教訓をお示しになりました。

恐れ多いことながら、此の御親閱を受けまして 陛下に對し奉つて父に對すると同じく、恰も生みの親であるかの如き感情のわき立つのを禁ずる事は出来ませんでした。さうして之は何の理論もないのであります。只感激の中に無意識的に

感ずるのであります。威嚴の中にやさしみのあらせられる 陛下を拜し奉つた喜びと、宇中の重大使命とを無事に果して歸つた喜びとが交々至りました。私は歸校中の列車内で深き／＼感激にうたれてゐました。

御親閱を拜受して

大分縣立杵築中學校第五學年 二 宮 尊 徳

昭和六年十一月十八日、熊本市東北帶山原頭に集ふ若人はそも幾萬ぞ。草莽の臣にも帝國臣民としての最大の光榮に浴すべき喜びしき日が到來した。見よ、鹿兒島縣を除く九州各縣に、山口縣を加ふる男女中等學生、青年訓練所生、在郷軍人、女子青年團員等、雲霞の如き群衆は、今日の此の光榮に浴せんものと、早くから陸續としてつめかけて居る。定刻近くなると、さしにも廣い練兵場も全く人の波である。いよ／＼定刻前には一切の準備既に整ひ、各集團は整然と集合を終つて、滿場は早くも莊嚴なる御親閱の雰圍氣に満たされ、咳一つするものなく、唯 陛下の御臨場を待ち奉るばかりであつた。

やがて林の如き靜寂を破つて、嚙啞たる喇叭の響きが起つた。色鮮かな大日章旗が秋空高く掲揚せられた。號砲一發、廣い天地に轟き渡ると、陸軍戸山學校の軍樂隊によつて、嚴かに「君が代」の吹奏が始まる。我知らず身のひきしまるのを覺える。と、御召自動車は練兵場に其の麗はしい姿をあらはして、淺茅の上を氣持よくすべつて、徐に中央に進み、三段にしつらへられた純白の御座所の下に御降り遊ばした。燦として輝く天皇旗と共に、オー、遙かに玉座の上に颯爽たる御英姿を仰ぎ奉つたのである。嗚呼其の瞬間！我等が永遠に忘れる事の出来ない其の瞬間。

何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさになみだこぼるゝ

全くさうだ。唯故知らない感激と感謝が胸に溢れるのであつた。分列行進が始まつた。軍樂隊の勇壯な行進曲につれて幾千人づつかの集團は、歩武堂々と行進を起し、後から後からと引續いて前進する。其の間畏れ多くも 陛下には、直立

不動の御姿勢にて、各集團が御前を通過する毎に、一々擧手の御答禮を賜はつた。その中我等の番が来た。中隊長の澄み切つた號令が響き渡つた。「頭右！」嗚呼今眼のあたり龍顔を拜し奉り、その神々しさに打たれ、限りなき御仁愛に浴しては、自ら敬仰の念を生じ、血潮の浪は若人の胸に溢れ、萬感交々湧出して、我と我が胸の一時に重く壓せられるのを禁ずることが出来なかつた。私は總てを忘れて、唯夢に夢みる如く全く無我の境を彷彿した。しばし茫然として居ると、數千の乙女が三方より玉座近くに進み出で、一齊に大地より湧き上るやうな妙なる調で奉迎歌の奉唱を始めた。

あゝこゝにすめらみことのみくるまを迎へまつれり

嗚呼此の佳き日！何たる喜びぞ、何たる幸ぞ！都も鄙もおしなべて、貴賤貧富の隔てなく、老若男女の別なく、之を養ふこと春の如く、之を涵すこと海の如き、我が大君の惠の露にうるほひて、泣かないものがあるだらうか。君が御稜威を仰がぬ者があり得ようか。如何なる分子も、冷たき罪の人の子も、此の愛に、此の御威光に觸れて感激せないので居られようか。

さうだ、國家の安危を獨り大御心の中に置かせ給ひ、宵衣肝食、宸襟を惱まし給ふ辱さを思ふと、不束なる身も、我が身の上を反省し、將來に對して覺悟しないでは居られない。我等は日本臣民だ！陛下の赤子である。萬世一系の皇統を戴き、世界無比の國體を有する帝國臣民としての眞の喜を感謝すると共に、君命を泰山の重きに比し、竹の園生のいや榮えまして、津の國のこやのひまなき政を助け奉らせ、難波のわざの亂れざらん事を希はずには居られない。

前途多望なる若人よ！國家萬歳の安泰を思ひ、先づ我等一人一人が、雄々しく奮ひ起たうではないか。第二の國民としての使命に生きようではないか。さらば東洋の平和は、世界の平和は確保され、我が國運はますます發展して、天皇の御稜威は、世界に限なく、千代萬代に輝き渡るのである。

嗚呼御親閱を拜受し、龍顔を拜し奉つた今日の佳き日こそ、我等の腦裏に久遠に記されて、今後生涯の尊き思ひ出となり、我が使命を果さんとする心に、固き關守を得た日なのである。

帶山原頭幾萬の魂は踊る。

御親閱を拜受して

大分縣立白井中學校第五學年 姫野 万亀 生

昨夜の疲勞は何處へやら我等はうるはしき大君の龍顔を拜すてふ限りなき幸福の前に新しい活力を與へられて元氣づいた。今日、十一月十八日待ちあぐられた御親閱のその日である。あくまで澄み渡つた大空は今日こそ文字通りの日本晴れ。肥後の地である。大友と鳥津との中原である。そして今皇國を護るものゝふ達が戰鬪の妙技を恣にした即ち陸軍特別大演習の行はれた地、熊本であり、そこには野山をかざる菊花がやんごとなき、萬乗の臨幸をかたじけなうし、恰も我のみが、君の恩寵に生きてゐるかの如き誇をもつて咲き香つてゐた。午前十時熊本中學に勢揃ひした我が縣下中等學生團は榮ある今日の御親閱に不敬の行動等なき様に謹慎の念を深うして拜受すべく服裝を整へた。指揮官の號令の一つ一つに緊張そのものを漲らして纏渉たる帶山練兵場に入つた。

見よ！今や晴天白日のもとに翻る日章旗のひらめきを！はた立ち並ぶ貴顯紳士の波を。早くも整列を終へ咳一つせず、静まり返つた七萬の學生團を。時は來ぬ。一時十分。啞然たる喇叭の響き、いとおごそかに「君が代」の合奏。九尺高き御玉座に現はれ給うた御英姿を遙かに拜し奉つた時、未だ經驗したことのない嚴肅な雰圍氣に取りまかれて身ぶるひしたのである。

あゝ我等は一日として此の君なくして斯く安らけき堵の中に枕を高くする事を得ようか？支那を見よ、若し此の世に生を得て、生くる限りの最大の喜悅を感じるものあらば、今こそ其の瞬間であらねばならぬ。この幸福、この喜悅、我等は畏れ多くも大君の御前に熱い涙のとめどない降下と並行して力強い分列行進の足をそろへた。足、足、足、音、音、音、それは君の御前で試さるゝこの行を最善ならしめんとする忠心からの發露ではなからうか？國家の縮圖を今此の練

兵場に見る。元氣よくふみ進む赤子たちの堅實な足並み然も濁きに行はれたと聞く現役兵のそれ以上に數多きこの若人の足並の勇ましさにどんなに頼もしい御微笑を與へ下さつたことであらう。胸おどらせる軍樂隊の合奏は個々の心を生の感謝に酔はせるに充分であつた。廣い草原を堂々又肅々ふたゝびもとの休憩所へ歸りつゝある自分自身を幾萬もの群衆の中に見出した時は、赤い大きい夕陽が西空を染めて、無事に拜受を終了した者たちへの祝福をあらはしてゐた。今や乾坤の大氣は蕩然として搖曳するを見る。

あゝ畏れ多い 大君を直前に奉拜し得た我等は何といふ幸福であらう。常に此の日の君に報ずるの精神を支持して行かねばならない。然り、天壤無窮の國運を扶翼することは、實に我が第二國民の本分であり、且又祖先の遺風を顯彰する所であるのだ。滿洲は騒ぐ、支那は暴れる。然し今居る所で與へられた我等の使命を完全ならしめるのが今日の有難き御親閱の榮に浴したことの大きな報いであると思ふ。知れ！今の發奮努力が如何に未來に大切なことであるかを。希望は未來にある、而して我等青年は未來に生きるものなのだ。この無比の國體美を保持し、更に發揚するの責任は我等の雙肩に懸つてゐるのだ。あゝ。

「日出づる國のますらをが今戦ひに出でてゆく」うた歌ひながら、肥後の地を歸途についた。漱石のロンドン塔見學ではないけれども、何處をどう歸つて來たかわからない。自分の意識のすべては皇軍意識で一杯であつたのだ。

肥後につゞく枯野に太き日のつぶら
驛についた時、枯野に大きい太陽が沈みかけてゐた。

御親閱を拜受して

大分縣立竹田中學校第五學年 田代則雄

青春の血潮の沸立つ感激を娟々の歌調に籠めて一抑一揚、張りつめた大波のゆるやかに流れ渡る歌聲、天もとゞろと原

頭を壓して湧き上る萬歳の號嘯、一条の罅隙だに残さぬ、極度に高潮し切つた當時の、寧ろ劇的に近かつたあの感銘的な情景を想ひ起す毎に胸が高鳴る。躍る指揮棒の曲線が傳へる輕快な奏樂に私達の行進も半ば夢見る心持であつた。十一月の午後の日射しを反映する尖銳な劍光に、ともすれば視野を眩まされながら、而も網膜を刺す程に鮮かに印象された御英姿、僻陬に隠れてはゐても、一箇の日本人として易くは諦められず、猶未練氣に胸に抱いてゐた大きな憧れは、今此の奇蹟的な現實によつて立派に満足されたではないか。「我を我としろしめすかやすめらぎの玉のみ聲のかゝる嬉しさ」澎湃として押し寄せる、不思議に感傷的な歡喜の波打ちに喉をうるませ、奇傑彦九郎の逼迫した感激の高潮を如實に味ひながら何處からともなく體の奥深くを揺る不可知な衝動に思はず辣然として身慄ひした。放浪の詩人西行は、老杉の蔭も玉垣に神寂びた伊勢の大宮五十鈴川の清らかな囁きに耳底を洗ひながら、意遠く神遙かに無極と冥合し去つたが、私は天皇陛下の御英姿から直ちに汚れた一切を撥無して、第一義的な日本の絶對精神に觸れ、或は偉大な萬葉の歌人がものした千古の絶唱「海行かば水づく屍山行かば草むす屍大君の邊にこそ死なめ願みはせじ」の歌を通して眞實な古人の氣魄が今更の様にひし／＼と心根に徹すると思つた。正成或は清盛の精神は過去の史實よりも、寧ろ私達の内部生命に猶強く躍動してゐる。私のあの熱い涙は同時に正成、清盛の涙ではなかつたか。私のあの熱い感激は、同時に正成、清盛の感激ではなかつたか。あの没我の刹那は、同時に正成、清盛が 大君に殉ずるの雄々しい決心ではなかつたであらうか。私達の覺悟次第では彼の人々の選んだ嶮阻も容易に踏み越える事が出来るのではないか。と考へた時、私の双頬に悲壯な微笑が浮んだ。「義は君臣にして情は猶ほ父子の如し」とは 雄略天皇の大御言葉であるが、私達のあこがれや、希望、喜びや悲しみ、さうした總てのものを上 天皇の大御心に拜しまつることの出来るのは如何に大いなる誇りであるであらう。天皇の大御心と私達の心とは、恰かも張り切つた弓弦の絶えざる感激の高潮の状態に置かれてゐる。そこに自己がない。古い言葉で云ふならば鞍上人なく鞍下馬なしで唯、簫々たる 天皇中心主義の神秘な一元の音律に融和して動く境地である。正成がさうであつた。清盛がさうであつた。そして亦私達も。

長くも 陛下は私達の喜びを喜びとせられ、私達の悲しみを悲しみとせられる。歡びの宴には共に杯を挙げさせられ、禍の跡には齊しく龍顏を曇らし給ふ。圓らかに大らかにあらゆるものを掩ひ包むに足りながら、必ずしも萎縮はさせず現實に明るくあれ、清く世に處して飽く迄正しく、苟且にも他を欺く勿れ、とやさしく解き放たれる。而も憐みの御手は絶えず私達の頭上に翳させられ、影の形と、私達の行方にもその大御心を惱まし給ふ。そして私達が假令何處の地の涯にでも最後の息を引き取る時 陛下は大御心に甦り來つた民草の靈を固く／＼搔い抱かせ給うであらう。矢盡き刀折れる時迄痛みの喘ぎの下に 天皇の御名を誦んじ、やがて大きな安心を淋しい微笑に湛へ乍ら黄泉に就いた多くの益良雄の満ち足りた心こそ、宗教的歡喜の極致でなくて何であらう。

重く軋る天蓋の下、香煙のゆらぎに仄かな法燈の裏には、暗い死の影がある。而し全ての生活創造の根元であり、靈の最後の住家であるべき 陛下の大御心こそ、私達日本人にとつて釋迦以上のものでなくてはならぬ。基督以上のものでなくてはならぬ。天皇陛下の御英姿を拜する時、私の心は遠く地を離れて、千早振る神代の古へに復り、遠白く深く静かな永劫の黄昏の薄明路に佇み乍ら、「寶祚の隆へまさんこと天壤と與に窮りなかるべし」彼方なる瑞樹の森の邊、劍の神々が勝鬨の宴に洩れて來る幽かな「不朽の日本」の奏でにいつまでも／＼耳を傾けてゐるかのやうに感じた。陛下の大御心と私達の心とが、單なる歴史上の事實にのみ止まらず、掘り下げられた現實の奥處にその不可離な固い凝合の根を下してゐる事は、結局その境地に沈潜しその境地に冥合した人に丈しか理解されない。何故なら、それは理論でなくて信仰であり、知識でなくて直覺であるから。哲學者はその書物を閉ぢ、文學者はその原稿とペンを置き、畫家はその素練と畫筆とを擲ち、そよとの風の動き、地に踊る落葉の微かな音だに聞きのがさぬ程の繊細な心もて、此の雰圍氣に没頭するがよい。そして目頭に何はともない熱い涙を覺えた時、始めて 陛下の大御心に甦へる事が出來たと信じてよいであらう。忠とか孝とか、さう云つた抽象的な説明は、最早、私達の神韻的な靜冽な水面を濁す朱の汚點にしか過ぎない。眞に或る過去の偉大な國學者が云つた様に、儒學の徒らに煩瑣な檢討は私達日本人の高い誇りを蔑したかの感がある。

事實を忌憚なく述べれば、私は嘗て人々が常に云ふ「皇室は宗家であり國民は分家であるべきだ」と云つたやうな言葉に對して深い感激を覺えなかつたが、それは如何に大なる過ちであつたであらう。山にある者は山の大きさを知らぬ。陛下の御英姿を目のあたり拜しまつたあの時の忘れ難い感激こそは今迄のかうした不純な自己を清算して眞實な自己に喚び戻すのに十分であつたと信ずる。

更にそれは湯玉の所謂「日新、日々新、又日新」であつて、永遠な心の篝火として紅蓮の焰を不斷にあか／＼と擧げ乍ら私の前途を指南するかの様に思はれる。最後に實朝の歌を掲げて我が詠懷に換へる。

山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふたごころわれあらめやも

御親閱を拜受して

大分縣立佐伯中學校第五學年 緒 方 壽 生

十一月十八日、あゝ我等は、如何に此日を待ちに待つたことよ。そして忠愛の心は燃えに燃えた。我等は郷土を代表して、千載一遇の此の良き日 陛下の御親閱を拜受することになつたのだ。其の光榮や大にして、其の任務や重しと言はねばならぬ。

十一月十七日午後五時半、校庭に集合し、午後七時三十分、諸先生に送られつゝ、汽車はゆるやかに動き出した。途中臼杵で、臨時列車に乗り換へた。定員八十名の車室に、百五名乗り込んだので正に満員以上である。各驛毎に、參加團體が乗り込んだ。夜にもかゝはらず是等を見送る人々は、「しつかりやれよ、頼むぞ。」の聲を連發する。此の簡単な言葉の中には、「お前達は、郷土人を代表して參加するのだ。陛下に對し奉り赤誠を捧ぐる時、他人に少しでも劣るなよ。聖恩に報いるには我等の純潔な心を以てせねばならぬ。一生一代の晴れの場所だ。しつかりやつてくれよ。」と。此の意味が含まれてゐるに違ひない。是には大和民族の血が横溢してゐるのではあるまいか。

かくして大分驛を過ぎ、豊肥線に入つてからは、汽車はひたすら闇中を轟進した。車内は黙々として、眠りの國をさまよつてゐる。然し各の顔には生氣が漲つてゐた。午前三時半、水前寺驛着、早速所定の休憩所に行つた。此處にて朝食をすまし、午前七時半出發、編成集合所熊本中學校に赴いた。午前十時、最後の服装點檢を終へて、愈々帯山練兵場に向つた。十一時練兵場着、此時已に場内には多數の參加團體及び拜觀者集合し、其の數凡そ十六萬人と稱せられた。午後零時半、援助委員長、長谷川少將準備全く終る旨を告ぐるや、場の一隅より、仕掛花火が中天に上げられた。此時聖上陛下には、熊本大本營を出御遊ばされ、刻一刻、玉轡を進めさせられたのであつた。やがて、喇叭の音いともほがらかに合圖の音を奏するや諸員起立、最敬禮の中に、鳳輦は御到着遊ばされた。聖上陛下には、かねて設けられたる純白にして高さ九尺の玉座に立たせられ、天皇旗は燦として旭光を浴びて翻つた。あゝ此の光景の神々しさ、その嚴肅さ、譬ふるにものなかつた。

熊本縣知事、御親閱拜受の旨を奏上し終るや、戸山軍樂隊の喇叭たる奏樂の下に、一大分列式は開始せられた。聖恩に感泣する全九州六萬の若人の足どりを見よ。此の大集團の寂として聲なく、只力の限り大地を踏む歩調の力強さを見よ。すすきの穂の如く並び行く銃劍の閃光と、色とりどりの團旗とからは、昭和日本の盾となり、矛となり行くに十分なる勇氣と氣概とが満ち溢れてゐる。

畏れ多くも陛下に渡らせられては、不動の御姿勢にて、一々御答禮を賜はつてゐる。其の御姿勢の御嚴格さ、今更ながら我々は恐懼措くあたはずの感に打たれた。分列式は繪巻物の如く繰りひらかれてゆく。我等の集團長古川先生の指揮刀が上つた。我等の行進は始まつたのだ。玉座近くなれば、前列の先生方も、我等生徒も、一層の緊張を覺え大地も砕けよと足踏みならした。突如「頭右!!」の號令がかゝつた。今し咫尺の間に仰ぐ陛下の御姿。あゝ九千萬民草のことほぎ奉る聖上陛下。あゝ我等の眼からは、熱涙のにじみ出るのを如何ともすることが出来ない。あゝ感激の熱涙、しばしは身も心も忘れてしまつたのだ。我等は盡さん、我等は勵まん、この良き國、此の大君います御國。心も空に所定の位置

に復するや、女子奉唱團は場の中央に進み出で「あゝこゝにすめらみことの……」の奉迎歌は、秋空に響き渡つた。大和撫子の赤誠は優にやさしく、又力を籠めて歌はれた。續いて全員の國歌合唱あり、最後に本山熊本縣知事の發聲で、天地も破れよと萬歳を三唱した。かくして陛下には、本山知事の行事全く終了の旨の言上を聞こしめされて、全員最敬禮の中をいとも御機嫌うるはしく御退場遊ばされた。一時間餘にわたつた御親閱の間陛下は、御嚴格なる御姿で、しかも一々御答禮遊ばされたことを思ふ時、我等は聖恩に感泣して其の爲す所を知らず。唯々恐れおののくのみである。古歌に曰く「海ゆかばみづくかばね山行かば草むす屍大君のへにこそ死なめかへり見はせじ」と。この歌こそ、此の時の我等の心境を語るものである。

我等は再び休憩所に歸り、先生引率の下に熊本城を參觀し遙かに浮き立つ青瓦の大本營に對し、感激の目禮を捧げた。午後九時四十分、水前寺驛發、翌十九日午前五時三十分佐伯驛に歸着した。

自分は家に歸り、父母から御親閱の狀況を尋ねられた時に、唯一言「あまりに恐れ多くて陛下の御前では、茫然として、唯々熱涙のみが溢れ落ちた。」とのみ答へた。私は、これ以上答ふことが出来なかつたのだ。父の老眼にも一滴の白露が宿つてゐた。そして父は「人民の其の涙があるうちは、日本は永久に榮えるのだ。永久に。」と、はつきりと言つた後につこり笑を湛へて、新聞の國際聯盟理事會云々の所に目を向けた。

御親閱を拜受して

大分縣立日田中學校第五學年 三 澤 數 間

秋の空澄み、菊の香高き今茲十一月、正に千載一遇ともいふべき天皇陛下の御親閱を拜受するの光榮に浴して、私共一同は眞に感泣の外ないのであります。當日は一天晴れ渡り風強けれども誠に結構な日和でした。一同整列して陛下の御臨場をお待ち申す間もなく、一發の煙火を合圖に、喇叭たる喇叭の音響き渡りお召の自動車は到着致しました。間もな

く起る「君が代」の奏樂。天空高く翻翻と翻る國旗。壇上に御起立遊ばした 天皇陛下の御英姿をお拜み申した時、私共の心は何とも云へぬ莊嚴な氣に振へました。それは私共が生れて未だ曾て経験した事のないものでありました。勇壯なる軍樂隊の奏樂につれて、私共は 陛下の御前近く行進して分列式を行いました。その間 陛下には長くも擧手の禮さへ賜はつたのであります。聽て分列式も終つて、再び原位置に歸り、本山熊本縣知事の發聲で、六萬の若人が熱誠込めて、天皇陛下の萬歳を三唱した時、あゝその時、私は日本帝國九千萬の民草が一致團結して、陛下の爲、國家の爲盡すのだ……といふ感じが、ひし／＼と胸に迫つて來るのをどうすることも出来ませんでした。

あゝかくの如き盛大なそして莊嚴な御親閱を拜受することが出來て、私共は何といふ幸福者でありませう。私共の心は今此の新たな感激で溢れて居ります。願はくは此の敬虔な氣持を何時までも失はずに居て、私共の本分即ち勉強に一意専心邁進したいのであります。

錦旗を拜し奉りて

大分縣立國東中學校第五學年

瀧

口

恰

大阿蘇を周る紫の瑞雲を破つて昇る雄大な太陽は、晴れ渡つた熊本の天地に黄金色と輝く瑞光を放つてゐた。朗かに澄んだ晩秋の空を、折り／＼白雲が悠々として流れてゐた。

あゝ、その日十一月十八日、それは吾等全九州の若人にとつて永久に忘るべからざる感激の日である。

長くも 明治天皇熊本に行幸遊ばされて茲に三十年、今又菊の花かをるこの十一月、再び錦旗を迎へ奉つた熊本の地は申すに及ばず、その御親閱を仰ぐ吾等の光榮、我等の榮譽は、到底筆舌に盡す能はざるものである。

時まさに午後一時、水を打つたがやうにしづまりかへつた帯山の原頭に一發の號砲は高らかに響き渡り、嚴かなる雰圍氣に溢れた練兵場の隅々まで、崇重なる喇叭の音は靜かに流れ、森嚴自から襟を正さしめるのであつた。續いて流れる

「君が代」の吹奏と共に 大元帥陛下を迎へ奉る。遙かに玉座の御聖姿を拜し奉つた時には、全身何者かに釘づけられたが如く、何とも言ひ得ぬ一種の靈感に打たれるのを覺えた。續いて起る分列行進、若き血に燃ゆる九州男兒のそれは壯烈なる大行進である。輕快な行進曲に、整然として大地を蹴る足並は、強く雄々しく歩武堂々。九州健兒の眞面目を兩肢にこめ、兩腕にこめ、魂一杯の行進を續ける時、何時しか己を脱却し、歩調さへも意識なく、ただゆくりなく神境を行く裡に「頭右」の號令で龍顏を目近く拜し奉れば 陛下には、いとも御鄭重なる御答禮を遊ばされる。おゝ此の瞬間、私の魂の躍動は!!私の感激の極みは!!遂にこみあげる涙となつて溢れるのであつた。ふと我にかへつた時は、すでに玉座は遙かに離れ、引き續く堂々たる大集團も張りつめた緊張裡になほ行進を續けてゐた。女子團体の奉唱歌も終り、天まで裂けよとばかりの萬歳の三唱に嚴肅然も光榮に輝く吾等の御親閱は終つたのであつた。思へば此の間一時間にあまる間、長くも陛下におかせられては、凜然たる直立不動の御姿勢で終始せられ、我等臣下としては誠に恐れ多く、陛下の御聖旨の程を拜察するだに畏き極みである。

あゝ、わが感激の日、更に想ひをめぐらせば、何の故を以て吾等如き者にも閱を賜はるぞ、如何に 陛下の青年學徒に對するその御思召の深きことぞと、その皇恩の厚きにたゞ感泣の外はなかつた。

光榮の此の秋!瞳を遙かに轉ずれば、あの廣漠たる滿洲の原野に、皇國のため奮戦苦闘、血と肉とをもつて暴戻限りなき支那軍にあたる我將士、遠くは聯盟理事會の紛争等々、わが國にとつては實に國難到來の秋と云はなければならぬのである。上に御仁徳深き 聖天子を戴く我等としてはこの重大なる時局に直面し、此の十一月十八日を、皇恩に報すべき永久の記念日として、心に誓ひ肝に銘じ、刻苦勉勵、進んでは國難打破の大準備に、ひいては 陛下の大御心を安んじ奉るべく、益々努力を續けなければならぬと思ふ。

御親閲拜受感想

大分縣立大野中學校第四學年 江尻眞平

我々の憧憬の焦點であつた御親閲の日は來た。昨日まで曇り勝ちの天候もさすがに今日は我等の眞心にうたれてか、一點の雲もなく晴れ渡つて、空には銀河が流れてゐた。六十有餘の我等大野健兒が月影を踏んで田中を後にしたのは午後八時頃だつた。黙々として萬感の胸に滿つるを壓へ乍ら、夜行軍練習としての三里の道程も、何時の間にやら、朝地驛に到着、間もなく車中の人となつた。車中の混雑、うつり行く景色、熊本市の印象、立正高等女學校に宿泊の寒い一夜、熊本中學、水前寺公園の景色、それ等は暫くおく。何故なら、今私は生涯を通じて最も有難い嬉しい時間に近づきつゝあるのだから。

帶山練兵場！それは私の想像を裏切らなかつた。此所で我々は少憩の上、大隊長の指揮の下に整列して、御召自動車をお待ち申上げるのである。さすがに今日に限つて時間の經つのが遅い。私は幾度か自分の時計を進めようとする衝動にかられた。

號砲一發!!折からの緊張した空氣を破つて、それは高く人々の耳朵をうつた。

素破!!私は心臓の鼓動の高鳴るのを感じた。續いて響く喇叭たる喇叭の音、オートバイに護衛された御召自動車は、軍樂隊の「君が代」吹奏裡に純白の御臺の下に進んで行く。いよゝゝ御登壇あそばされると、分列行進が始まり親しく我々に御答禮を賜ふのだ。幾多の分列行進も過ぎ、いよゝゝ我等の番となつた。息づまるやうな緊張の中に「頭右」の號令がかけられると、畏くも陛下は擧手の禮を遊ばされた。尊い御身を以て我等如き者にまで、御答禮下さつた事を思ふと眞に感激の涙にむせばざるを得なかつた。それが済むと續いて奉唱部隊の奉唱歌、次には全員の「君が代」合唱があつた。噫、幾萬の赤子が熱誠よりほとばしる愛國心のこの發露に耳を傾ける時、我々は襟を正して日本帝國に生れた事を感謝し

ないでどうしてよからうか。

私は此の聲を聴いた時、さうして、紺青の空を御脊にした神の如きあの御英姿を拜した時、現在の日本の國情をかへりみ、國際問題の紛糾せる此時に當り、底知れぬ力強さと嬉しさとを感じ、東洋の東端に位する大日本帝國の礎はいよゝゝ堅く、皇運は千代八千代に榮えるであらう事を確信した。そして我々第二の國民の責任の如何に重大であるかを知り、我々の本分を全うして聖恩の萬分の一に報い奉るべく後日の修養を深く深く心に誓つたのである。

御親閲を仰ぎて

中津市立扶桑中學校第五學年 野田眞彦

その瞬時——力強く大地を踏む靴の音も、勇壯なる軍樂隊の調も、ばつたりやんでしまつたやうに思はれた。眼の前にちらつてゐた友の姿も、銃劍も、もうなんにも見えなかつた。ただ玉座に立たせ給ふ陛下の御英姿のみが、くつきりと秋空に浮きだしてゐられた。もうなんの邪念もなかつた。ただ一心になつて僕は仰ぎ奉つた。

なんと云ふ尊さだつたらう。なんと云ふ力強い感激だつたらう。云ひ知れぬ威壓が僕の心をぐんぐんと押しちぢめてゆくやうに思はれた。そして未だかつて意識したことのないある力強さを、意識せずにはゐられなかつた。

我も又日本島根の男子なり君のみために命捧げむ

御親閲を拜受して

大分縣立第一高等女學校第五學年 大津安子

聖天子の鳳輦を迎へて、筑紫野の秋は澄む。燦たる秋光にきらめく銃劍、堂々と進む幾千幾萬の若人達。しかしてそれら健兒の行進を、力づける勇壯な行進曲。その曲にすら打ちふるふ胸をしづめながら、私は仰ぎまつた。あゝ、我が

聖上陛下の御英姿を。白く光る銃の穂並と、黒く燻む帽子の波とを越して、更に高く、神々しきその影向を。

直立不動の御姿勢にあらせられながらも、尙幾分の微笑を刻まれて御親閲を賜ふ陛下の御尊影は、一條の聖光の如く私の瞳に輝き互るのであつた。私はその森嚴なる光の尊さに、瞬きすら許されぬほどの衝動に打たれて、そのまゝ立ちすくんでしまつた。

隊伍整然たる列は進む。國たみの父とまします我が聖上陛下は、今やこの勇にして健なる若人達の頭上に立たせられて、擧手の答禮をあそばされるのであつた。

あゝ、夢であらうか。此の賤しい南國の一少女が、今までのあたり大君のみ姿を仰ぎまつらんとは……。だが夢ではないのだ。決して夢ではない。見よ、嘘から迸り出づる涙の頬に傳ふを。頬から胸へ、胸から地上へと。私達の小さい生涯に於て、最初であり、恐らくは最後であらうところのこの清浄なる涙、悲しみのそれではなく、歡びの涙。聖なる君の御前にひざまづく歡びの涙なのである。あゝ、この大和島根に生れて、この大なる御惠の光を浴びて、昭和の聖代に生くる吾等の幸の多さよ。

あゝわれら生けるかひあり

おほけなき今日のほまれを

.....

奉唱の歌聲も、迫り来る感激に、ともすれば消えようとする。高らかに歌ふ奉迎歌の韻律の間には、かすかなすゝり泣きの聲が混る。私は知る、この歌の詞よりも、更にその涙のそのすゝり泣きの、いかに吾等赤子の心情を雄辯に物語るかを。

私達は、燦然たる天皇旗を前にして玉座に立たせ給ふ御英姿をおろがみながら、息も絶えよと唱和した。

萬世に語りつぎつゝ

ことほがむひとつこゝろに.....

その歌聲は朗かに牙えわたつて、遠く霞む阿蘇の山々を越え、空のきはみまでも通ふかと思はれた。

御親閲を拜受して

大分縣立中津高等女學校第五學年

荒 木 ツ ヤ

あゝこゝに、すめらみことの みくるまを、むかへまつれり。

待ちにまつた日が今日となつたのでございます。肌寒いあけがたの風が吹いて、廣い街路をすぎる人々の靴の音がなぜか氣にかゝります。熊本の地だ。しきりに身のひきしまるのを覚えます。緊張した町、さう感ぜずには居られませんでした。練兵場の爽やかな空氣を透して、彼方に黒い一團は男子中等學生の集團でございませう。美しい旗は、在郷軍人、青訓生でございませう。胸のマークも色とりどりに集つて来る拜受者の群、陪觀者の群。深い落着を見せた蒼空にふうわり浮いた白雲、美しく微笑みかける太陽、それは、感激に燃えた若人の今日の光榮を祝福するかのやうでございませう。ゆつたり横はるうす紫の群山を控へて嚴然としつらへられた玉座。神聖無垢なる白光の輝き。やがて、あの玉座に 聖上陛下を拜する事が出来るのでございます。夢ぢやないかしら——遙かに帝都を離れた私達が——私達の大和魂よ、この高鳴る胸のおのゝきよ。私達は永久に日本國民なのでございます。

御發聲のしらせに、廣漠たる御親閲場に滿ち溢れた陛下の赤子は自分の立つてゐる所を忘れ、自分を忘れ、直立不動玉座の方を凝視して居ます。無心の状態。そしてそこに、美しい感激と、大和魂が凝つてゐるのでございます。すらすらとかゞげられた日章旗は、今や場を壓して颯爽とひるがへつて居ます。嘯唳と響き渡る「君が代」の奏樂裡に、立御遊ばされた御英姿。私達の頭がどうして下らずに居られませう。じつと眼を閉ぢました。そして私は、此の光景をはつきり心の眼にうつしました。永遠に消える事のない心の鏡にやきつけました。

分列式が始まります。軍樂隊のマーチで動き出した一隊。指揮者の剣がピカリ／＼と閃めきます。至尊の白い御右手が時折拜されます。此方へおしよせてくる一隊、美しくしかも整然とならんだ銃剣の林。碧天に織出された天皇旗は、御紋章の黄金色を輝かせます。奉唱部隊出動のお指圖に少女の波はゆるやかに動きます。數百歩にしてはたと止まりました。玉座間近く、あまりのかたじけなさに仰ぎ奉る事すら恐れ多いのでございます。指揮者の旗が上げられました。と、叫び出された歌の一節、なごやかに流れるその音律、私達の聲が歌つて居るのではありません。それこそ全日本女性の愛國の叫びなのでございます。私達は歌ひました。千載一遇の光榮でございます。聲の限り歌ひました。……最後の節が終りました。眼を開いて玉座の邊を仰ぎました。大空を仰ぎました。いやが上にも澄んだ秋の空は紺碧に輝いて居ります。世界無比なる國體の縮圖でございます。

サイレンが響きます。やがて、陛下には還御遊ばすのでございます。遠く遙かに薄薄の響きが消えます。一度に湧き出づる歡喜と感激との涙は、數萬の少女の眼に溢れるのでございました。あゝこの光榮、永劫に刻みました心の誓ひ、日本の女性、盡忠報國、力強く私達は生きませう。

御親閱を拜受して

大分縣立高田高等女學校第四學年 安部 時代

昭和六年秋十一月、畏くも 聖上陛下には肥筑の野に行はせらるゝ大演習御統監の爲、遙々我鎮西の地に行幸あらせられました。その朝、九州各縣の男女中等學校生徒、其他に御親閱を賜はつたのであります。この日私達二十名が我校を代表して親しく御親閱拜受の列に加はることは、私達の永へに記念すべきことであります。唯感激と喜悅に満ちて、夜も眠られない程でありました。

ほのぼのと明けたる十八日の朝、各地より集つた女學校生徒、青年團員よりなる我等奉唱隊は、熊本女師校々庭に列を

整へ、指揮官につれられて、帶山練兵場に参りました。遙かに阿蘇の高峯を仰ぎ、西は肥後の平野果てしなく續き、漂渺として目も遙かに、今日の晴れの場所には申分のない所だと思ひました。正面には玉座眞白く、場の周圍は次第に集る参列の人で十重二十重、目もとゞかぬまでに、圍んでゐるのであります。空は雲一つなき日本晴の菊日和。中空高く國旗が掲揚される時、號砲一發 陛下の御着を報ずると、滿場寂として聲なく、翻る旗風のどかに、嘸々たる奏樂の中に、玉車は靜かに御入場あり、壇上遙に玉體を仰ぎまつた時、お我等の 陛下……唯有難く嬉しくて、何ともいひ様のない感激に、涙が止められないのでした。間もなく勇ましき軍樂隊の奏樂と共に男子中等學校其他の分列式が始まりました。其莊嚴な光景何と云ひ表はしてよいか、酔はされるといふことがあの時の氣持でせう。それが終ると私達奉唱隊は、軍樂隊の誘導につれ 陛下のおそば近くに進んで、所定の位置につきました。そこで私達は、滿腔の赤誠をこめて、奉迎歌を奉唱いたしました。我等若人の血は燃え、たゞ尊さと辱なさに高なる胸は、立つてゐるのにさへ、たへない氣がいたしました。熊本縣知事の發聲で全員の萬歳三唱、この様な熱誠のこもつた聲は、世界のどこでも聞くことは出来まいと思つて、喜びで胸は一ぱいでありました。午後二時十二分 陛下には「君が代」の吹奏裡に、還御遊ばされました。あゝ今日の光榮を荷つた私は、自分の生涯に再びこの様な輝かしい日はあるまいと思ふと、たゞ辱なさに涙を禁ずることが出来ませんでした。我が國運の將來を双肩に負ふべき我等青年男女は、大に修養の道にいそしんで、この御鴻恩の萬分の一にも報い奉らねばならないと、いよいよ固く覺悟いたしました。

御親閱を拜受して

大分縣立四日市高等女學校第四學年 清瀬 敏子

時は十一月十八日、軍樂隊の奏でるマーチにつれて、行進する男子の學生の銃の林の間に、いともやはらかな晩秋の風にひらめく天皇旗と、一々御會釋を賜はる 聖上陛下の御英姿を、遙か向ふに拜した時、私は何とも言へぬ嚴かな心の緊

張を覺えました。霜月の空とは思はれぬ程澄み渡つて、ちぎれ雲の散在して居るのも趣きがあり、縹渺たるシベリヤの大草原を、聯想させる帯山の練兵場は、陛下のみくるまを迎へ奉つて此上ない歡喜と、言ひ知れぬ嚴肅な気分とで、充滿して居りました。未だうら若き學生の身を以て、一天萬乗の君の御親閱拜受の光榮に浴したと云ふ事は、げに／＼身に餘る光榮だと思ひました。やがて壇上に立たせられたリーダーの指揮棒の動きにつれて、いとも莊重な奉迎歌が歌ひ出されました。「あゝ此處にすめらみことのみくるまを迎へまつれり……」と、歌ふその聲はよし細くとも、私達の至誠と、喜悅と崇敬との全部をこめた、心からの叫びであります。殆ど我を忘れて……。感激に満ち／＼た歌の餘韻は、さら／＼と吹き過ぎるそよ風と共に、とりまく彼方の山の端にかすかに消えて行きました。「最敬礼！」の號令の下に、一齊に頭を下げ、おそろ／＼頭を擽げて、再び、聖上陛下の御姿を拜み奉つた時、私はほんたうに幸福だと思ひました。その光景を目撃しましたなら、たとひ外國人であつても、自然と涙がこぼれ落ちる事と思ひました。その時の気分は、とても筆や口では言ひ表はす事は出来ません。つゝがなく御親閱を拜受して、國歌「君が代」が一奏されました。最後に、本山熊本縣知事の「天皇陛下萬歳！」の奉唱に續いて、私達がこれを三唱致しました。あゝその聲、何んと力強い叫びだつた事ぞう。それは聖壽の萬歳と皇室の彌榮とを祈る私達の眞の聲でありました。どうして滿腔の熱誠を以て叫ばずには居られませう。大阿蘇の群山も、有明の大海もこれに呼應して、正に天地も揺がんばかりで、私は此時程我が大日本帝國の礎の如何に鞏固であるかを、痛感した事がありませんでした。それが濟んで聖上陛下のみくるまを御奉送申した時、私は全く夢から覺めた様な氣が致しました。二時間餘りの短い時間でも、無上の光榮ある時を過した事は、私達の一生に如何に深い強い痕を止める事でありませう。やがては、長かつた學校生活を終へようとする私達の最後の頁を、かくも華かに飾る事の出来ました事は、私達にとつて無上の喜びであります。これも明かに治まる昭和の大御代に生れたからだと思へば、我身の幸運がつく／＼感ぜられ、女子といへども今後は一層君國の爲めに精忠の誠を致さなければならぬと深く深く印象づけられました。

御親閱を拜受して

大分縣立三重高等女學校第四學年

後藤 千代子

一時十分を僅かに過ぐる頃、煙火は轟き渡つた。やがて來たらんとする晴のひとときを待つて、徐に息づく。身心緊張の度はまして來る。刻一刻、嚴肅な沈黙が續く。心臓の鼓動ばかり靜寂を破る。遙か彼方の玉座は、折からの午後の陽に一人の白さを輝かす。數分の後には長くも、大元帥陛下を仰ぎ奉る事が出来るのだ。身は戦き心は躍る。草木よ祝へ、我等臣子は此の一遇に、一指をも一毫をも動かさず、ひたすらにお待ち申上げてゐるのだ。腹の底から流動し、高鳴り溢れる喜と感激とに私達の全身は凝り固つてしまつた。緊張は極度に達した。日の丸の大國旗は嚴かに掲げられた。靜かに湧き起るラツパ「氣を付け」。續いて流れる「君が代」の吹奏。陛下は己に御着座遊ばされたのだ。あなかして、直立不動の御英姿よ。陸軍御正裝の御胸の輝き。縣知事さんが、御親閱を仰ぎ奉る旨を奏上されてゐる。その聲は耳にこそいらね、その奏上の言葉こそ、拜受者全員、否九千萬の同胞が、御稜威を拜し奉りて尊き御守りとなり申さむ眞情の發露なのだ。分列式は始まつた。嚴肅にして雄々しき軍樂の響、堂々空を壓して進みくる校旗團旗の波、劍のきらめき、あゝ此の輝きこそ、實に世界無比の皇威と、拜受者幾萬の心そのものの光なのだ。熱血ほとばしり、精氣みちみちたるその足並、あゝ頼もしき皇國の男子よ。御答禮遊ばされる純白の御手袋。あゝその大御心の辱さ。

遂に私達の奉唱の時來た。一時も早く奉唱申上げたい。一時も早くその光榮に浴して、このほとばしり出る感謝の至情を心から奉唱申上げたい。軍樂隊に迎へられて足は地につくつかぬ。ゆめうつゝの中に所定の位置に居すまひを正した。畏くも龍顏を咫尺の間に仰ぎ奉る奉唱の位置に全身の感覺を眼一つにして、指揮者のタクトに注ぐ。胸の高鳴るを押へ押へ背を延ばし延ばして、「あゝ此處にすめらみことの大國旗を御奉り奉れり鳳舞を」と、咽喉も破れよ。胸もさげよ。天にも徹れ地にも響けと、調子も拍子も、其他何ものも其處にはなかつた。歌ふは、人か、われか、私達は只夢中に奉唱し

つゞけた。平素は長いと思つたみ歌も瞬く間に歌ひ終へてしまつた。眞に一瞬の間だつた。その片時も長からん事を念じたにもかゝはらず。目出度く奉唱を終へた。此の重任を終へた。と意識した時、堪へに堪へきつた涙は、一時にポロポロと落ちた。百の言葉を連ねても、千萬の文字を綴り合せても、この喜びを言ひ盡す事が出来ようか。間もなく起つた「君が代」の奏樂。あゝこの君、この國柄、私達は再び根限り熱聲を絞つて、千代に八千代に、この君、この國柄を讚美し奉つた。われにかへるひまもなく、熊本縣知事さんの「天皇陛下萬歳」に唱和して聖壽の彌榮を三唱した。やがてラツパの吹奏により、私達は御稜威彌高きその御英姿と、おほけなき今日の譽とを、永久に語りつぐべく深く／＼最敬禮をした。そして金色燦たるみ旗を今更の様に仰いで、連綿たる皇室の隆昌繁榮を祈り、場内高く翻る大國旗に國運發展を念じた。再び起る「君が代」の奏樂、そのゆるやかな流れと共に、陛下には靜かに御還御遊ばされた。飽かず／＼お見送り申上げる。場内寂たる中に翳々と響く軍樂の調。

時恰も滿洲事變の勃發に、内外騒然たるの時、此の僻遠の地に於て、おほけなき此の光榮に浴する事の出来た喜び、忘れようとして忘れ得ぬ此の日よ。心に銘じ瞻に刻みて、國民としての義務、否、陛下の赤子としてこのみ恵に對へ奉り、お慕ひ申すことの何人にも劣るまじきを深く／＼心に誓ふのだつた。

御親閱を拜受して

大分縣立日田高等女學校第四學年 織 田 敏 子

ドン、バリバリと云ふ煙花の音が四邊のざわめきを破つて、廣い場の隅々迄響き渡つた。我々はもう間もなく起る今日の御盛儀を豫覺して、全身のしびれる様な感じを起し乍ら思はず空を見上げた。青々と澄み渡つて一點の曇もない廣い廣い空に、唯一塊の白雲の様に固まつてゐた煙が、次第々々に擴がつて青い色の中に滲む様に溶け込んで行つた。其の頃には又四邊が騒がしくなり始めてゐた。其の時「氣を付け」と云ふ號令が我々の耳に響いた。平素であつたならば聞えなかつたかも知れないその號令が、耳元で叫ばれたより以上に強く明瞭に聞えた。思はず飛上る様な氣持で姿勢を正した。暫くの後——大波のうねりを思はせる様な、緩やかな「君が代」の奏樂が我等の心の底を揺り動かす様に響き渡つて、爆音も爽かな一隊のオートバイや、お召自動車が見野にうつた時、私は頭の頂天から足の爪先迄、冷水を浴びせられた時の様にずんとして、微か乍ら体の戦慄するのを如何ともする事が出来なかつた。そして何か分らぬが、唯理由もなく臉が熱くなつて、今まではつきりとしてゐた御車がぼうつと霞んで拜せられた。そして陛下が眞白な玉座に着御遊ばされて男子の分列式に一々御會釋を賜はつてゐらつしやるのを拜見して、尙一層何とも筆紙には現はし難い感を深くした。分列式が終つて我々奉唱部隊が前進する時、一步々と足のすくむ様な氣がして、思ふ様に前へ進む事が出来なかつた。奉唱中でも今にも涙が頬を傳ひさうになるのを、幾度も幾度も、抑へ乍ら歌つた。最後の一句「語りつぎつづつ壽がむ一つ心に」の所を唱ひ終へる時は、本當に唯一つ心で、最後の餘韻が何時迄も、何時迄も消えない様にと四邊の空氣に唱ひ込めた。國歌合唱の時や、萬歳奉唱の時等は、自分自身の聲のすべてをそれに打込んだ。そして全身全靈で叫んだ。最後に御車をお見送りする時は長い極み乍ら、恰も慈父にお別れする時の様にたまらなくお名残惜しい氣がしてならなかつた。尙私

は此の時初めて「君が代」が、日本にとつてどんなにふさはしい國歌であるかと云ふ事を知り、且又つく／＼と日本の國体の美しく尊いと云ふ事と、この國に生れ、しかも今日の悦びに逢ふ私達の幸福さを感じする事が出来た。そして此の時だけは練兵場の芝生の上に落ちる熱い涙をどうしても禁ずる事が出来ず、唯感激の涙にむせんだ。それと同時に、一心に御車の御後影を見送り奉りつゝ、「君が代は千代に八千代に」と眞心こめてお祈り申し上げた。

御親閱を拜受して

大分縣立白杵高等女學校第四學年 吉 本 タ マ エ

天高く、氣澄み、菊の香薫る昭和六年十一月。 天皇陛下には長くも鳳輦を阿蘇の麓に向けさせられ、御親ら大演習を

御統監になりました。そして私達男女の若人達にも御親閲を賜はつたので有りました。何と言ふ尊い事でせう。又何と有難い事でせう。其の感激の情、今に新しく過ぎし日の喜びの跡を辿る時一層の感激がひし／＼と身に迫るのを覚えます。當日十八日朝、集合所にて隊伍を整へた私達第二奉唱部隊は、大分縣を先頭に、一世一代時の場所帯山練兵場に向つて肅々と行進した。道程は大變長く日光は秋の日ながら強く照り付けた。平素なら私達の歩調はともすると鈍く、重く成り勝であつたのに、今日はやがて拜受する光榮の喜びに身も心も軽く十數町長蛇の列は一糸の亂れもなかつた。やがて來た。譽の帯山練兵場、廣い場内には先着の男女中等學生、在郷軍人、青訓生及び男女青年團員等、いづれも御親閲の榮を賜はる喜びの人々が恭しく整列して居た。私達は玉座の遙か右に整列した。玉座は一段高き所に更に二重の高き段になつて居て、眞白に装はれ、靜かに、大君の玉歩を迎へて居る様に見えました。刻々、時間が迫つて來たので、私達は大意で辨當をすまずでしたが、玉座の前で誠に畏れ多くも、亦光榮の至りとの感は私達の胸に一ぱいで有つた。

午後零時四十分頃、火花が一發打揚げられ、同時に式場正面に大國旗がする／＼と高く掲げられた。行在所御發聲の知らせである。やがて嘯唳たる喇叭の音が響き渡ると、滿場森として聲がない。鹵簿がお近づきになるのである。見よ。僅かに白雲を阿蘇の山上に残して晴れ渡れる大空。空中高く翻る日章旗。遙けき山々、皆、今日のよき日を和やかに祝福するかの如くで、一入嚴かな感を抱かせた。御召自動車よりお出ましになつた。天皇陛下はお靜かに玉座にお上りになつた。私たちは心ゆくばかり丁寧に最敬禮を行ひ、遙か彼方に御姿を拜み申した。やがて勇壯なる軍樂隊の奏樂につれて男子の分列式が始まつた。次から次と幾十とも知れぬ隊伍が御前を敬禮しては過ぎる。其の間約四十分。私達はともすると体をくずしかけたりするのに、陛下にはかしこくも始終不動の御姿勢でゐらせられ、殊に各隊毎に擧手の御答禮をなさつてゐらつしやる御様子が白の御手袋に明かに拜まれて、ひたすら恐れ入る外なかつた。私は此の勇ましい分列式により若き日本を姿を見出して、天晴、事の有る時は、陛下の御爲に一廉のお役に立つ事であらうと力強く感じた。此の次はいよいよ奉迎歌奉唱である。遙か遠くから軍樂隊の人々が、足並揃へて私達を迎へて來て呉れる時、又樂につれて、だん／＼御前

近く進んで行く時、私の心は限りなき感激と喜びに一ぱいだつた。いよいよ奉唱の場に着いて最敬禮を行つた。今度は、大分はつきりと拜み得る位置に來たので、其の御氣高い御英姿を我等の 天皇として仰ぎ奉つた時、私は限りなき身の幸福にどれ程喜び、感涙に咽んだか知れない。そして奉迎歌を奉唱する時には、心から奉唱した。

「あゝ此處にすめらみことの御姿を拜みまつる」あゝ如何なる天の恵みか。「おほけなき今日の譽れを萬世に語りつぎつ」と。私達は此の榮ある日を永久に忘れてはならない。千載一遇と云ふ言葉があるが、筑紫のはての少女が御親閲を拜受する等、是こそ眞に其の言葉にふさはしいもので、御代なればこそと聖代の有難さを泌々と感じた。それに付けても彼の數萬の大部隊が何等の故障もなく、立派に拜受の光榮を荷ふ事が出來たのは、もとより上 陛下御盛徳の然らしむる所であるが、各係の方々の綿密なる御計畫と熱心なる御世話とによつたものと、深く感謝されるのである。とにかく私達はかくの如く身に餘る光榮に浴し、一屏自重し、努力して御恵み深い 天皇の聖旨のまに／＼もつと／＼意義ある生活を送りたいものであります。

御親閲を拜受して

大分縣立佐伯高等女學校第四學年 田 村 き く

十一月もなかばをすぎた十七日の夜、堪へられない喜びを包んで汽笛をあとに懐しい佐伯を出發しました。車窓に見る豊肥の山々は、此の時の私達には限りなく美しいものに思はれました。汽車の十時間！それも明日を待つものには夢の間に、朝の四時水前寺驛へ着きました。

十一月十八日！！愈々待ちに待つた日は訪れたのです。榮あるこの日を私達はどんなに待つたこととせう。それにつけても幾時間かの後には、身にあまる光榮に浴する私達であることを思ふと、疲れも打忘れ、唯々感激に血潮は高鳴るのでした。此の日空には一片の雲なく、阿蘇の連峯もこの佳き日を祝福するかのように輝き、ものみなすべて 陛下を迎へ奉るの

でした。

午後一時を過ぎて間もなく一發の號砲中天に轟けば、啾唳たる喇叭の音は彌がうへにも人々を嚴肅な氣分に導き、ついで起る軍樂隊の國歌奏樂裡に 陛下には御臨場あらせられました。咫尺の間に仰ぎ奉る 陛下の御姿!! あゝ私達はここに大君の御姿を拜み奉る事が出来たのです。この時の氣持、ほんとに何にたとへませう。あまりの尊さ忝けなさに、熱い涙はとめどもなく頬を傳はりました。知事の奏上が終れば勇壯な分列式。それが終ると私共奉唱部隊は前進し、玉座を前に御稜威稱へて空もとどろにあらん限りの聲をあげて合唱致しました。しかし次第に目がしらが熱くなつてすべてが霞んで見えるのでした。けれどあふれ出る涙もふかず一生懸命歌ひました。此の間正に一時間。陛下には不動の御姿勢にて一々御親閱あそばすのでございました。かくして最後に聖壽の萬歳を三度唱へ式はこゝに終りを告げました。奉送する私達は、唯感涙にむせぶばかりでした。

そして世界にその比を見ないこの日の本に生を享けたことを、かくも尊き 聖天子を戴くことを、そして榮あるこの日にめぐりあつたことを感謝致しました。

あゝ菊の香高き十一月十八日!! 私達は永久にこの日を忘れることは出来ません。

御親閱を拜受して

大分縣立竹田高等女學校第四學年 首 藤 榮 子

一點の曇もない日本晴、帯山練兵場にては、今日御親閱の光榮に浴する幾萬の群衆が、織るがやうに、續いてゐる。天高く氣澄むの好季節、私共も押へきれぬ喜びのために、おのづと歩みの軽くなるのを覺えるのである。

かくて零時三十分「氣を付け」の喇叭の吹奏に嚴肅な氣持は刻々に深められてゆくのであつた。午後一時十分式場の入口に、高く日章旗は掲げられて、恐れ多くも御鳳旗は今式場に臨ませられるのである。式場の中央に設けられた一段と高

い玉座に、長くも龍顔を拜し奉つた刹那、たゞ一同はかたじけなさに涙のこぼるゝのを禁じ得ないのであつた。男子の分列式によつて式は始められ、やがて私共の屬する奉唱部隊の奉唱となつた。奉唱部隊の全員が、聲高らかに、眞心をこめて、謹んで奉唱すれば、長くも 陛下には、一々舉手の禮を以て御答禮遊ばされたのであつた。

私等はけふの此の一日を感激中に送り、陛下の大御心に副ひ奉るべく、更に深く心に銘した事である。

御親閱を拜受して

大分縣立國東高等女學校第一學年 松 見 惠 美

瑞雲柵引き、菊花薫る昭和六年十一月十八日は、御親閱の光榮に浴した記念すべき日である。

未だ東の空も明けやらす、寒風肌をつんざく頃漸く水前寺驛に到着した。驛前で列を整へ直ちに休憩所へと向ふ。汽車での疲れた重い足をひきすりながら、何處へ行くともなく、唯前の人に隨うて行つた。電燈も碌に點いてゐない淋しい街を、曲りくねつて歩くのも容易ではなかつた。歩を進めてゐるうちにやがて休憩所——大江小學校——へと辿り着いた。

校庭の所々には、焚火をして、周圍に澤山の人々が集つてゐる。ガヤ／＼と騒ぐ中を掻き分け、電燈も點いてゐないたゞ眞暗の中を搜りながら、二階の廊下へ着いて一休みする。洗面所に行き、清らかな冷たい水で顔を洗ひ、身を淨めて元の位置につき、未だ暗いが朝飯にとりかゝつた、お茶もないので、冷たい水筒の水でやつと我慢してゐた。その中に段々夜の帷は開かれて、東の空は仄白く、太陽はにこやかに笑ひかけた。八時半には大分縣奉唱部隊全部整列して、女子師範學校へと赴く。最早熊本市内には澤山の人々が往來して、非常な賑はしさだ。電車、自動車が頻繁に往來する、交通巡査が忙しく整理に努める、大變な混雑だ。師範學校に行く迄にはかなりの道程であつた。廣い街を歩いてゐるうちには、かなり大きな建物も多かつた。やがて壯大な建物が見えると思ふと、それは師範學校で、大分縣、佐賀縣、宮崎縣の第二奉唱隊が集合する所だつた。私共もそれ／＼位置について見渡すと、廣い運動場をすつかり埋めて居た。これが練兵場に行

くと、それは／＼何十分の一にも足りないものだらうと想像された。前庭の公孫樹の葉は、全く金色に染まりつくしてヒラ／＼と惜し気もなく微風に舞ひ散つてゐる、晩秋の碧空を彩るのに十分であつた。水筒に水を注いだり、携帶品や服装を整へたり、用意をさ／＼怠りがなかつた。あちらでもこちらでも、ひそ／＼と話が交はされる、それは皆式場で不敬のない様にか、手落ちのない様にとの用意のためであつた。天皇陛下をまのあたりおろがみ奉る時の氣持など、次から次へと想像はやまなかつた。指揮者の注意があつてから後にいよ／＼私共が、今日迄待ちに待つて居た御親閲式場たる帶山練兵場へと出發した。最早胸はわく／＼して躍つてゐた。此の上もない身の光榮！これからだと思ふと、いよ／＼活氣づいて足の歩みも軽く、昨夜の疲れも全く忘れてしまつた。とかくするうちに練兵場の一隅に踏み込んだ。

廣い／＼見渡す限り果てしない草原、サク／＼と歩を運んだ。長蛇の様な列、後方の女子青年團の衣すれの音が快く私共の耳朵を襲つて来る。サラ／＼と吹き渡る微風は氣持よく私共の頬を撫で、名も知れぬそこらあたりの雑草を軽く戦かしてゐる。幾ら歩いても盡きない草原の式場までには、随分遠い様な感じがしてならなかつた。平素なら此の草原に餘り人も見ないだらうに、今日は何處を見ても、悉く紋服に身を固めた、老若男女拜觀者の群だつた。

暫くして式場に到着した。嗚呼、今まで待ちに待つてゐた拜觀も、いよ／＼此の原頭で開始されるのか、何と云ふ身の光榮か、中食のために一先づ此處で息むことになつた。思ふさま足をのばして疲れを癒した。懐かしい草原！まるで母の愛に抱かれた様な氣がした。やがて喇唳たる喇叭の音が、いとも勇ましく場内の隅々まで響き渡つた。同時に再び整列にかゝつた。幾十萬とも數知れぬ人々が參列してゐる。嗚呼この幾十萬と云ふ人の中には、兄さんも居るんだと思ふと、身にあまる感激に、胸の躍りをどうすることも出来なかつた。此の數知れぬ澤山の人々がたちどころに並んでしまつた。黒・紺・黄色とり／＼の服装が、限りなく並んでゐる。其の間には、校旗・團旗・會旗などが、燦として太陽に輝いてゐる。遙か向ふの純白の高臺は、まさしく玉座であつた。間もなく「氣を付け」の喇叭と共に、私共は直立不動の姿勢をとつた。場内は水をうつた様に咳一つ聞えない。其時胸は高なり、足の尖までビリ／＼と力がこもつて、身に餘る嬉しさは

一人でに瞳を潤ほすのであつた。静けき場内は、一發の煙火に破られて、間もなく、晩秋の空高く天皇旗の翻るのを拜した。暫くすると、またしても喇叭の音が響き渡つた。すると御召自動車の滑る音が、次第に近くに聞えると思ふと、間もなく目前を御通過遊ばされ、玉座近く迄進ませ給うた。陛下には御車をお下りになつて、玉歩豊かに玉座へとお着きになつた。

あゝ儼然たる御英姿!!おろがみまつる其瞬間に、何か只ならぬ靜謐が天地を領してゐたのである。小さき胸にこみ上げて来る涙、潸然として双頬に流るゝを禁ずることが出来なかつた。其の刹那、せめて感激の十分の一なりと、父母にも分ちたい氣がした。

一時十分軍樂隊の奏樂によつて、各團体毎に分列式が始められた。陛下には長くも、一々御擧手の禮を遊ばされ、實に一時間と云ふ長い間、御微動だも遊ばされず、恐懼の極み身の措き處もなかつた。それが終つて、いよ／＼私共の奉唱部隊が、奏樂の裡に軽い足どりで玉座近くに進み出で、そこで最敬禮の後、徐に「君が代」は始まる、今迄靜かだつた場内は、たちどころに天地に響く齊唱が、一糸亂れず流れ始めた。折からさし添ふ日影は一際鮮かに、千草萬木皆之に和した。終つて奉迎歌が四周を壓して響き渡つた。心底から「あゝ吾等生けるかひあり」としみ／＼感ぜずには居られなかつた。私共は更にこの齊唱の底に血が湧き返ると同時に、知らず知らず感極まつていつか眸頭の熱くなるのを覺えた。

私共は畏れながら咫尺の間に龍顏を拜し奉り、誠に崇高にして偉大なる、其の君徳の至仁にして至慈なる、たゞ／＼自ら難き涙にむせぶより外何物もなかつた。

嗚呼世界に類なき大帝を戴き、國運は隆々と展び、九千萬國民は、こゝに皆腹鼓を打つの惠澤に浴する事が出来るのであると思ふ時、眞に感激に堪へないものがある。私共は、かゝる吾國の全盛を喜ぶと共に、か弱いながらも益々國運の發展に力を副へ、前途に希望を抱いて、元氣よく學びの道に精進せねばならぬと思ふのである。

御親閲を拜受して

大分縣立森高等女學校第四學年

小 川 フ ミ

愈々待ちに待つた十一月十八日は訪れた。今日こそ女子一生一代の光榮に浴する輝しい日なのである。旅先ながら一同は心身装髪を入念に整へて、師に導かれながらさま／＼の豫感と溢るゝ喜びを胸に抱いて、帯山練兵場に參着所定の位置について時の至るのを待つた。

時しも一碧に晴れ渡る大空の下には、錦繡をあやなす數百の會旗、團旗、校旗が阿蘇嵐に翻つて、其の勇ましき美しさ場を埋むる數萬の光榮者、場を繞る數萬の拜觀者。誰も誰も皆憤ましやかな面影、晴れやかなまなざしではある。生れて始めて見る同胞の大衆。此の光景に打たれた私は、早くもひし／＼と胸に迫り来る異様の波に襲はれたのであつた。

號砲一發、中空高く紫の煙を引くと見るや、日章旗はすらすらと竿頭高く掲げられた。今まで憤ましやかな中にも幾分のさざめきの空氣の漂つてゐた四圍は、さつと静まり返つて全く嚴肅其のもの。一同の面は一齊に緊張の色で滿される。「いよ／＼御でましである。」と思ふと、未だ嘗て味はつた事のない嚴かな氣持が體中に漲り溢れて、思はず襟を正し固唾を呑んでみ車の臨幸を待ち奉るのであつた。やがて萬場寂として聲なき森嚴さの中を、御稜威輝くみ車は、いとも静やかに着御遊ばされる。私は早や胸塞りて睫にせきくる嬉し涙の淀むのを覚え、自づと下る頭につれて何とはなしに恍惚たる氣持に滿たされて暫しは顔さへ上げることが出来なかつた。「心亂しては」と再び心氣を引き締めて、やをら前方を仰ぎ奉れば、天照らす晴朗の日影に煌き輝く純白の、いや高き玉座には、尊くも尊くも 天皇陛下御直立遊ばされ給ふ。はつと胸を衝く尊嚴の氣に、眼の眩むやうに覺えて再び急ぎ最敬禮をなし奉れば、溢るゝ涙止めもあへず、ときめく血潮の高鳴りのひまにも心裡に映るいとも畏き大御すがた。「おゝ！現人神！」忽ち全身に起り来るのをのき畏れ、再び頭を擦げんには餘りにも勿體なく、やゝ暫く謹み謹んで首垂るれば、續いて湧きくる有難さ、嬉しさ、山村に賤の乙女として生れ

ながらかく大御心にみそなはし給ふ此の光榮を、と思へば又更に萬感胸に迫つて自分を自分と悟りかねる程であつた。折から起る軍樂の響。再び心を正して拜すれば、指揮に應じて在郷軍人部隊以下諸團隊の御親閲拜受分列が開始されたのであつた。赤誠を籠めて歩武堂々と踏み出す其の隊列の勇ましき。畏くも 陛下には一隊毎に一々御鄭重なる御擧手の答禮を賜はりつゝ、時餘に亘る長き御親閲の間、端然として御直立遊ばされたるまゝ、些の御微動だにあらせ給はず。私は再び御徳を偲び奉つて、神とし生れさせ給へる御みすがたの尊さを壽ぎ奉るのであつた。かくて男子の御親閲に引續き、いよ／＼私達奉唱部隊は奉唱の爲、重ねての光榮に浴すべく更に玉座近く參進した。一步々々御側近く伺ひ進むにつれて、彌が上に尊嚴の氣の身に通り來るのを覺えながらも、此度は緊張の心を全身に籠め「奉唱の使命を全うするために」と全靈を捧げて定位置に就き最敬禮をなし奉る。かくて軍樂隊の奏でる奉迎歌に合せて、滿腔の誠を歌ひ上げ奉るべく、心の限り聲の限り一心に唱し奉れば、我ながら曲の響に打たれて一同のコーラスは阿蘇の山深く稱へられ、有明の海の水底に秘められるかのやうに一音々々と歡びの心の高なるのを覺え、餘音翳々として盡きざる練兵場裡には、再び森嚴の氣が漲つて、三たび有難さかたじけなさの雰圍氣が漂ふのであつた。奉唱を終つた一同の面さしには言ひ知れぬ感激の漂つて奉謝の涙に眼を濡らす人々で滿たされてゐた。

あゝ實に、思へば思ふ程身に餘る此の面目。此の感激。どうして表現することが出来よう。「み民われ生けるしあり……」と先人の歌つた心こそ今の私達の心の一つの現はれであらうか。歸るさの道々、かくも尊き至上を戴く國民の幸福を思ひ、世界に比なき國體の輝かしさを思ひ、強き國、正しき國の幸をしみじみと味ひながら、この一大光榮をとことばに記念すべく誓ふ心の數々を想ふのであつた。

御親閲を拜受して

大分縣立杵築高等女學校第四學年 武内富子

仰ぎ見る空は飽くまで高く、飽くまで澄み渡つてゐる。億萬條の金光線は果しなき空間に降り注ぎ漲り渡つて、天皇日和の麗日である。ドーン……。俄かに莊嚴な號砲が轟いた時、私は思はず衿を正さずには居られなかつた。愈々大本營御出門だ。眼路果しなきこの廣場に集つた數十萬の拜觀者の群、御親閲を拜受しようとする數萬の赤子、果して今何を思ひ何を期待してゐるであらう。前驅の響きも聞えた。自動車の警笛もひつきりなしに響く。私は後方なので何も見えない。唯無闇と心の躍り出すばかりである。やがて勇ましい奏樂が奏でられ始めた。日章旗は空高くはた／＼と鳴る。右手には分列式を行ふべき數萬の若人達が控えてゐる。突如!!突如として鳴り渡つた行進曲につれて、おゝ進むは進むは……。色とり／＼の校旗、團旗。カーキ色の服に黒い服の群。一集團、二集團……。腹の底から起る「左向け。前へおーいー」。「駆足！」の號令も頼もしい。彼等は嚴寒の滿洲の野に苦戦してゐる同胞の姿を幻に描きつゝ、力強く大地を踏みしめて一歩々々前進してゐるのであらう。

二時を二十分過ぎた頃から、愈々我等奉唱部隊の前進だ。凸凹の多い道を只管列を亂すまい／＼と前進する。心中には何物もない。陛下の御姿が愈々はつきりと拜せられる迄になつた。五歩、十歩、二十歩……。天皇旗も見え出した。龍顔もはつきり眼に映する頃、止め!あゝ今しおろがみまつる我がすめみまの尊。皇國のお若き 聖天子は 大元帥陛下の御正装辱く拜せられた。その感激に息づまる瞬間、心を籠めて最敬禮をした。やがて戸山學校の赤いパンツを穿いた指揮者が高い壇上に立つ。

あゝここにすめらみことの
風聲を迎へまつれり みくるまを……

いと／＼莊嚴に秋の天地に響き始めた時、感激の涙に聲のうち震ふのを覺えた。そこにもここにも感激に震ふ聲々を耳にした。私はそれと同時にしつかりした安定と力強さを心中に見出したのである。今は思想悪化の時代といふ。不良分子猖獗の時代だと云ふ。けれども／＼決してそれは恐るるに足りない事だ。今眼前に展開された此の情景を見よ。この感激的な一瞬間の情景を見よ。この感激の心が國民の心から冷え切らぬ限り永久に日本の礎は微動だもしないのである。

御親閲を拜受して

大分縣立別府高等女學校第四學年 石崎アサエ

古歌に、「何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」とあります。微賤なる少女の身として、畏くも一天萬乗の大君を、咫尺の間に拜し奉る事の出来た有難さ、勿体なさに、感激の涙を絞つたあの日の私達の心情こそは實に至純、至誠なものであつて、同時に、この歌の真心であると思ひます。

忘れもせぬ霜月十八日、私達は恐れ多くも、熊本市外帯山練兵場に御風聲を迎へ奉りました。錦旗は、翻翻として金風に翻り、山川草木は、皆その御稜威になびき伏して、今日の好き日を壽ぎ奉つてゐるやうに思はれます。場に滿ちた十數萬の民草は、颯爽たる現人神の御英姿を、壇上高く拜み奉り、一時間の長きに亘る御儀式の始終を通じて、不動の姿勢を御續け遊ばされた謹嚴なる御態度、さては又數萬の分列行進隊に對し、一々擧手の御會釋をたまふ御慈愛深き御聖徳に、感激の胸を高鳴らせて、赤子の純情を捧げ奉つたのであります。

あゝこの大君、あゝこの赤子、この御親閲場のシーンこそ、眞に我が日本の姿であり、又日本ならではの見る事の出来ない事實であると思ひます。私達はこの有難き皇國に生を享け、昭和の御代に生れ合ひ、今又かかる光榮の日を持つ事の出来た事を、心から感謝致します。當日私共が啣咲たる樂の音に合せて、聲打ちあげて奉唱した歌詞にもあります通り「おほけなき今日のほまれを萬世に語りつぎつつ」皇室の御繁榮と帝國の隆昌とを永久に祈願してやまない次第であります。

是と同時に私共、女生徒として又國家の一員として日々よく本分を盡し、以て聖徳の萬分一に酬い奉るべき覺悟であります。

御親閱を拜受して

大分縣長洲實科高等女學校補習科 都 留 ユ キ エ

私達三十人は學校代表者として先生に引率せられ御親閱拜受を負ふべく彼の

御民我れ生けるしあり天地の榮ゆく御代に逢へらく思へば

の古歌以上に喜びを懐き無事に式場に就いて見ると、玉座を中央に、さしもの大廣場も整然として設備の苦心を物語つて居ます。折柄秋天高く轟き渡る號砲に式場正面の大國旗が翻ると、場内頓に緊張して十數萬の大衆咳一つ發するものもなく、「君が代」の奏樂裡に私達が、日に夜に仰ぎ奉る我が叙聖文武なる 陛下を迎へ奉りました。全員最敬禮の後、學生生徒青年團員等の分列式がありまして、私達の待ちに待ちたる時は來ました。軍樂隊の奏樂に合せる部隊の行進數秒にして、最敬禮を行ひ、畏れ多くも御龍顏を拜し奉ることが出來ました。その瞬間の感激歡喜何とも申すことは出來ません。「かたじけなさに涙こぼるゝ」と、歌はれた古人の氣持がよくわかりました。やがて奉迎歌を合唱すると、身さへ心さへ我れを忘れて虚榮もなく競争もなく唯恍惚となつて生來始めての嚴肅な氣分に接しました。最後に萬歳の三唱の奉祝はめでたき中に勇ましく、數日間御統監遊ばされし大演習の事さへ聯想せられて、感激に堪へざる中に此の御盛儀は滞りなく終らせられたのであります。

惟うに大御心より出でさせられし事にて、有難さ此の上もなきのみならず、御式中の御容姿御動作が總て仰慕の極みで私達の拙き言でも筆でも現はし得る限りではなく、文字通りの現人神でおはす感じがいたしました。と同時にいろいろの教訓を身にしめる事が出來ました。君臣大義は申すも畏し。設備の簡素、清潔、時間の嚴正、數へ來れば數限りもなく、

他日家庭教育上の好教訓を得たのを感謝いたしますすにつけても、本日此の式を遙拜するため、應利山上に在る私達の全校の生徒に一目拜ませたらばと衷心より思ひました。

御親閱を拜受して

扇城高等女學校第四學年 井 ノ 口 愛 子

青空に響く煙火一發、白い煙がぼつかりと空に浮ぶ。日章旗は高く掲揚された。今まさに 陛下の御尊容を仰ぎ奉るかしこさ、よろこばしさに身が震ふ。嚴かに「君が代」の吹奏が始まつた。いよ／＼着御遊ばされたのである。靜かに頭をあげた時、すでに玉座に立たせ給ふ 陛下のみ姿を拜みまつる事が出來た。あゝ何といふ尊い御姿であらうか、私の魂は只かしこさに震へるのみであつた。此處に集ふ六萬餘の魂は皆一樣に震へた事であらう。勇壯な軍樂隊のマーチにつれて次から次へと、群がり湧いてくる分列隊の群が玉座の御前を過ぎる。陛下はかしこくも其の度毎に擧手の禮を遊ばされる。我が國家の中堅となるべき青年達が威容堂々として 陛下の御前を過ぎる時、あゝこれこそ誠に皇國の姿であると、頼もしさに涙がこぼれるのであつた。奉迎歌奉唱「あゝ今しすめらみことのみ姿を」と 陛下の御前に奉迎の誠を披瀝せんものと、あらん限りの聲を出した。「たゞかしこさに涙こぼるゝ」と歌ふ時、私の眼には涙が溢れた。言の葉では申されぬこの心持、君の御爲にはと言ふ大和魂を今ひし／＼と感ずる事が出來た。

天皇陛下萬歳！萬歳！萬歳！六萬の魂は帶山練兵場をゆるがし遠い山々にこだました。思へば前後一時間の長い間、陛下は御起立の儘我等をみそなはし給うたのである。何とおそれ多い事であらうか。私には只尊い神の御姿とのみ拜された。

御名殘惜しくも鳳輦をお送り申した後やつと我に歸つた。油然として湧いて來る忠誠の眞心、あゝこれが尊い大和魂であらう。此の魂があればこそ、忠君愛國、舉國一致の實を擧げる事が出來るのである。「私は立派な日本婦人となり君の

御爲、國の御爲に盡し奉る覺悟でございます。」と、心の中でお誓ひ申上げたのである。

御親閲を拜受して

大分縣立三重農學校第三學年 後 藤 福 男

御親閲を拜受して、殊に強く感ぜられたのは、生後始めて、この千歳一遇の御盛事に参列するを得たる光榮と、有難さであつた。我等の胸中は始終歡喜に燃え、光明に輝き、陛下の御前では、唯々有難く、畏れ多く、感激の極、敬慕の情油然而して湧出し、恐懼、感激、喜悅の情に充たされ、この小さな胸は張り裂けんばかりであつた。陛下におかせられては、始終嚴止なる御態度を以て吾々に常に眼を注がせ給ひ、分列式に際しては、一々御答禮までも賜はり、我等の精神の緊張は其の極に達し、感激に堪へない所であつた。

御親閲の進行するに連れて、拜受の人々の意氣、いや増しに増し、胸奥に溢るゝ喜悅の情、全身に漲る浩然の氣は、或は分列式となり、或は奉唱歌となりて自ら發し、是等青年男女の一舉一動悉く我が國の將來の象徴であり、此の九州の一角で國家の將來を暗示せしめられるかの如く感ぜられ誠に喜ばしく、心強さを感じられた。「國家の將來はその國の青年を見て知る」と御親閲の御盛事を御催しの所以も實に又此處に存するのではなからうかと恐察せずには居られなかつた。尙、我々は陛下が如何に大御心を我等の上に注がせられ、我々に御期待遊ばされるかを、拜察し奉る事が出来た。私は此の度、かゝる光榮に浴し、同胞の意氣、斯く盛なるを目の邊に見、益々智徳を修得し、心身を練磨し、第二國民として御期待に違はざる、先輩に恥ぢざる、他國人に劣らない國民となり、多事多難に直面せる國家の將來を双肩に擔つて、立たねばならぬことを固く固く心に誓つた。

御親閲を拜受して

大分縣立四日市農學校農科第三學年 葉 錦 煥

一日千秋の思ひで待ちわびた十一月十八日、此の日は長くも 聖上陛下には吾等九州沖繩山口各縣下數萬の學生の爲めに熊本の帯山練兵場で御親閲を賜はつた有難き極みの日であつた。恵まれた秋の天は彌高く、肥筑の野は清く光輝と歡喜とで一杯であつた。

忘れる事の出来ない大正十年の事であつた。私の郷里臺灣新竹で、陛下の尊顔を拜した事があつた。當時陛下には未だ皇太子殿下であらせられた。私達のやうな卑しい者にまで、一々答禮を賜はつた事など當時の様を思ひ出される。當時お恵み深い有難さに全島民は感激のあまり喜びの涙を出さない者は一人としてなかつた。

今又此の光榮に浴し、然も玉座の直前で御親閲を拜受するのと思へば、どう言つていゝやら感慨無量、唯緊張、息も吐き得ない程の硬直さを感じました。御英姿、御英姿、嗚呼これ我が帝國を統治遊ばされる大父君か、此の君にして此の國あり。私は力一杯に手を振り、足を踏みならして御親閲を拜受しました。此の時程私は大舟に乗つた大丈夫な氣のした時はなかつた。さうして何時ぞや國語の時間に懇々と教はつたあの大作家持の作歌「海ゆかばみづく屍山ゆかば草むす屍大君のへにこそ死なめかへりみはせじ」の歌を思ひ出して、覺えず細腕をさすつて陛下の爲めには水火も辭せないと固く拳をかためた。かたい決心だ。決して自分を欺いてはならない、堅い誓ひだ。自分達の務めに此の氣概で此の精神で働いて行けばいゝのだ。内地の此の農學校で學んだ甲斐があつて、澤山なお土産を腹の中に秘めて持つてゐます。來る三月には郷里の臺灣に歸つて必ず皆に披露して共に「喜びたいもの」と今から其の日を待つてゐます。「君が代」の國歌、腹の底から湧き出づる赤誠の籠つた萬歳の聲も、其の後一層嚴肅な有難い氣に打たれて尊く思はれます。天皇旗は翻つてゐます。日章旗は翻つてゐます。さうして久遠に翻へる此の旗は如何なる風の日も雨の日でも世界に彌高く翻る事とせう。

御親閲を拜受して

大分縣立國東農學校第三學年

宮 川 安 彦

御親閲。それは自分の一生を通じて忘るべからざる喜びの思出であり、臣子の光榮實に之に過ぎたるはない。茲に拜閲後一ヶ月、宏大無邊の御聖徳は深く身にしみ、感激の涙未だ新なるものがある。

憶ひ起こす十一月十八日朝まだき歡喜の胸を躍らせつゝ、憧れの帶山練兵場に着いた。九州各縣、山口縣下中等學校生徒及び男女青年團員、無慮數萬の拜受者は、整然たる統制の下に滿場等しく瑞氣に酔ひつゝ、寥として聲なく、陛下の入御を御待ち申上げた。定刻陸軍軍樂隊の吹奏する「君が代」によつて、一層森嚴の氣を漲らす頃、陛下には自動車にて靜々と着御遊ばされた。噫!!誠に恐懼の極みながら、昨日までの憧憬が今現實化したのだと思つた瞬間、名狀すべからざる靈感に打たれ我、我を忘る。遙か大阿蘇の連山は恰も、聖上陛下を奉迎し千載一遇今日の佳き日を壽ぎ奉るが如くである。御召車より降り立たせ給うた。陛下は長くも玉座に直立遊ばされ、一同の敬禮に對し舉手の御答禮を賜はる、その颯爽たる御英姿を拜し奉る光榮、歡喜何物か之に過ぐるものぞ。此神々しい雰圍氣に包まれて覺えた極度の有難さと緊張とは幼い筆で到底表現し奉ることは出来ない。仰げば、大元帥陛下には終始不動の御姿勢にて吾等を親閲し給ふ。折柄奉唱部隊の奏でる莊重な調べ!一として恐懼感激の極、喩の熱くなるのを覺えぬものはない。「誠内に發して事外に應ず」とか本山熊本縣知事の發聲によつて恭しく聖壽無窮を壽ぐ萬歳の聲は滿目蕭條たる秋の原野に反響して、さすがの大阿蘇をも揺がさん許りであつた。

顧みればはや一ヶ月、御親閱拜受に依つて受けた感激は、吾人の心に忠君愛國の精神を根強く植ゑ付けたのである。此の宏大無邊の御聖恩に對し、誰か一死以て君國に報ずるの念、斷然として湧かざるものがあらうか。古人は言ふ「海行かばみづく屍山行かば草むす屍大君の邊にこそ死なぬ顧みはせじ」と、吾人は實にこの至言なるを體驗した。

嗟呼、生等幸に聖明の恩に浴し、この盛典に遭ひ、歡喜の衷情に默する能はず。恭しく之を草し、誠惶誠恐以て筆を擱く。

御親閲を拜受して

大分縣立玖珠農學校第三學年

宮 木 光

火の國の山川草木に、早くも秋は暮れんとするのに、春を迎へた様に朝の曇りも金峯山へ一掃してしまつて、空きはやかに澄み渡つてゐる。これも亦四十四萬坪を埋めた赤誠十數萬の同胞と共に限りなき喜びに溢れて、時のたつのを待つてゐるのである。午後一時、奉迎の煙火は碧空高く打ち上げられ、大國旗はいきづまる様な緊張の裡に西風を切つてすらすらと揚げられて翻々と翻つた。やがて、遙かに響き來る喇唳たる「氣を付け」の喇叭と共に全員は益々緊張味が加はつて今か今かと、陛下の着御をお待ち申し上げた。戸山軍樂隊の莊重なる「君が代」の奏樂の音は九州の中央より、高きみ空をついて津々浦々に至るまで流れて行く様に思はれた。

あゝ、此の嚴肅さよ、莊嚴さよ、すめらみことの御稜威の忝けなさと喜びとに私は自己有るを忘れてしまつた。秋風に靡く錦旗と共に、くつきりと玉座に浮び出だされし御英姿を拜し奉つた時、心の奥底より押しよせ來た怒濤の如き感涙。「捧げ銃」の號令と共に電氣の様な速さで、嚴肅な靜寂がありとあらゆる人々を支配して行つた。どの位の時間が経過したか私はわからなかつた。やがて分列式にうつり、輕やかに、步調高く、各團体は團休旗を先頭に軍樂隊の行進曲と共に進んで行く。愈々御親閲を拜受すべき時は來たのである。小林大隊長の澄み切つた嚴肅なる號令と共に、二千に餘る我々團体は眞剣に、邁進の力を發揮した。陛下の御うるはしき御龍顏を拜し申し上げた時、餘りの神々しさ、有難さに貧しい私の步調はとまりさうであつた。が、私は此の時眞面目、眞剣と云ふことより他に何もなかつた。我々は只もう一生懸命だつた。分列式が終るや否や、御玉座に面して三方より靜々と進み出で、行つた奉唱部隊の奉唱歌は指揮者のふるふタク

下に依つて嚴かに唱ひ出された。「あゝ此所に天皇の……み光に阿蘇の高嶺も、有明の海に輝ふ……」ああ、此の歌、阿蘇の高嶺も有明の海も、そればかりでなく、海山越えて海外の同胞、山川まで今日の祝すべき日を如何に待つたことか。千載一遇の今日の日有りて、我々は此の國家に生れた有難さの益々強く、又其の責任の重大なることを深く感ぜずにはゐられない。

陛下におかせられましたは、此の御親閲の長い一時間を直立不動の御姿勢にあらせられた。とは何と云ふ有難き忝けなさ勿体なさであらう。陛下が實に我々を赤子として愛撫し給ふ深き大御心に對し奉りて、義勇奉公の念の益々強く更に深く湧き出で、來た。あゝ、此の良き日、此の有難き感激、私は永遠に忘れることは出來ないのである。

御親閲拜受感想

大分縣立日田林工學校林科第三學年

宋

熙

烈

昭和六年十一月十八日、この日こそ我等六萬六千の學生々徒等が帶山練兵場に於て御親閲に參列するの光榮を得た、生涯忘れざる事の出來ない記念すべき日である。午後零時五十分、冲天高く擧げられた一發の號砲と共に「氣を付け」の號令は雷の如く耳朵を打つ。廣い練兵場は闐として物音一つも聞えない。國旗は碧空高く掲揚される。軍樂隊の吹奏する奉迎の「君が代」は嘯唳と四邊を威壓する、御召自動車は徐々に御入場遊ばされる。やがて、聖上陛下には靜かに御車より降らせ給ひ、設けの玉臺に玉歩を運ばせ給ふ。嗚呼何と云ふ莊嚴なる風景ぞ。我等の胸底には萬鈞の重力が加へられ、唯限りない御盛徳に頌垂れるばかりであつた。やがて分列が始まり、暫くの中に我が集團は忝なくも玉座近くなつた。胸は高鳴り夢中で步調を取る。折柄、突如として起る集團長の「頭右」の號令と共に、始めて眞正面に龍顏を仰ぎ奉ることが出來た。陛下が擧手の答禮を賜へる時、瞬間ではあつたが畏れ多いことではあるが、これぞ眞に一日も一分も否、一秒も幾千萬の民草の上を御軫念遊ばされる一天萬乘の大君におはすかと拜し奉つた。我が集團が元の位置に歸つてからも

分列は續いて行はれてゐた。不動の姿勢で尙依然として、擧手の答禮を賜はるその御英姿を仰げば、只無限の感激に打たれるばかりである。全身の緊張を以て行進する諸生が、熱誠は意氣は又あり／＼と一舉一動に表はれ胸に響いて來るのであつた。畏れ多い事ではあるが、聖上陛下には大演習御統監すでに數日間に亘らせられるが少しも御疲勞の色なく、依然として微動もあらせられず、約一時間餘に亘る長時間の間、始終參加部隊に御目を注がれておはしませし事は、餘りにも畏れ多い御仁慈であり、御精勵であらせらる。やがて女子青年及び女生徒の奉唱歌も終り、勇ましき喇叭の音は御親閲終了を告げ、軍樂隊の奏樂裡に、陛下には御機嫌麗はしく還御遊ばされた。折柄擴聲機に合せて起る「天皇陛下萬歲」の聲は大地をも轟かす程であつた。そは聲の有る限り、心の限り聖壽の無窮を祈り奉る國民赤誠の叫びの聲でなくて何であらう。

我等はかかる御仁愛の浪、大八洲に逼き御高徳の大元帥陛下を仰ぎ戴くことを無上の光榮として、一身以て聖恩の萬一に報い奉るべく、大なる決心の唇を結んで恐懼した。奉送の「君が代」と共に御英姿を奉送しては、唯萬感胸に迫るのみであつた。式後我々一行は、大石驛に急ぎ、その晩は寒い冷たい板の上で寝ながらも、感激の一日を回想して元氣で夜を明した。

御親閲を拜受して

大分縣立大分工業學校建築科第五學年

姬

野

菊

雄

晩秋の空澄み渡りて寒氣漸く増し、燈火親しむべき霜月十八日、天皇陛下には、連日のお疲れも厭はせ給はず、午後一時大本營御出門、略式自動車兩輛にて、帶山練兵場に着御、鹿兒島縣を除く九州各縣及び山口、沖繩兩縣の高等專門學校、男女中等學校生徒の青年訓練所、在郷軍人等、無慮六萬有餘名に親しく御親閲を行はせらる。これより先、この日の光榮に浴する若人等は場の西北端中央に設けられたる御座所前面に一齊に整列を終り、幾百十の校旗、團旗は、目も綾に

風にはためく。かくて式場前面の大マストに、國旗が空高く掲げられ、「君が代」の軍樂隊の音いと嚴かに響き渡るなかに、午後零時十分 陛下には玉座につかせらる。白布の御座に着かせらる。陛下の颯爽たる御英姿は、嚴かにあたりを壓し給ひ、いとも尊く拜せられ、我等は一齊に捧銃の敬禮を行ふ。これに對し 陛下には、長くも擧手の御會釋を賜はり靜かに一同の鞠躬の狀を憐はせらる。嗚呼 聖天子の御直前にて、第二の國民として、親しく寵類を拜し奉るの光榮は、何たる感激ぞや。

この時に於ける我等の心境は、到底筆舌には表現し得ざるものあり。我等は唯皇恩の深きに感泣する以外には、如何なる適當なる言葉をも見出し得ざりき。凡そ世界に國をなすもの、數十を以て數ふれども、我が日本の如き君臣の密接なる關係を有する國を、何處に求め得んや。況んや、國民に御親閱を賜はるなど、他國に於ては思ひも寄らざる事なり。我等は御仁慈深き 陛下を上戴くことを無上の幸福と思ひ、生を帝國に享けしことを感謝し、この宏大無邊の聖恩に感泣措くところを知らざるものあり。

我等の敬禮終るや、間もなく軍樂隊と共に勇壯極まりなき大分列式は開始さる。若民草の擔ふ銃劍は、過ぎし軍の昔を語れども、劍には九州男子の新たなる赤誠籠り、握る銃把に感激の血潮の躍動するを得ざりき。陛下に於かせられては、各集團毎に一々優渥なる擧手の御答禮を賜はりたるは、誠に長き極みなりき。續いて女子中等學校女子青年團よりなる奉唱部隊の奉迎歌と、天地に響ける全員の三唱する萬歳とを聞こし召され、徐ろに還幸遊ばされたり。

抑々御親閱を行はせらるる目的を拜察し奉るに、單に青年の燃ゆるが如き意氣を天覽に供し、我々をして天顏を拜するの機會を得しむる爲のみならず、御親閱に依りて、傳統的の國民精神たる國家觀念を益々發揚せしめ給はんが爲めならずや。されば我々は其の目的の存する所に感銘して、聖旨を奉戴し、御親閱當時の心を長く胸に秘め、一意専心學業に精勵し、忠良なる臣民となり、皇室を中心とせる新興日本帝國の國威の發揚と國運の進展とに資せざる可からず。

御親閱を拜受して

大分縣立中津商業學校第五學年 玉井悦弘

時は昭和六年十一月十八日、熊本市外帯山練兵場の碧空高く大國旗は揚げられました。私は生れて始めての緊張にも緊張した「氣を付け」の姿勢を取つて、天皇陛下の着御を御待ちしました。聽て、午後一時十五分長くも純白の玉座へ颯爽たる御英姿を拜したのであります。申すも長き事ながら、瑞正尊嚴に渡らせられる御雄姿を拜しました時は身体の奥底からこみあげてくる感激を何ともする事が出来ませんでした。本山縣知事の奏上も済んで、軍樂隊の奏樂裡に、熊本縣の學校が分列式を始めた時、私は一層涙ぐましくなりました。あの時の軍樂隊のあの奏樂は、私達が分での豫行で聞いた時とは異つた何物がありました。各團體が分列をなす毎に、陛下には端正なる擧手の禮を遊ばされました。その度に、眞白い御手袋は何かを現はしてゐる様に思はれてなりません。あの御手袋は確かに、他のそれとは大差があると思ひます。或る物があの御手袋の中にも這入つてゐる様で御座いました。やがて、私達は 天皇陛下の御前を分列致しました。よく玉顏を拜し奉らうと始めから思つて居りました故、一生懸命、ほんたうに一生懸命でした。そして「頭右」を致しました。長くもあの時の 陛下の御顔は御優しく渡らせらるゝ様で、しかも何處となく崇高な、犯すべからざる様子に拜し奉りました。御前では時間の経過が大變早く感じました。

そして私の感じた事は、天皇陛下は普通の御人ではなく、寧ろ神の權化に渡らせらるゝと言ふ事です。あの御威容を拜し奉つては、日本程幸福な國はないと思ひます。あんな御立派な、決して他國に見ない。聖上陛下が我々臣民を赤子の如く御慈しみ下さる。こんな有難い事はない。時節柄、滿洲事變、經濟國難、思想國難等と言はれてゐるが、大丈夫日本は天子様の國である。その天子様の國が——正義の國が——どうして他國に壓倒される事があらうか。又 天皇陛下の御尊容を拜し奉れば、決して外國かぶれの思想なんか起るものではない。そして國民一致、我が國の國是に向つて邁進す

るより外の考へは決して起るまい。結局は、この日本の國は、千代に八千代にさゞれ石のいはほととなつて、世にいや榮えゆくのだ。とかう思ふと、我々の譽ある日本の國に生れた事を感謝せずには居られない。我々は世界に比類のない國の民草である。天子様を中心とした正義の國民である。嬉しさ、有難さに、何か知らないが、私の睫の奥に秘められた涙は、大變熱した様に思はれました。

やがて、各團体の分列式が終つて、軍樂隊は分れ分れになつて、こちらの方へやつて來ました。そして各縣の女子奉唱隊は玉座の御前に進み出で、奉迎歌を合唱しました。その歌の文學的價値はどうか知らない。又あの時の調子がよいか悪いか知らないが、私はブルツと身慄ひ致しました。九州の女達の奉迎歌が、さぞ 天皇陛下の御満足辱くした事であらうと拜察して、畏れ多いが、何となく 陛下に御近づきした様な懐しい慈父の様な感じが致しました。あゝ、此の一瞬間は、陛下を中心として、各御親閱拜受の人達の心が、一つとなつてゐた事と思ひます。あの時の氣持、あれが本當に感激と言ふのでせう。あれが眞の一致團結と言ふのでせう。あの時の氣持で我等は現在の國難に當り、御鴻恩の萬一をも報ぜねばならぬと深く感銘致しました。

御親閱を拜受して

大分商業學校第五學年 中 村 善 雄

瞑黙してその日を想ひます。あゝあの光榮、あの感激、あの歡喜、そしてあらゆる神經が一點に集中したあの緊張。それは私にとつて最初であり又恐らく最後のものではあらうと思はれる尊い經驗を與へられた日でした。

一樹さへ認め得ない廣漠たる原野、全く見渡す限り小草の原です。冬に近いもう全く茶褐色に染まつた小草がはげしい北風に小さく身震ひして、それが大きな波になつて遙か東方に登えてゐる大阿蘇の紺色にまでつづいてをり、西の方はこもりした森の上に微笑みかけてゐる金峯山があつて、高原といふやうな感じのつよい託摩ヶ原の一角です。そしてその

四十四萬坪といはれる帯山大練兵場は御親閱拜受者と拜觀者との群で埋めつくされ、その上に大きく擴がつた眞青な晩秋の空が澄みきつてゐます。これが永久に忘れられない光榮の日、昭和六年十一月十八日の帯山練兵場の姿でありました。一時十分過ぎたと記憶してゐます。私共は畏れ多くも 大元帥陛下の颯爽たる御英姿を雪の如く純白な玉座の上に拜し奉つたのでした。あゝその時の光景、その時の氣持、私は十分にかきあらはす事はできませんが何といふ嚴かなおそれ多い有難い御英姿でした。満場一齊に「頭―右」、キラツと光る捧げ銃の刃先、しづ／＼と垂れる五彩の校旗 陛下には畏れ多くも擧手の御答禮を遊ばしたのでした。あゝそれは全く息づまるやうな一瞬でした。岡とした帯山原頭にみち／＼とゐる莊嚴の氣と、畏れ多くも 陛下御一人の上に集中された全九州、否全日本國民の至誠の表現があるのみです。國家總動員の姿なのです。萬世一系の 天皇を中心としてすべてを捧げ盡して至誠の上に築き上げた歴史と傳統との貴い國體そのものの姿なのです。何といふ意味の深い莊嚴な一瞬間でした。この時のこの光景、この感激は私に死ぬまで忘れらる事のできない強い印象を腦裡に刻みつけてくれたのです。そして涙のこぼれるやうな何かしら強い力を意識せずにはゐられませんでした。これが忠といふものか、これが日本國民が三千年の間、培つてきた精神なのか、日本國民として最も誇るに足る瞬間でした。さすが烈しかった北風もこの尊嚴さに壓されてか、一時びつたり止んだやうでした。暫くして嘯曉たるラツパの音と共に流れてきた戸山學校軍樂隊の演奏する壯快な分列行進曲が、緊張しきつた人々の神經に活氣と明るさを投げこんだのでした。そしてやがておこされたのが男子部隊の大分列行進でした。空はあくまで澄みきつた蒼空です。晩秋の太陽はさわやかな光を注いでゐるのです。場に滿つる雄壯な氣、豪快な力、潑刺たる意氣の若人が一天萬乗の大君の御前を歩武堂々大地を踏みしめて進んで行きます。分列行進をおこして玉座の御前までの約百米の間の私の氣分、それは今考へてもどうしても分りません。たゞ無我夢中だつたといふべきでせう。自分は今校旗を手にして先頭を歩いてゐる。自分の任務は重い。かりそめにも失敗してはならない。どんな事があつても過があつてはならない。死んでもこれを果さねばならぬ。といふ強い感じが嵐の様に私の頭の中を走りすぎた事ばかり覚えてゐます。しばらくして耳に入つた